
Skills Cross

火桜芙蓉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S k i l l s C r o s s

【Nコード】

N 7 1 3 2 P

【作者名】

火桜芙蓉

【あらすじ】

ここは、「才能」、つまり超能力が当たり前にある世界。そんなある日、普通どおりに帰っていた赤井は、ひよんなこと（注…本当にひよんなことから）から女の子、紅に出会い、大変な出来事に巻き込まれていく…。

「私から離れなさい！死ぬわよ！」

「残念だがその願いは聞くことができねえな！」

（注…ツン満載のハイテンションラブコメディではなくバトル展開満載…、のはず…。）

【ほぼ毎日更新予定です。余程の睡魔が襲わない限り。後、感想どしどし待ってます！ 誤字脱字訂正あったらよろしくお願いします！！ 改となっているところは文法的におかしいところを直しただけですので、読み直さなくても結構です。】

百話突破しました！！ これも読者の皆さんのおかげです！！
ありがとうございます！！

(表) (前書き)

これが初投稿なわけなのでー、お手柔らかにお願いしますー。

あ、ペン速の遅さは信じられないほどなのでー、更新遅れることもありますー。

上で言ってますけど、ほんとーに残酷な描写があるかどうかって言われたらびみょーなところも多いし、一応入れといった感じが近いので、気兼ねなく読んでください。

厨二病丸出しとか気にしないでっ!!

(表)

俺の名前は赤井夢斗。

まず、この世界について語らなければならないだろう。

ここは、超能力、「才能」^{スキル}が平然とある世界。

ちなみに、ここでいう才能とは、念力、瞬間移動、予知のような、よくある力という考え方で間違いはない。

二歳、九歳、十六歳の時に「才能検査」を受け、「才能」がある
と診断された者は、「都市」に移される。

「都市」は日本の東京近くに大きく存在している。

「都市」には五つの入る道があるが、いつも検問が敷かれていて、何も用がない人間が入ることは非常に容易ではない。

ひどい隔離政策だと考える人も多いかもしれない。

実際、才能^{スキル}を持つ人々が出てきた頃、今から四十四年以上前には、普通に共生していたのだから。

では、なぜこのようになったのか？

例えば、生まれつき才能を持つ子供がいたとして、その子が才能をきちんと使いこなしていればいい。

だが、そうではなかったら？

もしもその子が危険な才能を持っていたら何が起こるだろうか？
子供同士、何気ない一言で傷つくことも多いだろう。

感情のままに才能を行使、もしくは感情に吞まれて才能を暴走させてしまうかもしれない。

国会でもたびたび話題になっていて、隔離派と反隔離派で争っていたそうだ。

そんな国会を圧倒的に隔離派に傾けた出来事があった。

四十四年前、史上最悪の事件、京極事件である。

死者は数千人、重軽傷者数万人という異常な事件だったそう。

この事件から、「都市」計画が一気に浮上し、今に至った。

これは隔離ではなく、守るための考えです、ということが政府の言い分だ。

少し話がそれた。

俺は、この「才能検査」によって“無才能”といわれた“才能者”だ。

それは俺の才能によるものなんだが、それは後で説明しよう。

今日、どうしてこんなことをやってしまったんだろうか。

普通に一般人として、逃げていればよかった。

まるで、十二歳の頃みたいだ。

まずは、今日の放課後から話を進めようか。

（表）（後書き）

というわけで、こんな感じです。

他にも色々と掲載するかもしれませんが。

しないかもね。

まだまだ未熟者なので、読んだ方は感想をできるだけ書いてくれると幸いです！。

(表)・2

4月21日金曜日、放課後。
もうすぐゴールデンウィークだが、正直普通の日と思っていた。
今日も交差点を避けるために造られた地下のトンネル的なものを
通っていて、ふと前を見ると、

女の子が飛んできた。

もう一度言おう。

女の子が飛んできた。

それもまるで大砲のような速度で。

まさしく、「飛んできた」。

「走ってきた」なんて感覚では無かった。

そしてその女の子の顔は何かから逃げるように引きつっていて、
しきりに後ろを見ていた。

前方不注意。

よくある車の事故のように、

俺達は衝突した。

(表)・2(後書き)

というわけで、二つ目。

ゆっくりと話は動くのでよろしくです。

(裏) (前書き)

実はこれ、前書いてたやつにリメイク版なんですー。
正確には今も少しずつ書いてるんですが…。

ところで、コタツはいいですねー。
まったりします。

(裏)

私は必死で逃げていた。

「都市」……。

ほとんど乗っ取られているって言うっても過言じゃないわね……。

あの男……、クリエイター“創造者”、そして“花鳥風月”、ファイブデイズ“五日間”とか言う奴ら。

このことを一刻も早くあの人に伝えなきゃ!!

しかし、この追っ手もやるわね、「ファイアメイカー発炎能力」をある程度あげた
LEVEL3〜4くらいかしら。

もう一人、あいつは瞬間移動でも持っているのかしら、いつの間にかえらく近づかれているものね…。

人に見られているところで私の才能を使うわけにもいかないし…
…。

「ん、いいところがあるじゃない。あそこなら上手く曲がって撒けるかしら。才能も全力で使えるし……」

そして、彼女はそこに入っていた。

交差点を避けるために造られた地下のトンネルへ。

来ているかしら…、早く逃げないと……。

そうして彼女はしきりに後ろを気にして……。

私達は衝突した。

（裏）（後書き）

というわけで。

コタツでまったりしつつカップラーメン食べながら書いてます。

&l t; 1&g t;; 赤井夢斗は女の子に出会い、才能を行使する。 〵 (1)

短編って書くの難しくありません？

長編なら書けるんですけどねー。

&l t; 1 & g t; 〽赤井夢斗は女の子に出会い、才能を行使する。〽

(1)

「のわあっ!!」

「あひゃあ!!」

ドンツと大きな音を立てて、二人はぶつかった。

「何すんだよ!!」

「ちよっと邪魔なのよ!どいて!」

「そりゃこっちのセリフだ!早く俺の上からどけ!!」

「はあ、何を……、って、うわあ!!」

その状況を端的に言うなら、ラブコメだった。

なぜなら、赤井を押し倒すかのようにして女の子が上に乗っかっていただけ。

俺こんなに女運強かったっけ?

まだ、赤井はきわめて平穏なことを考えていた。

「白道さん、なんかぶつかってますけど?」

「あちゃあー、一般ピーポーかよお……。巻き込んだじゃったなあ」

「…、上司に向かってこんな事言いたくないですけど結構古いと思いますよ、一般ピーポーって」

赤井がある種羨ましいともいえる状況の中、向こう側から声が聞こえてきた。

両方とも男、それも大人の声だった。

すると、赤井の上にいた女の子がものすごい勢いで振り返った。

「知り合いか？」

「あんな奴ら知りたくもなかったわよ！追いつかれちゃったじゃないの！！」

この女の子はこいつらに追われている？

もしかして俺、また面倒なことに巻き込まれてるのか？

「あんたはさっさとどっかに行って！邪魔よ！」

「よく分らんが、こいつらに追われてんのか？」

「だったら何なのよ！？」

残念だが、俺はまた面倒ごとに巻き込まれているらしい。

そういや、あいつと出会ったのもこんな感じだったか……。

“私を助けなさい、男でしょ、中学生になったんでしょ？”

“何なんだアンタ！？”

アイツとはまったく逆の誘い方だな……。

それはそれで心躍る……、か？

「手伝ってやる。」

「は！？」

&l t; 1& g t; 〱赤井夢斗は女の子に出会い、才能を行使する。〱 (1)

短編とか書いてみたいんですけどねー。
いつか頑張ってみたいなと思います。

「It's getting closer! 赤井夢斗は女の子に出会い、才能を行使する。」

(2)

昨日、傾物語を買いましたー。

面白そうですね、読んでないですけど。

&l t; 1&g t;; 赤井夢斗は女の子に出会い、才能を行使する。

(2)

「あ、アンタ、何言ってるのよ、ば、バツカじゃないの!!」
今度はこっちに振り返ってきた。

首の骨大丈夫か? と、心配したくなるほどの振り返りだった。
そして、目に見えてその女の子は動揺している。

まあ、いきなり知らない男に「手伝ってやる」なんて言われたら
普通引くよな。

「追われてて、逃げてるんだろ? 助けてやるって言ってるだ」
「ふざけないで!!」

明らかに女の子は怒っていた。

「なんだよ、いきなりあった奴と痴話喧嘩かあ? じゃじゃ馬姫様よ
お」

向こうから嫌な声が聞こえてきた。

まるで何もかもを馬鹿にしているような感覚。

初対面の奴にこんな事考えるのもなんだが、こいつ嫌な奴なんだろうな。

「ほら、アンタが馬鹿なこと言ってる間に追いつかれちゃったじゃない!!」

その女の子の顔が一気に変わり、すごい勢いで立ち上がった。

「白道さん、じゃじゃ馬ってのも古いです」

「そうなのか？最近の流行ってのはよく分からんなあ」
嫌な声の男は白道と言うらしい。

女の子を追ってきた二人組は、全身真っ黒いスーツを着ていた。
黒服、という呼び方がふさわしい二人だった。

「じゃ、止まれ」

白道、と呼ばれている黒服がそういった直後。

ピキンと。

一時停止したかのように。

止まった。

女の子が。

白道によって石にでも変えられさせたかのように。

「……？おい？」

最初は赤井もただ動いてないだけかと思ったが、どうもそうではないらしい。

まるでそこだけ時間が止まったかのようにだった。

試しに目の前で手を振ってみるが、何の反応も示さない。

「なんで止まんねえのよお、お前……」

「白道さんの才能スキルが、聞いてない？」

向こうでは、黒服の二人も何かに驚いているようだった。

「もしかして、お前の“才能スキル”ってやつか？　これ」

「何なんだ、お前」

「まるで俺が化け物みたいな言い草だな。ま、そんな言い方するって事は、大方才能スキルで間違いないか」

「だったら何なのよー！？　だったか？　ま、それはともかく、本当に何をした？」

「ハハッ、お前、どんな状況でも焦らないタイプだと思ったんだがな」

「俺もそういうタイプだと思ってたが、今日は本当久しぶりに驚いたぞ」

お互いの主張ばかりで、まったく噛み合っていない会話だった。

「こんなに女の子を追い掛け回して、何やってんだがっ」と

赤井はゆっくり立ち上がるとおもむろに呟く。

「これが才能なら、こうすりゃ治るのか？」

赤井は止まってしまった女の子の肩に手を触れる。

瞬間。

「————何よ、いつの間に立ったの？　ていうか、触れないでよ」

女の子が、元に戻った。

&l t; 1&g t;; 赤井夢斗は女の子に出会い、**才能**を行使する。 〵

(2)

ぼちぼちBACCANO!の新作でないかな…。

これを見ている人に成田良悟さんがいたらいいな！。

&l t; 1&g t;; 赤井夢斗は女の子に出会い、**才能**を行使する。 〵

(3)

ところで、甘酒ってどう思いますか？

作るのもいいですけど、たまには売ってるやつを飲むのもいいですよー。

<1>;1>;赤井夢斗は女の子に出会い、才能を行使する。>

(3)

「お前、まさか――」

「白道さん、俺に任せてください!!」

「え、俺が今から意味深なことを言おうとしてんだけど!」

黒服のもう一人が赤井に突っ込んできた。

「どんなトリックか明かしてもらいますよ!!」

言うや否や、黒服は両腕をクロスした。

「マ○オじゃないけど炎球!」
フレイヤーボール

そして、クロスした両腕を元に戻すときに黒服から、赤井に向かって野球の硬式ボールくらいの火の玉が飛んできた。

この人、格闘の経験とかないのかな?

火の玉などにまったく気後れしていない赤井。

赤井も黒服と距離を縮めるように駆け出す。

つまり火の玉も近づいてくる。

そしてそのまま――――、

「諸刃突き」

赤井は駆け出しながら、いつの間にか両腰に構えていた両手をそのまま二つの火の玉へ向けて殴った。

「あ、アイツ、何して!?!」

普通に考えれば、俺の両手は火達磨ひだるまになってしまうだろう。

普通に考えれば。

しかし。

バシユツと。

二つの火の玉は赤井の両拳に触れた瞬間、掻き消えた。

「ツッ!？」

黒服の顔も驚愕しているのが見て取れた。

そして、赤井の拳はまだ腕ひとつ分程伸びておらず。

火の玉を殴った程度で止まらない赤井の拳はそのまま、黒服のがら空きになった腹に両拳を叩き込んだ。

「グハッ!!」

赤井に殴られた黒服は、腹を押さえて屈みこんでしまった。
突進の勢いもあったのか、驚きによって気が緩んでしまったのか、
思いのほかのダメージだったようだ。

「アンタ、格闘戦の経験無いんじゃないか？がら空きだったぞ」

赤井は黒服を見下ろしながら、ともすれば悪役にも取られかねないような言葉を投げかけた。

&l t; 1& g t; 赤井夢斗は女の子に出会い、才能を行使する。 3

甘酒いいですよー。

ぜひオススメですよー！

<1 t; 1 & g t; 赤井夢斗は女の子に出会い、才能を行使する。>

(4)

この話どれくらいで完結するんでしょう。

ネタがやばい……、出過ぎる……。

長い付き合いになるかと思いますが、よろしくっ！

<1>; 赤井夢斗は女の子に出会い、才能を行使する。>

(4)

「俺が説明しようとしてるときに勝手に突っ込むからこうなるんだよ……」

はあ…、と溜息をつく白道。

「アンタ、何なの？」

俺の後ろでは女の子が不思議そうにこちらを見ていた。

「キャンセル。スキルキャンセル
“才能帰却”か？」

白道が重く話し出した。

「へえ、知ってる人がいるとは思わなかったけどな」

赤井はその言葉の意味を知っているらしい。

その言葉を聞いた白道は、

「そうか、よし、戦略的撤退するぞー」

と、何とも間の抜けた声で驚いたことを言い出した。

「ちょ、ちょっと待てよ、何でその言葉を知っているのかまだ聞いてないぜ!？」

「白道さん!?! 何言ってるんですか!?!」

赤井と黒服のもう一人が声を合わせて反論した。

「ほらほら、上司の言うことは聞くの。この状況は俺らにとって非常に厳しい、何より俺が何も持っていないからほぼ一般人化してるんだよねえ」

やれやれ、といった感じで首を振る。最後のほうは自嘲気味だった。

「……分かりました」

渋々、といった表情で納得した黒服。

「いや俺は納得してないって!!」

赤井がそう叫ぶも、

「じゃ、アデュー!」

白道がそういうと、黒服が地面に向けて炎を出した。

赤井が走って追いかけて、またも炎に触れるだけで消したものの、そこにもう奴等は居なかった。

&l t; 1& g t; 〱赤井夢斗は女の子に出会い、才能を行使する。〱

(4)

今気づいたこのサイトの新能力。
章とかって分けられるんですね！。

&1 t; 2 & g t; ; 二人は互いに話し合い、今の状況を理解する。 〵

(1)

さて、大晦日と三が日も終わったので連載再開ですよー。

ちなみに赤井君の過去話も有りますがー、それが出るのはまだまだ先になりそうですー。

&1 t; 2 & g t; ; 二人は互いに話し合い、今の状況を理解する。ゝ

(1)

「行っちゃった……」

「行っちゃった……」

二人はトンネルの中で呟いた。

……………。

「じゃあ、ぼちぼち聞かせてもらうか。なんで君が残念なことに黒い服な喪中軍団に追われてんのか」

少しの沈黙の後、赤井が女の子に対して話を切り出した。

「ちょ、ちょっと待って!」

だが、女の子はとても混乱していた。

「あなたは何? 何なの? それにどうやって火を消したの? 訳わかんないのよ」

そりゃまあいきなり会った男に「助けてやる」なんていわれた挙句追手をぶちのめした、なんて意味分からんよな。

ここは俺の方から自己紹介をしたほうがいいかもな。

「何、といわれると、人間としか答えられないわけなんだが…。俺は赤井夢斗。赤は普通に色の赤、井は井戸の井、夢はそのまま、斗は北斗七星の斗だ。16歳で高2」

「って、そんなことはどうでもいいの!? 何よあれ?」

この女の子は俺の自己紹介が気に入らなかったらしい。

「何って、何だよ」

「アンタ、赤井…。だっけ? どうやって火を消したの? 赤井は一般人でしょ? 才能は無いはずなのに…。?」

やっぱりそこか。

説明するしかないよな！。

「しかしクエスチョンマーク多いな、後人の名前にクエスチョンマークは付けるな。簡単に言うなら、俺には才能があるんだよ。絶対に才能検査じゃひっからない、な」

「どういこと？さっき白道が言ってたキャンセルってやつが関係してるの？」

よし。

いい感じのタメだな。

本当はタメとか考えちゃ駄目なんだろうけどな！。

「そ。才能…“スキルキャンセル才能帰却”。こいつの能力は簡単。才能によってできているもの、例えばさっきの火とかもそうだけだよ、ああいうのに触れると無条件で消しちまう、残念なことにな。それを俺が持っている」

「も、持っているって…、そんな才能聞いたこと無いわ！あ、有り得ないじゃない！　そんな、事……」

女の子は明らかに動揺していた。

「おいおい、有り得ないなんて言うなよ。そんなこと言ったら才能なんていう超能力はみんな有り得ないだろうが」

「そ、それはそうだけど……」

渋々納得。

「よし、じゃあ答えてもらうぞ。君はどうして追われているのか、後名前も教えて」

赤井が最初の話題に戻した。

「……、私は、くれないぎね紅鍵音。紅はべにっていう字の紅、鍵はそのまま、音はおとつという字。ちなみに赤井と同じ16よ」

そこまで言う、ふう、と息を吐いた。

「私はあの黒服連中、“統一オールワン・ハッピーワールドされた幸福な世界”の秘密を、知ってしまったのよ」

「ほうほう、よくある展開だな、そりゃ。で、何を知っちゃったんだ？」

赤井が聞き返すと、紅が妙なことを言い出した。

「絶対笑わないでね、嘘じゃないから」

「え……………」

最初は意味が分からなかったが、すぐ後の紅の言葉で分かることになった。

「世界征服よ」

&1 t; 2& g t; ; 二人は互いに話し合い、今の状況を理解する。 ;

(1)

一言言っておきますが、赤井君の才能は決してとあった魔術で禁書
な目録に出てくる上条○麻さんの力では無いですからね！

&1 t; 2 & g t; ; 二人は互いに話し合い、今の状況を理解する。 ;

(2)

最近空虚な感じになります。

例えで言うなら夏休みがもうすぐ終わるのに宿題やっけてないくせにゲームをやつてるときみたいな。

&1 t; 2 & g t; ; 二人は互いに話し合い、今の状況を理解する。 〵

(2)

「……………、マジですか？」

「マジよ。何度も言わせないで」

「うーそーだー！！有り得ないって、いまどき世界征服とか！！何世代前の魔王だよ！！」

いやいや。

この時代に世界征服とか。

できるわけ無いじゃないですか。

「私だって最初は有り得ないと思ったわ。でも、これは本当よ。じやなければあんなに私のことを追ってこないでしょう」

「……百歩譲って残念なことにそれが本当だとして、お前はどんな秘密を握っちまったんだ？」

「実は、私もまだ知らないの」

「は？」

秘密を知らないで追われてるってどういうこと？

すると紅はそんな俺の心の声を読んだように言った。

「赤井の言ったことは分かるわ。私の握っている秘密って言うのはこれなの」

紅はそう言いながら首元からひとつのペンダントのようなものを取り出した。

それは小さな長方形で赤色をしていた。

「何だそれ？」

「これはUSBメモリー。この中に秘密があるって言われて、今家に帰っているところだったの。まだこの中は見てないから、私は知らないの」

「なるほど。そういうことか。」

ん？

今の言葉の中におかしなところがあったな。

「なあ、『秘密がある』って、誰に言われたんだ？」
少し気になった。

たかだか高校生程度の人間がそんな秘密を握れるとは思えなかったからだ。

これは、聞いてはいけないことだったのだが。

「このことを言ったのは、私のお母さん。このUSBを渡して、死んじゃったんだけどね」

……。

「悪いな。嫌なこと思い出させちゃって。すまなかった」

「べ、別に気にしてないから、大丈夫なんだから……」

明らかにへこんでんじゃねーか。

こりゃやっちゃったな…。

金輪際この話題は出せそーにねーな。

「じゃ、じゃあよ紅、お前、どこから来たんだ？」

「“都市”よ。私も才能持ち。私と母さんは才能を持っててそこに住んでたんだけど、父さんと兄さんは持ってなかったからこっちに住んでるの。いまは父さんのほうの家に行ってるの」

「そうか、やっぱり“都市”に。なら、お前の才能は何なんだ？」
“超跳躍”^{ホッパー}。それが私の才能。簡単に言うなら脚力の強化ね。って、やっぱりってなによやっぱりって」
「だってお前ものすごい勢いで飛んできたじゃねえか。それにあんな才能を使う奴等に追われてたもんな」
「ん、確かに」

そうしてひとしきり話した。

この出会いは、赤井のこの後の人生を大きく変えることになるわけだが、そんなことをこの状況で知るものはいなかった。

「1 t; 2 & g t;」二人は互いに話し合い、今の状況を理解する。」

(2)

冬休みの宿題。

あんなに短かったのにどうして鬼のような数の宿題が出るんでしょうか？

<1 t; 3 & g t; 二人は一日置いて、目的地へと向かう。> (1) (前

大変眠いです。

非常に眠いです！。

<3>; 二人は一日置いて、目的地へと向かう。

(1)

「やーもう紅ちゃんってば可愛いわねー!」

「ちょ、お母さん、やめてくださいって」

「やーだもう、お母さんなんて気が早いわよ! こーんな馬鹿息子にはもったいないわねー」

「紅のおねーちゃん、わたしと遊んでっ!」

「わかったわかった。さーこっちで遊びましょーねー」

「わーい!!」

何で今こんな状況になっているのか。

少し話を遡ろう。

「お前家までもう近いのか?」

「うーん、後6時間くらいかしら」

「遠いな!!」

赤井と紅はこれからのことについて話していた。

「あんな奴等にまた追われるかもしれないのに大丈夫なのかよ」

「あのね、ここまで助けてくれたのには感謝するけど、もう大丈夫よ。これ以上私に関わると死ぬわよ」

「俺は出来るだけ女子の願いつてのは聞きたいもんだがな。残念だがその願いを聞くことはできねえな!!」

「あんた馬鹿じゃないの」

「キメ台詞を潰された!」?

「どうでもいいけど、私から離れたほうがいいのは事実よ。ちよつとおかしな才能を持ってるからって格好つけて頭突っ込まないほうがいいわ」

「嫌だ。俺はお前を助ける」

「どうやって？」

紅のその目は俺をすこし試すようだった。

「なら今日は俺の家に来い。部屋は父さんの部屋が開いてるから問題はない」

「ふーん、家ねえ。そのほうがいいかも。そうして」

「……意外と驚かないんだな」

「無理だって分かってるもの」

そこまで言われたら少し燃えてきた。

絶対に紅を家に泊めてやる。

そんな熱い決意の中家に帰った。

問題なのは母さんの承諾だ。

ていうかいきなり女子連れてきて泊めてくれて大丈夫か？

心配は無用だったが。

「……ただいま。」

「……お邪魔しまーす。」

二人は恐る恐る家（赤井）に入った。

「あらお帰り………えっ？」

そこには丁度母さんがいて。

どうやら俺が女子を家に連れてきたことに驚いたのか、手に持っていたTシャツを落としてしまった。

「……ゆーちゃん、ちょっと来なさい」

暗い声で俺を呼ぶ母様。

ん、変な誤解された？

ちなみにゆーちゃんってのは俺の家族内での呼び方（母のみ）。
あんま好きじゃない。

そう思いながら紅を玄関に残したままリビングに来ると、耐えていたかのように母さんが肩を震わして、

「何よ何よゆーちゃん！！ あの娘とっても可愛いじゃない！！
ねえ彼女なの！！ やったじゃないゆーちゃん！！」

ずてーん。

バラエティなら絶対こけてるぞ。

いや確かに紅は可愛いって部類だと思うよ。

肩までの亜麻色のショートカット、目も大きいほうだと思うし、
小顔だし。

だからって…。

「あのー母さん？」

「いやいや、ゆーちゃんにもついにこんな日が！！ お母さん嬉し
いわ！」

もうこっちの話なんか聞いちゃいねえな。

この人が俺の母さん、あかい みづき赤井美月。

年齢不明、身長145センチ、靴の大きさ22センチ。

一言で言うと、合法ロリ。

何度も父さんが実は法律を犯してるんじゃないかと不安になる。

俺の年からして40は超えてるはずなんだが。
今でも映画館に子供料金で入れるらしい。

「落ち着け母さん、しっかりしろー!!」

たまに母さんが発病するトリップモード。

こうなるともう人の話なんか聞きやしない。

よく父さんが帰ってきたときこうなる（ちなみに俺の父さんは単身赴任中。）

こんなときの対処法はひとつ。

「あー、あんなところに父さんがー（棒読み）」

あさっての方向を指差しながら答えるとなおよし。

「どこ、どこなの!!」

ぶんぶんと首を振って探す母さん。

……、空しくなってきた。

「母さん、嘘だよ。落ち着いた?」

「嘘だったの?　しょんぼりしちゃうわよー。」

「じゃあ本題、あの子紅って言うんだけど、一日泊めてやってくれねえか。」

「……………」

母さんは腕を組んで考えた。

そして、重い口を開いた。

「同棲したいなら言ってくればマンションの部屋くらい借りてきたのにー。」

「ん!？」

「実家で同棲しようなんてゆーちゃんも結構強者だと思うけど。ちゃんと紅ちゃんの見聞も聞いたの?　恋人の家族と一緒に暮らすっ

て相当きついところがあるわよ!。」

「何ものすごい勘違いしてんの!!!」

「ん、どういうこと?」

「いやいや、一日だけでいいんだって!! どんな曲解してんだよ!!!」

「なーんだ、そうなの? 別にいいわよそれくらい。太陽さんの部屋が余ってるから、そこをつかえばいいわね」

「お、おう」

ものすごい誤解を先にされたせいかな、すごく簡単に認められた。

そうして紅をリビングに呼んだ。

「……OKになったぞ」

「そ、そうなの。意外ね」

すこし紅の顔が赤いのは気のせいだろうか。

「それはそうと」

「ん、なんだ?」

「ゆーちゃん(笑)」

「うるせーやい」

リビングに戻ると、妹の葉月も二階から降りてきていた。

「えと、こんにちは。今日はありがとうございます」

そして、話は冒頭に戻る。

「お父さんに電話しなきゃ」

「せんでえーわ!!!」

うん、疲れた。

&l t; 3& g t; 二人は一日置いて、目的地へと向かう。く

(1)

(後

これからゆつくりとキャラたちについて説明していききたいと思いますー。

この手のやつはいんすぴれーしょんってやつで決めてるところも多いので、難しそうですーがー。

まずは赤井君から。

赤井夢斗って言うのはモンハンのアカムからなんですよね。

赤と夢で。

主人公がこの名づけ方ってまずいですかね……。

色々と過去があったりしそうな不思議な子……って設定にしたい!!

&1 t.; 3 & g t.; 〽二人は一日置いて、目的地へと向かう。〽 (2) (前

商売戦略って大事なんじゃないか？

ま、私にはどーでもいいことなんですー

&1 t; 3 & g t; 二人は一日置いて、目的地へと向かう。 (2)

まあ。

そりゃそうだよね。

何にも起きるわけ無いですよね。

ひよっとしたら黒服が来るんじゃないかとも思っていた俺が馬鹿みたいじゃん。

そして朝。

幸い今日は土曜日なので特に何にも無い。

「さー行くか」

「どうしてさも当然のように付いてこようとしてんのよ」

朝食を食べた後、紅は母さんにお礼を言って出て行った。
だから付いていっただけ。

「お前狙われてるんだろ？ 助けてやるって」

「赤井はあいつらの恐ろしさを知らないんだから……」
そうはいっても駄目だとは言わなくなった紅。

心を開いてくれたのかな…？

と思っていると、紅は興味深い一言を言い出した。

「でもま、その手間も私が家に着くまでだけだね」

「ん、どういうことだよ」

すると紅は急に顔をキラキラさせて、

「だって、お兄ちゃんがいるんだもん！」

と、とびきりの笑顔で言い出した。

「に、兄ちゃん？」

「そう、お兄ちゃんよ!」

「おいおい、どんな兄さんか知らんけど、こっちにゐるってことは普通の人なんだろ? 俺と大差変わんねえじゃねえか」

「どんだけ兄さんが好きなんだよ。」

「このころ、まだあの人に会う前はそんなことを考えていた。」

「さてしも。」

「電車やらバスやらを使いこなし。」

「4時間程度で着いた。」

「お前6時間位って言ったよな!!」

「だってバスとか電車とか使ったこと無いんだもん」

「どんだけ箱入り娘なんだよ!」

「だって私の才能があつたら別に使う必要ないし。跳べばいいから」
「……、そうか、跳躍ホッパーだったっけか」

「そういうやそんな才能聞いてたな。」

「直線に跳べば結構な短さで行けるのに……。わざわざ金を使っちゃったじゃない」

「直線に跳ぶ!？」

「流石にビルだと厳しいけど、家とかアパートくらいなら跳び越えられるわよ?」

「小さなところでやっぱ才能ってすげえなと思ったぜ……」

「そんなこんなで紅の家。」

「普通の住宅街にある普通の一軒家だった。」

「もういいわよ。ここまで付き合ってくれてありがとう。赤井のこ
と、たぶん忘れないわ」

「多分て。でも、とりあえず任務完了なのか……? っていうか、お前で
何とかできるのか? この後」

「大体私とアンタは他人。後はあたし達の家族で何とかするわ。警察にも頼ればいいしね」

「そうか、お前の兄ちゃんってのがどんな人かってのは気になったんだけどな」

どうしてこんなことを言ったのか。

「じゃあ、見てく？」

今でも謎。

紅がチャイムを押す。

ピーンポーン。

よくある普通のチャイムがなると、数秒ほどで玄関のドアが開いた。

そこにはラフな格好をした男が。

「…、鍵音！！どうして帰ってきて？　ってそれより」

俺が聞いたのはここまでだった。

「お前は誰だー！！」

玄関にいた男によって、顔面をおもつきり殴られ、俺は意識を失ったからな訳で。

&1 t; 3 & g t; 二人は一日置いて、目的地へと向かう。 (2) (後

恒例のキャラ紹介コーナー！

今日は紅鍵音さんの出番です。

名前の由来は赤 紅ってところと、ネタ帳的なところから名前を。

ちなみにペンネームもこっからとったんですよー

ヒロイン1、にしたいけどなんか難しそう…

&l t; 4 & g t; ; 二人は統一された幸福な世界を知り、そして…。

(1

夢喰いメリーがアニメ化イエーイ！！
ついに来たかって感じですっ！！

<4>; 二人は統一された幸福な世界を知り、そして…。

「はっ!!」

気がつくと、天井が見えた。

「あ、よかった!! 目が覚めたよ、お兄ちゃん!!」
ん、誰の声だっけこれ。
ていうかここはどこだ?

「よかったよかった! 直前で手加減したとはいえ意識を失ってたからね」

なんか忘れてるな。

今俺の顔を覗き込んでいる男の人は誰なんだろう?
こういうときは今日の行動を思い返すといらしい。

「赤井くん? 大丈夫? 意識飛んでない?」

朝起きて、誰か…

紅か。

紅とどこかに向かって…

そうだ、紅の家だ。

それで紅の家に着いたんだった。

それで確か誰かに会

「ああああああああああ!!」
そうだった!!

今ここで覗き込んでいるこの男の人がいきなり丸太を振り回してきたような威力で殴ってきたんだった!!

そこで俺は飛び起きた。

「誰だお前!!」

「ごめんなさい」

「謝られた…」

最初あったときはいきなり殴られて、次にあったときにはいきなり謝られたよ!!

「ちょっと待ってください。あなたは誰なんですか……」
「いよいよ状況が理解できなくなってきたぞ……」

「あ、ああ。今回は俺が早とちりしちゃって殴ってすまなかった……
…俺は紅桜^{くれなゐら}。鍵音の兄だ。よろしく。そして殴っちゃってごめんなさい」

そういうと桜は正座をして、
腰を折りたたみ額を床につけた。

俗に言われる土下座だった。
英語で言うとうとDOG EZAだった。

そりゃもう見事な。

「いやいや、頭上げてくださいって! 俺いま迷いが多すぎて訳わかんなくなってますよ。どうして、その、俺を殴ったんですか?」
「それが、その……、鍵音がいきなり都市から何の連絡も無く帰ってきてさ……、男連れてきて、結婚でも申し込まれるのかと思っちゃまって……」

「ま、まさかそれで俺を?」
「いやいや、そんなことで。」

初対面の人を殴るわけ無いって。

「いつの間にか身体が勝手に動いちゃってたんだ……。手が滑っちゃった（キリッ）。」

「どんな手の滑り方だよ！！ 意識失ってたよ！！」
「ていうか決め顔でそんなこと言うなよ！」

「それにしてもとんでもない威力で殴ってきたぞ大丈夫かお前の兄ちゃん。」

「でも強かったでしょ？ あれでも最後は手加減してたから。本気なら赤井、死んでたよ。」

「死！？」

と、こんなとんでもない自己紹介を終えた後。

「今何時？」

「もう5時よ…」

「やべ、早めに帰んねえと！！」

なんせ4時間かかったまうとこだからな。

「本当にごめんなさい」

結局桜さんは最後まで謝ってた。

しかし跡とかほんと残ってないな。

ある意味殴り方がよかった？（殴り方がよかったってなんだ。）

「お邪魔しました」

そうして俺が紅の家から出ると、誰かが追いかけてきた。

「ち、近くまで送るわよ…」

紅（鍵音）だった。

「ごめんなさいね。私のお兄ちゃんが……」

「正直戸惑いすぎて怒るタイミングとか無かったからな……。もういいよ」

「そう……」

珍しく紅がしおらしい。

この際気になることも聞いておこうか。

「ところで気になったんだけど、お兄さん、桜さんって何者なんだ？」

「何者って？」

「あのパンチ力、只者じゃないっていうか……。何をしてるのかなと」

「只者じゃないって、そりゃそうだよ。だってお兄ちゃんは無才能の一般人の中では世界最強だから」

「は？それってどういう」

「会話中すまないけど邪魔するぜ？」

「こいつらが、創造主クリエイターの言っていた……」

俺がその奇天烈な答えにどういう意味か聞こうとしたとき、目の前に二人の男が現れた。

&l t; 4 & g t; ；二人は統一された幸福な世界を知り、そして…。

（1

めだかボックスの話なのですが、安心院さんを初登場時から好きなキャラにしたファンの方ってどれくらいいるんでしょう？ひよつとして私だけ？

&l t; 4 & g t; ; 二人は統一された幸福な世界を知り、そして…。

（

サブタイトルが長いのが癖なんです。

最初にあんな風を書いちゃいましたから。

意外とああいうの考えるの難しいんですよー。

<t;4>; 二人は統一された幸福な世界を知り、そして…。

「空気を読めよなお前ら……」

そこにいたのは、白道とスーツの男だった。

白道は前と同じ喪服のような黒いスーツを着ていた。

だが、腰に何やら付けている。

もう一人はこの前殴った奴とは違うようだ。

燕尾服を着ていた。

「は、白道!？」

紅も驚いている。

「じゃじゃ馬姫ちゃん久しぶりー、よっ」

「何故捕獲対象と友達のような感覚で話そうとしているんだお前は……。それでも“today”のリーダーか？」

「そういうわないでくださいよ“風”^{ウィンド}さん。」

なんか世間話っぽい始めた!!

だが、その会話に驚いている人が約一人いた。

「白道が“五日間”^{ファイブデイズ}のリーダーの一人で、もう一人はあの“花鳥風月”の一人ってこと……？」

「どうした? 紅。」

紅が急にガクガクと震えだした。

「ん? そおかそおか。お前等は俺達の肩書きを知らなかったんだよな。俺は“today”のリーダー、^{はくどうつきかげ}白道月影。隣のこの人は“花鳥風月”、《風のウィンド》さん」

「何故名乗る……? 普通は隠すものだぞ。それに本名を出してはコ-

ドネームの意味が無かろう」

「だから“風”^{ウインド}さんの言うてないですよ。その前に、あなたの名前も知らないですけどね」

「“today”？ “花鳥風月”？ 何だそりゃ？
いきなり何を言い出したんだこいつら。」

「あ、赤井……。まずいわよ……。こ、こいつらは……」
紅はどんどん青さめていくし。

「まあキャンセル赤井君は知らないよねえ。じゃじゃ馬ちゃんの代わりに説明するか。まず“五日間”、こいつは“統一^{オールワン・ハッピー}された幸福な世界”の行動部隊みたいなもんだ。駒とか、兵とか、軍隊的なものだと思ってくれ。そこでこの部隊つてのが五つに分かれてる。だから“五日間”なんだけど。そしてこの部隊の一つ一つに名前がつてな。“day before yesterday”、“yesterday”、“tomorrow”、“day after tomorrow”、そして“today”。ちなみに“day before yesterday”は“DBY”、“day after tomorrow”は“DAT”って訳されるがな。
俺はこの“today”のリーダーなのさあ」

「ん、なんとなく分かったような。でもなんでこんなに紅は怯えてるんだ？」

この怯え方は尋常じゃない。

「ん？ 俺達が強いからじゃない？」
「自分で強いとか言うな。悲しいぞ」

「おいおい、またそっちで話を始めんなよ。“花鳥風月”ってのは聞いてねえぜ？」

なんかこいつらのペースだな。

「そうだね。“花鳥風月”ってのは俺の上にいる才能者4人のことを言うんだよね。四天王って奴さ。言っとくけど、俺より相当強いぜ？ 多分」

「どうして敵となるかもしれん男にこうもべらべらとお前は喋っているんだ……」

「いいじゃないですか。盛り上がりますよ？」

「盛り上がりを気にするな。」

つまり、白道の隣にいる人は花鳥風月の風の人ってことか。

「赤井、逃げるわよ！！ 家に戻るの！！」

気がつくのと、紅が今来た道を急いで振り返った。

ダンツと地面を蹴る音が大きく聞こえたかと思うと、斜め45度で跳んだ。

「高っ！ そして速っ！！」

赤井が紅のほうを向いて、よく分からんが俺も逃げようかと思っ
たとき、

「逃がさないよお。“花鳥風月”の人まで連れてきちゃったんだから」

後ろから声が。

白道の声だった。

「ホワイトアイズ白眼視”。止まれ」

ピキン。

何かが起きた気がした。

瞬間。

紅が空中で、跳んでいる途中で、

停止していた。

これは……、最初に会った時のあれか!?

そう、最初に紅や白道と会った時にもこの感じのときがあった。
あの時も紅は止まってしまった。

白道のほうを向く。

「スキル才能かよ!」

「スキル才能だけど」

ここで戦う気か!?

「しゃーない!!」

こうなったら紅にもう一度触れて直してから逃げるか戦うかだな。
そう思い、逃げた。

背を向けて。

別に本当に逃げようとしたわけではなく、とりあえず紅に触れて
から考えようと思った。

ウインド

「“風”さん、後は任せましたよお」

「言われずとも」

ドンツと後ろから音が聞こえた。

空気が振動するような音。

紅の跳ぶ時の音に似てるな……。

音も気になったので白道たちのほうを向くと……。

大砲のように“風”^{ウインド}が突っ込んできていた。

まさしく黒い砲弾のようだった。

その人は人間とは思えない速度でこちらの間合いを詰めてきて、
あっという間に赤井を追い抜いた。

「嘘だろっ……！」

「嘘じゃない、現実だ」

“風”^{ウインド}は赤井の前で止まった。

「速すぎだろ……。」

この人は強い。

直感で感じた。

「眠れ」

瞬間、“風”^{ウインド}が目の前に見えたと思うとグッと腹部に痛みが走った。

そして、赤井はどさりと倒れこんだ。

「意外と弱いじゃないか」

「実力を出し切れなかったつてのもあるのかもですよお」

「そうか……」

ウインド

“風”はそういうと、赤井に手錠を掛け始めた。

「さてさて赤井君、“都市”^{スキルキャンセラー}までの道中色々と聞かせてもらうぜえ。
どうして君が“才能帰却”^{スキルキャンセラー}なんて能力に気がついたのとかねえ」

白道の呟きは、誰にも聞こえなかった。

&l t; 4 & g t;) 二人は統一された幸福な世界を知り、そして…。

(2

これにて1章が終了しました。

もちろん2章に続くわけですが。

2章は遂にな都市偏スタートです!!

ただし2章に行く前にちよこちゃんかします。

成田良悟さんの『BACCANO!』アニメ最終話“不死者もそうでない者もひとしなみに人生を謳歌する”を見ながら。) 火桜芙蓉。

く創造主は表の世界に現れる。く（前書き）

今回は敵の動きを少しだけ。

本当に少しだけです。

まだ名前の出ていない幹部とかも出ますー。

「創造主は表の世界に現れる。」

「“花鳥風月”に“五日間”もほとんどいなくなっちまったな。どうするか……」

大きなホールに一人の男が呟いていた。

「アンタがほとんど仕事に回しちまったのが問題なんだろうが。なんかついたのか？」

「“痛”^{ペイン}、創造主様とちゃんと言いなさい」

そんな呟きに答える声が二つ。

ひとつは若い男、もう一人は若い女の声だった。

「軽い仕事、いや仕事って言うほどでもないもんが白道^{ハクドウ}の知らせで出来てな。どうしようかなと」

「じゃあ俺が行こうか？」

「いえ、この“恋”^{ラブ}に……」

男に二人が言い寄る。

「そうだね、この仕事は俺が行こうかな」

「創造主様……！ 何を……」

女の方がひどく驚いている。

「心配するな、これは簡単な仕事だしな。それにこれは俺から直々に行った方がよさそうだ。明日には帰ってくる」

創造主はこう続けた

「ぼちぼち表の世界に出たい。俺達はこの世界に戦争を仕掛けようとしてんだからな」

フツと笑うと、創造主はここを出て行った。

く創造主は表の世界に現れる。く（後書き）

はい。

今日は色々と眠いのです！。

でも色々と進みました！。

&l t; 1& g t; 〽二人は白道と共に“都市”へ向かい、ある男に出会う。〽

今日は私の大好きな小説『BACCANO!』の話をしましょう。

なんといいますか、映画みたいな感じで、主人公と呼ばれるキャラ
がないのが特徴なんですよね！。

一見どうでも良いような事件が最後に繋がっているようにする才能
とかは流石だと思うわけですよ！。

：これ以上語るとみんな付いてこなさそうなのでやめますが。

しかし私の周りに『BACCANO!』を知っている人の少ないこ
とと少ないこと。

みんな『デュラララ!!』ばっか言いやがって！

：いや『デュラララ!!』も好きなんだけどね？

なんか電撃で最初の作品だし、もっと目立っても良いと思うんです
けどね！。

<1t;1>; 二人は白道と共に“都市”へ向かい、ある男に出会う。

気がつくとき、何やら硬い金属質な床に居た。

上には蛍光灯が見えた。

横向きに倒されていて、手を動かそうと思っても動かせない。

後ろでに手錠をされているようだ。

すると、何かを閉めるようなガラツと音がした。

ゆっくりと意識が戻ってくるにつれて、じくじくと鳩尾のあたりが痛み出した。

そうか、俺、風とか言う人におもっきり殴られて、意識を失ってたんだ…。

1日二回も気絶したのか。

本当に身体に悪そうだ。

ここは…

「ん…」

「目覚めたのかいキャンセラー赤井君。ここは“都市”行きのバスの中だぜえ」

声が聞こえた。

聞いたことのあるような…。

「まだふらふらしてるねえ」

「……………?」

どこだって言ってた?

……行きのバスの中……

都市行きの……

「都市だあ!？」

文字通り飛び起きた。

「おお、よおやく目が覚めたかい？」

「……お前、アイツか？」

「実写版二十世○少年の伝説セリフじゃないんだからよお。白道だよ、白道。そのボケは初めてだ」

間違えた。

そうだ、こいつは白道だ。

どこかでここでボケろと天の声が聞こえたもんでついな。

「白道……、ここはどこだ？」

「だから“都市”行きのバスだって。いや、正確にはトラックの荷台の中なんだが」

「トラック……？」

じゃあさっきの扉の閉まる音はトラックの荷台の戸を閉めてたのか。

その時、ガコンと揺れた。

「発進だぜえ、超能力溢れる夢の街へ」

「紅はともかく、俺まで連れてくる必要は無いんじゃないか？」

「君も秘密を知っちゃったかもしれないじゃないか」

「……そうだな」

こ、殺されるのか？

口封じ的なあれ？

旅行に行くなら海か山かどっちがいいって言われて答えたほうに沈められるあれ？

俺は本当何にも知らないんだぜ？

だって桜さんのストリートですっと気絶（むしろ失神レベル）してたんだから。

（でも、あれは前日にあまり眠れなくて眠たかったっていうのもあるんだろう。）

「というのは建前」

「建前？」

「俺がこの事故のことを報告するとうちのボス、まあ俺の雇い主のクリエーター創造主”がお前にやけに興味を持ってな」

「クリエーター創造主”？」

また訳の分からんやつが……。

そいつがこいつらのボスらしいが……。

「何で俺なんかに興味を？」

「さあ、さしずめ自分と同じ才能を持ってる人間が居たことが嬉しかったとか、面白いとか思ってるんだろうな」

同じ才能？

それはつまり……。

「“才能帰却”を持つてんのか？ その“創造主”って奴は。何かコードネームにあわねえな」

創造って文字には『つくる』って文字が二つも入ってるのに。消しちゃ意味無い。

「その辺は心配すんな。アイツはもう一つあるからな」

「もう一つ……？ それってどういう」

「ん……、ここ、どこ……？」

「おやおや、じゃじゃ馬姫のお目覚めだぜえ」

白道にさっきの言葉の意味を聞こうとしたとき、後ろからここ2日で聞きなれた声が聞こえた。

「紅！？ お前も乗ってたのか！？」

「そう驚くな、当たり前じゃないか。秘密は絶対保持、彼女こそこの事態を引き起こした張本人なんだから」

となると、俺が意識を失った後、紅も詰め込まれたのか。
姿勢的に死角になってて全然気づかなかった。

「……、白道！！」

どうやらボケる気は無かったようだ。

紅は白道の姿を確認すると、俺と同じように飛び起きようとした。

ただ、俺と違う点が一つ。

俺は手錠の存在に気づいていた。

だから正確には俺の飛び起きるというのは上半身を腹筋で持ち上げたただけだ。

余談ではあるが、人が手を使わずに立ち上がろうとするのは意外と難しい。

手をついて起きるということもあるが、他にも手はバランスをとるという役目もある。

普通意識せずに手を使っているが、手にはこんな役割もあるというわけだ。

実験してみるといい。

まして後ろ手に手錠を掛けられては、手をつくことはもちろん、バランスも取れるわけが無い。

そして手錠の存在に気づいてなかった紅は……。

「つてあれっ！！」

起き上がろうとして、見事にスッテンコロリと尻餅をつくような格好になった。

ドシーンと。

受身も取れなかったんだからこれは痛い。

「痛ったあ！！」

思い切り立ち上がろうとした力が空回りした。

ありや痛いわな……。

「じゃじゃ馬姫……、別にここでボケをかまさなくてもいいんだぜえ……。それとも天からの声かい？」

と、白道は馬鹿にするというよりも呆れ返った感じだった。

「て、手錠なんかかけてたのね！」

「当たり前だと思ってくれよ」

「ここはどこよ！！」

「さっき赤井君に説明したばかりなんだけどねえ」

ここはもう聞いただろうから割愛。

「じゃあ、この手錠は何？」

白道からの説明を聞いた紅がまた質問した。

手錠？

別に変なところは無いと思うが。

紅は続ける。

「どうして私の足に力が入らないの？ いや、どうして才能が『使えなく』なっているの？」

才能が使えない？

どういうことだ？

その謎に白道が答えた。

「その手錠は特製品でな、身に付けた者の才能を封じるんだ」
つまりお前はその手錠をされている限り才能は使えないってことだ。

そう続けた。

「じゃあこっちの疑問にも答えてくれるか、どうせ都市まで長いんだし」

今度は白道の方から話を振ってきた。

「何？」

紅が返す。

俺も紅も、白道は紅に質問するんだと思っていた。
違っていたが。

「違う違う、じゃじゃ馬姫のほうじゃなくて赤井君のほうだよ」

「…俺？」

俺に質問だった。

正直すこし驚いた顔（むしろ「えっ」て感じ）をした。

白道はそんな二人の顔を見て、

「おいおい、びっくりすることはないだろう。俺が赤井君に質問することといたら決まってるじゃないか」

と続けた。

「質問が決まっているって……？」

紅は不思議そうな顔をしている。

「おいおい。じゃじゃ馬姫はもっと頭良いと思ってたんだけどねえ。
その様子だと君も赤井君に聞いてないね？」

「ど、どういう意味よ！」

なんとなく馬鹿にされている気がしたのか、言い返す紅。

「どうやって赤井君は才能に気づいたのか、だよ」

&l t; 1 & g t; ； 二人は白道と共に“都市”へ向かい、ある男に出会う。

これと呼んでいる人の中に成田良悟さんがいるんでしょうか。
いないんでしょうか。

知り合いでも良いのでいてくれると嬉しいです。

だって知り合い経由でこの小説を読んでくれるかもしれないですし
1。

&l t; 1& g t; 〱二人は白道と共に“都市”へ向かい、ある男に出会う。

今日の報告は特に無い筈だと思いますー。
ただ寒い。

さーむーいーのー！

<1t;1>二人は白道と共に“都市”へ向かい、ある男に出会う。

考えて見れば簡単に辿り着く質問である。

才能検査ですら引つかからないその才能。

もちろん、他の才能者に会ったことがあるなら別だが、今の社会で高校生くらいの年代であれば、親族に才能を持つものがない限り会うことは難しい。

「……君のことは独自に少し調べた、というか聞いたんだけど。お前の家族に才能を持つものは居ないよね」

「……。どうやって知った？」

「君のお母さんって結構なおしゃべりだよな」

「アイツか……」

絶対聞かれたら喋るだろうな。

そうですけど何か？みたいな。

「これは本当に興味本位、アフレコだからどうでもいいっちゃどうでもいい。さっきお母さんに聞いたって言ったけどよ、本当は別件で行ったついでに聞いたもんだから。もしかしたら俺達の仲間にもう一度聞かれることもあるかもしれない、てかあるだろう。特に創造主はえらい食いついてたからな」

別件？

少し気になっていると、白道が自分から答えた。

「ああ、別件って言うのは赤井君のお母さんに赤井君が才能を手に入れたってことを伝えて、都市にしばらく滞在するってことを伝えただけ。別に襲っちゃいないよお」

また上手く都市への滞在理由とか付けやがったな。
てか襲うって。

「で、どうなんだよ？ 教えてくんねえのお？」

ほら、ほら、と言った感じで迫ってくる。

おっさんうぜえ。

いや流石に言わないけどさ。

「昔色々あったんだよ、色々な」

「なんだよ、黒歴史でもあるキャラってかあ？ 痛いぜ？」

「黒歴史って言うな。あと痛いとも言うな」

人の過去にけち付けるな。

確かに黒歴史的に不思議だったことは認めるけどな。

「そう、色々あったんだ。まあ言いたくないんなら俺もそれで良いかな？ 多分」

「随分簡単に引くんだな」

「そうかい？ アフレコだし、こんなので君の事を知れるとも思っていないし」

お前みたいなタイプは絶対聞いてくると思ってたんだが。

正直ここで迫られたらどうやって話を逸らそうかと思っていただけに、この反応は意外だった。

「赤井君にじゃじゃ馬姫、寝ておいたほうが良いぜえ。こっから結構長旅だし。俺はもう寝るなあ」

数分後。

白道がそう言ってあぐらをかいてトラックの横の壁にもたれかかったので、もう一度横になることになった。

とはいえ、トラックの荷台の床、金属質で固くてめっちゃ寝にくい。

正直気絶するか貫徹した後じゃないと寝れる気がしない。

紅はどうなのかな、と思って紅の方を見てみると、目が合った。

紅も同じようだ。

（こんなところで寝れるかお前？）

（寝れるわけないでしょ）

白道もああは言ったものの絶対寝れてないなと思って見ると、

「ZZZ……」

爆睡していた。

&l t; 1& g t; 〽二人は白道と共に“都市”へ向かい、ある男に出会う。〽

久しぶりにキャラ解説コーナー！

今日は紅桜さんです。

名前の由来は特に無いと言えないんですね。

もっと登場させたかったしそこそ伏線っぽいのも出したんですが
出番的に今回はフェードアウトしちゃいましたー。

またどこかで出るかもですよ！

&l t; 1& g t; 二人は白道と共に“都市”へ向かい、ある男に出会う。

さてさて。

今日も寒風が吹きつけてきます。

これは地球内暴力だ！！

<1>; 1>; 二人は白道と共に“都市”へ向かい、ある男に出会う。

「……、は!？」

唐突に目が覚めた。

頬がひんやりと冷たく、身体も冷たい。

結局寝ちまったな……。

正直トラックの床なんかで寝れるか!、と思っていたがそんなことは無く寝ていたようだ。

ただし身体の節々がどこなく痛い。

ベッドや布団に慣れた現代人の悪いところか……?

そう考えたが、よく考えると相当昔から布団はあったと思うので、実はそうでもないかもしれない。

「……起きたの……」

「ああ紅……、つてえ!？」

赤井が驚いたのも無理は無い。

紅は髪はボサボサ、目には大きくまが出来ていて、こちらを睨む様に見ていた。

「まさか……」

「結局ほとんど寝てないわ……。赤井は先に寝ちやうから本当眠いのに寝れなくていらいらして頭とか掻いたりながら意識を失うように少しだけ寝たけどもう気持ち悪いのよ……」

「二行の文なのに文から読点がなくなるほどきつかったんだな……。」

読みづらいわ。

「ふわーあ、お、お前ら起きたのかあ。まったくガキは朝が早くて困

るってーの」

熟睡していた白道が目を覚ました。

心底ノンレム睡眠をお楽しみみなさったそうで。

「どうしてアンタはこんなところで綺麗に熟睡することが出来るのよ理解できない考えられない有り得ない」

紅さん若干キレ気味で読点抜けるんですね。

「おいおい、冬山よりましだろ？」

「どんな所と比べてんのよそこは寝たら死んじゃうじゃない」

「つまり死なないんだから寝れるってことだろうよお」

「頭痛い……いろんな意味で」

紅さん読点ないしエクスクラメーションマークないから感情表現乏しくなってるけどこれ怒ってるんです。

だって目が人でも殺しそうな目なんだよ？

表現できないけど本当に怖いんです！

そのとき、ガクンとトラックが揺れた。

どうやら止まったようだ。

するとガラッと扉が開いた。

「ようやくついたか。待ちくたびれただろ」

開いた扉の目の前にはある男が。

30代位の男だった。

「おやおや、アンタ直々に見に来たのかよお。こりゃびっくり仰天だ」

白道は少し驚いたような顔をしたが、またすぐにニヤニヤと笑い出した。

「誰だ？」「誰なの？」

紅と赤井の声がシンクロする。

「あらあら、じゃじゃ馬姫は知んなかったのかあ。誰って、白道はそこで一息ついてから、」

「クリエイター創造主だぜえ」

と言いつつ。

&1 t; 1 & g t; ; 二人は白道と共に“都市”へ向かい、ある男に出会う。(

これからは更新の遅れることがあるかもしれませんが、気長に待つてくださいー。

&l t; 1 & g t; 二人は白道と共に“都市”へ向かい、ある男に出会う。

昨日は更新できませんでしたー。

この小説を読んでいるそのあなた!!

面白いと思ったら宣伝していただけると嬉しいですー。

<1t;1>ゝ二人は白道と共に“都市”へ向かい、ある男に出会う。

「クリエイター創造主!？」

二人は大きく叫んだ。

だが。

「と、周りの空気のまま驚いて見たが“クリエイター創造主”って誰なんだ？」
「はっ!？」「えっ!？」「……それは驚いた」

赤井が本音を言うところ にいた3人全員に驚かれた。
だって知らないもんは知らないんだから。

「ちょ、じゃじゃ馬姫教えてないの!？ そんなあり得へんやろ!
!」

白道さん驚きすぎです。

なんで今まで嫌な喋り方だったのにキャラ変えようとしてんだよ。
エセ関西弁で。

「……そういえば何も教えて無かったわね……」

紅は思い出したかのように呟いた。

だから誰なのこの人。

「ふむ、自分のことを自分で語ると言うことはいささか悲しいところもあるんだがな、しょうがないから自己紹介するか」

クリエイターその創造主さんは少し悲しそうな顔をした。

なんかごめんなさい。

「俺は“オールワン・ハッピーワールド統一された幸福な世界”のリーダー、クリエイター創造主と名乗らせて
もらっている」

「え!？ じゃあこの人が!？」

簡単に言うならRPGで魔王の目の前にいた感じなの？

セーブも回復してもらってないっての。
どんだけレトゲ？

「じゃあ何や、赤井は秘密も何も知らへんってことや無いの？
SBメモリーを見たんちゃいますの？」 U

白道はキャラ乱れっぱなし。

エセ関西弁にエセ京都弁が入りだしたぞ。
本当メモリアル級なんじゃないの？

「実は見てないってのが本当なんだが」

「嘘やろマジで!？」

いやいやメモリアル級だよねこれ。

絶対驚かない飄々としているってキャラ設定はどこに行ったんだ
よ。

ここだけ読むとめっちゃ面白い奴になってきてるぞ。

そんな俺と白道の漫才（白道の一人ボケに近いけども）は、そう
長くは続かなかった。

「落ち着け」

創造主と呼ばれているこの男が一言だけ発した。

ビュワーっと風が吹くようにその言葉は俺達を通り抜けた。

それだけで静かになる。

圧迫感、張り詰めた空気にさせられた。

「さて赤井君。私がこうやって直々に会いに来たのは少し尋ねたい
ことがあったんだけど」

明らかに創造主ペースにさせられる。

俺はごくりと生唾を飲み込むしかなかった。

「どうやって才能に気づいた」

やっぱりその質問かよ。

そんなことを考えていると、

「そうか、白道がどうしてトラックの荷台で赤井君と一緒に来ていたのか謎だったが、どうやら同じことを聞いたんだな？」

まるで心を読むかのような的確さだった。

俺には才能^{スキルキャンセラー}帰却があるから読心系の才能は効かないはず。だとするとこれは本当にこの男の推理力だった。

「おやおや、ばれちまったかあ。まあいいけどよお」

白道はいつの間にか元の飄々としたキャラに戻っていた。

あの白道の方が面白かったんだけどな……。

「そうか、白道、お前赤井君からほとんど何も聞き出せなかったのか」

流石にこの言葉には驚いた。

「はは、流石じゃねえか創造主。頭のキレはやばいな。確かにその通りだ」

白道も目を少し大きめに開いて驚いていた。

ただ今回は声を上げてキャラが崩壊するほどではなかったようで、口調は変わらない。

「読心系才能者なのか、お前……」

度肝を抜かれる推理力だが、よく考えれば俺の心は才能帰却で読めなくても白道の心は読めるのだ。

だから驚くほどではない。

読心系才能者なら。

「おいおい、赤井君、確かに創造主の推理力には度肝を抜かれるが、別にそういう反則的な才能は創造主は持ってないぜ？」

「その通りだな。私の才能はそのような力ではない」

浅はかな俺の考えは敵二人によっていとも簡単に砕け散ったが。

「私の才能はもっと面白い」

創造主がそういうと、右手の指を3本立てこちらに見せた。
すると、

ボツと人差し指から火が。

ビリツと中指から電気が。

ピキツと薬指から氷が出た。

「どういうこと……、どうして3つも!?!」

何が面白いのかさっぱり分からない俺を尻目に、紅は一人で非常に驚いていた。

<1t;1>;ゝ二人は白道と共に“都市”へ向かい、ある男に出会う。ゝ

そうそう、

ぼちぼち新作小説を考えていますー。

ま、しばらく出ないでしょーがー。

&l t; 1 & g t; 二人は白道と共に“都市”へ向かい、ある男に出会う。

どうも地の文を書くのが苦手なような気がしますー。

それって小説書く上でどうなのとか突っ込まないでください。

<t;1>t;」二人は白道と共に“都市”へ向かい、ある男に出会う。

「なんでそんなに驚いてるんだ、紅」

目を見開いて驚いてるとこ悪いが何に驚いたのかさっぱり分からんぞ。

「だって、3つも同時に……」

3つ同時？

もしもこれが才能のない世界ならともかく、ここは才能が溢れている世界だぜ？

何が不思議なんだ？

「そうか、赤井君はこれのすごさがわかんないのか。そうだよねえ、

スキル・サイエンス

“才能学”なんて普通の学校じゃ習わないもんなあ」

スキル・サイエンス

“才能学”？ 何だそれは。

スキル・サイエンス

「なあ紅、“才能学”って何なんだ？」

スキル・サイエンス

「“才能学”って言うのは簡単に言うなら才能を研究している学問。原理だとか。それでも色々と分かってないことは多いんだけど」

「で、どうしてそれが紅の驚く理由になるんだ？」

「才能学では、三重の才能は存在しないのよ。アイツは発炎、発雷、発氷の3つの才能を同時に使った、だからありえないのよ！」

ってことは。

今日の前のこの男は常識外れの才能なんてものがある世界の中でさらに常識外れなことをしたってことか。

それは驚くよな。

ん、待てよ？

「さっき才能学は色々分かってないって言ってたよな。それなら例外がいてもおかしくないんじゃないか？」

世の中にはどんなことでも例外がありますから。

「確かにそうかもしれないわね。これはただ単に三重の才能者の例

がないってだけだから。もしかしたら世の中にもいるかもしれない。でも、例外があったとしても驚くのは一緒でしょ！」

……そうだな。

今まで習ってきたことを覆されていて、今まで見つかっていない三重才能者が目の前にいたとするならそれは驚きだ。

「さて、ぼちぼち雑談は終わったか？本題に入ろう」

創造主が冷たい顔でこちらを見ていた。

相談する時間は終了、って訳かよ。

「別にアンタに話すことなんて」

「中学一年、夏休み」

赤井の言葉を潰すかのように創造主は遮って言ってきた。

「それが……、何だよ……」

心なしか推理物で追い詰められている気分だ。

しょ、証拠はあるのか！？　とか言いそう。

「君はその期間だけぼっかりと穴が開いているんだよ。何をしていたのか分らない。さしずめ『空白の夏休み』、と言った所か」

「どうやって……、その事を……」

「こう見えて私は一組織のトップなんでね。それくらいの情報収集は出来る。だが、ここだけは何も出てこなかった。何もだ。まったく情報が無い。ここを怪しんで当然だ。その反応だとはやりそこに何か、才能者との接触があった、ということか」

やばい。全部当たってる。

「まあ、白道も詮索をしなかったようだからしないでおくが、一つだけ答えて欲しい」

????。

え？

詮索しないの？

正直ここで迫られたらどうやって話を逸らそうか（ry

「何ですか？」

もう安心だ。

あの時の事は正直好きじゃない。

そう思っていたが油断していた。

この男を。

「そのことが紅を助けた理由になっているのかも知れないな。todayの報告から赤井君はそこそこ戦闘経験もありそうな雰囲気だそうだったらしい。そして赤井君は空手等格闘技を習っていない。ならばその中の夏休みに戦闘、もしくはそれに近いものがあり、実践的な戦い方を教えて貰ったのだろう。そして赤井君はこのことを語りながら無い。それは赤井君の意思だけだとは思えない。誰かに口止めされているということかもしれない。そして赤井君の住所。すべてを考えたんだ結果だ、答えて欲しいものだが」

随分と長い説明をされたが、実はそれは全部当たっているわけ。ここまで来ると本当は事実を知っているんじゃないかと不安になる。

何を質問されるのか。

「君が戦闘を教えて貰った人は、“崩壊”^{クラッシュ} いや、『崩野響輔』^{くずのひびくすけ}ではないか？」

&l t; 1& g t; 二人は白道と共に“都市”へ向かい、ある男に出会う。

創造主の才能とは？

崩野響輔とは？

さまざまな謎を残して進めようと思いますー。

伏線にゃによです。

&l t; 1& g t; 二人は白道と共に“都市”へ向かい、ある男に出会う。

私は謎を残して進んだ方が好きなんですー

最後のどんでん返しほど面白いものはないでしょ？

ん、これってどんでん返しになるのかな？

<1t;1> ; 二人は白道と共に“都市”へ向かい、ある男に出会う。

崩野響輔。

そうだ、崩野だ。

俺があの時助けてもらった。

でも、口止めされてんだよね…。

“そうそう、俺と関わったことは誰にも言わないでくれ。俺も追われてる身なんぞな。”

そんなことを言っていた。

だけど、この男の鋭さは知っている。

ここで嘘をついたところでバレるだろう。

ごめんな、崩野。

「……、ああ、そうだ。俺は崩野に助けてもらったんだ」

「……そうか、やはりな。あの男、死んでなかったか。殺そうとしても死ぬような男ではないと思っていたが」

今まで感情をほとんど表に出していなかった創造主が、ここだけはすこし感情を出ているように見えた。

憎悪の感情。

俺がそんなことを感じていると、創造主は一瞬だけフツと笑った。怒り。

憎しみ。

化〇語風に言うなら凄惨に笑っていた。

その時の顔には、寒気がした。

普通の奴には何も感じないかもしれない、というかあんな一瞬気づかないかもしれない。

でも俺はわかった。

この二人に何があったのかは知らない。
だが、凄まじい何かがあったのだろう。

「そうか、わかった。では以上だ。私は帰る」

いつの間にか創造主の顔は元に戻っていた。

あの顔に気づいたのはどれくらい居るんだろう。

紅は別に普通の顔をしている。

白道はニタニタと気持ち悪い笑いを顔に貼り付けていた。

こいつはやっぱり気づいてたか。

「白道、処置は言ったとおりに。赤井君、8日後にまた会おうと思う
がそのときはよろしくな」

創造主は意味深な言葉を残してその場を去った。

残ったのは3人。

「さてさてえ、あの男があんなに感情を出すとは、余程のことだった
んだろうねえ。崩野ねえ」

白道がぶつくさ呟いている。

そうしていると、不意にハツとした感じでこちらに振り返った。

「つと、仕事しなきゃいけないんだよねえ。赤井君とじゃじゃ馬
ちゃんにはこの“都市”で生活してもらうんだけど」

「生活？」 「どういうこと？」

二人が聞く。

「これから普通にこの“都市”で生活してもらってことだ。それが
創造主の命令。赤井君は紅と同じ寮に入ってもらって、紅と同じ
学校に通ってもらう」

え？

それって？

「俺に、“都市”で住めってことか！？ 訳わかんねえ！！」

「私も口封じとかされないの？」

まさか俺に“都市”で暮らせなんて言われるとはな。

俺は普通な世界で普通に暮らす予定だったんだけど。

「しゃーねーもんよお。俺は金で雇われた傭兵でな。命令以外は聞く気ないし、理由も聞いちやいないからなあ」

なんだそりゃ。

今時傭兵なんていたんだな。

「ちょっと、確かにその処分は嬉しいけど、私はあなた達の秘密を盗んだのよ！？ どうして生かしているの？」

そりゃそうだ。

普通なら口止めで殺されてもおかしくない。

「だあかあらあよお、俺はしらねえの。詳しくは創造主、ってもう居ないけどよ。いいじゃねえか、死ななかつたんだから。よかったな。それと、お前の危惧していた秘密のことだがな」

白道はそこまで言うのと、絶望的な一言を言い出した。

「ウィンド“風”さんがお前の家に行った。意味は分かるよな」

それはつまり。

USBはもちろん奪われたのだろうが、そんなことよりも。

桜さん。

紅のお兄さんが危ない。

あの人は強いそうだけど、それでも相手は敵の幹部クラス、それに才能を持っている。

これは紅大丈夫かな…。

そう思っていると、今度は紅が驚くことを言い出した。

「まあ、お兄ちゃんなら大丈夫でしょ!!」

「どんだけブラコンなんだよ!! どんだけ過信してんだよ!!」
もう驚きすぎて間髪いれずに突っ込んだよ!

どうやらこの気持ちは白道も同じだったようで、口をあけて驚いていた。

<1t;1>;ゝ二人は白道と共に“都市”へ向かい、ある男に会おう。ゝ

さて、新しい小説がぼちぼち完成しそうです！。

そのときは活動報告で報告しますね！。

&1 t; 2 & g t; ; 二人は学校へ向かい、今度は変人に出会う。 (1)

活動報告でもしましたが、
新・小説が完成しました！。

『不思議な』恋物語となります！。

&1 t; 2 & g t; ; 二人は学校へ向かい、今度は変人に出会う。)

(1)

「さて、これからどんな生活が繰り広げられるんだろうな？」

「私は普通だと思っうわよ？ 才能のない学校生活を知らないからどう思っうかは分かんないけど」

白道の話を聞いた後、3人で紅の寮まで行くと白道は、

「じゃあ、赤井君の部屋は302。じゃじゃ馬ちゃんの隣だから。

後は寮長とかじゃじゃ馬ちゃんに寮のルールとか聞いといてくれよ。学校は紅ちゃんと一緒に登校して、そのまま職員室に行ってくればいい。話は通してあるからよお」

それじゃ。

と、白道は手を挙げるとすぐに立ち去った。

その後は、寮長さんに話を聞いたり、紅に話を聞いたりして大体の生活は分かった。

この日は日曜日だったので、紅に色々と“都市”について紹介とかしてもらった。

そして次の日。

今日は4月24日月曜日、朝のこと。

学校に登校している途中での会話で、冒頭に戻る。

「そうそう、聞き忘れてたんだけどよ。“都市”の人たちは寮暮らしが多いのか？」

赤井がこう思ったのも無理はない。

圧倒的に行き道に寮が多かったのだ。

「だって“都市”に来れる人は才能を持つ人だけ。才能ってのは遺伝とかの可能性が低いらしいから、家族離れ離れになる可能性も高いのよ」

「それって結構つらいな……」

才能検査ってのは2歳からある。

2歳で子供を一人暮らしさせるんだからな。

そう思っていると、心を読んだように紅は言葉を続けてきた。

「大丈夫よ、6歳くらいまでなら親も“都市”に入れる発行所が出るし、そうでなくても手続きを取れば何とかなるのよ」

「なるほどなあ。それでも寂しいとは思うけど、しょうがないか
そういうルールだから。」

仕方がないか。

「そういや、俺料理とか出来ないんだけど。紅は出来るの？」

「あ、赤井、料理できないの!？」

めっちゃ驚かれた。

男子なんだからしょうがねえだろ!

「この“都市”の8割の人は料理が出来るわよ」

「なんで!？」

俺の学校じゃ女子くらいしか出来なかったぞ!?

「だって学校で詳しく学ぶじゃない。小学校から」

「小学校から!？」

こういうところが“都市”と外の違いなのか……。

「そうじゃないの？」

「中学校から週一のペースだよ。学べるわけないだろ料理なんか」

「ありえないわね……。料理が出来ないなんて……」

「有り得ないのか……」

むしろその意見の方が有り得ないけどな。

男子だからな! 高校生だからな!

そりゃ出来るやつもいるかも知ないけどほとんど出来ないやつ
ばっかだぞ!

「ところでよ、2歳ごろにここに来たとしたら一体どうなるんだ？
流石にいきなり一人暮らしはないだろ？」

「ああ、中学まではおんなじ施設で暮らしてるわよ？」
そういうことね。
なるほどなるほど。

そうして喋っていると、周りの登校生が増えてきた。

すると、目の前に建物が見えてきた。

「あれが、間之崎^{まのさき}学園よ」

それが俺の通うことになる間之崎学園だった。

&1 t.; 2 & g t.; 二人は学校へ向かい、今度は変人に出会う。 (1)

学園物、

ようやく学校を出すことが出来ました！。

&1 t; 2& g t; 〽二人は学校へ向かい、今度は変人に出会う。〽 (2)

アンパン、カンパン、カレーパン♪

ん、一人入れ替わってる奴がいるな。

どこに行った食パンマン。

<2> 二人は学校へ向かい、今度は変人に出会う。

(2)

都市立間之崎学園。

都市第二地区南西に位置する幼、小、中、高、大と全一貫性のエスカレーター式の学園である。

この方が都市的には非常に効率が良い。

何故なら、親元を離れた子達が非常に多いからだ。

この学園のランクはA。

ちなみにランクというのは学園の質によるもので、ランクAともなると入るためにはそれ相応の何かがいる。

お金であったり、才能であったり。

要は進学校のようなものだ。

先程出たこの学園に入るための何かとは、才能を持つ、あるいはそれに等しい何かを持ち、校長または理事長クラスの人間に認められることである。

都市とはいえど、その強さはまちまちである。

才能も万能ではない。

銃を向けられてしまえばそれでお終い。この都市の6〜7割はそうであろう。

この学園で言うところの才能は、むしろ異才と呼ぶ力である。

紅のような能力は実はそこそこ珍しいものである。

それにプラスして彼女の先天的な期待値でこの学校に入ることが出来たのだろう。

そして赤井が入るのも納得できる。

才能を消去する才能なんて今までの常識を覆すものであるからだ。

そして…。

「元無才能の学校から来た赤井夢斗って言います。誕生日は五月五

日、好きな食べ物はレバ刺しです」

ここに転校生が一人。

4月24日月曜日、2－Aの朝のホームルームであった。

赤井は間之崎学園についた後紅に職員室の場所を聞き、入って色々な話をした後、今日から授業に入っていていいそうだった。そしてこの状況。

意外と自己紹介というものは照れる。

「じゃあ、赤井君に質問のある人！！　じゃんじゃん挙げてね！」
「じゃ、じゃんじゃん！？」

ちなみにこの常時元気ハツラツなこの人が俺のクラスの担任、ふ富士叶じかなえである。

もちろん言うまでもないが女性。

見た目で言うと女子大生くらいの若い先生だ。

補足（後から聞いた話。）

生徒（男子全般）から絶大な人気を誇る先生の一人。
確かに健康的な美人といえば当てはまる先生である。
そんなことは置いといて…。

「血液型は？」

「才能は？」

「好きな歌手はー？」

「無才能の世界ってどんな感じ？」

「嫌いな食べ物は何じゃんよ？」

「趣味は？」

「か、かの、彼女はいるんですか？」

「好きな女性のタイプは？」

「好きなタイプと聞かれれば、俺は叶先生みたいな……」

「お前に聞いてないだろ樹野」

「お前は本気で叶先生ラブだな」

「叶ちゃんは彼氏とかいるのー？」

「いたらアイツが絶望するな」

「俺は叶先生を信じてる！」

「叶先生何歳ですかー？」

「あいつ、無謀な」

「誰も知らない叶先生の年齢を正面から……」

「今度こそ成功するかもよ？」

「いや、ムリだろ」

「叶センセの好きなタイプは？」

「待ってましたー！！」

「おい誰か紙とペン出し始めたこいつを止めてくれ！」

「禁断の愛に突っ走る気だ……」

「陰ながら応援するよ！」

「いやいや、応援しちゃ駄目じゃんよ」

あれ？

俺に対する質問じゃなかったか？

何で今富士先生の質問へと早代わりしてんだ？

「もう、みんな私のこと大好きなんだから♪」

お前そこで乗るのかよ！

そこは普通教師として話を戻すところだろうがよ！

「好きなタイプねえ……、年上で背が高い人かなあ」
ピシッ。

「先生、樹野が白くなりました！」

「ついでに何か大切なものがひび割れました！」

「燃え尽きたんだよ、真っ白な灰に……」

「大丈夫。愛があればタイプなんて関係ないわ。」

「そうそう、いくら背が後ろから3番目だからって！
ピシピシッ。」

「バカヤロー！傷を深くしてどうすんだよ！！」

「あっ……。その……。ゴメン……。ね……」

「うん、いいよ。どうせ、分かってたから」

「おい誰かネガティブなこと言ってそのまま窓枠に手をかけて人生を終わらせようとしてるこいつを止めてくれ！！」

「陰ながら応援するよ！」

「自殺をか？」

「だからどっちにしる応援しちゃだめだつってんじゃない」

「叶ちゃん、早く樹野を！」

「樹野くん、先生は樹野くんの事大好きよ。もちろんみんな。」

「マジで！！」

「おい、お前最後の言葉忘れんなよ」

「叶先生は俺の事好き叶先生は俺の事好き叶先生は俺の事好き叶先生は俺の事好き……」

「だから最後にみんな好きって言ったじゃんよ？」

「まー、元気になったんならー、良いんじゃないー？」

「え、でもアイツこのままほっとくの？」

「いいじゃん、幸せそうだし。トリップさせとけよ」

「ああ、ほっとけ、じき直る」

「ですな」

もう呆然と赤井は立ち尽くしていた。

このノリについていけなかったというべきか。

俺の前の学校でもこのノリはなかったわ……。

このカオス、いつ終わるんだろう？

&l t; 2&g t; 〱二人は学校へ向かい、今度は変人に出会う。〱 (2)

なんと今回一番字数が多い!!

そしてその内の半分以上を会話で占めている真実:

ある意味伝説の回:

二人は学校へ向かい、今度は変人に出会う。(3)

さても寒いですね。

凍えるように。

どしたんですかね今年。

<1 t; 2 & g t; > 二人は学校へ向かい、今度は変人に出会う。 >

(3)

「はいはい、分かったわよー。みんなー。赤井君が困ってるから、みんな落ち着いて発言してね♪」

そのカオスを止めたのはカオスを生み出した本人、富士叶だった。その言葉で教室が静かになる。

「じゃあ話も一段落したことだし、赤井君への質問をしましょうか。血液型と才能と好きな歌手と無能力の世界がどんな感じってのと嫌いな食べ物と趣味と彼女がいるのかと好きな女性のタイプについてね。発表お願いしまーす♪」

♪好きだな。

いやそこじゃないね突っ込む場所。

なんであんなおちゃらけた感じで生徒の話は全部聞いてんだよ…
…。

途中からは俺もわかんなかったしよ。

「え、あー、もう少しゆっくり、ていうか1つずつ言ってくれませ
ん？」

「あ、ああそうね。じゃあ、血液型は？」

「A B型です」

「なら私と同じじゃない。次。才能は？」

「うーん、説明が難しいんですけど…。才能スキル帰却キャンセラーって言うんです
聞いたこと無いわね…。どんな才能なの？」

「相手の才能で出来たものを全部消し去るってのが大本の才能です」

その一言で、周りがざわつき始めた。

「そんな才能有り得るの…。」

「それ、相当凄いな…。」

そんな中、ある意味チャレンジヤーともいえる女子が一人手を挙げた。

「ねえ、ちょっと試しても良いかしら？」

「え、あなたは……？」

グラビトン・シャットアウト
しのさきまや

「篠崎麻耶。才能は“重力遮断”。これは対象範囲の重力を消す力。これがあなたに効くならあなたは浮かび上がるはずよ」
なるほど、重力遮断ね。その力なら…。

「いいですよ。いつでも」

「ならお言葉に甘えるわ」

そう言い切ると、“重力遮断”を発動したようだ。

赤井の周りのチョークやら教壇がふわりと浮かび始めた。

が、赤井は動かない。

「うわっ」

「本当に浮かばない……、ね……」

「すっげえー！！」

「なるほど、面白いじゃんよ」

半信半疑だった生徒達も少しずつ本当だと分かって騒ぎ出す。

「なるほど。凄いわね、その才能」

篠崎も驚いていた。

「えと、こんな感じの才能です。後は、俺に触れている時にその触れられている人の才能が発揮できなくなるってくらいですね」

教室内はざわついている。

ざわざわ。

そんな時、パンパンと二回手がならされる。
手を鳴らしたのは富士先生。

みんなが静まる。

どうやら教師的な能力は高そうな先生だ。

「凄い才能なのね♪じゃあ次の質問。好きな歌手は？」

「そうですね……。俺は曲で選ぶので特定の歌手とかはあんまり……」

「へえー。次に、無能力の学校はどんな感じ？」

「今見た感じだと大差は無いと思いますよ」

「なるほどね。嫌いな食べ物？」

「食べられるものなら何でもですね」

……。

実際こんな自己紹介延々と続いた。

その後。

「じゃあ赤井君の席は紅さんの隣で♪」

なんだこのベタ展開とはもう言わないさ。

「んじゃ、これで今日のSHRは終わり♪赤井君も分からないことがあったら先生や周りの人にどんどん聞いてね！」

そんな快活な声を響かせて富士先生は外に出て行った。

どうやらこの自己紹介タイムは長かったらしく、入れ替わるように男の先生が入ってきて、授業を始めると言った。

<2>二人は学校へ向かい、今度は変人に出会う。 (3)

会話主体の感じになってきました。

地の文を増やした方が良いでしょうが、なかなか出来ませんね…。

&1 t; 2& g t; 〱二人は学校へ向かい、今度は変人に出会う。〱 (4)

ようやく学園の話が進んできましたよ。

忘れてませんけど、今日も寒いです。

暖かくなるまで言い続けますよー。

<2>; 二人は学校へ向かい、今度は変人に出会う。

(4)

一時間目終了。

こここの数学はそこそこ難しかったな!!

いや、見栄を張るのはよそう。

かなり難しかった。

ここってそういう名門らしいんだよね……。

よく考えれば難しいのも当然かもしれない。

そう考えていると、俺の周りには多くの人が集まっていた。

「なあ赤井、俺は染山紫瀬そめやましせって言うじゃんよ。よろしくじゃん」

「僕は、十島茶仁としまささじって、名前なんだよ」

そういつて口々に名前を言い出した。

「わかんないところがあったら俺に任せとけ！」

「そうだ、学校を一通り紹介しようぜ!!」

「なら、この辺の街についても説明しようよ！」

「さーんせーい。」

「とりあえず放課後に俺らと学校でも回るか？」

話がとんとん拍子で進んでいく。

だが赤井はこの空気が嫌いではなかった。

むしろ好きだった。

ああ、わいわいがやがやっこいいなあ。

「いいぜ、学校案内してくれ」

いつの間にか答えてしまっていた。

どうやら赤井もこのクラスに馴染み始めているのかも知れない。

この後英解、物理、公民と続いた。

授業についていくのは大変そうだ…。

そして昼休み。

今日の昼ごはんは行く途中の近くのコンビニで買ったパンだ。
食堂の場所とか聞いとかなきゃいけないな。

「なあ、一緒に食べようじゃん」

そうやってきたのは染山。

休み時間に常に喋りに来てくれた男の一人だ。

「そうですね、私もご一緒させてもらってよろしいでしょうか」

彼は相馬海。

随分と堅い敬語が特徴で覚えている。

「僕もー」

こいつは十島。

どうも話していると気が抜ける奴である。

「そうだな、一緒に食うか」

そうしていると、俺や染山らのとりまきを見ている男が。

入りたいのかな……？

そんなことを考え、声をかけようとする、

「おーす転校生。一緒に食おうぜ！ほら、天音も！」

そういつて天音と呼ばれた少年の背をバンバンと叩く男。

こいつは…、藤崎か？

そうそう、ふじさきれつ藤崎烈。

180センチはある高身長でガタイがいいのが特徴。

もう一人は……。

「天音、そういやお前は赤井に挨拶してなかったろ。やれよ」
そうしてバンと前に出させた。

「えっと……、僕は天音。あまね いずな天音雷綱。よろしく……」
そういつて頭を下げた。

「そんなに頭下げんでいいって。天音君、一緒に食べようぜ」
そうして席を作った。
どうやらかなり引っ込み思案のようだ。

いつの間にか5人も周りに集まっていた。
すっかり大所帯である。

「天音の作った飯はうまいんだぜ！！」

「そ、そんなこと……、ないよ……」

「うんにゃ、ここはうまいに一票」

「僕もうまいにー、一票」

「うまいに俺も一票じゃん」

「あ、転校生。俺の弁当は天音製なんだぜ！！」

「そいつはすげえな」

「天音はいい嫁さんになれるよな!!」

「いやあ……」

「そこは喜ぶところなのか？」

やはりというか。

場の空気をつくるのは藤崎だな。そう思った。

五、六時間目もあっという間に過ぎ、放課後。

「さあて、案内しようかね赤井君」

結局学校紹介は昼休み一緒だった染山、相馬、藤崎、天音、そして俺の六人で学校を回っていった。

体育館、保健室、校長室、生徒会室、食堂、etc。

食堂は思っていたよりずっと広かった。

「ここは親などがいない方がほとんどなので、仕方ないのではありませんかね。料理が出来る人が多いとはいえ、藤崎さんみたいな方もいらっしゃるし、朝は大変でしょうから」

と説明してくれた。

そうしていい雰囲気で終わり、通常なら「六人で帰ろうぜ!」的な空気で無事寮までついたろう。

だが、そうは問屋が卸おろさなかった。

&l t; 2& g t; 〽二人は学校へ向かい、今度は変人に出会う。〽 (4)

最近20..00のルールを守れてませんね。

ごめんなさい。

しばらくは毎日更新する予定ですが時間は不定期となりそうですー。

&1 t; 2& g t; ; 二人は学校へ向かい、今度は変人に出会う。 (5)

サイン、コサイン、タンジェントであるじゃないですか。
三角比です。

なんかタンジェント浮いてね？

&1 t; 2 & g t;) 二人は学校へ向かい、今度は変人に出会う。(5)

事件は、門を出てすぐに起こった。

「ん、やっと出てきたか。“創造主”に目を付けられた哀れで哀れな少年赤井君」

目の前には、男。

まったくもって普通。

30代くらいで、上は黒のパーカー、下はジーンズ。

群衆の中にいれば気づかないであろう。

ただ、一つ違うとするなら、

違和感。

存在感といっても良いかもしれない。

この感じは、白道…、というより崩野の感じだな。

そんな分からない男は左手をポケットに入れたまま右手を振り近づいてくる。

(なあ、あれ、赤井の知り合い?)

(俺も知らん。)

(少し、危ない、ニオイが、しますねー)

小声で話し合う。

(ってか、クリエイターって何?)

（くりえいたー？なんだそりゃ）

（何かを作ってるじゃんよ）

（何かとは、何でしょうか）

（さあ？）

そんな訳が分からない空気も敢えてか読まず、混乱させる言葉を喋りだす男。

「とりあえず、俺と一緒に来てくんね？」

「アンタ、何者だ。赤井は知らねえって言ってるぞ」

やっぱ藤崎は強気だなあ。10%感動。

「おいおい、喧嘩腰だねえ喧嘩腰だねえ。確かに彼と僕とは初対面だ、初対面だよ」

まるで大事なことのようにくどくど話す男。

「だけど信じてくれよ信じてくれよ。俺は少なくともお前の味方だとは思うから」

味方？

意味が分からない。

何だこのおっさんは。

“天啓”。天より閃く教えの如く。」

不意に十島がスツと普段と違うような声を出した。

「視界により範囲指定。分析。answer、’ついていった方がいい。’天啓終了」

まるで十島が別人に変わってしまったかのような喋り口だった。

その変化に周りも驚いている。

ただし、その驚き方は違っていたが。

「お、^{センス}“閃”じゃん！」

「天啓来るか。それにしても、この男を信じて良いのか？」

「……十島君、ついていった方がいって……、本当……？」

「このような怪しい人についていけ、というのが答えですか。なかなかどうして」

ん？

今の電波受信を信じたのか？お前ら。

「おいおい、今の何だよ。訳わかんないぜ。十島もどこから電波受信してんだよ」

確かに普段からぼわぼわしてる奴ではあったけどよ。

流石に今のは電波キヤラ確定並みの所業だぜ？

その答えに答えてくれたのは他ならぬ十島だった。

「今のはー、電波受信とかじゃなくてー、僕の才能なんだよー」

「才能？」

「そー、僕の才能、^{センス}“閃”の“天啓”ってやつなんだよー。赤井君に効くかどうかー、不安だったけどー、見ないようにすればー、大丈夫だったね」

「^{センス}“閃”？“天啓”？どんな才能なんだ？」

聞いた感じだと凄そうだけど。

「^{センス}“閃”ってのはー、僕の才能の名前でー、“天啓”ってのは技みたいなものかなー。見たものの問いに対する答えを返す。いかようであつてもねー」

え…？

そんな才能まであんのか。

「それって、どれくらいの的中率なんだ？」

「昔は低かったけどー、今は99%だよー。ほとんど絶対といっても良いかもー。」

的中率ほぼ100%じゃん!!

ちよつと待てよ。

それって……。

「テストは、どうなってるんだよ……? そんな才能使っちゃったら……」

「ああ、その点は心配ないじゃん。そこは染山が説明してくれた。」

「テストは才能は使っちゃいけないルールなんじゃんよ。それに元々高校生になるまでは才能は学校の授業以外で使っちゃいけないじゃんよ」

「そうなのか……、よかった……」
もしも使えていたらアイツは常にテストで100点を取り続ける化物になっちまう。

「よく分かんが、その彼の才能の力で俺の無実が晴らされたって事で良いのかよ。」

置いてけぼり感たっぷり謎の男が会話に入ってくる。
そういや、忘れてたな。

「じゃあ、お前と一緒に行く……、ぞ? いいんだな、十島」
「うんー、良いと思うよー」

何か信じにくいが。
とりあえずついていくことにした。

&1 t; 2& g t; 〱二人は学校へ向かい、今度は変人に出会う。〱 (5)

今気がついたこと。

サブタイトルで二人は〱って書きながら変人と出会ってるのは赤井君だけですな…

ごめんなさい。

そして十島の才能が羨ましい…

「二人は学校へ向かい、今度は変人に出会う。」
(裏)

今回は少し趣向が変わっておりますー。

ではー。

&1 t; 2 & g t;) 二人は学校へ向かい、今度は変人に出会う。

(裏)

何なのよ、アイツ！

紅は怒っていた。

昼も一緒に食べるって言ったら「いや、別に良い」って言うし！
帰るときも道が分からないだろうから一緒に帰る？　って聞いた
らまた「いや、別にいい。」って言うし！

怒っていたが故に早めに帰ってしまった。
そのため、門の出来事を知らなかった。

ここも、異常なしね。

風紀委員長姫岸鉄ひめぎしこうがねは校内を見回っていたために、門の出来事に気づかなかった。

ああ忙しい忙しい！

生徒会室の書類を片付ける一人の男。

結局今日はみんな帰っちゃったし……、俺も“鉄姫”と帰ろうかな……。でも“間之スポ”の準備もあるしな……。もうちょい頑張るか！

生徒会長高原衣たかはらうもは学校行事で忙しく、門の出来事に気づかなかった。

今日も仕事忙しくて大変だわ。
富士叶などの先生達は忙しく、その門の出来事には気づかなかった。

故に、赤井がよく分からない男についていったということは、あそこにいた四人以外知らなかった。

そして、彼らの知らないところで話はどんどん進んでいた。

―都市、第四ゲート前―

「久しぶりだな、都市！」

その男はどこかへ向かいながら道の真ん中で高らかに声を上げていた。

普通なら白い目で見られたりするものだが、この道には誰もいなかった。

だからこそ、声を上げているのかもしれない。

「まだ待ち合わせには時間があるな……、“ツキ”の奴はこういうの疎いし、散歩でもしとくか」

時計を見ながらゲートの前の道で待ち合わせをしているだろう男

は歩き出した。

男の名前は、赤井[・]太[・]陽[・]。

太陽もまた、ある学園の門の息子[・]が巻き込まれてる出来事には気づかなかった。

―第四ゲート前へ向かうバス車内―

「アイツが連絡をよこすってことは、赤井つながりのことなんだろうなあ」

ハア……と溜息をつきながら愚痴る男。

世界は動いている、誰も知らないところで。

&1 t; 2 & g t; ； 二人は学校へ向かい、今度は変人に会おう。 ； (裏)

今回は少しキャラ紹介に近くなりましたねー。

いきなり現れた赤井太陽の目的とは!!

次回、怒涛の展開? 乞うご期待?

&l t; 2& g t; 〽二人は学校へ向かい、今度は変人に出会う。〽 (6)

今日実はすつごく大事な用事があったんですー

それが気がかりで気がかりで、今まで更新が遅れたりしていたりもしていましたがー、

ついに終わったのでーこれからは何とかなりそうです。

嫌いな日、平日です。

<2>; 二人は学校へ向かい、今度は変人に出会う。

(6)

「アンタ、一体何者なんだ？」

赤井は謎の男に連れられるままあるところへと向かっていた。
どうやらそこはこの男の隠れ家的な場所らしい。

「俺は、廻家界視。^{めぐりやかいし}輪廻の廻に家、世界の界に視力の視だ。強いて言うなら“創造主”の知り合いだ」

「知り合い!？」

「どうやら凄い人だった。」

「でも、どうして俺がここにいるって分かったんだ」

「あー、色々とー、ほら……」

随分と言葉を濁す廻家。

「……禁則事項で」

「怖いわ!！」

一体どんなルートから情報仕入れてきてんだよ。

マジ恐ろしいったらありゃしない。

自分のキャラどんなのか分かってる？

謎の男だぜ？

「しかし世界は偶然で出来てるんじゃないかと思えるほどだ、思えるほどだよ。紅嬢が逃げたと思えば、それを助けた無謀な少年がいて、そしてそれがあの“創造主”の才能の一部と同じ。驚きの偶然だな」

確かに、そう聞くと随分不思議に思える。

ひよんなことは本当にひよんなことだったということか。

しかし……、

「さっきから色んな奴に話を聞くんだがよ、その“創造主”の才能ってのは何なんだ？ 白道って奴にも聞こうと思ってたんだがなんやかんやで聞けなかったしな。知り合いのアンタは知ってんのか？」
「ん、ああ、もちろんだ、もちろんだとも」
廻家はこともなげに答えた。

「奴は“デュアルスキル二重の才能”の持ち主なんだよ」

「二重？ どういうことだよ」

「簡単に言うなら才能が二つあるんだよね、アイツには」

「へえ、悪魔の実みたいに二つは共生できないってわけでもないのか」

「そういえば紅も三重は無いって言ってたが二重まで無いとは言っていないな。」

「アイツは右手と左手に二つの才能を持っている。アイツのつけた名前では、“クリエイターズ・ライト創造主の右手”と“キャンセラーズ・レフト帰却者の左手”、だったっけか」
「……どういう才能なんだよ、それ。紅はアイツはおかしいっててたぜ。三重の才能はないとか、炎と氷と電気を同時に出していたとか」

「ああ、そういうことね。大丈夫、アイツの才能はそういうところがぶっ飛んでるから。さっき言ったお前と同じ才能ってのは“キャンセラーズ・レフト帰却者の左手”の方だな。こっちはお前と同じで触れたものの才能を消す。問題はもう一つの方、“クリエイターズ・ライト創造主の右手”の方だ。アイツのあだ名がついた理由でもあるしな」

「ど、どんな才能なんだよ」

正直聞くべきでは無かったかもしれない。

それほどこの内容はかなりきついものだった。

「簡単に言うなら、何でも創れる。火だろうが氷だろうが雷だろうが鉄だろうが金だろうが何もかもだ。放出型をここまで馬鹿にした才能はないといっても過言じゃないだろう。あーでも、生き物は流石に創れないとか言ってたような気もするが」

「何でも創れる……？」

それって、最強すぎないか？

通りで指に炎と氷と電気を出せるわけだ。

普通発炎能力者などの火を出したりする才能は放出型、もしくは発能力者メイカーというそうだ。

この辺は才能学について聞いたときに紅に基礎として教えられた。放出型はその名の通り、一つのを出すことが出来る。

発炎なら炎、発氷なら氷、発電なら電気という風に。

だが今の説明を聞く限りでは、

こういう常識を軽く打ち破っているということになる。

流石、ラスボス格って事かよ。

&1 t; 2& g t; 〽二人は学校へ向かい、今度は変人に出会う。〽 (6)

今回はあのラスボス格、創造主さんの才能大公開です。

さて、赤井君はこの才能に立ち向かえるのでしょうか！

うーん、才能公開早すぎたかも知れませんか。

でも良いか。

&1 t; 2 & g t; 〱二人は学校へ向かい、今度は変人に出会う。〱 (7)

流石は日曜日。

今日はもう一つぐらい更新できる気がします。

&1 t; 2 & g t; ; 〱 二人は学校へ向かい、今度は変人に出会う。〱

(7)

「さて、そんな“クリエイト創造”の力を知った赤井君、我が秘密基地へようこそ! !」

廻家に連れてこられた場所は、

「ただの廃ビルじゃねえか! !」

そう、ただの廃ビルだった。

見事に廃れていた。

システムデスクなどは少し残っている。

「叡〇塾じゃねえんだからな! !」

忍野でもいるのかここは。

「いやいや、こういうところのほうが意外と安全だったりするんだぜ? 人の注意も向かないしな」

「そんなもんなのか?」

確かに人の注意は向かないだろうな。

なんとなく納得。

「さて、赤井君、才能者同士の戦いで一番何が大切だと思う?」

廻家は廃ビルの2階についたところで机に腰掛けいきなり語りかけ始めた。

この質問には聞き覚えがあった。

これは……、崩野が質問したんだ。

「相手の攻撃をすべて受けない、かな」

……。

そう答えると廻家は思案顔になり、
「どこでその答えを知った？」
と言った。

「ん、何かいけなかったのか？」

あえてとぼけてみせる赤井。

もしかしたら廻家も“創造主”と同じように“崩壊”を知っているのかも知れないから、探りを入れてみた。

「そうだな、駄目だ」

廻家は厳しく、心なしに強い姿勢で答えた。

それは単に、その考えが駄目だったというよりも“崩壊”の考えをそのまま言ったからかも知れない。

「しかし随分と早くこんな問いに答えられたな、しかもその答え、誰かに聞いたのか？」

やっぱり廻家は“崩壊”を知っている。不思議とそう確認できた。

「これは昔ある人を助けてくれた男に同じ問いを聞かれてな。そいつの答えがこれだった」

「そうか、その男は……」

「崩野響輔だ。“創造主”って奴にも同じ事聞かれたな。崩野は、何かしたのか？アイツは自分のことをただのしがない脱獄囚だとか言ってたが、アイツが刑務所に入った理由とかと関係があるのか？」

アイツは法を犯すような男じゃない。

自分でも無実を晴らすといていた。

ならば、どうしてアイツが刑務所に入れられていたのか。
それはずっと謎だった。

「何か、したか……。アイツはとんでもないことをしでかしてるな」

「さて、今日はもう帰れ。夜も遅い。明日放課後にでもここに来てくれ。紅嬢にもよろしく言っといてくれんか。出来ればここに来て欲しいしな」

「ああ、分かった」

廻家さんに話を聞いた後、もう夜も更けてきたので帰ることにした。

正直今日は色々なことがありすぎた。

創造主とか言う奴の才能、そして、崩野の秘密。信じられなかった。

まあ、なるようになるか。

&1 t; 2 & g t; 〱二人は学校へ向かい、今度は変人に出会う。〱 (7)

この辺の紹介みたいなのかはあんま好きじゃないですね。
早く話を進めたいです！。

では今回は今回も。

〱 ONE PIECE デービー バックファイト 最終戦 コンバット 勝利 シーン を見ながら。〱
火桜芙蓉でした！。

「統一された幸福な世界」、大体集結。 (1) (前書き)

ではでは。

2章が終わりましたので、余章を。

「統一された幸福な世界」、大体集結。」 (1)

4月24日月曜日、とある場所。

「赤井夢斗、紅鍵音、そしてイレギュラーの都市への移動、完了しました。なお、白道、継夜は非常に大変な急用が入ったため来れなくなっただけです」

「えー、ゲツエイ来ないのー？」

ホールに響く声。

一人は渋い男の声、もう一人は幼女のような幼い声だった。
「というかもう一人は幼女だった。」

「了解。“風”、任務お疲れ様です。“花”^{フラワー}、仕方ありません。白道はあの太陽に呼び出されているそうです。それと“花”、そちらの任務は？」

ホールの中央にいる男がそれに答える。

「分かったよ“創造主”。任務のほうは万事解決してるよ!!」
「そうですか、それは良かった。まだ、皆来ていないようですね」
そういった直後、ホールの扉が開き、男女合わせて8人が顔を出した。

「わりい！ 遅くなっちゃってよオ！ 仕事片したところだなア。」

全部終わったでエ！」

「“鳥”^{バード}、声がでかい。この“tomorrow”、“DBY”^{デイ・ビフォー・イエスタデイ}と共に任務完了しました」

「つてめ、よう花鳥風月の一員である“鳥”様に『声がでかい』とか突っかかれたなア」

「おいおい、喧嘩はやめろって。一応“創造主”の前なんだからよ」「一応とは何ですか一応とは！“痛”^{ペイン}！もっと敬意を払いなさい！」「そういうなよ“恋”^{ラブ}。“創造主”を神か何かと勘違いしてんじゃないのか？」

「あなたのそういうところが（ry」

バラバラな年齢、バラバラな服装の6人が騒いでいる。

「“創造主”　ー！ー！！」

その6人の後ろから名前を叫んで飛び出してくるゴスロリの格好をした少女が。

「あのねあのね、“月”^{ムーン}も、ちゃんと仕事できたの！！　“DBY”が色々と面倒見てくれたの！！」

自分を“月”と名乗った少女は飛び出してきた、その勢いで“創造主”に抱きついた。

「それは良かった。“月”。後でご褒美をあげましょう」

「やったやった！　ご褒美だ！」

“月”はその場でピョンピョンと飛び跳ねた。

「“DBY”、大変だったでしょう。“月”は」

喜んでいる“月”を片目に扉を見た。

そこには飛び出した“月”を急いで追いかけてきたのであろう一人の男が。

「“月”様、お待ちください！　あ、“創造主”！」

“創造主”に気づき、慌てて佇まいを直す一人の男。

「これはお恥ずかしいところを見せてしまいました……、申し訳ありません……」

そういうと腰を90度曲げての礼。こちらにも罪悪感が目覚めるほどの礼だった。

「もう頭を上げなさい、“月”のお守りごころう。“D B Y”」

「はい……」

“D B Y”と呼ばれた男は非常に疲れているようだった。

「ガッハッハッハ！ “創造主”、久しぶりじゃのう！」

扉からこちらに手を振る筋骨隆々でゴリラの男。

「久しぶりですね。“y e s t e r d a y”。お元気そうで何より」

「まったくじゃわい！！」

ガッハッハとその男はまた笑った。

「それでは、始めるぞ」

“創造主”は高らかに手を掲げ、

「“統一された幸福な世界”、開戦に向かつての最後の集会を！！」

オールワン・ハッピーワールド

「統一された幸福な世界」、大体集結。 (1) (後書き)

ふむ。

ただいま起き抜けに投稿しております！。

……眠い。

「統一された幸福な世界」、大体終結。」 (2)

「それでは、集会を終了します」

“恋”^{ラブ}がそう言い、集会は終了した。

「来るべき五月一日に向けて残り一週間。皆、頑張るように！」

“創造主”がそう締めると、花鳥風月、五日間は出ていった。残ったのは“痛”と“恋”と“創造主”だけとなった。

「二人も手を抜かずに、潜入の任務頑張ってね」

“創造主”が二人の任務を応援した。

「はいっ！ 頑張りますっ！」

“創造主”からの応援が嬉しかったのか“恋”はとても喜んでいった。

「なあよお、“創造主”。俺は間之崎学園なんだがな、どうしてこんなことしなきゃいけないんだよ」

だが、“痛”の考えは違っていて、自らの任務に疑問を持った。

「確かに……、もっと他の有力者を抑えていた方が良いのではないのでしょうか」

“恋”もそうだったらしい。

「それは、学生……。子供の方が怖いからさ」

「怖い？」

「大人って奴は価値か無価値か、常識というものがあるからな。それが色々とストップをかけてくれるもんさ。思考とか行動とかにな。だけど子供は違う。自分の正しいと思った方に突っ走っちゃう。閃きとかで行動しちゃう。だから……、怖いのだ」

「そうですか……」「そんなもんか？」

二人は渋々納得したような顔をした。

「だからこそSランクを有している二つの巨大勢力となりえる学園を落としておきたいのさ。間之崎にはあの高原衣、そして紅に赤井君、黒峰にはあの不確定要因のイレギュラーが居るからね……」

高原衣。

現職・学生、生徒会長。

“創造主”にえらく買われているようだ。

「ちなみにこの配置にも意味があつてね。間之崎は赤井君が居るから、もしも戦闘沙汰になったときは“痛”、君の才能が一番やりやすいでしょ。黒峰のアイツは“恋”、あなたの才能がやりやすいでしょうから、と思つてね。上手く赤井君とイレギュラーを配置できただろ？」

そこでフツと微笑をした。

さてしも世界。

お前はどうか変動する？

俺に味方してくれることを頼むよ。

ゝ“統一された幸福な世界”、大体終結。ゝ (2) (後書き)

今気がついたことがあるんです。

これを読んでいる人が口コミで広げてくれるかもしれないじゃないですか。

そうやって口コミを受けた人がまた口コミをしていくんです。

そうすると可能性は無限大のような気がして。

もしかしたら成田良悟さんまで届くんじゃないかとか。

結論..口コミ、お願いします！

く太陽と月、集まり話す。く（前書き）

前回は短かったので、ちょっと努力して二つ目を出して見ます。

あれ、もう12時回った？

日付がもうずれちゃったじゃん。

前回の小説がこの日の前日、午後11時くらいに更新しました。
その更新の内容が短かったので、もう一つ出せるかなーとは思った
んですが。

無理でしたね。

く太陽と月、集まり話す。く

―第四ゲート前―

「おお、来た来た」

太陽はバスの昇降口から降りてくる一人の男を発見した。

「ツキ！久しぶりだなあ、おい！」

手を振る太陽。

「まったく、お前がこっちに来るなんて、何年振りだ？　五年振りか？」

「四年ぶりだ。ま、俺の息子がここに来なかったらここに俺は居ないんだろうがな」

「ああ、そのことだろうとは思ってたさ。その前に、ツキって止める」

「なんかいけねえか？」

「女みたいだろ！　お前には美月さんが居るだろうが。」

「いーじゃねえか。俺は太陽、お前は月だよ」

「俺はただの月じゃねえ。月に影で月影なんだよ。お前は赤井太陽で普通に太陽だろうが、俺は白道月影、月じゃねえ、月影だ」

「しゃーない、分かったよ、ツキ」

「「……」」

「アハハハハハハ！」

「クハハハハハハ！」

二人は笑い出した。

今までの会話がまるで普段のネタかのように。

いやきつとネタだったんだろう。

それが通じ合ったことが嬉しかったのであろう。

「ふい……。じゃあ、本題に入るぜ。俺の息子に、何があった」
「そうだなあ……。まずは……」

そうして白道はすべての経緯を話した。
随分とあっさりと。

「成程な……。流石は俺の息子って訳か」
太陽はうんうんとうなづいている。

「ところで太陽、しばらくここにいるのか？」

「そうだな、せっかく来たしちよっくらいは滞在すると思うぞ？」
するとその答えをきいた白道はすこし神妙な顔をして、

「そうだな、一週間くらいにしたほうが良いぞ」と言った。

「それはお前の雇い主のクリエイターってやつに關係が？」

「……、それは禁則事項だが、こっからは早く離れた方がいい」

「あんがとよ、白道。一つだけ忠告するけど、死ぬなよ？」

「忠告あんがとさんよ」

この二人の關係はあまり知られていない……。

く太陽と月、集まり話す。く（後書き）

最近執筆時間が削られます。

だから更新が遅れます。

でも毎日更新は続けていく予定です。

あと雨宮高校シリーズは終わってません。書きたまるのを待ってるだけです。

出来たら活動報告でちゃんと言います。

&l t; 1& g t; ；二人は対立し、五人は囁し立て、篠崎は紅のために動く。

最近一話一話が短くなってきましたー。

もうちょつと頑張りたいと思いますー。

「今ここに俺が来なかった!？」

「馬鹿野郎、そいつがルパンだ!」

頭の中でループしてます。

カリオストロの城が見たくなりました。

&l t; 1& g t;; 二人は対立し、五人は囁し立て、篠崎は紅のために動く。

4月25日火曜日。

まだ学校までの道があやふやな赤井は紅に、「一緒に行こうぜ！」と誘ったのだが、

何故かこっぴどく怒られた。

なんであんな怒ってたんだろ…。

鈍感男は、気づかないまま登校した。

8..00AM 間之崎学園2-A。

紅と共に登校した赤井は、五人に詰め寄られた。

「十島が“天啓”使ったからたぶん大丈夫だとは思うけど、どうだったじゃんよ？」

「大丈夫だったのか？」

「とりあえず怪我等は無いようですが」

「普通に登校してきてよかったよー」

「でも…、何があったか…、謎…、なのです…」

五者五様。

心配してくれたり何があったか聞いてきたり。

「そう一気に喋るなよ。実はかくしかじかでな」
かくしかじかって便利だね。

実は廻家さんが普通（？）の人だったり。
今日も会うことになったとか。（昨日は結局肝心な話が出来なかったそうだ。）

“創造主”のことはもちろん、崩野関係のことは伏せておいた。

しかし赤井は気づいていないことがあった。

「ちょっと、何それ！？ 私知らないわよそんなこと！？ アンタの帰りが遅かったこととなんか関係あるの！？」

紅の存在だった。

紅は門の出来事を知らず、一緒に来たことをすっかり忘れていた。

「あー、えっとな、昨日門の前である人に会って、その後俺がその人に付いて行った話の続きになる」

「そ、そういうこと……。もっと早くに言いなさいよ！」

「お前に迷惑かけたくなかったしよ、それに帰ってきたとき部屋真っ暗だったじゃねえか」

「なら朝話せばよかったじゃない！」

「朝はお前が怒ってただろうが！」

「……痴話喧嘩？」

「私はこの状況に一時離脱させていただきます」
相馬一抜け。

「俺も一時撤退するじゃんよ」

「同じくー」

染山と十島が二抜け。

「あー、俺も逃ーげよっと」

藤崎三抜け。

「あ……、あれ？　僕をほってかないでよっ！」

天音四抜け。

「大体私はアンタを心配してたのよ！　何よその言い草！」

「つってもあの状況で言えるわけ無いだろうが！」

そんな喧嘩の途中でキーンコーンとチャイムが鳴った。

すると紅は背をくるりとこちらに向け、「ふんっ」と言いながら席に戻っていった。

俺紅の隣の席なんだけど、気まずくなるよな……。

そう思いながら席についた。

&l t; 1&g t;; 二人は対立し、五人は囃し立て、篠崎は紅のために動く。

今カリオストロの城見てます。

DVDね。

やっぱり何度見ても面白いです。

おすすめ映画の一つ。

&l t; 1&g t;; 二人は対立し、五人は囁し立て、篠崎は紅のために動く。

今回は日常編って感じですよ。

平和な毎日どうぞー。

意外な伏線が！？

いや、無いと思うけどね…。

<1t;1> ; 二人は対立し、五人は囁し立て、篠崎は紅のために動く。

一時間目、物理。

「そういや赤井は宿題したんじゃないか？ さっきの話だとすぐ寝たっぽいじゃん」

斜め前の席の染山が聞いてきた。

「……、ああー！！ P71のやつか！ やっべーよ、まじやっべーよ！」

「石ズッチーはこういう所結構厳しいじゃんよ？」

物理の先生、石鎚いしづち厳三。げんぞう（通称石ズッチー）

一言で言うなら、超渋い。

渋さの塊魂。

……紅はまだ怒ってるのだろうか？

そうふと横を見ると、楽しそうに女子と話している紅の姿が。

そーいやあの人は……。

赤井は紅としゃべっているもう一人に見覚えがあった。

篠崎麻耶だった。

後で聞いた話だと、彼女は生徒会に入っていて成績も普通に良いらしい。

そんなことをつれづれなるままに考えていると、紅と目が合ってしまった。

すると紅は篠崎に見えないようにして、顔を鬼のようにした。

女怖っ！！

さっきまで楽しそうに話してただろ！

女子に恐怖を抱いた赤井であった。

ちなみにこの後赤井君は転校二日目ということもあり怒られませんでした。

「二、二時間目、俺はこれにすべてを……」

「どうしてげっそりしてるじゃんよ？」

いや確かに授業ってのは静かに受けるもんだよ？

そりゃそうなんだよ？

ある程度の緊張も必要だとは思うよ？

でもあの緊張のレベルは度が過ぎてるって！

死刑執行前の囚人の気持ちかよ！

「ま、慣れれば何とかなるじゃんよ」

「そんなもんか？」

正直あれでけろっとしている染山に驚いたが、慣れてしまえばということは無いかもしれない。

その二時間目。

現代文学、富士叶。

「はーい♪授業始めるよー！」

……この先生が人気な理由が分かった気がする。

まさしく砂漠の中のオアシス。

先程の重圧だらけの授業ではなく、飛翔するかのような軽さで授業を受けた。

それでいてちゃんと内容が頭に入っているのだから、富士は凄い先生なのかもしれない。

三時間目、数学。先生は阿蘇貴則^{あそ たかのり}。

結果？

何を言ってるんだ。

普通の高校に通っていた赤井夢斗だぞ？

「赤井ー、大丈夫かし？」

「俺に構わず先に行け……」

何だこの授業は。

みんな平然とした顔をしてやがる。（藤崎は多分単に馬鹿なだけだとは思うが）

「赤井、どうでも良いけど、次は体育。準備するじゃん」

「体育！」

ついに俺が普通に頑張れる教科来たり。

今の俺は水を得た魚のように！

「体操服はー、大丈夫なのー」

「ああ、ここが届くまで前の高校のを使うつもりだ。でも、今日は見学っぽくなると思うぞ。」

そうして着替える。

この学校は男子がA組、女子はB組で着替えるようだ。

「そーいや藤崎と天音は？」

「さあ、トイレじゃねえの？」

「そっか」

着替えの中で藤崎と天音の姿が見えなかったが、そういうことか。

「じゃあ行くか」

「何で仕切り口調じゃん？」

「行こー」

とりあえず三人でグラウンドへ。

「赤井は知らないと思うけど、桜島先生はとにかく凄いじゃんよ」

「サクラジマ？ ふーん、どんな風に？」

正直、体育教師の凄さならこっちだって負ける気がしない。

普通の高校なめんなよ、進学校！

「そうだな、50メートル4.9秒だったり、ムーンサルト飛べたりするじゃん」

「そんなもん高校に求めるな！！」

その人はしかるべき所に行ってオリンピックにでも何にでも出てもらおう。

そういえば。

桜島といえば、桜さんはこういうことできるんだらうか？

紅の誇張表現かもしれないが、あの人は本物の人のような気がした。

なんとなくね。

出来るのかな？

出来そうな気がする。

あってみたらわかると思うよ？

いや正確には殴られる瞬間を味

わえばわかるよ？

あれは本当に怖かった。

ほとんど覚えてないけど。

殴られる瞬間しか頭に無いや。

そして授業はソフトボールだった。

&l t; 1&g t; 二人は対立し、五人は囃し立て、篠崎は紅のために動く。

ここでキャラ解説コーナー！

間之崎高校の先生方の名前の由来は日本の山、主に火山からとつて
ます。

富士山とか阿蘇山とか石鎚山とか。

最後のはマイナーですね。

次は雲仙さんが出るかもしれません。

ま、どうしてこんな適当な名前の付け方かって、そりゃあほとんど
でないからですよ？

&l t; 1& g t; ；二人は対立し、五人は囁し立て、篠崎は紅のために動く。

最近話の先のほうだけ思いつく症候群に罹っている気がします！。

怖いですね！。

共感できませんか？

&l t; 1& g t; 〱二人は対立し、五人は囁し立て、篠崎は紅のために動く。

さても今日の授業はソフトボールの**はず**だった。
はずだった。

大事なことなので二回言いましたよ？

二クラス合同で行われるそのソフトボールは、想像を遥かに上回るものだった。

理由はただ一つ。

才能の使用の許可。

人に危害を加えない程度ならOKだそうだ。

平然と剛速球が飛ぶ。

そしてそれを打つ。

ホームランの**はず**のコースのボールが何故か急角度で落ちてフライになる。

お前らもうプロ野球行けよ。

「赤井、お前もやって見るか？」

いいです先生、俺にここに入る**勇氣**は、

「おう、赤井、入ってこいよ！」

「次の打順代わってやつから！」

俺に恥をかかせたいのかお前らは！

悪意なんて無いだろうが俺はお前らのそのキラキラした笑顔に殺意を覚えるぞ！

普通の体育ってもんを知らねえのかよ！
俺の才能はこういうのに向いてないの！
もう無才能と同じなんだって！

「いや、俺は」

「遠慮すんなって！」

「ほらほら、行ってこい！」

先生に後ろからぐりぐりと押される。

先生、遠慮とかそういう気持ちは一切ないんですよ？
分かって、ねえ、分かって？

気がつくともバッターとして立っていた。
もう何か無理。やけになりました。

「こいつ普通にプロ並みの球投げてたやつじゃないかよ」
赤井は小声で呟くが、誰も気づかない。

「じゃあ、いっくぜー！」

バシュ！ という音が投手から聞こえた気がした。

そしてズバン！と音がしてボールはキャッチャーミットの中に。

あー駄目だ。もう見えないレベルだもん。

レポートした感じに近いんだけど。

やっぱプロの球はテレビで見るのと違って迫力あるね！

……俺もあの男もプロじゃないけどさ。

「出た、嵐山のジェットストレートアタック！」

「流石の転校生も嵐山のジェットストレートアタックは打てないか……」

なんだそのジェットス〇リームアタックみたいな必殺技。

三体でやるやつね。

「どうよ！ 俺の才能“嵐の射出”ジェットストームは！ こいつは周りの空気を集めて一本の嵐として集めた空気を打つジェットみたいな才能なんだけ！」

つまり。

どうしてこんな剛速球かという理由は、この嵐山という男が空気を集めて、投げる瞬間にボールの後ろからまるで追い風のように集めた空気を一本にして出してるわけだ。

バシユっていうのは風の音だったってわけか。

バシユ！

ズバン！

そうこうしているうちに二球目もストライクが入った。

どうやらコントロールも高いらしい。

現在2ストライクノーボール。2アウトランナー1塁3塁。

打てればヒーロー、打てなきゃ何とやらって所かよ。

&l t; 1 & g t; ; 二人は対立し、五人は囁し立て、篠崎は紅のために動く。

なかなかこの症候群ってのは恐ろしいものでしてねー。

もう先の方の話はあらかた決まってるんですがー、ちょいちょい色んな考えが頭を駆け巡ります。

こうなると今の状況がイライラしてきて駄目なんですわねー。
もっと早く進めたいとか。

まあ打つ速度がそれに伴ってないんで仕方ないんですがー。

：もしかしてこれって愚痴なんですか！？
だとしたらごめんなさい。

二人は対立し、五人は囁し立て、篠崎は紅のために動く。

運試し検定とか面白そうじゃありません？

真っ白な解答用紙にAかBかの二択を答え続けるんです！。

一級取ったら宝くじを買おう！

&l t; 1& g t; ；二人は対立し、五人は囁し立て、篠崎は紅のために動く。

「赤井、今度は俺の最速のストレートを見せてやるぜ！」
スポ根みたい。

いつからこの小説の趣旨は変わったんだろうか。
もしここから読んだ人がいたら勘違いするだろ。

「いっくぜー！」

よしこい！

なんて答えるわけは無いけどさ。

そして、バシュ！とボールが放たれた。

そのボールは綺麗にキャッチャーミットに、

入らなかった。

カキンという音を立て、ボールは綺麗に向こうへ。

「んな馬鹿な！」

嵐山はボールの飛んでいったライトを見て啞然となっていた。

これはホームランコース来たんじゃないか！？

赤井はテンションマックスで塁に出る。

実は赤井が打てたのには理由があった。

あの時会話で感じた嵐山の性格から、確実にストレートが来ると

予想は出来ていた。

“どんなに速い攻撃でも、来る場所が分かっていたら対応できる。

”

崩野の教えだった。

テレフオンアタック

崩野は“予想されている攻撃”と言っていた。

ストレートを予想した赤井は、キャッチャーが構えているミットの
の高さにバットの芯を合わせ、そして嵐山が投げるフォームの終盤
の頃には振っていた。

なんせ速さは2球で分かった。

これくらいのタイミングだろう。

とはいえ、とても難しい技ではある。少しでもタイミングがずれ
たり、バットを振り間違えれば三振。

そもそも嵐山がストレートを投げるかどうかは分かっていない。

これはプチミラクルというやつなのだろう。

そして赤井が悠々と塁を走っていると唐突にその声は響いた。

「スリーアウト、チェンジ！」

へ？

その声に驚いてライトを見ると、ボールがきっちり握られてい
た。

明らかにホームランボールだったのに…。

そこではっと気がついた。

さっき見てたとき、ホームランのはずのボールがいきなり急角度
で落ちてきてたような…。

ちゃんと少し前に書いてある。

重力を操る才能者か！

きっと重力を増やしてボールを落としたのだろう。

ベンチからああ…という声。

ごめんなさい。

&1 t; 1& g t; ；二人は対立し、五人は囁し立て、篠崎は紅のために動く。

上のやついいと思うんだけどなー。

この前友達に話したらはっ？て言われました：

&1 t; 1& g t; ; 二人は対立し、五人は囁し立て、篠崎は紅のために動く。

たまにラーメンとかシチューとかが無性に食べたくあるじゃないですか。

そのノリでいまドーナツが食べたいです。

<1t;1> ; 二人は対立し、五人は囁し立て、篠崎は紅のために動く。

「がっかりじゃん」

「だよー」

「うるせえーやい。しゃーないだろうがよ！」

結局2ー1で敗北。

そりゃ多少は非難の目も向くよね。

そして今は昼食を食べていた。

場所は食堂。

きっとこれからも食堂だろう。

ちなみにここの食堂は広い。（前も言った気がする）

場所が学年によって違っていて、小学生ブース、中学生ブース、高校生ブース、大学生ブースで分かれている。

もちろんここは高校生ブース。

今日はラーメンを頼みました。

そして席に戻って見ると、梁山たちのメンバー五人の他に、

「なんで？」

紅と篠崎がいた。

「何よ。いちや悪いの？」

「全く……、鍵ちゃんの気持ちを逆撫でするのが得意なのかしら？」

赤井君」

「なあ、勘だけだよ。赤井ってかなり鈍感じゃん？」

「納得ー」

「あれは……、駄目……」

「まさかとは思いますが、赤井と紅のなんか息あってるな的气氛に気がついていないとでも思っているのでしょうか」

「天音にまで馬鹿にされたか」

「そんなこと……、ないよ……」

「ところでよ、この空気ってまた修羅場の空気じゃん？」

「一旦……、引く……？」

「ならば一時的にこの席を離れましょう」

「賛成ー」

すこし会話は成り立っていないが赤井の事実をずけずけといっているのはニュアンス的に分かる会話を繰り広げ、五人はそろそろと隣の席へ。

そしてこっそりと赤井たちの席を見ていた。

「なんで赤井君は紅に冷たい態度を取るのかな？ 私たちはあなた達二人が何か不思議な関係って事にはうすうす気づいてるのよ？」

紅が三日も休んで、やっと登校したと思ったら君がここに来た。

結局ごたごたで気づかなかったけど、君達二人の仲ってなんだかなだでいい気がするのよね。たまたま席が隣とは思えないくらい、ね。

「

「ちょっと、篠崎！」

篠崎の適切すぎる解説に、逆に紅が驚いた。

「……。そこまで分かるのかよ……」

普通気づくよ！

五人の突っ込み。

「もう一度聞くけど、どうして紅に冷たい態度を取るの？ 紅は昨日あなたが一緒に帰ってくれなかったとか、大事なことを話してくれなかったとか言ってるわよ？」

篠崎の口調は強くなってきている。

正直怖い。

「ま、待ってって！ 俺は別に紅に冷たい態度なんて」

「本当にそう言えるかしら？」

別に冷たい態度を取るつもりなんて無かったのだ。

これは本当。

こんな風にごたごた化しているなんて思っても見なかった。

篠崎の目が怖い。

鬼でも見殺すかのような視線だ。

「ちょっと待って篠崎！」

俺がそんな目に耐え切れなくなりそうなところで紅が口を開いた。

「どうして止めるのかしら？」

そう返した篠崎の口は少しほころんでいる様にも見えた。

「だって……。赤井にも事情があったのかもしれない……。私も少し熱くなっちゃってたから……。」

紅の顔はすこし気まずそうな顔をしていた。

「そう、じゃあ仲直りの握手ね」

「は？」 「へ？」

篠崎が急に笑顔になって赤井と紅の右手を取って握手をさせた。

まさか、

狙ってやがったのか!?

篠崎以外の七人は、篠崎に非常に驚いた。
まさしく策士、魔性の女だった。

&1 t; 1& g t; ; 二人は対立し、五人は囁し立て、篠崎は紅のために動く。

開いてるかなー、ミ○ド。

私はハニーデ○ップとエンゼル○レンチが好きですね。

ってあれ？

あんまドーナツっぽくない！？

いや多分ドーナツだと思うけど…。

&1 t.; 2 & g t.;) 全員で雑談を繰り広げ、不意にある男に再会する。)

そういえばサブタイトルに出会うつて多いですねー。

ではでは。

全員で雑談を繰り広げ、不意にある男に再会する。

赤井と紅が和解したところで、染山達五人が席に戻ってきた。

そして今度こそ昼食。

ラーメンはすこし伸びぎみになっていた。

「あの……、染山君、食べすぎじゃない？」

篠崎は驚いた顔で染山の弁当箱を指差す。

無理も無い。

そこには三段の重箱が置かれていた。

まるでおせち料理のようにでんと。

ある意味迫力満点。

しかもカロリーの高そうな油物等が詰まっていた。

それを掃除機のようにヒョイパクと口に運ぶ。（いやむしろ吸い込む感じ。）

「昨日から思ってたがお前よくそんなに食えるよな。」

それは赤井も昨日から思っていた。

あまりにも周りのやつが普通に接してたからいえなかったけどよ。

これは男子だからとか言うレベルじゃないぜ？

どうやら驚いているのは俺と紅、篠崎の三人だった。

「ああ、これは、」

「これはー、紫瀬の才能が関係しててねー。紫瀬の才能は“体温自在”^{カラリー・コントロール}って言ってさー」

「おい茶仁！ 手前俺の才能バラしてんじゃねえじゃんよ！！ こ
こは俺がカッコ良く自分の才能を言うところじゃんよ！！ 俺に語らせろや！！」

どうやら十島は空気の破壊が好きらしい。

ところで、

「カロリー・コントローラー “体温自在” って何？」

「カロリー・コントローラー “体温自在” というのは何なの？」

「残念ながら教えて欲しいんだが、カロリー・コントローラー “体温自在” ってのは何なんだ？」

三人の質問が合わさった。

「カロリー・コントローラー “体温自在” ってのはー、」

「もう言わせないじゃん！」

十島が言う前に染山が口を塞いだ。

十島はモゴモゴとなっている。

「カロリー・コントローラー “体温自在” っていうのは、簡単に言えば自分の体温を上げたり下げたり出来るじゃんよ。0度だろうと100度だろうとじゃん」

「へえ。そりやまた凄いな」

冬とか寒くなさそうだな。

「なんか棒読みな気がするじゃん……」

「あまり凄さがわかんなくてな」

実際そういわれても、驚くのも難しいってもんだ。

「でその才能とお前がたくさん食べることに何の関係があるんだ？」
「そうそう、この才能の弱点っていうか、対価っていうもんがあるんじゃない。それがかなり腹が減るってことなんじゃん。カロリーを使うだとか何とからしいけど。才能を使用するともっと酷いじゃん」
「じゃあ、いくら食べてもほとんど太らない……、ていうか食っていないとまずいのか。残念なことに」

「まったく、女子にとってうらやましすぎる才能ね……」

「本当。私たちがどれだけ努力してると思ってるのかしら」

ぞくつと背筋に悪寒が走ったかと思うと、二人の女子が染山を凝視していた。

「な、何じゃんよ？」

「別に何でもないけれど？」

なんか篠崎さんも口調が怒り気味。

才能なんて狙って好きなものももらえるわけじゃないんだからどうしようも出来ないんだけど……。

まさしく八つ当たりに近いそうだった。

&1 t; 2 & g t; ; 全員で雑談を繰り広げ、不意にある男に再会する。)

ここで才能のおさらいを。

赤井夢斗… “才能帰却”

紅 鍵音… “超跳躍” (少し前書いてたのから修正。)

白道月影… “???”

染山紫瀬… “体温自在”

十島茶仁… “閃”

藤崎 烈… “???”

天音雷綱… “???”

篠崎麻耶… “重力遮断”

創造 主… “創造主の右手” “帰却者の左手”

こんな感じですねー。

またある程度まとまったら出すと思いますー。

&1 t.; 2 & g t.;) 全員で雑談を繰り広げ、不意にある男に再会する。)

最近文が荒れてる気がしますー。

ごめんなさい。

「&1 t; 2 & g t;」全員で雑談を繰り広げ、不意にある男に再会する。」

「その廻家さんって言う人はどんな人じゃん？」

「うーん……、変な人？」

「そんな変な人と二人っきりで会おうとしてたわけ……？」

「よくわかんないねー、赤井君はー」

「それにその人の居る場所が廃ビルとは……」

「がっかりだよ……、赤井君……」

「センスをー、疑われるー？」

「ぼろくそね、赤井」

「うるせーやい」

なんで俺はこんな大所帯で廻家さんのところへ向かっているんだろう。

今俺は梁山達五人に篠崎、紅を合わせた八人で廻家さんのところへ向かっていた。

何故こんなことになったのか。

それは昼食後に遡る。

さて、昼食後。

紅に廻家の本当の事情を説明して、一緒に廻家さんのところに行くことになった。

のだが。

「なあなあ、紅と赤井どっかいくのか！」

「おいおい、逢い引きじゃん!？」

そこにいたのは藤崎と染山の二人。

ある意味一番バレたくない人種だった。

「お前ら……」

物凄い曲解をしていたわけだが、事情も話せないので。

ややこしくなってきた……。

「なあ天音、あいつら放課後デートするんだって！」

「え……、そうなの……」

「なあ十島、あいつら放課後デートするじゃんよ！」

「えー、そうなのー」

「おやおや、面白いことになってますね」

「赤井君、意外と積極的なのね……」

あつという間に広がったー!!

ややこしいを通り越してミレニウム問題級だよ!？

「ちょ、ちょっと赤井、どうするのよ！」

「俺に言われてもなあ……」

大体こいつらは俺と紅の仲をすこし勘違いしているところがあった。

「ほらほら、茶化さないの。二人の仲直りデートなんだから、邪魔しちゃいけないわよ」

篠崎がそういうと、みんなが暖かい目になった。

なんか無性に腹が立つ。

「ああもう！！　そこまで言うなら一緒に来いよ！！　俺と紅はそういう関係じゃないって証明してやる！」

「ちょ、赤井、いいの？」

「もういいわ！」

そして放課後、あいつらは見事について来て、冒頭に戻る。

「すこし頭に血が上りすぎてたな……」

街をあつちの廃ビルに向かいながらぼやく赤井。

「元はといえばアンタが悪いのよ、赤井」

「そこに関しては弁解の余地が無い」

廻家さんは今日大切な話をすると言っていた。

きっと“創造主”がらみのことなんだろう。

なのにこんなに部外者を呼んでしまった。

「しまったなあ……」

すると、考え事をして前が見えておらず、赤井はドンツと誰かとぶつかった。

「ああ、すいません……、って、え？」

「え？」

俺と紅はぶつかった方の人を見て、硬直した。

みんなもそのほうを見る。

そこには二人の男がいた。

一人は黒のジャージを上下に、もう一人は赤いジャージを着ていた。

そして赤井と紅に限ってはその二人を、他のみんなは一人を知っていた。

「桜島先生じゃん」「せんせー、こんにちはー」と、赤井と紅以外の六人は挨拶を交わす。

六人が知っている黒いジャージを着たその人とは、間之崎最強らしい体育教師、桜島だった。

ただ俺と紅はそんな六人と違い、もう一人の方を見ていた。

その男とは、

「お兄ちゃん!」「桜さん!」

そこには、来れるはずの無い男、紅・桜がいた。

&1 t; 2& g t;) 全員で雑談を繰り広げ、不意にある男に再会する。)

はい、桜さんも都市に来ましたよー！

だんだん集結しつつありますね、キャラが。

次はどうして桜さんがここに来ることになったのか、になると思いますー。

&1 t; 3 & g t; 一 般 人 に し て 他 称 世 界 最 強 が 動 き、 “ 創 造 主 ” を 驚 か す。

友達に言われて気がついたのです。

アニメが始まると原作の単行本の出が速くなりませんか？

メリーとか凄いんですけどー。

&1 t; 3 & g t; ; 一般人にして他称世界最強が動き、“創造主”を驚かす。

「どうしてお兄ちゃんがここに!？」 「どうして桜さんがここに!？」

驚く二人。

「ん？ 桜と知り合いなのか、お前ら？」

桜島先生もこっちの会話に入ってきた。

桜さんは「お前達にこんなに早くお前達に会えるとはなあ」と質問を無視。

「だから、お兄ちゃんはどうやって来たの！」

紅は混乱している。

「と、とりあえず落ち着こう、紅」

赤井が落ち着かせようとしたが、

「落ち着けて紅! ってぶっ!？」

「これが落ち着いていられますかー! ! ! !」

ボスッ! と赤井の腹を一蹴した。

わけもわからず赤井を攻撃した

赤井に36のダメージ!

赤井は倒れた

「って、倒れてねえっつーの!!」

「一体何にツツコんでるじゃん？」

梁山達もこっちの話に入ってきた。

「とりあえずまあお前ら落ち着け」

流石になだめ始めた桜。

「んで、どうして桜さんがここに居るんですか？」

「この人は紅のお兄さん、で間違いないんだよね？」

「さっきの感じだと……、そう……」

状況整理も出来たところで。

さあ、どうして桜さんがここにいるのか語る番ですよ!!

「あー、うーん、面倒だし、回想でいいか？　かくかくしかじかで」

「んな適当な！」

4月22日、土曜日17..30

「鍵音遅いなー」

桜は紅の帰りを待っていた。

この頃、赤井君と紅が“ウインド風”に襲われているなんて知る由も無いが。

すると、ピンポンとチャイムが鳴った。

「父さんか？　でも鍵持ってるはずだけど」
そう思いながらはーい、と返事をして玄関を開ける。

そこには黒い服を着た男が。
喪服のような黒いスーツ。
燕尾服の形をしていた。

「この家は、紅さんの家で間違いないでしょうか？」
なんだか隙の無い人だなー。
そう思ったが気にせず、「そうですけど、何か？」と続けた。

瞬間、

その男は拳を構え、桜の鳩尾に向かって殴りかかってきた！！

&1 t; 3 & g t; 一 般 人 に し て 他 称 世 界 最 強 が 動 き、 “ 創 造 主 ” を 驚 か す。

はい。

これからしばらく（そんなに無いけど）桜さんの列伝が始まります
よー。

このキャラ好きですねー。

&1 t; 3& g t; 一般人にして他称世界最強が動き、“創造主”を驚かす。

ここあたりの話は結構好きですー。

桜さんは結構好きなキャラでしてー。

感想待ってます！

…まだ書きづらいかな、感想。

<3>一般人にして他称世界最強が動き、“創造主”を驚かす。

パシッと小さな音が響いた。

「いきなり物騒だな。それともこれが最近の握手とか挨拶ってやつか？　だとしたら謝るわけだが」

「……、アンタ、何者だ？」

桜がしたことは単純明快だった。

腰の辺りで今にも打ち出されようとしているその拳を、速度に乗る前に右手をかざして止めた。

ただそれだけだが、普通の人間には出来ない芸当だ。

まず、いきなりの訪問者にいきなり殴られるなんて想像できるはずがない。

それなのにこうして防いだ。

“風”^{ウィンド}がこう問いかけたのも頷ける。

「何って、しがない無才能^{ノーマル}の一般市民だぜ？」

「こんなことをする一般市民がどこにいるんだ」

そういうと“風”は拳を下ろした。

「さて、何の用なんだよ。いきなり急所狙って意識落とそうとして来るほどのものがうちにあるのか？」

すべてお見通しってわけかよ。なんなんだこの男は。

“風”はそう悪態を心の中でついたが、結局目的を話すことにした。

なんというか、この男にはすべて見通されている感覚がする。もちろんすべてがそうと言うわけではないだろう。

そんなことが出来るのは忠誠を誓った“創造主”様だけだ。
だが、嘘をつけないような迫力がこの男にはあった。
さしずめオーラといったところか。

さつき拳を止められてから、なんだか頭の警報が鳴り止まない。
ただの無才能者をこんな風に感じたのは初めてだった。

「USB。USBメモリーを貰い受けに来た。ここにあるということとはわかつている」

そう、“風”の目的とはUSBメモリーの回収にあった。
もちろん情報を知っている疑いのあるこの男も後で始末する予定だったが。

「ああ、成程ね。あんた達が鍵音の言っていた“統一オールワン・ハッピーされた幸福な世界”って奴等なのか。んで、組織の大事な情報が入っているUSBを取りに来たと」
桜は納得する。

その姿をみて、“風”は始末対象に桜を完全に追加した。

「そこまで分かっているなら話は早い。さあ、それを渡してもらおうか」

「ああ、別に良いけど」
そういうと玄関から奥へと入っていった。
もちろんついていく“風”。

そして居間と思わしき部屋にあるパソコンにささっていたUSBを取り出すと、ホイッと“風”に手渡した。
何事も無くキャッチする“風”。

ゾ
ワ
ツ
と。

USBを受け取ったときに感覚がした。

全身が総毛立つ感覚。

危険だ。

さつきから頭の中で、『この男は危険だ』という警報が鳴っていた。

だがこれを受け取ってから、その警報のレベルがMAXになった。

[illegible]

別にこの男がナイフを持っているとか、そういう訳ではなく、ただ怖い。

こいつの放つ気がどんどん膨れ上がっていた。

俺の正体を知られたときから。

その警報の理由はUSBを受け取ってコンマ数秒後にわかる。
ドスッ！！！！

「か……はっ……？」

気がつく、桜が目の前について。

気がつく、腹部が殴られていた。

あまりにも速すぎて、理解が追いつかない。

いまだに殴られたのかどうかわからない。

痛みもまだ感じない。

そのまま見えない力のように、身体が。

吹き飛んだ。

まさしく殴り飛ばすといった表現の正しいような桜の放った右ストレートによって、“風”はそのまま窓へと突っ込み、それを割り飛ばして外にまで出た。

「まあ多分アンタは体術がすごく得意なタイプの人なんだってのはさっきの不意打ちでわかったから、多分意識は飛んでないだろ、立ち上がれよ。鍵音のことも、母さんのことも聞きたいんでな」

その目は、殺気に溢れていた。

&l t; 3& g t; 一般人にして他称世界最強が動き、“創造主”を驚かす。

桜無双が始まりますよー。

紅の言っていたことは実は真実だったりするかもしれません。

世紀末救世主伝説っ!？

とはいえ“風”も黙っては居ませんからそのつもりで。

&1 t; 3 & g t; 一 般 人 に し て 他 称 世 界 最 強 が 動 き、 “ 創 造 主 ” を 驚 か す。

桜無双発動中っ!!

<3>一般人にして他称世界最強が動き、“創造主”を驚かす。

立ち上がってやるよ。

立ち上がってやるともさ！

「……ふざけてやがるな、その威力……」

ゲホツと咳き込みながら“風”は立ち上がった。

「さて、窓ガラスを割っちゃった訳だが、まあ後で買いなおせばいいか。しかし結構不意をついた自信はあったんだがな。なんだかんだで腹筋に力が入ってたな。やっぱりお前は凄いな」

桜がやれやれというジェスチャーをした。

そして桜も外へ出てきた。

多分俺が意識を失わず、なおかつ立ち上がることが出来たのは、ひとえに俺の今までの経験のおかげだったのだろう。

どうやら身体は俺の意思と関係なく腹筋などの主要な筋肉を緊張状態にしていたようだ。

警報ががんがん鳴っていたから、こういうことが起きたのだろう。

こいつは油断ならない。

「まったく、どんな威力のパンチなんだ……、よ！」

速攻で決める！

そう考えた“風”は、言葉を言い終わる前に一気に間合いを詰めた。

姿勢は超低空。

砲弾のように近づき、顎を狙った必殺のアッパー！（正確には必

ず殺せるわけじゃないけど)

桜はそれをなんともないように一步下がって避ける。

が、

それを見切っていたとでも言わんばかりに“風”はそのアップパーを止め、左のストレートを一步下がって無防備になっている桜の腹目掛けて繰り出した。

流石にフェイントのアップパーで右手を挙げているので威力は桜程ではなかったが、明らかに今のは無防備なところに打った。

はずだった。

「……!?!」

桜はそのストレートをリンボーダンスの要領で綺麗に避けた。むしろマトリックスの名シーンに近いかも知れない。

そしてその行動だけで終わらないのがこの男、紅桜だった。

そのまま手を後ろにつき、そこから自分の足を蹴り上げて逆立ちするような形となり、くるっと回って綺麗に着地。

それをしている間に“風”への攻撃も欠かさない。

足を蹴り上げてから逆立ちをする前に両足で出たままの“風”の腕を挟みこみ、そのまま回転して着地していた。

つまり。

バン！ と背中から地面に打ち付けられるように“風”も一回転して投げられた。

まさしくこれこそ神業。

およそ人間に出来る芸当ではないだろう。
そしてそれをする男が桜だった。

「くっ……」

“風”もちろん受身は取っていたのでそこまでのダメージはないが、精神的な面の方はかなりきつい所まで来ていた。

立ち上がる氣力を失わせられる。

桜が両足を閉じていたのを開いた。

同時に“風”の左腕も解除された。

「さて、聞かせてもらうぞ。鍵音の帰りが遅い。お前達が何かしたのか？」

あくまでも冷徹な目でまだ倒れこんでいる“風”を見る。

「……こんなにやられるのは本当に久しぶりかもな。紅鍵音に関しては、生きている。心配するな」

するとひどく安心したような顔を見せた。

先ほどから殺氣しか感じてない“風”としては、とても新鮮だった。

「そうか。良かった。じゃあ、帰りが遅いのはどうということだ」

「……紅鍵音は赤井夢斗と一緒に“都市”に向かっている。“創造主”によると殺したりはしないようだから大丈夫だろうがな」

「なるほどな。自分の陣地にとりあえず連れてきておく、って所か。

じゃあもう一つ。母さんを殺したのはお前らか？」

安心していた顔からまた引き締まり、殺気を目に孕ませだした。

「……否定はしない。だが、“創造主”の命令ではない。“創造主”の考えを汲み取れない愚かな者の犯行ではあるがな」

「そうか。すっきりした」

死刑宣告のように冷たく、

そう言い放った。

&l t; 3 & g t; ； 一般 人 に し て 他 称 世 界 最 強 が 動 き、 “ 創 造 主 ” を 驚 か す。

書いてて思いますが、桜さんはもう人間業を超えていますね。
無才能なのにです。

だからこそですかね、このキャラは大好きです！

あれ？

前回の後書きの結構好きから変わった？

&l t; 3& g t; 一般人にして他称世界最強が動き、“創造主”を驚かす。

最近描写に映画やゲームを持ちいりだしましたー。

元ネタがわからない人はごめんなさい。

桜無双は継続中です。

**<一般<にして他称世界最強が動き、
“創造主”を驚かす。**

「ちっ!!」

“風”は一気に立ち上がり、桜から距離をとった。

今の目に、心底ゾクツツとした。

深い闇のような黒目。

吸い込まれそうな目。

「しょうがない。こいつを使わなければならぬか……」

そういうと、“風”は燕尾服を脱いでワイシャツになった。

そしてワイシャツの袖の右側だけを捲り上げた。

そのとき桜があることに気がついた。

「……、お前なんでそんな長い手袋してんだ？」

“風”の両腕に白く長い手袋がしてあった。

それは二の腕についてる薄いわかのようなものまで続いていた。

というか、そのわかでずれるのを防いでいるんだろうか。

日焼け止め……っていうか男だね。

「ああ、すぐにわかることになる」

そういうと“風”は口で右腕からその手袋を咥えて取った。

そしてそれを左手で取ってポケットに入れた。

「ん、お前黒人……、じゃないよな？」

桜がいきなりとんちんかんなことを言い出した。

だがそれもこの状況を見れば納得していただけだろう。

茶褐色。

右腕だけが茶褐色になっていた。

「これが俺の才能、ジェノサイド・ライト“滅亡の右手”だ。もうお前に隠す必要もないだろう。この白い手袋はこの才能を封じるためにある」

「ジェノサイド・ライト“滅亡の右手”？ なんじゃそりゃ」

素直に聞き返す桜。

「助言などやらん。一撃で決める」

すると“風”が今度は無謀ともいえる突進をしてきた。

そして隙ありありのまま右手を突きだしてきた。

まずい。

この手はなんかやばい。

そう思った桜は、右におもつきり飛んだ。

横っ飛びー！

幸い何も起きなかったが、警戒は解かない。

なんせあれは才能が宿っているらしい。

今まで人が何十年何百年も掛けて確立させてきた法則をぶち破るのが才能だ。

それならば過剰な反応こそ通常な反応だろう。

「おやおや、俺の才能が何か知ってんのかよ。まあ、その反応は正解だと思うけどな」

“風”は口調がだんだん落ち着いてきていた。

桜の人並みに過剰な反応に相手は無才能で普通の人間だと思い出したのだろう。

「もしかしたらその腕が一撃必殺の威力を秘めてるかも知れねーん

でな」

そうは言いながらもファイティングポーズをとる桜。

「そうか、なら死んでもらうぞ」

そう言って“風”はゆっくりと間合いを詰めていく。

そして互いの距離が2メートル程になったところで構えた。
不思議な構えだった。

右手を身体の前に押し出すように手刀で出し、左手は脇辺りに置いていた。

まるで右手を完全に見捨てているような構えだった。

いやむしろ右手に触れさせるような構えだった。

「怖いな、その構え」

そう桜が呟いた直後。

“風”が動いた。

出していた右腕を突き出した。

ただし今度は非常に速い突きだった。

まるでフェンシングのように。

桜はそれを上手くかわす。

が、

“風”はそれだけでは終わらなかった。

それをひたすら連射した。

突き、突き、突き、突き、突き、突き――――

手刀で行われるその突きは、まさしく剣で突き刺しに行こうとしているかのようだった。

まさしくフェンシング。

桜はそれを紙一重でかわし続ける。

今のこの状況もマト○ックスの銃弾を避けるエージェントス○スの名シーンのようだった。

むしろバイオハザードのウェ○カー避けかも知れない。

ふむ。

これは触れることで発動する感じの才能か。

この突きの雨を見事に避けながら桜はそんな暢気なことを考えていた。

そして防戦一方に見えた状態から、行動した。

「十撃よ」

そう桜は言い――――、

そして見事に反撃を開始した。

「破っ！ 破っ！ 破っ！ 破っ！ 破っ！ 破っ！ 破っ！ 破っ！ 破っ！ 破っ！」

連射される突きの一瞬の隙（一般人には隙に見えない隙）を見て、鋭い十連撃を繰り出した。

右脇腹、左脇腹、左肩、右肩、顎、右肩、左肩、右脇腹、左脇腹

と打ち放つ。

「かつ、くつ、あつ、なつ、あつ、ううつ、がつ、いいつ、やつ、くつ」

“風”の口から声が漏れる。

そして“風”はその連撃で後ろへ押しやられよろめいた。

「十破に、――破竹っ！！――」

桜はそういうと、足から腰、腰から肩、肩から腕へと力の移動が傍から見てもわかるような滑らかで美しいフォームで、右ストレートを打ち出した。

ブンッ！ と風の音がするほどのストレートだった。

“風”はよろめいてはいたが流石にこの一撃はまずいと思い、両腕で必死にガードした。

「そおい！！」

またもブンッと音がして、“風”の目の前でその殺人的なストレートが止まった。

「そういやその右腕はなんかよく分からんけど触れちゃいけなかったんだよな、危ない危ない」

その止め方は腕が外れかねないような感じ。

なんとも暴力的な止め方だった。

桜は才能があるのであろう右腕が防御に回されているのを見て、咄嗟にストレートを止めたのだ。

「……、はあ、ぐっ……」

流石に今までのダメージが効いているのか、“風”が片膝をつい

た。

先ほどのストレートを守ろうとした腕は、ほぼ無意識かのものだったらしい。

目がうつろになっている。

「さて、どうしたもんか。アンタ、ひとつ俺の願いを聞いてくれな
いか？」

桜はまだまだ暢気なものだった。

「なん……、だよ……」

どうやら意識は持っているようだった。

「俺を“都市”に連れてってくれよ。それくらい出来るだろう？」
それが、桜の願いだった。

&l t; 3& g t; 一般人にして他称世界最強が動き、“創造主”を驚かす。

なんかマト○ックスとか言ってると見たくなったので、
今見えます。

D V D ね。

&1 t.; 3 & g t.; 〱 一般人にして他称世界最強が動き、“創造主”を驚かす。

さて、桜無双にも終了のときが…。

&l t; 3 & g t; 一般人にして他称世界最強が動き、“創造主”を驚かす。

「“都市”に、連れて行け、か」

片膝をつき、右手をアスファルトの地面について“風”は言われたことを反復する。

「そうだ。今ここでお前を殺してもそれは俺の一時の感情が満足するだけで、後には何も生まれんからな」

冷たい目はそのままに言い放つ。

「……わかった。“創造主”様に連絡してみる」

そういうと、白い手袋を右手に付け直し、ポケットから携帯電話を取り出した。

そしてボタンを押し、耳に当てる。

「ええ、はい。申し訳ありません」

「で、用件なんですが」

「そうですか、もうお分かりでしたか」

「……よろしいですね。わかりました」

そこで電話は終わった。

向こうの声は聞こえなかった。

「どうやら良いそうだ。良かったな」

「そうか。ところで――――」

桜はそこで言葉を切ると、“風”の足元を指差した。

「何が起きてんだよ、それ」

“風”が右手をついていた部分。

そのコンクリートが茶褐色のような色となり、灰のようにさらさらと砂のように風で流されていた。

その円はすこしずつ広がっていつている。

「……これは“滅亡の右手”ジェノサイド・ライトの力だ。触れたものを腐敗させる」

「そういや、さっき言ってたやつか。それはオンオフってのはつくのか？」

「つかない。故にこうして手袋で封印している訳だ。こんなもの放置していたらいつか自分の身体にでも間違って触った時に死んでしまうからな」

そうして右手を見せた。

「アンタ、そういや聞いてなかったが名前は？」

「ウインド“風”、とでも呼んでくれ」

「成程、風化で『風』ってわけか」

“都市”に行くのは、“風”がこっちに来るときに乗ってきた車に乗ることで解決した。

そうして世間話をしながら、その車は“都市”へと向かっていった……。

「そうして俺はここで体育教師にでもなれ、といわれてここに居るわけだ。ちなみに体育教師とは何たるかっていうのを教えてくれたのが桜島。なんか意気投合してな、それで仲良くなって今に至ると。ちなみに今は黒峰高校ってところで教育実習ってやつを受けてる」

長い回想が終了した。

ちなみに桜は赤井と紅を除く事情を知らない他の八人には招待状をもらってきたんだと嘘をついた。

なんだよ招待状って。誰からどうして何の理由でもらったんだよ。そうは思ったけど誰も何も言わなかったので納得したようだった。

そして、

「ちょ、有り得なくないですか!! 桜さん!!」
周りのみんなに聞こえないように桜さんにツッコむ。

「流石私のお兄ちゃんって所ね!」

「本当に紅の言っていたことが本当だったなんて……」

だっていかにも四天王みたいなやつだったのに。

「で、お前らどこ向かってるんだこれ?」

「廻家さんって人のとこ。その人はいろいろ知っているらしいの、

“創造主” 関連とか」

最後の方は声を小さくして言った。

「じゃあ、俺も行こうかな。桜島も来るか?」

「そうだな、生徒の安全を守るって点でもいいかもな。じゃ、行くか」

結局、この後廻家さんのところに行くのは桜さん、桜島先生を含めた十人となった。

「It's 4 get;」今度は正義の男が仲間になり、磐石な態勢を整える。」

さて、だんだん登場キャラが揃ってきましたー。

&l t; 4 & g t; ; 今度は正義の男が仲間になり、磐石な態勢を整える。 〵

「確かに赤井君。俺は紅嬢にはよろしくとは言ったし、出来ればここに来て欲しいとも言ったけどさあ……」

はあ……、と呆れたように溜息をつく廻家。

「だからってちよいと多すぎやしないか!？」

周りを見て当然のツツコミをする。

ここは廻家の居る（というか秘密基地？）廃ビル。

そこには赤井と紅の他に八人。しかも事情なんてさっぱり知らない部外者だ（正確には桜さんは知っているが）。

「俺は大切な話があったんだよ……。とりあえず彼らには何とか言っというて、俺達だけで話をしようか」

そうして廻家は廃ビルの階段のほうへ向かう。

「すまないけど俺達は話があるから、お前らはそこにいてくれ」

「なんだよ赤井、水臭いじゃん」

「うーん、それは聞いちゃいけないのー?」

「無理だな」

「ならば聞かないであげましょう。元々いきなり押しかけたのは我々ですし」

「しょうがない……。ね……」

「しゃーないってやつやな」

赤井は染山、十島、相馬、天音、藤崎に説明。

「ねえ篠崎、私たちはちよつと話があるから、ここに居てくれない

？」

「ん、分かったわ」

紅は篠崎に。

「ま、よく分らんけど、大事な話があるようやからここに居てくれるか？」

「生徒の管轄も出来るしな。お前も黒峰だからって怠けずちゃんと俺の生徒を守れよ」

「当たり前だろ。俺の妹と面白い男だからな。護るさ。ていうかお前の生徒ではないだろ」

桜さんは桜島先生に。

そして俺、紅、桜さんで階段を使って三階へ。

手すりとかがぎしぎし言って怖いし、回りには亀裂も走っている。ここは本当に壊されかけの廃ビルなんだと思い知らされました。

「さて、話なんだが」

三階に上がると、廻家さんがもう回転する椅子でぐるぐる回りながら遊んでいた。そして来たとわかるところを向いて話しかけてきた。

「その前にちょっといいか？」

話を遮ったのは桜さん。

「アンタが廻家さんってのは分かった。じゃあ、その男は誰だ？聞いてないぞ」

そう。

そこにはもう一人男の人がいた。

髪は赤みがかかった茶色で、髪型はところどころがつんつんしている今どきの髪型。

服はホストのようなスーツ。黒服の仲間と言われても納得する黒

色だ。

身長は180くらいだろうか。

「まずは彼の紹介が先かな。じゃ、自己紹介して」
そうして手で自己紹介を促す。

その男の人が前に出てくる。

「俺は焰炎作。ほむえんさく廻家に誘われてここに来た。悪は殲滅せねばならん！
焼き尽くしてやろうぞ！」
その人は堂々とそう言い放った。

「まあ、正義感の強いやつではあるから、仲良くな」

最近変な人ばかり知り合うようになってきた気がするが俺はもう気にしないことにしよう。

&l t; 4 & g t; ； 今度は正義の男が仲間になり、磐石な態勢を整える。 ；

よく考えたらあんまり学園関係ない気がするけどないでもないかもしれません。

どうなんでしょう…。

でも学校は出てるし！！

大丈夫さ！

「**今度は正義の男が仲間になり、磐石な態勢を整える。**」

最近の人はアンタッチャブルという映画を知らない人も居るそうです。

残念ですねー。

&l t; 4 & g t; ； 今度は正義の男が仲間になり、磐石な態勢を整える。 ；

「じゃあ自己紹介も終了したところで、本題に入ろう」

俺達も焰さんに自己紹介した。

「信頼できるやつではある。“燃える正義”、“炎の執行人”と言われているからな」

「名乗ったことは無いがな」

そして本題。

「最近“統一された幸福な世界”の活動が活発化、というか幹部メンバーが集結しているらしい」

「集結……、ここにですか？」

「そうだな」

「それは信頼できる情報か？」

「多分な。情報源は明かせないが、かなり信憑性は高い」

多分。

それが本当ならもうすぐ何か大きなことをやるのかもしれない。

「情報源ってのは何なんだよ。明かせないなんて言われたら信じようにも信じられないぞ」

桜さんはこういふとき強い。

……、別にこういふときで無くても強いか。

「あのさ、聞き覚えがあると思わない？ 廻家界視ってさ」
「そうか？」

下で残っているみんなの会話。
篠崎が妙なことを言い出した。

「確かに、どこかで聞いたことのある名前だな」

「桜島先生もそう思いますか？」

「ふむ。どこで聞いたのか。何処だったかな……」
腕を組んで考える桜島。

「そうだ、十島、あれ使えよ“閃”！」

「そうだねー」

そういうと制服の内ポケットからシャーペンと紙を取り出した。

そして、『廻家界視とは何者か。』と書いた。

「何で書いたの？」

「こうしないと目で見れないじゃん？ こいつの才能は【目で見たものの問いを返す】だから、目で見えるようにしなければなら
んじゃん」

「ふうん」

「さて、電波タイムじゃんよ」

十島の雰囲気が変わる。

「視界により範囲指定。分析。answer、廻家界視は都市、
『円卓』のメンバーの一人。四星の廻家である。それ以上の答えは
望めず。天啓終了」

「『円卓』のメンバー!？」

その言葉に全員は驚愕していた。

「情報源ねえ。『円卓』での機密事項とでも言えば良いのかよ」

「『円卓』ですって!？」

その言葉に非常に食らい付いたのは紅だった。

「『円卓』って何？ 紅」

「『円卓』って何なの？ 鍵音」

その言葉の意味がわからない二人。

「『円卓』っていうのは、外の世界で言うところで内閣みたいな感じに近いの。七人の理事とリーダー、計八人で構成されてるの。都市の法律や制度等を決められるほど権限は相当大きい。この都市のトップ八人って所かしら。……どうりで。廻家って聞き覚えがあったのよね」

「そんな凄い人なのか廻家さん!!」

「へえ。只者じゃないとは思ってたけどな」

そういやどうして俺がここに来たことを知っているのか、って聞いたら禁則事項でとか言ってたけど、そういう理由があったのか。

「ちなみに焰も『円卓』の一人だぜ？ 一星の焰だろ」

「まあな」

「ええ!!」

紅はいちいち驚いている。

どうやらこの『円卓』というものは余程凄いものなのだろう。

「**it; 4 get; 今度は正義の男が仲間になり、磐石な態勢を整える。**」

芸人の方は知っていても映画の方は知らないもんなんですねー。

「**it; 4 get; 今度は正義の男が仲間になり、磐石な態勢を整える。**」

眠いですね。

<4>今度は正義の男が仲間になり、磐石な態勢を整える。

「ここで俺が『円卓』のメンバーであることは関係ない。それより俺が紅嬢を呼んだのには理由があるんだ」

『円卓』騒動も少し治まり（というか俺と桜さんにはまだいまいち凄いかどうかつかみきれてないけど）廻家さんが話をまた切り出した。

「俺か？」

「桜さん、紅嬢っていいましたよ……」

「私に何の用だったの？」

「追われていたんだろう。ということは何かあいつら、“統一された幸福な世界”の秘密を握っているとかあるんじゃないのか」

USBのことだ。

直感的に三人は分かった。

それよりも。

ずっと前から気になっていた単語があるよね。

「なあ、今更聞くのも何なんだけどな。“統一された幸福な世界”ってのは何者なんだ？」

何度も出てきた単語だったが、聞くタイミングはいつもなかった。

「正直俺も疑問だった。USBの中にはそう書いてたんだけどな」

「お兄ちゃんも赤井も、知らなかったの……？」

紅はげんりしていた。

「統一された幸福な世界」ってのはお前達が黒服とか呼んでる奴等の組織名だ。っていうかお前らそんなことも知らずに戦ってたの

かよ」

「私は知ってたわよ!」「俺はまだ活躍シーンは無い!」

「……すまん」

俺や紅はともかく桜さんは一回無双してましたね。

「で、何か心当たりがあるようだが。かまわないようなら話してくれない」

「そうね、私とお兄ちゃんが知っているのは作戦の計画概要だったわね」

「成程な。で、どうだったんだ?」

「それは――――」

紅は学校のかばんからペンとiraない裏の白い紙を取り出して、さらさらと書き始めた。

そして洋楽の事実が!!

じゃなくて驚愕の事実が!!

とまでは行かなかったけれど。

作戦名『ハッピーエンド』

・ “都市” 全機能の停止。及び全人間を統治下に。

・ 『円卓』のメンバーに対しては一人につき一人はつくこと。

・ その後外部への交渉開始、その如何によってプランAからプランDまで変更可能。

その他色々なことが書いてあった。ただ日時に関しては書いてはいなかったそうだ。

そして“五日間”の才能も記してあったそうだ。

・ デイ・ビフォー・イエスタデイ “DBY”……、『メタルメイカー発鉄能力』
・ イエスタデイ “yesterday”……、『ダイヤモンド・ボディ肉体硬化』
・ トゥデイ “today”……、『ゴーゴン蛇女の目』
・ トゥモロー “tomorrow”……、『???』
・ デイ・アフター・トゥモロー “DAT”……、『クイックムーヴ定点移動』

そう紅が書いた後桜さんがもう一つ書き足した。

・ ウインド “風”……、『ジェノサイド・ライト滅亡の右手』

わかることはここまでだった。

しかし日時がわからないというのは厳しいし、“五日間”の才能データにしたって名前だけではわからないものも多かった。それに都市全人間を統治下に置くんてどうやってやるのか。そのこともここには書いていなかった。紅いわく紅のお母さんはそこまで重要機密を握れるほどの幹部では無かったようだ。これを見た人に“統一された幸福な世界”に気をつけていると警告したかったのだろうか。

「**it's getting**」今度は正義の男が仲間になり、磐石な態勢を整える。」

寒いですね。

「**今度は正義の男が仲間になり、磐石な態勢を整える。**」

「つい二日も休んでしまいました。」

「ごめんなさい。」

「眠かったです。」

<4>今度は正義の男が仲間になり、磐石な態勢を整える。</p>
</div>

「……微妙だな」

廻家は苦い顔をした。

流石にこんなアバウトな情報ではない情報とは思えない。

「いや、これより他に――――」

「そういうなよ。こんなもんでも俺達の母さんが命がけで紡いでくれたんだぜ？」

紅の言葉を消すかのように桜さんはおどけたように言う。

「しかしこういうより他は無いだろう。そのUSBはあるのか？」

「ない。“風”ってやつに渡しつきりだったからな。家のパソコンには」

その後。

廻家は紅から情報を引き出した後少し思案顔になって、「お前らもう帰れ。次は何か動きとか用があったら来い」とぶしつけに言った。

そしてすぐ出ることにした。時間がもう六時を回っていたからだった。

「お、もう帰るじゃん？」

「じゃー、帰るー」

「しかし私たちよく考えたら何でここに来たのでしょうか？」

「……ノリ……？」

「考えたら駄目ってことだろ」

二階に居た八人も忘れない。

248

この後。

桜島先生は気を使ってくれたのか、俺達三人だけになれるように

「じゃ、こいつらは俺が送るから」と言った。

「あんがとな」

「何のことだ？（ニヤリ）」

こういうところが仲の良いところなのだろうか。

桜島先生のはからいで三人きりに。

「……お兄ちゃん！ どうして嘘をついたの!？」

三人きりになったとたん紅が叫んだ。

「嘘？」

そういえばさつき……。

「あのUSBにはまだ情報が入ってたはずよ。どうして……?」

「まだ情報が？」

そうだ。

さつき何かを言おうとしていた紅を桜さんが止めるようにしたんだった。

「ま、確かに情報はあったわな。でも、俺にはまだアイツは信用できないんでな」

「なんで？」「どうして？」

もちろんここで聞き返すのは当たり前で。

「赤井君はともかく、俺と鍵音はあの男と初対面なんだぜ？ 鍵音は信用しすぎだ。少なくとも疑え」

「……ごもつともで」

確かに初対面であんな人は信用しづらいよね……。

ところで、気になる点が一つ。

「じゃあ、その言っていない情報ってのはなんなんですか？」

そこで答えたのは紅だった。

「USBの中にはファイルがあったんだけど、その中にはロックがかかっているものや、隠しファイルがあったのよ」

「多分母さんは“統一された幸福な世界”のメインコンピューターあたりから大きなファイル丸ごとコピーしてきたんだろうな」

桜さんが補助。

でも、今のちょっとおかしくないか？

「待てよ。ロックがかかっていたものはともかく、どうして隠しファイルまでわかったんだよ」

普通見えなくしてこそその隠しファイルだからな。

「それは私たちのお父さんのせいね……」

「俺達の父さん、くれなゐぎり紅火切。親父は色々パソコンってのに詳しくてな」

「詳しい？」

「そういうのを見抜けるプログラムとかが勝手に入ってるって事。俺達が普通に使うようにまでそんなもの入れとくな、って話だがあの親父なら仕方が無いか」

よく分からないけどプログラマーとか言う人種なんだろうか。

赤井のパソコン関係に乏しい頭ではその程度しかわからなかった。

どうやら家のパソコンにはデータを保存していて、全情報は多分紅の父さんが解いてくれるそうだ。

その連絡を待つことにした。

そして次の日。

届いた連絡は「しくじった」だそうだ。

どうやらファイルを開くことには成功したようだが、本当の開け方で開けないと発動するウィルスがあったようで、中身が全滅したそうだ。全力で復旧してみるそうで、一週間くらいかかるそうだ。本気でやれば二日で出来るそうだが、火切さんも社会人。時間はそうは取れないらしい。

そして火切さんから連絡も無く、廻家さんのところに行くほどの用事も無く、この日から六日後の5月1日（月）。

一週間を待たずして、大事件、これからの日本史に残る出来事が起きた。

ゝ視点は二つ、謎を残しながら黙考する。ゝ（前書き）

はい、余章シリーズです。

「視点は二つ、謎を残しながら黙考する。」

side…>統一された幸福な世界、頭領く

4月30日 日曜日。

さて。

ようやくここまで来た。

どれだけの時間をかけたのだろうか。

どれだけの労力をかけたのだろうか。

まあいい。

今はただ喜ぼう。

それに、この作戦が最初にしてもっとも重要であるし、これから更に忙しくなるからな。

お前も見ているか？

“closed”……………、いや。

クローズド

■ ■ ちゃん。

明日は、5月1日。

side…>??<

4月30日 日曜日。

随分と下準備に時間がかかってしまったが、そのかわりにとても面白いショーが始まりそうだ。

もう俺は陳腐なショーでは満足できないな。

面白い結果を見せてくれ。

“統一された幸福な世界”、楽しいチーム名じゃないか。

……、赤井夢斗が絡んでくるとは思わなかったがな。

あの男、とことん俺の邪魔をしたいようだな。

それにあの高原衣とかいう男、紅桜も不確定要素だ。

まあ、確定なんて元々してないんだがな。

適当に計画を立てて、適当に準備して、本番だけ本気で全力を尽

くす、ってタイプだからな、俺は。

不確定要素が絡めばもっと面白くなる可能性もあるわけだしな。

それでも、赤井夢斗……。

あの男にいつ再会しようか。

今回のショーで出会うのはとりあえずご法度。

だがアイツの知り合いにちょっかいを出してみるのも面白そうだ。

『より良い』^{better}より『最高』^{best}、なんて言葉があるそうだが、そんな言葉はcheapだ。

安い、軽い、つまらない!!

『より悪い』^{worse}より『最悪』^{worst}だろうがよ!!

そんな結果を希望してるぜ?

いや、絶望してるぜ?

バッドエンド
最悪の結果を。

最悪の結果
バッドエンドを。

ゝ視点は二つ、謎を残しながら黙考する。ゝ（後書き）

本来この二つは分けて書く予定だったんですが、上の方だと200字に到達しませんでした。

さて、side>???<とは？

流石にここばかりはわかりませんよね。

伏線ってやつなのです。

わからなくて当然ですよー。

&l t; 0 & g t; ; 〵 “統一された幸福な世界”、闇夜に登場。 〵 (前書き)

さて。

ようやくバトル編に突入できそうです。

バトル展開満載だったはずが、ここまでほとんどバトルが無かったですからねえ…。

しかし最近人気が減ってきましたー。
ぶー。

<0> “統一された幸福な世界”、闇夜に登場。

……、

ミッション・スタート
任務開始だ。

5月1日月曜日、2200。

あるビルから一気に人が飛び出し、夜の街へと消えた。

とある交番。

そこには、185cmはありそうな男が青い制服を着た警察官に手錠を掛けているというわけのわからない状況が出来ていた。

「悪いなア、警察官のあんちゃん。こいつも仕事なんや」

「な、なんなんだお前!! こんなことをして後でどうなるかわかっているのか!!」

「後でどうなる? わからへんなアそんなこと。警察官にもなって一寸先は闇っちゅう言葉を知らへんのか?」

「なっ……!?!」

「心配せえへんでも殺しはせん。止めらとるからなア。でも、しばらくの間黙っててもらおうで」

「……お前、何者だ」

もう逆らっても無意味とわかったのか、落ち着いてきた警察官さん。

「わいは“オールワン・ハッピーワールド統率された幸福な世界”で“バード鳥”って名乗らせてもらっちよる。あんちゃんも半日たてばこの状況がわかるようになる。じやからア……」

「眠っつけ」

警察官が聞いた言葉はここで途切れる。

意識が途切れる前最後に警察官が見たのはなまりの強いこの男の目。

その目は本来白目の部分が真っ赤に染まっており、黒目の部分は緑色、瞳孔はその緑より深い色だった。

まるで化物とでも言うべき姿だった。

そして次にこの警察官が目覚めたのは数時間後だった。

そして警察官が気を失った（正確には気を失わせられて）後、その警察官と同じような服装をした四人の男が交番の後ろから出てきて、一人は元々警察官が座っていた席に座り、残りの三人は奥の部屋へと行った。

「こんなんでばれんもんなんかア？」

“鳥”^{バード}と名乗った男が席に座った男に聞く。

“創造主”様曰く、普段接しているものならともかく、普通の人間には警察は警察としてでしか認知されていないから、そんな些細な変化でとやかく言う人は居ないそうですよ」

「なるほどなア。じゃ、わいは次のところ行ってくるわ。今回この仕事俺のメインな仕事な訳やし、じゃんじゃん働かんとかかんもんなア。だいたい、悪の組織がお天等様が上つとる時間帯に作戦を起こそうなんて考えがどうかしとるんちゃうか？ おかげで夜メイン、っていうか夜しか外で働けんわいはどうせえっちゅーねん」

「いやいや、そこまでもが作戦の内なのでしょ」

「そうかア？ じゃあしーないか。お前もここ頑張りーや」

その化物のようななまりの強い男は手を振り、

次の瞬間にはそこから消えていた。

「恐っそろしいよな、“花鳥風月”の皆々は」

このようなことが行われ、文字通り“都市”の警察機関は誰にも知らされること無く乗っ取られていくこととなった。

&l t; 0 & g t; ； “統一された幸福な世界”、闇夜に登場。 ；（後書き）

久しぶりにキャラ解説コーナー！！

今回は染山と十島について。

染山と十島は随分と喋り方に特徴のあるキャラクターになっていますねー。

下の名前の紫瀬と茶仁っていうのも色を考えてからつけましたー。

さて、これからもよろしくねっ！！

&l t; 1 & g t; 、「都市」、いたるところで異常発生。」 (1) (前書き

友達と話してたんですけどね、
真心こめてつくろうとか、心をこめて作ればおいしいとか言うじゃないですか。

<1> “都市”、いたるところで異常発生。 (1)

5月1日月曜日、9…00 間之崎学園。

その日、間之崎学園では一時間目だった。というかどこの学校でもそうだった。

そんな状況で、廊下を歩く謎の集団が居た。

9…20。

それは唐突に訪れた。

急にサイレンがクラスのスピーカーから流れ出したのだ。

よくある避難訓練などに使われているようなサイレン、しかし避難訓練があるなんて誰からも聞いていない。

全員が固唾を吞んで見守った。

その放送から聞こえてきたことは、

「あーあー、ヒトデの足は一本になるまで切られても再生するそうです…、ってこんな緊急暗号言ってもどうせ向こうには先生も居るんだからもう良いか？ もう良いよね鉄ちゃん！ 緊急放送緊急放送！！ 学園内に謎の不審人物っていうか軍団が攻め込んできました！！ 信じるも信じないもあなたしだいですが早急に逃げることをおすすめします！！」

シーン。

怒涛のような放送だった。

「はっ？」となってみんな硬直して動くことが出来なくなっている。今の声は誰だったんだろう。いたずらなのかな。にしてはなんでヒトデの話なんかしたんだろうか、それに向こうには先生が居るっ

てどういう……。

赤井はそんなことをつらつらと考えていた。

すると、斜め前の染山がこの混乱の中俺の席まで近づいてきた。

「急いで逃げるじゃん！ 早く！」

どうやら染山はこの放送を信じているようだった。

「おいおい、この放送お前信じてるのか？」

「大体の人はー、信じると思うよー」

気がつくとも十島もここに居た。

「どうしてだよ」

「今の放送の声はあの高原衣じゃん」

「誰だよ」

「生徒会長だけど？」

「生徒会長！？」

どうやらあの放送は生徒会長が仕掛けたものらしい。

「うわあ……」

『わあああああああ！！！！』

どうやら静かになっていたみんなのたがが外れたようだ。

他のクラスの方からも聞こえ出した。

クラスみんなが廊下に飛び出す。

「皆落ち着いて！！」

この声は富士先生か。

でも全員こんなパニック状態じゃ聞きやしないだろうな。

ていうかどうしてこんなに皆信じたんだろう。

「そりゃあ、生徒会長だからじゃね？」

「そんな理由で信じるもんか？」

「そうですね、赤井君は転校生ですから生徒会長の話を知らないの
でしょう」

「まったく、何が起こったのかしら？」

「……大変な……、事態……？」

「まあそう震えるなって、天音」

いつの間にか俺の席の周りには普段のメンバーが。
というかお前らはよくパニック状態にならなかったんだな。

「これは、もしかしたらお母さんの言っていた……」

「作戦、『ハッピーエンド』ってやつか？」

紅が耳元で静かに呟いた。

気がつくのと、俺達以外クラスには誰も居なくなっていた。

「俺達は窓から出て逃げるじゃん」

「窓！？　ここは4階だぜ！？」

「でも……、廊下は……、人でいっぱい……」

「篠崎の“重力遮断”を使えば速いわ」

「俺の才能は“才能帰却”だぞ！」

「では、こうするのはいかがでしょう」

相馬がグッドアイディアっぽいのを言い出した。

&l t; 1& g t; 、「都市」、いたるところで異常発生。」 (1) (後書き

そういうの嬉しいんですけど、よく考えたらそれって心を食い物に
してますよね。

愛情がこもっているなら愛を食い物にしていますよね。

というネガティブシンキングでしたー。

&l t; 1 & g t; ; 〵 “都市”、いたるところで異常発生。〵 (2) (前書き

なかなか眠いです。

という訳で。

「梁山さんの才能を使えばいいのですよ」

「俺は“才能帰却”だが、それすらも何とかなるのか？」

「大丈夫です。あなたの才能は触れたものの才能の力を消すんですよ？」

「だから、どうするんだよ」

少し考えあぐねるが。

「では私たちは先に篠崎さんの才能で降りときます。その後梁山さんの“カロリー・コントロール体温自在”で4階からコンクリートを溶かしてゆっくり降りればいいんですよ。赤井さんは梁山さんが腰に紐でもつけてそれを握って降りればいいんです」

「OKじゃん」

「待て！ コンクリート溶かすって――――――」

赤井の言葉も聞かず4階の窓から出る。

「篠崎、お願い」
グラビトン・シャットアウト

「“重力遮断”、発動」

そうして梁山以外の全員がふわりふわりとゆっくり下へ。

「さて、行くじゃん！！」

梁山はそう叫び、俺達は窓際の壁に。

「カロリー・コントロール“体温自在”、開始じゃん！！」

梁山はそう意気込み、壁のコンクリートに両手をついた。

「俺に触れると火傷するじゃん？ 赤井」

「俺は才能は効かないぞ？」

「今のは冗談じゃん。良い？ 俺は今コンクリートに穴を開けてる

じゃん。そこに手をつっこむから、そうしたら腰につけた紐を持つじゃん」

「紐？」

一体何が起きるんだろうか。

そう思いながら紐を渡された。その紐は染山の腰に繋がっている。

「100℃、200℃、400℃……」

「400℃!？」

一体どんな温度なんだよ!! 体温とかのレベルじゃないぜ!?

「この程度で、驚くなじゃん……」

すぐに変化は訪れた。

腕が温度で貫通したのだ。

「これ以上の必要はないじゃん。向こう側に行くか」

「向こう側？」

一体どういう意味だ？

そういう前に染山が動いた。

窓の外へ染山が飛び出し、自分の作った穴に手を突っ込んで宙ぶらりんのような格好に。

「危ねえ!!」

「ノープロじゃん。早く足につかまるじゃん」

「んなこと怖くて出来るか!？」

「そういつてもこうするしか無いじゃんよ」

「……」

「ほら、早く!!」

「……やけくそだ糞野郎!!」

そういうと紐を持って飛び出した。

こうして俺も宙ぶらりんに。

「意外に……、重いじゃん……」

「さっさと何とかしやがれ!! お前がこうさせたんだぞ!!」

「じゃ、じゃんじゃん仕事するじゃん!!」

ズルツツと。

そんな気色の悪い感じの効果音で。

景色がなんだか少し変化した。

さっきまでの木の高さが上がった気がする。

だが、それは少し違っている。

染山が手をつ突っ込んでいたところがドロドロと溶けている。

そしてゆっくりと落ちている。

「はっ!?!」

ちよ、ま。

ゴゴゴゴとゆっくり落ちていく。

「つと」

「のわっ!!」

結構バランスが悪いし、持ってる紐が滑り落ちそう。

でもここで落ちたらデッドエンドしか待ってない!

頑張れ俺!!

「梁山式エレベーター、一階に到着じゃん」

数分後、ぶらぶらと所在無さげだった足が地面につく。

ああ、地面ってすばらしいもんなんだな。
地球の偉大さに感動した。

<1 t; 1 > t;) “都市”、いたるところで異常発生。) (2) (後書き

更新したら寝ます。

<1>;1>;、 “都市”、 いたるところで異常発生。 (3)

5月1日月曜日、9..04 “都市”、とある豪邸。

「き、貴様！ この二星の網代儀様あじろぎに何してくれてんだ！！」

「開始4分でこれ。がっかりするほどの弱さね。権力と金と親の七光りってやつで『円卓』の立場についてる、いい例というわけなのかしら」

「アハハハ！！ 弱っちいたりやありやしないわね！」

元々非常に大きく豪華絢爛な部屋だったのだろうが、今は暴風雨でも通った後のように色々なものが散乱していた。窓ガラスは叩き割られ、上についていたのであろうシャンデリアは下に落ちて粉々になっており、掛けていただろう絵画のような板は床に落ちてひびが入っていたり、ひどいものは割れていた。周りには人も多く倒れていた。

そんな中、一人の男は小さくなって倒れたテーブルに腰かけガタガタと震えていた。

その目の前には女と少女。

女性はよく黒服が着ているあのスーツだったが、ネクタイは赤く、スーツ自体もゆったりとした形となっていた。

少女は黒を基調としたフリフリのついた服。いわゆるゴスロリというやつだろう。

「もしかしたらあなたの才能は戦闘には向いていないのかもしれないんだけど、それでももっと戦えるわよ？ 本当、一星と四星のところに起きたかったわ。でも、だからこそ私の配属はここなのかしら。この程度なら、別に“月”ムーンさんが来る必要もそんなに無かったですね」

「でも、あの“創造主”様だから、念には念をってやつじゃないの

かな？」

「ただでさえ人員が少ないのに念には念なんて込めるから一人当たり三人くらいの要人を倒さなきゃいけなくなるんでしょね……」
はぁ……、と面倒くさそうに溜息をつく。

これから先の敵もこんな感じだったら……、そう思うと退屈であくびが出る。

「お、お前ら、一体何なんだ！！ この俺に手出したら、何が起るかかわかってんのか！？」

あーあ、まだこの男氣い失ってなかったわけね。

「何が起るの？」

男の必死の抵抗は、ゴスロリ少女の見事な返しによって粉碎される。

「しょ、正氣か貴様ら！！ 後でどんな風に消されても知らないぞ！！」

「私が倒してきた人たち、しかもお偉いさん方に限って大抵やられる前にそんなこと言ってたわね」

すぐくつまらなそうに呟く。

返すのも面倒だったから小説から引用させてもらったわ。

と、言いたげなように。

「な、何なんだお前ら……。何なんだよお！！」

恐怖で齒はガタガタとなり、目は見開いていた。

「私たちはー！」

「なんで合わせないといけないのか凄く疑問だけど、“統一され
た幸福な世界”よ。後々名前はとて有名になるわ。私は“DAT
ハッピーワールド
オールワン
デイ・アフター・トゥモロー

”。彼女は――――――――」

「花鳥風月”、“月”のムーンだよっ!!」

「さて、名乗りも終了したわね。何か言い残すことは？」

「ほ、欲しいのは金か！？ 権力か！？ 名誉か!？」

「典型的なフラグね。じゃ」

“DAT”は冷たく言い放つとノーモーションで男の頭を拳で打ち碎いた。

5月1日月曜日、9..15 廃ビル内。

そこでは、廻家は快適な睡眠を楽しんでおり、焰は軽い筋トレをしていた。

「誰だ」

焰が何者かの影に気がついた。

「お気づきか。非常に残念だな」

「わ、私のせいではれたんでしょうか……、ごめんなさい……」

別に“DBY”^{デイ・ビフォー・イエスタデイ}のせいじゃないでしょうよお」

三人の男が影から現れた。

「……起きろ。廻家」

「……うえわ？ 起こすの早すぎない……」

「さっさと起きんかあ!!」

「ちよっ、起きる起きる!!」

焰が喝を入れると廻家が飛び上がった。

「ところで、初顔が勢ぞろいなんだが、どういうことだ？」

「そりゃあ初顔だろうよお。俺達とアンタ達は始めてあったんだからなあ」

真ん中の男が前に出てくる。

「誰だ、お前達は」

「ん、俺達に名前を聞かあ。俺達は“統一された幸福な世界”だ。名前くらい知ってるだろうがよお。俺は“today”の白道だ」
白道。

赤井達によく絡んできた男の名前だ。

確か才能は……、“蛇女ゴウゴンの目”だったか。

随分と語る男で三下みたいだな、そう思えるような奴だった。

「あの、私は、ディ・ビフォー・イエスタデイ“DBY”なんです。ごめんなさい!!」

「どうしてお前は敵に謝っているんだ……。俺は“風”ウインドだ」
残りの二人は……。

とにかく特徴的な二人だな、と思えるほど正反対に近かった。

三人ともバラバラに近い。

こんな奴らを纏め上げている“創造”クリエイトは、やっぱり天才だな。

しかしこうしてみると、“統一された幸福な世界”の服装も人によつて違うもんなんだと思う。

白道は全部がだらしない感じに見える。

“DBY”はなんだか大きめに見える。

“風”ウインドはきっちり着こなしているように見える。ただ“風”について右腕の袖の部分だけが無かった。

「さて、お前達は一星の焰と四星の廻家、で間違いないか？」

「ああ、間違いないな」

「ふあああ。眠みい。何なんだよ一体……」

二人とも答える。

「わかった。お前ら行くぞ」

「しよげた声出さずに行きましょうやあ。あんな化物じみた男はもういないってえ」

「ごめんなさい。命令ですので、殺られていただけですか…?」

三人はそう戦闘開始の合図を言い放った。

<1 t; 1 & g t; > “都市”、いたるところで異常発生。 > (3) (後書き

どんどんバトル展開が進んできました。

おめでとー！

<1 t; 1 > t; 〉 “都市”、いたるところで異常発生。 〉 (4) (前書き

今日はバレンタインデーですね。

<1> “都市”、いたるところで異常発生。 (4)

「風」という男は確か“滅亡の右手”とか言う才能で、触れたものを何でも腐らせるそうだが普段は白い手袋で封印してるそうだな……。

そう思って廻家が“風”の右手を見るが、そんな手袋はついていなかった。

見えるのは茶褐色の手だった。

すると廻家の目線が気になったのか、

「もうあのときのような失敗は繰り返さない。最初から全力で行く」と言った。

その言葉には激しい決意が込められていた。

なんで俺が紅嬢の兄貴のとばっちりを受けなきゃいけないんだろうか。

そう考えていると、何か白道のほうから声が聞こえた。

その次の瞬間、“風”の右手が顔の目に前に迫っていた。

「のわっ!!」

それをノーモーションで下がって離れる。

その動き方は足に無理やり引っ張られるような不可思議な下がり方だった。

が、そんなことは些細な事と、すぐに“風”はレポートしたように間を一瞬で詰めてくる。

今度はやべえ……。

流石に身の危険を感じたが、ここには廻家一人ではない。もう一人いる。

「業火!!」

焰である。

焰の手から火の球、いやむしろその速さと大きさは火弾といったも過言で無いようなものが“風”に向かって一直線で飛んでいた。

これは起死回生どころかこの一発で決まる……。

そう思ったが、杞憂だった。

「ちっ……、俺の才能の本領がばれちゃいますが背に腹は代えられないなあ!」
ホワイトアイズ “白眼視”!!!」

その時、明らかな異常が起こった。

火弾が空中で、“風”の顔の横で、何の比喻も必要なく、

止まっていた。

「それがアンタの才能……、えーと“蛇女ゴーゴンの目”だったっけか。その力か?」

「ああ。もうばれちゃったなら言っても良いかあ。俺の才能は目で見たものを世界の理ことわりから外して止める事ができる」

「理……、なんじゃそりゃ」

「それ以上の説明はまた次の機会ってことで!!」
ホワイトアイズ “白眼視”!」
来た……。

そう思ったときにはすでに顔の前に手が。

だが、今度はこう来ると簡単に想像できた。

「甘い!」
足を地面につかないまま腰が不自然に回転し、ストレートを放った。

それは“風”の腹にヒットし、後ろに仰け反る。

「白道の才能は視界に入らなければ止まらないってことを暗示してる」

「だからなんだってんだ!!」

廻家の下に少し離れていた焰がこっちに集まった。

焰は謎掛けのようなことを言っていた。

「お前との共同技だ」

焰は手を目の前に出した。

そして、

“炎華”

すると火がボウツと噴き出した。

「何やってんだ？」

「ほら、お前の才能だよ！ 回すんだよ！」

「……、成程!! お前頭良いな!! 行つくぜー！」

廻家は焰が出した手に自分の手を合わせた。

「じゃ、二人の共同作業で!!」

「誤解を招く発言やめろ。とりあえず技名は、」

焰が出した炎がぐるぐると回転しだした。

「“炎転華”!!」

それはまるで壁のように、むしろ。

盾のように。

「やられた。これじゃあアイツが見えないなあ」

「炎自体を止めるのは？」

「多分あれはずっと生まれ変わるように新しい炎が出てるタイプだ。」

止めても意味が無い。すぐ上書きされる」

「私が頑張ってないのがいけないんです……、ごめんなさい。もう準備は整いました」

「おう、出来たか。頼むぜ、“DBY”。俺はお前のあれだけはやられたくないんだから。敵にお見舞いしてやれ」

「同感だ。俺もこの右腕が無ければかなりきつい」

「では、ごめんなさい！！」
いつでもどこでもあなたのそばに
“有私鉄尖”！」

急に今までまったく戦闘に参加してこなかった妙におどおどした男が言った。

瞬間、シュリリリと何かが地面から、壁から、天井から飛び出してきた。

それは、糸のようにキラキラと光っているが、決して糸のように柔らかいものではない。

鉄線。

思わず俺達は手を引いてしまった。

それは失敗だったのだろう。

気がつくのと全く動くことの出来ないような状態にさせられてしまったのだから。

「さて、後は動けない相手に俺が腐敗を与えてやるだけか」
ゆっくりと“風”がこっちに歩いてくる。

「おい、さっきの応用編だ」

「ん、どうするんだ？」

「とにかく、せーのでやるぞ」

「名前は？」

「「ボルケーノ回天炎呪”！」」

こんどは炎が周りに噴出した後、回転し始め朱い竜巻と化してま
たも守るような壁になった。

ただ、今回は守るだけの壁では無かった。

「おおおらああ!!!」

どんどん竜巻の描く炎が大きくなっていく。もちろん“有私鉄尖
”など役に立つわけも無い。

「これ、やばくね？」

「逃げるぞ！」

「ごめんなさい!!」

白道達三人は撤退する。

パパパと廢ビルの窓ガラスが広がる炎で割れる。

「なあ、二階なら飛び降りても大丈夫だよな」

「上昇気流は炎で作る。心配するな」

そしてバンツと解除して、二人は何のためらいも無く。
窓から飛び出した。

<1 t; 1 > t; 〉 “都市”、いたるところで異常発生。 〉 (4) (後書き

だから何だって言うんだ！。

<1 t; 1 > t; 〽 都市〽、いたるところで異常発生。〽 (5) (前書き

瞬間昼寝ざぶとんは22世紀の発明の中でも画期的なものだと思います。

5月1日月曜日、9..20 黒峰学園体育教官室。

「なんか胸騒ぎがする
そこには紅桜がいた。」

今は体育の授業も無く体育教官室でコーヒーを飲んでいた。

「どう胸騒ぎがするんですか？」

桜の独り言に答える声が。

教官室の戸をカラカラと開け、一人の女性が入ってきた。

彼女は国語科の梶原先生。

今年四月に入ってきた新任の先生のように、髪は腰までかかる黒い髪を一つに束ねていた。

目は二重で濁りは無く、服装は黒いレディーススーツだった。

「ん、梶原先生。いやいや、虫の知らせってやつですよ」

「虫の知らせですか……」

梶原先生は呟いた。

「当たってますね。」

梶原先生は桜に向かって言うと、カチャリと桜の後ろで音がした。
撃鉄を鳴らす音だった。

「どういふことですか？」

「振り向かないで！ 撃つわよ」
振り向こうとした桜を制する。

大体想像は出来た。

後頭部に拳銃が押し付けられている。

「いやいや、あなたが拳銃をつきつけてきたのはもうどうでもいい問題なんです」

過ぎたことはもう言わない。

過去は帰ってこないから過去なのだ。

「……？ 何が言いたいのか……？」

頭に？を浮かべている。

「どうして俺があなたが拳銃を抜いて撃鉄を起こして後頭部につきつけるまでのこのことに気がつかなかったのかってことです」

「は……？ あなた何を言っているの？」

まあ、常人にはそう取られるさ。

だが、俺は俺に自信がある。

自分のことは自分しか分からないというのなら、俺がこんなことに気がつかないはずがない。

まるで俺が入ってきた梶原先生に注意するなどでも思わされていた、いや惑わされているかのような……。

「自意識過剰にも程ってものがあるんじゃない？」

「確かに……、そう思われても仕方が無いな。だが、俺は気づけたはずだ」

「じゃあ、どうしてあなたは気づけなかったのかしら？」

そりゃ当然の質問だ。

ここで考えて欲しい。

別に考えなくてもすぐ分かるか。

ここはどこだ？

「才能……。人の注意を逸らすとか、そういう感じの才能があるんじゃないですか？」

「……、面白い話だけれど、そんなものを使える人がここにいないのかしら？」

「こんなことが出来たのは一人しかいません。それはあなただ……！」
でーん。

確実にそんな音がしたのだろう。

「し、証拠はあるの……！」

「それは、あなたまだ持っているんじゃないですか？　その上着の左ポケットに……！」

「なっ……！　……、ってもうこの茶番いいかしら？」

「そうだな、随分と梶原先生がノリのいい人ってのは分かった」
なかなかここまでボケ通せる人もいないよね。

しかも俺の後頭部に銃つきつけながら。

「そうね、確かにあなたの注意とかを逸らしたのは私の才能よ。でも、だから何？」

「だからねえ……。ところで、アンタは普通の梶原先生って言うんじゃないのなら一体誰で、俺に何の用なんだよ」

まだ、俺が狙われる理由はわからない。

だが、誰が狙ったのかは分かる。

「そうね、あなたも知っていると思うけれど、私は“統一された幸福な世界”の“恋”^{ラブ}って名乗らせてもらっているわね」

「コードネームってやつか。幹部クラスで間違いないか？」

「“創造主”様の側近が幹部というのなら」

そりゃ幹部だよ。

さて、どうやって逃げ出したもんか。

「どうやっても逃げ出せないと思うけど？」

「……。そういう人の心を読んだりするのがアンタの才能ってわけか」

それは非常に逃げづらいな。

“統一された幸福な世界” ってやつにも戦闘専門以外のやつがいるってことか。

もしここまでが“創造主”の配牌なら凄いな。

俺には肉弾戦で挑むよりも心理戦でってことかよ。

しかも俺は心とか読めないから心理戦もクソもないし、ましてや女を倒す趣味など無い。

何この防具と武器持たずにリオレウス狩りにいった感じ。

しかも自分で自分を裏切っているような考えをいつも持ちながら蹴りだけで勝ってってか？

本当に嫌なことだが、“創造主”ってやつ配牌だな。頭の良さがやばいっつってたし。

「私の才能は別に心を読むだけって訳じゃないわよ。さしずめこれは才能を使っていると自然に起こるものに近いだけだし。後残念だけれどこれは“創造主”の配牌よ」

きっちり心まで読みやがって。

「じゃ、諦めて手錠をかけられてもらおうかしら」

「手錠？」

流石にそういう束縛が趣味の女はちょっと……。

「勝手にマジ引きしないでよ!!」

あ、心読まれるんだった。

「これは“創造主”の命令よ。作戦名『ハッピーエンド』。今頃教室では生徒達が拘束されているわ」

「警察は何をしているんだ？」

「もう大体拘束済みね。夜中のうちに随分と計算された作戦なこと。」

さて、逃げるか。

「あなた何を言っているの？ いや思っているの？」
俺の心を読んで驚いている“恋”。
そしてさらに驚愕した顔をする。

「そんなこと、出来るはずが……」
「俺は出来る」

心を読まれるのならもう良いか。

動くぞ。

そう思い、座っていたローラー付きの椅子を後ろに押し出して“恋”に当てる。

きっとこれは想像できていたことだろうが、反応できなかったのには理由があるだろう。

それはきっと俺の次の行動に起因するんだろうな。

桜は何のためらいも無く。

窓ガラスを割って窓から飛び出した。

「ここは4階よ!？」
そんなことは分かってるさ。

2階とかなら飛び出しても死なないだろうが、ここは本気で死ぬ高さだしな。

もちろん俺も考えなしで飛んだわけじゃない。

壁にかかとを擦らせつつ落ちて速度を下げながら、自転車置き場（下にあった）のトタンにドスンと落ちる。

これは力技だ。

身体の丈夫さにかこつけた理論もクソもない。

ボタンとトタンを破りそうな勢い（実際そこはかなりくぼんだ）だったわけだが、

見事に着地した。

&1 t; 1 & g t;) “都市”、いたるところで異常発生。) (5) (後書き

どうしてテレビの方のドラえもんでは出ないんでしょうか。

話が作りにくいんでしょうか。

<1<> “都市”、いたるところで異常発生。> (6) (前書き

今日レンタルビデオ店で思わぬ発見をいたしましたっ!!

まさかって言うものが!!

<1> “都市”、いたるところで異常発生。> (6)

5月1日月曜日、9…45 とある場所。

「A地区、制圧完了。B地区、残り数人。C地区、制圧完了」

「そうか。一般人の拘束は順調だな。で、『円卓』の面子は？」

「零星の鳳凰院、一星の焰、四星の廻家、六星の等々力、七星の輝が残っております」

「結構……、というかそれはやばいな。よりにもよって実力派が残ったか……。10時を超えたらそっちを重点的にするか」

そこは大きなホールだった。

そして一人の少女と男が。

一人は言わずもがな“創造主”。

もう一人はパジャマのような白いワンピースを着ていて、腰までかかる長い金髪だった。

「後、赤井君と他の仲間達に、イレギュラーでもある紅桜もまだみたい……。です」

まるでその景色を見て、通信を聞いているかのように彼女は話す。

そんな彼女の目は赤く光っていた。

正確には全体が光っているわけではない。

黒目のところにロックオンのような絵があり、そこが光っていた。

「“創造主”様が気にしていた赤井太陽についても目下搜索中だそうですね」

やはりか。

あいつらが簡単につかまるはずは無いだろう。

赤井太陽、富士叶、富士祈。

白道はこちらの手中に収めたのだがな。

あの四人組め。

今は三人か。

「本当に面倒な事態だな……。というか、その口調はやっぱり直らないもんなんだな」

しかし、厄介なやつらばっかりが残った。

そして、彼女のこの口調はいつになっても慣れない。

別に彼女が気をつかっているわけではなく、才能を使っていると
きは嫌でもこうなるらしいが、結構きつい。

「そうそう、間之崎の“痛”^{ペイン}さんからの報告だと、あの生徒会長に
やられたそうだよ。襲撃を行った瞬間に校内放送でばらされたみた
い。それでも事態は収束に向かっているようだけどね」

少しは口調が普段の状態に戻ったようだ。

「あの高原衣か……」

要注意人物に入れておくべきだった。

食えない男とは思っていたのだが。

それで赤井達が逃げ出した、ということか。

「その生徒会長自体もまだ捕まってないみたい」

「まさしく状況は最悪……。だな」

要人を捕まえに行かせる人員はもっと増やせばよかったか……？

いや、これ以上は手が回らないか。

イレギュラーの紅桜の所に行った“恋”はあの才能だからな。

赤井達のところに行った“痛”も強さでは問題なかった。

廻家と焰のところに行った三人も十分な戦力だった。

そうか、“痛”が間之崎に手間取っていたからその後行く予定だ
った等々力が残っているのか。

あの男は強さ的に問題が無いが、倒されていないということにはそういう意味があるのか。

ああいうやつもほうっておくのは問題だからな。さっさとあまっている人員を行かせるか。

「あ、連絡が入りました。“yesterday”が仕事を終了させようです」

「“yesterday”か、あいつの担当は間之崎にも六星の等々力のところにも近いからな。よし、行かせるか。“花”^{フラワー}、伝えてくれ」

「分かった」

こともなげに彼女はそういうと電波でもキャッチしたかのように独り言を言い出した。

「“yesterday”さん。今から地図を送りますので“痛”さんが受け持つ予定だった六星さんのところへ行ってください。これは“創造主”の命令です」

「え、はい。そうです。何分くらいでしょうか？」

「了解です、10分ですね」

全部独り言だったが、まるで誰かと会話しているようだった。というか会話していたのだろうか。

「という訳で、10分で行けるそうです」

「OK。じゃあ問題ないな」

計画に支障はきたせない。

作戦はもう始まった。

リセットボタンはこの世にはない。

無論、この計画にも。

ゲームオーバーはこの世にはない。

無論、この作戦にも。

&l t; 1&g t;、 “都市”、いたるところで異常発生。、 (6) (後書き

非常に感動っ!!

<都市>、いたるところで異常発生。> (7)

5月1日月曜日、10…00 都市全域。

その日の“都市”は静かだった。

何故なら、人々が次々と黒服たちによって拘束され、数箇所に固めて集められ脅されていたからであって。

9…30ほどから第五地区で始まったこの騒ぎはまたたく間に都市全土に広がり、

9；50にはほぼ全員が捕まる状態へと陥ってしまった。

そして10；00。

みんなが集められているところには一台のモニターが。

そのモニターは10…00になったとたん電源が入った。

「皆さん、聞こえているでしょうか」

そのテレビに映っているのはとある男だった。

「我々は“統一された幸福な世界”と言います。そして私はそのボス、“創造主”」

全員がその演説を固唾を吞んで見る。

「この度は、都市を侵略させていただきまして」
……？」

全員がその言葉の意味が分からなくてポカンとなる。

今時こんなことを考える馬鹿などいない、それが普通だろう。

「侵略といっても、抵抗しない限りはこちらもあなた方に危害を加えるつもりはありません」

何食わぬ顔でそう言う。

そして普通の人々にとって圧倒的な正義を踏み潰すかのような一言を言う。

「分かってるかどうかわかりませんが、警察に電話しようとか考えるのは無意味ですよ？ 私たちは警察を掌握させてもらいましたから」

「……うわああ!!」

一人の男が声を上げた。

『きゃああああああああああ!!!!』

それと同時にほとんど全員が叫びだした。

ダムの決壊のように。

パンツ!

乾いた音でありながら、大きな音がそこに響いた。

「うるさい。黙れ」

そこにいた黒服の声。

手には拳銃。

その拳銃の先からは薄く煙が出ていた。

すると今まで騒いでいた人たちは急に静かになり、ガタガタと震えだし、そして小さな声で話すようになった。

“創造主”の言うとおりであったな……。

威嚇で撃った男は思う。

「もしうるさくなったりしたら、とりあえず何でもいいから大きな音をだして静かにうるさいと言ってみろ。面白いほど静かになるから。これは心理学的な話でね、大きな音は人を惹きつける力があるんだよ」

そう“創造主”は言っていた。

「では、要所要所で伝えますので
そこでテレビが切れた。」

都市はこの日、落ちた。

&l t; 1 & g t;) “都市”、いたるところで異常発生。) (7) (後書き

バトル展開ですっ!!

さてさて、赤井君達グループ、廻家グループ、桜の3グループが主流で話が進みそうですー。

&1 t; 2 & g t;) “都市”、大荒れに荒れる。) (1) (前書き)

二日間も休んでごめんなさい。

ところで昨日、『デュラララ!!』の9巻のあとがきを読んだんですけど、驚くべきことが!?

&1 t; 2 & g t;、 “都市”、大荒れに荒れる。ゝ (1)

9..36、間之崎学園学校裏。

「とりあえずよ、教室からの脱出は完了したけどこれからどうする？」

藤崎がそう言い出した。

「ここにずっといるってのは？」

「多分ー、ばれるー」

「もしあの放送が本当だったなら廊下に出ていた生徒が怪しいやつらとやらにどうなったのか……、気になるところじゃん」

「とりあえず、情報収集が先なのでは無いでしょうか？」

相馬が普通の提案をする。

「妥当ね」

「ま、じゃないとどうしようも出来ないものね」

女子二人も同意。

ということで情報収集開始。

「じゃあ、ここから出るか」

「そーっとねー」

公正なる考えの結果、俺が出ることになった。

「やっぱチヨキ最強じゃん！」

「チヨキ無敗伝説？」

「赤井、弱いわね。最初で一人負けするなんて」

うるせーやい。

ああそうだよ公正な考えの結果だよ!!
俺が一人だけパーだして負けたんだよ!!

「おいおい。結構な人数が居るじゃねえか……」
校舎横のところだった。

上には本館と別館をつなぐ渡り廊下があり、そこには黒い服を着、
機関銃を持った連中が四、五人いた。

すぐ頭を引っ込める。

「こりゃ放送は本気だったみたいだな……、そういえば梁山とかは
どうしてあんな放送を信じたんだ？」

「だから、あの高原衣じゃんよ？」

「誰なんだよ」

「生徒会長だよー」

「だから誰なんだよ!!」

「そうだ、生徒会長に会いに行こう!!」

「だから誰!!」

ここまで支持率の高い男というのも謎だ。

生徒会長、高原衣。

何者なんだ？

「多分あの人は今も生徒会室にいるじゃんよ」

「それではー、レッツゴー？」

「俺はまだ知らないんだが……」

結局俺はよくわからないまま一階の窓からもう一度学校に戻り、
生徒会室を目指すことになった。

「廻家さんのところに行ったほうが良かったんじゃないか？」

「私はある人よりは生徒会長のほうが信じられるわね」

紅はぼっさりと切る。

本当どんな人なんだろう、生徒会長。

生徒会室は二階にあるらしい。

そこへ向かう。

行き道には黒服も多数いたが、そこは何とかして。

生徒会室の前へ。

そして扉を開けようとドアノブを染山が握ったとき、急に染山が向こうにひっぱられた。

どうやら開ける瞬間に向こうから扉が開かれたようだ。

「ようこそ、我が城生徒会室へ。紫瀬達ご一行様」

向こうから開けたのであろう男がおちよくるようにそういった。

「会長、本当驚かすのだけは得意ですね……」

「驚かすのだけとか言うなよー」

珍しく染山の口癖が出ない。

敬語に近いものがあつた。

「こんにちは、皆さん」

「おやおや、随分と人気の店になったんやなあ。ここも」

「あらあら」

そこには扉を開けた男の他にも三人。一人はここ間之崎の制服を着た女子で、黒く長い髪が特徴。

次の人は少しふけたような老人？ 正直見ただけじゃ年齢がわからないような人だった。

最後の人はレディーススーツを着た綺麗な女性。眼鏡を掛けていて、すっと背の高い人だった。

この人、誰かに覚えが……。

そう思うような人だった。

誰かに……、似ている……？

辺りを見回しながらみんなゆっくりと入と、中は意外と広がった。

「ん？　そうかそうか。見えないし見慣れない子がいると思ったけど、君が噂の赤井君だね。“才能帰却”の」

会長と染山に言われた男が俺に話しかけてきた。

見えない？

目の前にいるじゃないか。

そしていつの間にか噂になってたんだ。

「えと……。あなたは……？」

「ああ俺ね。名前は高原衣、たかはらころも役職は生徒会長だ。あいにくながら副会長ちゃんと書記ちゃんと会計君に庶務っちはいないから戦隊物っぽくは出来ないけどね。生徒会戦隊マモリマセンジャー、みたいな」
守らないのかよ！！

と、まあよくわからないけど、この人がみんなの言ってた生徒会長でいいのか？

「って、え！？」

紅が驚いていた。

なんか最近よくありすぎて本当に凄い事態なのかどうかかわかんなくなってきたけど。

残念だな。

そう思ったが、俺以外のみんなも驚いていた。

ってことはなにか凄いことでもあったのか？

「なあ紅、どうしてそんなにみんな驚いてるんだ？」

「だってそりゃ、風紀委員長に校長先生、それに理事長さんまでいるのよ！？」

「そうなのか？」

そうだとしたら結構なトップがここに集っていることになるんだが。

だが、どうやらそれは本当らしい。

みんなも一様に驚いていたし。

「ん？　そこな少年、あんま驚いてないみたいやな？」

快活な声で聞いてくる年のわからない人が話しかけた。

「校長、赤井君は裏口的な入学でもありますし、私たちの顔を知らないんですよ」

美人の秘書みたいな人が補助説明をする。

ということはやっぱりこの年のわからない人が校長なのか。

「そやな、なら自己紹介させてもらうか。わしは間之崎龍次郎。ま、役職は校長じゃわい」

「私は富士祈。役職は理事長ね」

確かにこんな二人がいたらびっくりするよね。

さっきは悪かった。

しかし、富士って……？

「もしかして、理事長先生って？」

「そうよ。富士叶、あなたの担任の姉にあたるわね」

……どうりで。

さっきは誰かに似てると思ったら。

叶先生か。

なんかあの快活さを真面目にしたらああなりそうな気がしないでもない。

「ほらほら、姫ちゃんも自己紹介しないと」

「……ま、そうね」

高原が隣にいた制服の女子をせかす。

「私は姫岸鉄^{ひめぎしろうがね}。役職は風紀委員長ね」

その人は私のほうを向いて一礼した。

凜とした人だった。

凄いな。

確かにここに学校のとっぺんみたいな人たちが集まってるわ。

驚くほか無いな、残念だけど。

「さてさて、自己紹介も終了したし作戦会議でも始めるかい？」

&1 t; 2 & g t;) “都市”、大荒れに荒れる。) (1) (後書き)

なんと『ダンガンロンパ』についての記事があったんです!!
いやいや、私も好きだったんですよね!!

成田良悟さんもハマっているとは思いませんでした!!

&1 t; 2 & g t; 〽 “都市”、大荒れに荒れる。〽 (2) (前書き)

また二日も…。

でももう仕事も終わったので、しばらくは落ち着きそうです！。

さて、今日ニュースを見てて吹いた空耳のコーナーっ！！

帰省中の兄って言ってたんですけどね。

続きはあとがきで。

&1 t; 2 & g t;) “都市”、大荒れに荒れる。) (2)

作戦会議？

一体この会長さんは何を言い出したのだろう。

「こんな状況になっちゃったし、こうなりや俺達の手で“都市”を取り戻そう！！ みたいな」

“都市”を取り戻す……、とはどういうことでしょうか？」

相馬がさっきの言葉に違和感を覚える。

間之崎学園がこんな風に謎の連中（統一された幸福な世界）の進入を許したのならわかるけど……。

そこで嫌な予感がした。

虫の知らせにも近い。

「あーあー、そうだよねみんなは外の様子を知らないんだよね」

「外の様子、とはどういうことでしょうか」

みんな少し思い当たることでもあるかのような顔をする。

どうやら俺と同じような虫の知らせを感じているのだろう。

「現在“都市”ではこのことと同じようなことが起きた。一般人が謎の黒服集団に拘束されてる。丁度9…30くらいから始まって。このペースじゃ速ければ10…00には全員捕まるんじゃないのかな？」

「!?’、と全員が驚愕した。

ただ、紅だけは少しその度合いは薄かった。

俺も紅もいきなりの事態に驚いたとはいえ、想像出来ない事態じゃなかった。

特に、あの“統一された幸福な世界”なら。十分に有り得る話だ。

「しかし驚く話じゃん……」

「しんじー、られないー」

「それ死語臭くね？」

「バレンタイン……、監督……」

「久しぶりに聞いたなそれ」

「まったく、皆さんはなんだかんだ言っても普段とほとんど同じです
ね」

相馬の意見におもっきり賛成だな。

あれ、ちょっと待てよ？

「生徒会長さんはここから出たのか？」

まるでその状況を見たかのように言ってるけどさ。

「ん、出てないけどさ」

「じゃあどうやって知ったんですか？」

「確かにそうね」「あ、そうなるのか」「有り得ない……？」「ま
ったくだ」「謎というわけですか」

と俺の意見に篠崎、紅、天音、藤崎、相馬が乗った。

ただ、染山と十島は違っていた。

「そうかそうか。お前らは知らなかったんじゃない」「会長の才能な
んだよー」

才能？

「俺の才能は“オブサーバー観測者”。簡単に言うなら視点を變えることが出来
るかな」

「視点を變える？」

「あー、例えば虫かごってあるだろ。その虫かごを世界、まあ今回は
都市としてその中にいる虫が人間だとすると、俺はその虫かごを
持つてる子供に近い。つまり、俺は見ている視界を別の視点から見
れて、それが広範囲に出来る才能ってことだ」

……そりゃ凄いな。

情報収集にも使えそうだ。

「なるほど。これで放送の理由もわかりました」

悟ったかのように相馬が呟く。

放送といえば……。

“「あーあー、ヒトデの足は一本になるまで切られても再生するそうです…、ってこんな緊急暗号言ってもどうせ向こうには先生も居るんだからもう良いか？もう良いよね鉄ちゃん！緊急放送緊急放送！！学園内に謎の不審人物っていうか軍団が攻め込んできました！信じるも信じないもあなたしだいですが早急に逃げることをおすすめます！！」”

あれか。

「つまりあなたはその才能、“観測者”の力で謎の侵入者とやらを発見して放送室まで行ってそれを全校に伝えたわけですね」

「ご明察の通り。俺がこのことに気づいて、姫ちゃんと一緒に放送室までいったって訳だ」

「あれが無かったらわしも富士ちゃんも気づかへんかったもんな」

「あなたの才能には一目置いています」

校長と理事長もべた褒め。

ところで。

「どうして会長さんはヒトデの話なんてしたんだ？」

「ああ、あれね。あれは緊急の暗号信号だよ。先生方しか知らないんだけどね。とはいっても、向こうにも間之崎の先生がいたから意味なかったんだけど」

「そう、その先生って」

「まずい、ここに過ぎたかも」

赤井がその重要なことを聞こうとしたときに、急に会長さんは何

かを見たように焦った感じで言った。

いや、“観測者”の才能で見てるのか。

「ここは俺に任せて先に行け!!」

「率先して死亡フラグを立てた……」

そういつて会長さんがキラッと笑顔を俺達に向けると、会長さんは扉を勢いよく開けた。

「あの馬鹿は……。皆さんは衣が敵を惹きつけている間に反対側のほうから降りてください」

そういったのは姫岸さん。あんまりお近づきになれそうにはなさそうだ。

そう考えていると姫岸も出て行った。

「じゃ、富士ちゃんみんなの先導しといてーな。わいはこっちから出るけんよー。鳳凰院のところにでも行ってみるわ」

そういうと間之崎校長は窓を開けると。

バビューンと。

いやいやマジで。

飛んでいきました。

「ヒーローじゃん？」

「あーいや、ここきて一番才能使ってるなって今感じたわ……」
ジェット機みたいなように、スーパーマンのように、バビューンと。

あれ、さっきはバビューンだったか。

もうどっちでもいいや。

残ったのは富士祈先生と俺達。

「先生、あの二人だけで大丈夫なんでしょうか」

「あの二人なら時間稼ぎとか凄く得意でしょうし。心配しなくても大丈夫よ。それに、彼はこの学校の生徒会長、つまりトップよ。風紀委員長も学校を守るトップ。なめちゃあ行けないわよ」

富士先生は結構自信ありげに言う。

とにかく。

生徒会長と風紀委員長が時間を稼いでくれているようなので、俺達は戦いを始めるであろう二人を尻目に反対側へ。（どうやらまだ来ていないらしい。もうすぐ来るようだ）

そうして一階へ降りることになった。

本当にあの二人だけで武器を持つ黒服を追いとめられるのだろうか。

まだ信じられないけど。

&1 t; 2 & g t;) “都市”、大荒れに荒れる。) (2) (後書き)

寄生虫の兄って聞こえちゃって。

いやテレビでそんなこと言って良いの、とか思っちゃいました！。

自宅警備員の方々？

&1 t; 2 & g t;) “都市”、大荒れに荒れる。) (3) (前書き)

最近更新が遅れ気味ですね。

もうすぐ落ち着いて毎日更新出来そうです。

&1 t; 2 & g t; ~ “都市”、大荒れに荒れる。~ (3)

さて。

一階に下りた俺達はとりあえずこの学校から出ようとして、廊下を走った。

祈先生は廊下は走らないなんて野暮なことを言わないタイプで助かった。

そして少しして玄関へ。

そこは数人の黒服が居て、嚴重に見張られていた。

よく見ると、玄関の扉の向こう（扉にはガラスがついているのです。）にはたくさんの間之崎の生徒がしゃがみこんで居た。

さらによく見ると手首の辺りがキラキラと光っている。

どうやら黒服に手錠を掛けられて拘束されているようだった。

「これは……」

「この黒服達も十分凄い奴等ってことね」

「みんなー、大丈夫なのかなー」

「生け捕りになっていきますので大丈夫ではないでしょうか」

「これって、本当の事態じゃんね……」

「……、怖い……。」

「天音、心配すんなって!」

「天音君の気持ちもよく分かるわ……」

俺達八人はやはりこういうものを直で見ると結構衝撃で。

そんな中、

「ねえあそこ、よく見て」

祈先生が何かに気づいたようだ。

祈先生が指差した先には、一人の女性が。

というか。

「叶先生!!」

藤崎が声を上げる。

そこにいたのは叶先生だった。

ただ、他の生徒とは違っていて、服はかなりボロボロで破けている部分からは血が出ているところもあり、木にもたれかかるように座り込んでいた。

「実の妹があんな風にされて、おめおめとこの場から立ち去るなんて出来なくなったわね」

祈先生は、静かに闘志を燃やしていた。

「ここは先生に任せて、あなた達はここから逃げなさい」

「え、でもどうやって？」

気圧されながらも紅が聞く。

この気圧はまるで白道と相対したような感覚だった。

歴戦の猛者のような。

「そうね。私が玄関で敵のほとんどを惹きつけるから、あなた達は裏門の方から出なさい。時間のタイミングを失敗しないで。私が突っ込んだらすぐ行くのよ。私もそこまで時間を稼げるかどうか分からないし」

「で、でも……」

「いいから。これしか方法が無いと言っても過言では無いわ」

祈先生は少し焦っているように見えた。

いや、早く戦いたいかなのような。

「……、先生の言うことを信じましょう。我々にはその手しか無さそうです」

相馬が苦しく声をだした。

二度も人を見捨てるかのようなことをしてきていると辛いものがある。

「そうじゃん。俺達は何とかこの状況を打開しなければならんじゃん。捕まったみんなを解放して、よく分からない奴等を倒すっていうハッピーエンドのために」

染山がみんなを奮い立たせた。

「私は自ら死ぬようなセリフは吐かないわ。私は、死なない」
振り向かずに祈先生は玄関へ走っていった。

「何者だ!?!」「敵襲か!?!」「構えっ!」

黒服達が後ろの方で騒いでいる。

「さて、俺達もさっさと行くじゃん」

染山がそう言った。

「そうだな。先生の心意気は無駄にはし」

藤崎が答えようとして、その言葉が途中でぶつりと切れた。

「藤崎?」

俺が気になって後ろを振り返ると、藤崎と天音が揃って消えていた。

「おい皆、藤崎と天音が居ないぞ!?!」

「何!?!」

ここで全員が立ち止まって後ろを見る。

藤崎と天音は一番後ろに居た。

何が起きたのだろうか。

「このパターンは……」

「パニック映画みたいー」

「こういうときは思って無くてもそう言うなじゃん、十島!?!」

染山が十島の発言に怒る。

確かに士気を下げる今は言って欲しくないな。

「まったく、大変な事態になってまいり」
そこでまた言葉が切れた。
今度は相馬。

「まさか!？」

確かに今みんなが相馬を見てなかったけど!
どっきりでしたとかそういうオチで頼むぜ!!
そう思いながら声が止まったほうを向くと、

相馬が忽然と消えていた。

「みんな、篠崎も!!」

篠崎も、ここから居なくなっていた。

残りは染山、十島、紅、俺だ。

こうなってしまうえば、みんながみんなを見張るしかない。
とにかく、何が起きているのか判断するのが先だ。

「いやああ!!」

紅が耐え切れずにしゃがみこんで叫ぶ。

今そんな大きな声は出して欲しくないが、こんな状況では仕方ないと言わざるを得ないだろう。

「落ち着」「とにかく」

染山と十島は紅を氣遣う言葉を掛けようとしてくれていたのだろうか。

だが、そんな言葉が最後まで紡がれることは無く、染山と十島も。

消えてしまった。

みんながみんなを見張るように、と思った矢先にこれだ。

これは……、本気でやばい。

赤井がそう思っていると、俺の手が暖かくなった。見ると、紅が手を握っていた。

「よく分からないけど、私のことは守りなさいよ……」

紅が小さな声で呟く。

手は小刻みに震えていた。

もしかしたら、ずっとそうだったのかもしれない。

学校が謎の襲撃を受け。

生徒会長と風紀委員長は俺達のために盾となり。

先生ですら俺達のためにおとりをかけてでてくれて。

こんな状況、普通は震えてもおかしくない。

むしろ、平常心に近い、というより何かのイベントのように思っ

ていた染山達の方が異常っちゃ異常だ。

あいつらの場合はあえて気を紛らわそうとしていたのかも知れないけれど。

しかし、こんな風になった紅可愛いなー。

先ほどまで異常だ異常だといっていた赤井も、十分異常だと言われても仕方の無い状況だった。

「みんな、どこに行ったって言うのよ……」

<2> “都市”、大荒れに荒れる。 (3) (後書き)

これじゃあまるでパニック映画みたいですわね。
仲間がどんどん消えていくのな。

次号、解決！！

号？

&1 t; 2 & g t;) “都市”、大荒れに荒れる。) (4) (前書き)

さてさて。

パニック映画展開、解決編です！。

&1 t; 2 & g t; ~ “都市”、大荒れに荒れる。 ~ (4)

「まったく、何が起きてるって言うんだ……」

悪態をつかずには居られない。

これは本当に訳がわからないぞ……。

手を繋いでいる紅はいつの間にか立ち上がっていた。

嘆いてばかりはいられない、ということだろうか。

「困るんだよね。そんな風に手を繋がれるとき。こっちとしては飛ばせなくて」

いきなり、幼い声を出して前から140センチくらいの女の子が現れた。

唐突に。

突然に。

「あなたは!？」

紅が叫ぶように言う。

それもそのはず。

彼女は全体的に黒い服を身にまとっていたから。

「誰って聞かれると“痛”^{ペイン}様の部下って言えば良いのか、“統一された幸福な世界”っていえば良いのか、それとも本名を言った方が良いのか、迷っちゃうんだけど。どれがあなたのためにはいいのかな、紅さん」

「どれでもいいわ!」

どちらにしろ、この女の子は敵、ということになるのだろう。

“痛”^{ペイン}という言葉は気になったが。

「どっちでもいいなんて考えはわたし良くないと思うんだけど」

「そんなことはいいの！！　それより、あなたがこんなことをしているの？」

そうだ。

比喩ではなく影も音もなく現れた彼女。

黒服、というのならなにか才能があるのだろうか。

「こんなことって答えが先輩達を別々のところへ飛ばしているということなら、そうだね」

どうやらややこしい言い方をする女の子だが。

俺達がパニック映画的な展開になっているのは、彼女のせいだよだ。

彼女は続ける。

「私の才能は超能力、才能の中でもとても有名な能力、“瞬間移動”！」

でーん。

そんな効果音がつくかのようにその女の子は言った。

確かに、才能だ才能だと言ってたけれどテレポートなんていかにもな能力まだ見てなかったな。

後は“心通”も見えないな。よく聞くのに。

「瞬間移動」ですって！？」

紅はすっごく驚いていた。

「どうしてそんなに驚いているんだ？」

「かなり希少な才能よ……」

紅は神妙に言う。

「でも、よく聞くぜ？」

「確かにそうね。でも、実はこの才能はすごく発現率が低い。空間を無理やり移動するなんて力だから。間之崎でさえも瞬間移動才能」

能者は十数人くらいって聞くわ」

「そうなのか」

それは意外だった。

どうりで一度も見かけないわけだ。

「ちなみに私もこの学校の生徒なんだよ？」

「嘘！？」「マジで！？」

それは驚いた。

この小ささだから初等科か中等科だろうか。

「ちなみに一口に“瞬間移動”^{テレポート}って言っても色々あるんだよ。私は自分と手に触れているものを移動させられるの。その才能を使ってみんなを飛ばしたんだけど。私はこんな才能だから色々な人にこき使われて大変で大変で」

「なるほど、それで二人ずつ消えていったわけか。それに気づかず俺達はここまで戦力の分散をさせてしまったわけだ、残念な話。いつから俺達がこの辺にいてるって気づいてたんだ？」

これでみんなが消えた謎も完璧に納得だ。

この女の子が二人ずつばらばらに別の場所へと飛ばしたのだろう。「君達が一階に下りてきてからだね。最初に気づいたのは“痛”^{ペイン}様それから“痛”様が連絡を入れてどうするかを聞いた上でこの作戦を執行了たって所。さて、紅さんも本来飛ばすはずだったけど、どういう風に手を繋がれてるとどうしようも出来ないし」

そうか、俺がこうやって手を繋いでるから。

“才能帰却”^{スキルキャンセラー}が効いているからこそ、彼女は出てきたと言うわけか。

“瞬間移動”^{テレポート}は俺が触れていたら発動できないから。

「なあ、さっきから言ってる“痛”^{ペイン}様ってのは何者なんだよ」
凄く上の人っぽそう。

「^{ペイン}痛”様？ みんながよく知ってる人だけど？」

みんながよく知ってる人？

「ほら、先輩方の後ろにいるじゃないですか。^{ペイン}“痛”様」

赤井と紅は前の女の子に言われて振り返る。

「嘘だろ……！？」 「本当に……！？」

後ろには黒い服を着た人影。

赤井と紅がその正体を見た瞬間二人は首筋に衝撃が走ったかと思うと、ぐらりと倒れこんだ。

そして、意識を失った。

&1 t; 2 & g t;) “都市”、大荒れに荒れる。) (4) (後書き)

一体振り返った先の黒服の正体とは! ?

&1 t; 2 & g t;) “都市”、大荒れに荒れる。) (5) (前書き)

今回は置いてきた人たちの話を。

&1 t; 2 & g t; ~ “都市”、大荒れに荒れる。~ (5)

9..45、間之崎学園二階廊下。

「別に姬ちゃんまで残らなくても良かったんだよ？ 危ないし」

「アンタが馬鹿で危なっかしいから私も残ったんでしようが」

そこでは二人の男女が道を塞ぐように立っていた。

生徒会長高原衣に風紀委員長姫岸鉄。

間之崎をよく知るものなら必ず知っているビッグネームの二人だった。

「俺は姬ちゃんには生きていて欲しいから、みんなと一緒に逃げて欲しかったんだけどね？」

「私は衣が助かって欲しいからここにいるのよ」

「随分と嬉しいこと言ってくれるね。さて、こんなノロケ全開の状況に水を差さないでほしいね」

最後の言葉はまるで何かを見ているかのように呟いた。

その言葉が出て数秒後。

駆け込むかのように3人の黒服が階段から二人のいる廊下へと出てきた。

そして、無骨な機関銃を二人に構える。

「手をあげて投降しろ。無駄な抵抗はしないほうが良いぞ」

3人の真ん中にいた男が二人に向けて話しかけてきた。

「姬ちゃん、ここはさっさと捕まった方が得策かもよ？」

高原は手を挙げ、一歩前に出て振り返って姫岸にそう言った。

その高原の目は、ウインクをしていた。

「抵抗とかなければ穏便に捕まえてくれるだけで済むですよね？」

「無駄な殺生は避けるように言われている。心配はするな、この手錠を掛けてもらうだけだ」

高原の問いに静かに答える黒服は、言いながら手錠をこっちに見せた。

見た目は銀色をした普通の手錠だった。

高原は一步、また一步と歩を進める。

いつの間にか間合いはほとんど無くなっていた。

姫岸も手をあげて高原に近づく。

「これが才能を封じる手錠ってやつですね」

「……、何故知っている？」

黒服がいぶかしむような顔をする。

「そりゃあ、外の様子を見てたから」

「外？」

先ほど捕まっていた間之崎の生徒を見ていたのだろうか。

しかし、それだけでわかるものか？

黒服はそう考えていた。

それが、黒服の油断だったのかもしれない。

ただの生徒と侮った。

「僥倖だ」
うまい

高原はそう言うのと、目の前で喋っていた黒服の後頭部を両手でがっつりと掴むと、ジャンプするように飛んで膝蹴りを顔面に喰らわせた。

ガスッと。

その黒服は後ろに仰け反る。

「手前！」 「何しやがってんだ！！」

両端の黒服がこっちに機関銃を向ける。

瞬間、姫岸が高原と同じ場所まで間合いを詰め両方の機関銃の銃身を両拳で打ち上げた。

高原に気を取られていた黒服はこのことに気づけず、銃の向きが一瞬上を向く。

その間に高原は右の、姫岸は左の黒服の鳩尾に拳を叩き込んだ。思わぬ衝撃に機関銃を取りこぼした。

「どんな強者にも心の隙がある」

黒服が取りこぼした機関銃を拾い、一つを自分で持ち、一つを姫岸に渡した。

「それが何かはわからないが」

それを倒れこんでいる黒服へと向ける。

その間にさっき黒服がちらつかせていた手錠を姫岸が3人に付けていく。

「それを突くのがこの才能、オフサーバー“観察者”だ」

「衣、語りすぎよ」

「ん、そうだね。悪かった」

姫岸に注意された後、とりあえず手錠をつけた黒服を生徒会室に入れ、生徒会室の扉の前に開いた教室の机とかを持ってきてバリケードにした。

これで生徒会室からは出られないはずだ。

そうして生徒会長と風紀委員長は行動を開始した。

9..52、間之崎学園玄関。

「さてと」

そう自分に言い聞かせるように。

富士祈は自分の役割を果たしに、そして妹の復讐もかねて決戦場へ向かった。

まずは玄関の黒服共を一蹴しないと。

そう思い立ち、祈はばらばらに配置されている黒服の内の一人に目をつけると行動を開始した。

「な、何だお前！」

「す、すいません！ 抵抗はしませんから殺さないでくださいっ！」

心底おびえたような声を出す。

「ああ。それくらい怯えてくれると悪の組織もやりがいがあるってもの……、おい弥彦、手錠持ってるだろ？」

「はい、これですね」

そう弥彦と呼ばれた黒服が手錠を祈の目の前の黒服へと投げる。それを確認すると祈は手錠に向けて一気に走り出し、手錠を取った。

「！？」と黒服が驚くよりも早く祈はその手錠を目の前の黒服にかけ、弥彦と呼ばれた黒服へと駆け寄った。

黒服へ両手を腹部へと突き出す不思議な攻撃で退かせると、その手に手錠を掛けた。

その手錠は両手を突き出したときにかすめていたものだ。

そして後ろにいた三人目の黒服に胸ポケットから取り出したボールペンを投げた。

それは直線の軌道を描くと顔面に当たりひるませた。

次に今度はその黒服へと両手を腹部へ突き出す不思議な攻撃をして、退かせる。

そこで退いた黒服の手を引っ張り手錠を掛けさせた。

ここまでで計三人の黒服を撃破した。

そして玄関を大きな音で蹴破る。

「誰だ!？」

一気に黒服の注目が集まった。

「通りすがりのただの理事長ですけど何か？」

数分後。

見事に自分達の用意してきた手錠に掛けられてしまった黒服がその辺に固まっていた。

「叶、ここにいたら増援がすぐに来るわ。急いでここを離れるわよ。動ける？」

「うん……。大丈夫……」

大丈夫というものの、叶の声は弱弱しかった。

とりあえずさっき黒服から奪った鍵を使って錠を外す。

まだ生徒達は解放するわけには行かない。

黒服も多く残っているこの状況で下手に動かれるのも困るからだ。そうして鍵を開けると、声がした。

「あーあー、ここまでやられちゃって。みんな意外と弱いんだな。それとも、あなたの才能ですか？」

その男は黒い服を着ており。

頭の上の方にふわふわと紅を浮かせ、腰の方に赤井を抱え込んでいた。

「……あなたが裏切り者、と言うわけですか」
析は静かに返す。

「いやいや、あなたには言われたくないな。もちろん妹さんにも。かなりの身体能力を持ち、かなりの才能を持つてるのに」

「うるさいわね。くだい男は嫌いよ？」

「そんなこと言わないでくださいよ理事長さん。あなたみたいな美人には言われたくない」

その男はおどけたような仕草をする。

「この裏切り者が、桜島!!」

「別に裏切ったわけじゃないですよ？ 最初から私は“統一された幸福な世界”、この事態を起こしている悪の組織の幹部だったんですから。いや、この口調もなれないわな。この制服来てるとなんかしゃんとしてな」

そう言って首下を緩める桜島先生。

「お姉ちゃん、気をつけて……。桜島先生の才能は本当に、異常……」

「私が負けるわけ無い。私の才能を知ってるでしょう？」
得意げな顔をする。

「それでも桜島先生、いや、桜島の才能は強すぎる……。チートよあんな才能……」

叶は最後まで心配していた。

&1 t; 2 & g t;) “都市”、大荒れに荒れる。) (5) (後書き)

さて、明かされましたね裏切り者の正体。

ここからどうなって行くのでしょうか！。

&1 t; 2 & g t;) “都市”、大荒れに荒れる。) (6) (前書き)

ようやく落ち着いて小説を書き溜められました。
しばらくは毎日更新できそうです！。

&1 t; 2 & g t; ~ “都市”、大荒れに荒れる。~ (6)

9..25、廃ビル外。

赤井達が生徒会室に向かった11分前のこと。

窓から飛び降りた後、廻家と焰は一気に走り出した。
何故か。

「俺達も飛び降りるぜえ！」

「ごご、ごめんなさい！」

「ふんっ!!」

白道、“D B Y”、“風”も窓から飛び降りようとしていた。

白道は胸元のポケットから黒い布、マントのようなものを取り出して下に落とすと、それが途中でピキンと止まり、そこを足場として。

“D B Y”は2階の窓から鉛色の金属（多分鉄）を斜面のように出して滑り降りて。

“風”は白らの臂力とテクニックで。

そうしてそれぞれ違う方法で降りてきた。

「やばいやばい。どうするよ！」

「まずは二手に分かれるぞ。やつらの戦力を分散させた方がいい」

「じゃあ合流場所はどこにする!？」

「ふむ。赤井君たちもいるだろうから、間之崎学園で」

「了解!!」

そこで廻家と焰は廃ビルの敷地から道へと出た。

廻家は右へ。焰は左へ。

「分かれたねえ。どうするよお？」

「ふわっ。どうでしょう」

「なら、俺と“DBY”は廻家を。“today”は焰を追え」
三人が降り立った後、“風”がリーダーシップを発揮した。

「ちょっと待ってくれよお。俺が『円卓』の七星を相手に一人で戦えってかあ？」

そこで異論を言ったのは白道。

「お前の才能は時間止めに向いているし、俺はお前をかなり信頼している。お前なら倒すことも出来るかも知れんしな」

「……、そこまで言われたらしゃあないなあ」

そこまで言って、白道は焰の行った左へ。

“DBY”と“風”は廻家の行った右へ。

「おいおい焰さんよお。そりゃ無いんじゃないのお！」

白道が左に曲がった先では。

焰が足と手から炎を出してかなりの速度で飛んでいた。
まるでジェットがついたかのように。

「流石は発現系メイカーの才能、発炎能力を極めた男かよ……、
炎イフ”。あまり才能は使いたくないんだが……、“白眼視ホワイトアイズ”！！」

そう白道が言った瞬間、焰の動きが止まった。

一時停止を押したかのように。

「これで地道に追いついて見るかあ」

「ちょ、あの人の動き方、変すぎませんか！！」

「これが情報に聞いていた廻家の才能か……」

“DBY”、“風”が右に向かった先では。

廻家が後ろ、つまり“DBY”、“風”と面で向かい合わせになりながら走っていた。

いや、走ってなどいない。

足が地面についたまま全く動かさずに、まるで横スクロールのよう
うに移動していた。

「あ、あの……」

「スピンアウト巡る輪廻」、すべての物体に回転力を与える才能。大方靴の底
にでもボールかなんか仕込んで回転させているんだろう」

「ハハハハハー！！ 追いつけるかなー！」
廻家はかなり調子に乗っていた。

「ふむ。追いつこう」

その安い挑発に乗るかのように“風”の身体がグツと伸びた。
実際は伸びてはいない。が、その加速力と歩法によって伸びたよ
うに錯覚させられた。

「縮地かよ！」

「俺の場合はYーダッシュだ」

「スーファミ版！？」

意外に“風”はボケてくれる人で。
Bーダッシュじゃないところが上手い。
とか考えてる場合じゃなく。

追いつかれ、先へと回りこまれてしまった。
前には“風”、後ろには“DBY”。逃げられない状況だ。

「戦闘開始って所かよ……」

&1 t; 2 & g t;) “都市”、大荒れに荒れる。) (6) (後書き)

七星の二人の才能もわかってバトル展開が続いておりますっ!!

&1 t; 2 & g t;、 “都市”、大荒れに荒れる。、 (7)

9..40、黒峰学園

颯爽とは言いがたく降りた桜は、あるところへと向かっていた。

「間之崎ってこっちの方だったかな……」

桜は降りた後急いで黒峰学園から出ると、間之崎学園へと向かっていた。

走る。

疾る。

駆ける。

翔ける。

途中で黒服の姿を何度も見かけた。

どうやら一般人が拘束され始めているそうだ。

無論、俺がこんな奴等に拘束されるわけも無いが。

そうして向かっていた。

そうして十分程が経った後。

間之崎学園まで後500mという看板が出たところで、あるものを発見した。

瓦礫。

10cmほどの大きなコンクリート塊が地面に落ちていた。

そこでふと右を見ると、とある大きめな家の垣根が丸く大きな穴を開けていて、何かに壊されていたようだった。

その大きな穴は家の中まで続いている、中の様子がわかった。

中は電気がついておらず薄暗くなっていたが、すぐく大柄な人影が見えた。

その人影はゆっくりとこちらに向かってきた。のそりのそりと。

その人影が家から出てきて、日の光を浴びる。

「仕事完了と……。ん、なんじゃお主。どうして拘束されておらんのじゃ？」

それは身長2mを越すかのような大男で、肩幅も広くガタイのいい体だった。

そして大きな特徴をあげるともう一つ。

大きな身体には似合わないような黒いスーツだった。

「ん、ようけ見たらどっかで見たような顔やなあ……」

その大男は手を口元に添えて考えている。

「おい、その手……!!」

流石に驚いた。

その口元に持ってきた手は、紅く染まっていた。

「おお、そうじゃそうじゃ。お前、イレギュラーとか言っておった紅桜じゃな？　っと、どうしてそんなに驚いておるんじゃ？」

「何やらかしたんだよ、その手。それ、血だろ」

桜はその手を指差して言う。

「ああ、そうじゃな。じゃけど、こりゃあ返り血じゃ。ワイの血じゃ無い」

「そういうことを言ってるんじゃねえ!!　手前、それは……、誰かを殴ってきたってことじゃねえか」

「ん？　それがなんかアンタに問題でもあるんか？　あ、ちよっと待ってくれ」

そこまで言うと、胸元から無線のようなものを取り出した。

「あー、もしもし。『クリエイター創造主』かのお。今わいの目の前に紅桜がおるんじゃが、どうしたら良いかのお」

電話をしているようだ。相手は“創造主”らしい。

「おう。了解じゃあ」

何かを了解したようだ。

「どうやら倒せとの命令じゃから、アンタを倒させてもらうかいの」
「ふざけんなよ……」

<3> “都市”、いたるところで戦闘開始。> (0) (前書き)

この話はグロ表現が出てくるので駄目だ、と言う人は注意してください。

注意しか出来ませんが。

さて、行動でも開始するか。

まずは“花”^{フラワー}の音声受信機つきカメラが邪魔なんだよな。

ま、それは何とかなるかな。

さて、この作戦『ハッピーエンド』をかき乱すときがやってきたわけだ。

それを“創造主”が知っている人間の方でやるべきなのか、謎の敵とするか。

結局まだ決めていなかったな。

とりあえず、“創造主”の仲間としての俺は死ぬわけなんだがな。

10・10、とある場所。

「“創造主”、“tomorrow”から緊急入電が入っています！
至急応援を頼むと！！」

「それはどういう意味だ！？あの“tomorrow”がそう簡単に助けを求めてくるとは思えないぞ！！映像は出せるか！？」

そこは“創造主”の本拠地でもある大きなホールだった。

そこで“花”^{フラワー}と“創造主”が話し合っていた。

「カメラの映像が何故か真っ赤で見えません！音声のみの通信となります！！」

「それでもかまわない！！早く出してくれ！！」

緊急入電ということは、どうやら“tomorrow”が危機に陥っているようだ。

そこで、ホールにあった大きなモニターが真っ赤に光り、向こうから“tomorrow”の悲痛な声が聞こえてきた。

「“創造主”！！何なんだよあいつはよ！！俺は聞いて無いっ

ての!!」

「どうした、何があった!!」

向こうの方では何か大変なことが起きているようだ。

「ああ、なんか……っってもう来やがった!! 至急救援を頼む!!」

な、何だお前!!」

「おいっ!! どうした!!」

「うわっやめ」

ザーザー。

そこで音声が途切れた。

「^{フラワー}花”、今までの“tomorrow”の場所を映した映像を出

せ!!」

「了解です!!」

“^{フラワー}花”がそう叫ぶと、大きなモニターに映像が映された。

10..05、とある某所。

「おい、そこのお前。止まれ。」

“tomorrow”と離れている黒服が何者かを発見した。

ここは“創造主”の放送終了後の一般人拘束集落地。

今でも色々な人々が手錠に拘束されている。

そこで、こちらに向かってくる人影を大きな円の外側にいた黒服が発見したのだ。

その男は無言でこちらに迫ってくる。

「おい!! それ以上近づけば撃つぞ!!」

黒服は銃を相手に向けて構えながら威嚇する。

その人影はその瞬間銃を構えた黒服の目の前まで現れると、

ボトリ。

その人影が黒服の首に綺麗に線ができたように見えたかと思うと、黒服の首が落ちた。

そして首からは噴水のように血が噴き出した。きやああああ、と周りの一般人が叫ぶ。

「なっ！ 手前何しやがってるんだよ！！」

“tomorrow”が前面に出る。

そのせいで映像の一部が隠れ、肝心の近づいてきた人影の顔は見えなくなった。

周りの黒服たちもその男に銃を向けて撃とうとした。

だが、人影はまたも無言で銃を向けた黒服の一人に近づくと、今度はその黒服の右手首がスパンと後ろに飛んだ。

そこで人影の動きは止まらず、右手首が飛んだことに恐れおののいている黒服の残った右腕を掴むと、“tomorrow”のいる方である円の中心へと放り投げた。

黒服の右手首から出る吹き荒れた血のせいでカメラが汚れ、全く映像が見えなくなってしまった。

「これが一部始終だと！？ 訳が分からん！！ とにかくこの場
人を向かわせる！！ 近いのは誰だ！！」

非常に“創造主”もこの事態には焦っていた。
本当にこの事態は謎だ。

いきなり俺達に向かって切り裂いてくるような殺人狂は調べたところ
いなかったはずだ。

「DAT」と“月”のチームです！！」

「じゃあその二人にカメラを持たせて急ぎその場に向かうよう伝えてくれ！！」

「わかりました。…… DAT”さん、“月”さん、今すぐ“to

morrow”さんが管轄だったポイントDへと向かってください
！！これは“創造主”の勅令です！　どんな命令よりも優先して
ください！！」

“花”は何かと通信するように会話した。

「一体何が起きてるって言うんだ……？　なんだこの嫌な予感ほ。」
“創造主”は本当に抱えこんだ。

10..32、ポイントD。

「何、これ、何がおきたって言うの！！」
「血……。」

そこは血溜まりという表現しか思いつかないような惨状になっていた。

そこにいた人々、黒服がまとめて切り刻まれていて、あたり一面が
血の海、血溜まりと化している。

血肉のにおいが辺りに漂い、体が震え上がるような気色の悪い臭い
がした。

果たしてこれは人間技なのだろうか。

人とは思えないやり口だった。

「おえっ。」

“月”は思わずその場で吐いてしまった。

「これが、惨劇と言うわけか。」
その映像を見ていた“創造主”は、苦い顔をした。

「……気持ち悪いです“創造主”、トイレに行きたいです。」

「ああ。そうだ“花”、俺も言っておくことがある。」

「どうしたんですか“創造主”？」

“創造主”はそこで怒りを顕にして、見えないとある敵に宣戦布告するように言った。

「高みの見物とは言えなくなった。俺も出る。」

&l t.; 3 & g t.;) “都市”、いたるところで戦闘開始。) (0) (後書き

この話は伏線と言うか。
謎ってやつなのです！。

&1 t; 3 & g t;) “都市”、いたるところで戦闘開始。) (1) (前書き

前回のかなりグロいと思われるような回からうってかわって今回は大丈夫です！。

10..14、都市Dブロック。

「くそっ!! こりゃ結構まずい状況だぞ。」

「……そうだね……。戦力の分散は今最も避けたい事態だから……。」

“瞬間移動”によって飛ばされた藤崎と天音は、とりあえず開きっぱなしになっていたビルの中に入ることにした。

この辺りはひどい惨状で、窓ガラスは割れ多少の血痕も見取れた。

「さてさて、ちよいと邪魔させてもらう訳だけでも。」

そんな二人が隠れているビルの中に入ってくる人影が。

「ふむふむ。三階か。どれ、ちよいと飛んでみるか。」

その人影は、藤崎たちがとりあえず隠れていた三階をずばりと言い当てると、その場から消えた。

「よっ。」

「のわっ!!」「えっ……。」

その人影は一階から消えたと思うと、藤崎達の目の前に現れた。

「さあ、^{バッドエンド}絶望を与えにきたぜ。」

10..35、都市Eブロック。

「“瞬間移動”とは、恐れ入りました。」

「敵に敬服してどうするのよ……。」

“瞬間移動”によって飛ばされた相馬と篠崎は、そんな会話を交わ

しながら隠れる場所を探していた。

「黒い喪服の人たちが来ても困るので、とにかく隠れる場所を探さないといけませんね。」

「その会話三回目よ……。」

篠崎はげんなりしていた。

この辺りはビル郡が多くあるのだが、どれもこれも鍵が閉まっていた。

高原の話では人が捕まっているそうなのでビルは入れそうなものなのだが、何故かこの辺りのビルだけは全部にロックがかかっていた。「この近くは確か政府要人とかが住んでたり重要な会議をするところだから、人がいなくても全部にロックがかかって当たり前、って訳ね……。」

篠崎は絶望的な声を上げた。

そう、この辺りは政府要人等が会議を行ったり、また住んでいる所でもあり、無人でも十分ロックがかかっている。

そして惨劇のようなことも起こっていなかった。

だから窓ガラスが割れているという風な世紀末的なことも起こっていなかった。

ふと時計を見ると、飛ばされてから30分以上が経過していた。

「ユメもキボーもあったもんじゃないわ。」

「そんなボケをかませられるくらいならまだ大丈夫ですよ。」

そんななか、目の前のあるビルから男が出てきた。

その男は顔こそ平然としていたが、身体中から滲み出るかのような怒気、殺気がこちらをおののかせた。

普通じゃない。

この男は普通じゃない。

そう二人は思った。

「どうして人がまだ街中にいるのだ？ ああ、赤井達の少年達か。ばらけさせていたが、ここには来ていないようだったな。まったく先ほどのことで本当に心乱されていたということか。いや、あの時はまだこんなことは起こっていなかったから、これは自分への言い訳か。」

その男は随分と饒舌に喋る男だった。

「とりあえず、捕まえておくか。」

その男は黒い服をビシッと決めると、こちらを向いて宣戦布告をしてきた。

10・15、都市Cブロック。

「紫瀬ー、僕にもカロリーメイト頂戴ー。」

「嫌じゃん。俺だって才能使ったんだから、腹減ったじゃん。」

“瞬間移動”によって飛ばされた染山と十島は、染山がもぐもぐとカロリーメイトフルーツ味（税込125円）を食べながらというなるとも間抜けな感じで隠れる場所を探していた。

「携帯も圏外モードー、連絡取れなきゃどうしようもないねー。」

「ま、おちつけてことじゃん。」

二人は非常にまったりとしながら街中を歩いていた。

「しかし、こう人もいないとこういう街中は不気味だな。」

「本当だねー。」

二人はいまだ誰にも気づかれること無く、本当に平和に歩を進めていた。

&1 t.;3>t.;、 “都市”、いたるところで戦闘開始。、 (1) (後書き

さあ、戦闘を始めようっ！ ですっ！

&1 t.;3>t.;、 “都市”、いたるところで戦闘開始。、 (2) (前書き

今回は藤崎と天音にスポットが当たっております。

「バッドエンド？ 何言ってるんだお前。」

目の前にいきなり現れた黒服の男に対して、不信感を露わにする藤崎。

「そう。バッドエンドだ。まだ赤井に手を出すわけにはいかないが、その仲間達なら良いだろうからな。」

「お前、赤井のことを知ってるのか？」

「そんなことか。奴は俺の復讐相手だ。」

その黒服はそこだけ明らかな怒りを示していた。

何かあったのだろうか。

「じゃ、お前の才能が何かは知らないが、殺らせてもらうぜ？」

「恐ろしい奴だな……っておい！！」

藤崎が相手の黒服の物騒な発言に突っ込んでいる間に黒服はこっちに向かって走って来た。

右手を突き出してくる。

その右手はキラリと光った気がした。

「あぶねっ！」

藤崎はその鋭い突きを胸ポケットから取り出したある物で防いだ。

キンツと堅く金属同士が当たりあうような音がした。

「どうして俺の“鉄の鋭き刃”^{メタルコーティング}がそんなもので防がれちゃってるのかな？」

「あんたの才能にも驚きだよ。二重の才能なのか？^{デュアルスキル} ここまで来るのには“瞬間移動”^{デュアルスキル} っぽいのに、メタルコーティングってなんだよ。」

疑問に疑問を返す。

「よし、落ち着け。俺は別に二重の才能って訳じゃあない。“鉄の^{メタル}コーティング

鋭き刃”は俺の身体に鋭い刃をつける能力だ。じゃあ俺の質問だ。どうしてそんなもので防げる？」

その黒服が一旦下がり手を広げて落ち着くように言った。

そして鋭い突きを防いだそのある物を指差す。

そこにあつたのは白い、

「こいつのことか？ そりゃあ俺の才能の成せる技な訳だが。」
白いそれをピラピラと振る。

それは紙だった。

「どういうことだ？」

いぶかしんだ顔をする。

「俺の才能は“グレードアップ値上昇”。物体に長所を付与する才能だ。今のはこの紙に堅さという長所を付与したわけだ。」

藤崎はすごくいい顔でそう言った。

「紙の何が凄いつてその薄さと軽さだ。しかし残念なことに硬度が無い。そこでこの才能で堅さを身に付けてやれば、日本刀も真っ青の鋭い刃の出来上がり。驚きの攻撃力と防御力を兼ね備えた武器となるわけだ。」

と、得意げに説明した。

「面白そうな才能だな。支配したくなる。」

「何の話だ？」

「別に。」

その黒服が何か呟いた気がした。

「……僕も、手伝うっ!!」

藤崎の後ろで天音が叫ぶ。

そこでバリバリという破裂音が聞こえてきた。

「藤崎、しゃがんで!!」

「おまつ、使う気かよ!!」

藤崎はその理由を知っているのか、ツツコミながらしゃがんだ。

「ああ、なんだよ。」

黒服は訳もわからず呆ほうけていた。

「“指電”!!」

そう天音が叫ぶと、天音の指から電気が飛び出した。

それはまるで横に飛んでいる雷のようにピカッと光りドンツと音を出し、

「がっ!!」

黒服に直撃した。

「……どう、かな……。」

「やりすぎのような気がしなくも無いけどな。まあ、お前が手加減したんなら死んでるってことは無いだろ。とりあえず、こいつが気絶している間に」

「気絶している間に、なんだよ。」

「!?!」

二人が落ち着いて話していた間に、黒服が立ち上がり会話に入ってきた。

「つたく、エレクトリックメイカー“発電能力”かよ。面倒くさいな。」

黒服はぽりぽりと頭を搔く。

「……驚いた。流石にここまで短時間で起きるなんて……。」

「おいおい。有り得ないだろ……。」

ドン引きだ。

「ほらほら、俺ってよく昔ジークフリートって呼ばれてたからさ。身体が丈夫でな。」

「ぜってー嘘だろ。ってか丈夫とかで済む問題じゃないと思うんだが。」

ちなみにジークフリートは北欧の伝説上の英雄で悪竜を倒した後返り血を浴びて不死身になった男です。

「さて、なあなあになっちまったが仕切りなおしと行こう、か!!」
「またも突進してきた。」

藤崎は両手に紙を装備し、天音は体中に電気をバリバリと張り巡らせて構える。

「能力付与。“硬化”。」「エレクトリシティ……。」

ガキイン!!

藤崎と黒服が激突する。

しゅとう かみそり
手刀対紙剃。

カンッ、カンッと小気味いい男が続く。

……小気味いい音が続く。

天音は二人が肉薄しすぎていて電気を放てない状況だった。

そんなバランスが崩れたのはすぐのことだった。

「こいつは固くしただけで元はただの紙。つまりはこうすればいいんだろ!!」

黒服がそう叫ぶと、手のひらから急に炎が出てきて紙を焼いた。

「熱っっ!!」

思わず手をぶんぶんと振る藤崎。

そこに黒服の攻撃が!!

天音は思わず息を呑んだ。

先ほどの“鉄の鋭き刃”メタルコーティングが発動している!!

そのままキラリと黒服の手が光ったかと思うと。

藤崎に振り下ろされた。

&1 t; 3 & g t;) “都市”、いたるところで戦闘開始。) (2) (後書き

小気味いい男って……。

元ネタわかる人いるのかなあ……。

<1 t.; 3 & g t.; > “都市”、いたるところで戦闘開始。> (3) (前書き

久々に録画してある『こぼと。』の最終回を見て感動していました
1。

ギイイイン!!

そんな音が鳴り響いた。

「切れない……?」

黒服がそう呟いた。

藤崎の服が斜めに引き裂かれてはいたものの、身体自体には別段傷は無かった。

“硬化”、ぎりぎり成功かよ。危ない危ない。」

「そうか。服の方を硬化したのか。」

そう、藤崎の服を硬化させることで鎧の様な役割をさせ刃から守ったのだ。

「とはいえとつさのことで硬化の能力が薄めになっちゃったがな。普通にやったらそれくらいの刃では斬られなかった。」

「そうかよ。だが、お前の武器は燃やしたぜ?」

「俺の才能はまだまだこんなところで終わらないってことだ。全力を出させてもらう。天音!!」

藤崎が天音の名前を叫ぶと一旦二人とも後ろに下がった。

「電気頼む!!」

「うん!!」

二つ返事で藤崎の言葉に答えると、天音が指を突き出しそれに藤崎が手を合わせた。

“指電改”!!」「能力付与、“斬化”、“強化”!!」
そうして電気が放たれた。

その電気は先程よりも大きく、強大で。

黒服を引き裂いた。

「かはっ！ 電気で人が切れるなんて聞いてないぜ……？」
黒服は体中を切り傷で血まみれにしながらも立っていた。

「俺の“斬化”は物体に切れ味を持たせる。“強化”はその物体のポテンシャルの上昇。そんな攻撃を受けても、やっぱり立ってやがったか……。ジークフリート（笑）さんよお。」

「さりげに馬鹿にしがったな！？」

「驚き……。」

漫才のような会話のやり取りの後。

「まったく、これ以上俺の才能をバラす訳には行かないよな。皆殺しにするならともかく、片方には絶望を与えたいし。赤井の仲間だったことを後悔しとけ。」

「何言ってやがんだ？」

急に黒服がまたも不思議なことを言い出した。

「俺はその“グレードアップ値上昇”を支配したいから、とりあえず、ルールいらぬ方は死んどけ。」

黒服がそう言うと、一瞬で藤崎の隣にいた天音に詰め寄った。
それこそ瞬間移動のように。

「お前にはデッドエンドを与えてやる。」

黒服はキラリと手刀を光らせた。

そしてそのまま斜めに振り下ろそうとしていた。

「……!？」

天音は驚いて動けないでいる。

死ぬ。

天音が、死ぬ……？

「危ねえっ!! 天音え!!」

気がつくと俺は、天音を突き飛ばしていた。

ズバツ。

そんな陳腐な音で。

「……えっ……？」

天音は目の前で起きたことが未だに信じられない。

藤崎が、斬られた。

左の肩口から右の腰辺りまでザックリと。

藤崎がよろめく。

そしてドサリと倒れこんだ。

倒れこんだ藤崎から血がどんどん同心円状に広がってきている。

「藤崎いいいいいいいいいいいい!!……!!」

絶叫。

「ああああっああああああああっああああっああああっああああ
ああああああああああああああっあ！！！！」
狂ったとも言うほどの乱れ具合だった。

「まったく……。俺はお前の方を殺すつもりは無かったのによ。ま
あ、そこまで絶望パニックに心震わせてくれているのなら俺としても嬉しい
限りだな。」

黒服は静かに倒れこんでいる藤崎を見、絶叫している天音を見る。

「……良かった……。お前はさっさとここから逃げろ……。」

「ああああっああああああ、藤崎！？」

藤崎のかすれた声を聞いて、天音の叫びが一旦止まる。

「どうしてそんな真似したの！？」

「別に良いってことよ……。お前に生きていた欲しかっただけだ……。
……。」

「ふざけないでよ！！」

「た、確かにな……。お前の秘密を知ってる奴も、これで居なくな
っちまう訳か……。」

「やめて！！　いなくなるとか言わないでよ！！」

藤崎の顔がどんどん生気を失っているのがわかった。

「やべえ……。視界が重い……。暗くなって、来やがっ……。」
そこで声が終わった。

「いやあああっあああああっあああああっあああっあああっあああ
っあああっああ！！！！！！」

天音はまるで女子のような声を上げて叫んだ。

藤崎が…、

死んだってことなの…？

「うわああああつあああつあああつあああつあああつあああつ
あああ！！！！」

&1 t.;3& g t.;、 “都市”、いたるところで戦闘開始。、 (3) (後書き

いやいや、『こぼと。』いい話ですねー。

さて、いまから録画してあるクレヨンしんちゃんのオトナ帝国の逆襲を見ます。

なんか泣けるもの連続で見てる気が……。

<3> “都市”、いたるところで戦闘開始。<4> (前書き

さて、昨日は7時に寝てしまったので。
今日はほんの少し長めの更新です！。

「お前……、さっきの男じゃないな？」

おそるおそる黒服は尋ねる。

【俺ノ質問ニハ答エテクレナイノカヨ。ソノ反応トカカラシテ多分
オ前ガ殺シタノニ間違イハ無インダロウケドナ。俺ガ誰カト聞カレ
レバ、天音雷綱^{アマネ イズナ}トシカ言ヘナインダガ。】

随分とこの男の口調のような、音程のようなものが変わっている気がする。

というか、まるで言葉は知っていて使えるのに、喋りなれていないような。

「それは、先ほどの男だろう。今のお前は、先ほどの天音と呼ばれていた少年じゃないだろうが。二重人格ってやつなのか？」

【オ前勘ガ鋭イナ。確カニ、二重人格ツテ説明ガ一番分カリ易イナ。
】

「やはりか。じゃあお前はさしずめ『裏』ってところか。」

【『裏』？ ソンナ安イ言イ方ヲスルナヨ。ドチラガ『裏』デドチラガ『表』カナンテ分カラナイダロ。他人ニモ、本人ニモ。普段見セテイル顔ガ『表』、ソレト違フ面ガ『裏』ナンテ一概ニハ言イ切レナイヨナ？ 酷イ話ダゼ。今ジャマルデ『裏』ガ悪イヨウニ言ワレテイルガ、大キナ間違イダヨナ。『裏』モ『表』モ両方トモ性格ガアリ人格ガアルノニヨ。】

「……随分と語るんだな。こだわりでもあるのかよ。」

【大有リダ！ トハイエ、名前ガ無イト確カニ不便ダ。ダカラ、俺ノコトハ“雷”^{サンダー}カ、“才能”^{スキル}デ呼ンデクレ。】

「どういう意味だ？」

雷、才能？

【俺ハ此ノ天音雷綱^{アマネ イズナ}ノ才能ダカラサ。才能ニ性格ガ付与サレタ、都市デハ俺一人、世界中デモ俺一人ダロウナ。】

「……それが本当なら驚愕だな。そんな存在、今まで見たことが無い。」

【有リ得ナイナンテ言ウナヨ、才能ナンテ有リ得ナイノ塊ダロウガ。

サテ、最後ノ質問ダガ、オ前ノ名前ハ何テ言ウンダ？】

「語っておいて損はないか。“tomorrow”。さて、俺とやる気なのか？」

そう挑発する黒服はまるで傷一つ無かった。

服は切り刻まれているのに、その部分には染み一つ無い。

【ソレガアンタノ才能……？ 色々トオカシイゼアンタ。持ち過ぎダロ才能。】

“雷”も驚いている。

「どうだ？ 俺に勝てると思うのか？ “発電能力”ごときが。」

その問いに“雷”は、

【ハハハハハハ！ 俺ノ才能ヲソンナアリフレタモノカト思ッテルノカヨ！ オ前ニ今マデ使ッテイタノハ俺ガ貸シ出シテイタダケノ才能ッテノニヨ！！】

爆笑して答えた。

「は？ 何言ってんだ？」

黒服が訳も分からず聞き返す。

その瞬間、黒服の目の前が輝き、爆発音になった。そして目の前に“雷”が現れた。

「……なっ！？」

【1000万、ボルテージ。】

黒服の額に天音の人差し指がこつんと当たったかと思うと、バリバリバリイ！！ とその人差し指から電気が一気に放出された。

「か……、はっ……。」

行動を許さぬ速さだった。

黒服が立ったまままで硬直した。

【コンナモノデハマダ死ナナイダロ、オ前。】

硬直したままの黒服に“雷”が語りかける。

黒服は硬直がだんだん治ってきた。

「あ、あああ！！」

黒服が手刀を振る。

そして天音が切りかかれた。

【痛ッタク……、無イ！！】

皮肉にも、天音の左の肩口から右の腰辺りという藤崎と同じように切られた。

だが、血は出ていない。

切り口からはバリバリと電気が出ている。

「か、はあああ！！」

そこでまたも黒服に電気が走った。

【俺が切り傷ゴトキデダメージヲ喰ラフ訳が無イダロ！ 俺ハ雷ソ
ノモノッテ言ウノニヨ！！】

「！？」

意識を失いかけても、黒服はその言葉には驚いた。

雷そのもの、ということとは。

この世界に二人しかいないあの才能系と同じということか……？

炎と氷。

そこに雷が加わるということ……。

メタモルフオーゼ
変異系だとも言うのか……？

【見セテヤルヨ、自然ノ能力、天災ノ力ヲナ。】

そこまで言う“雷”は一瞬で黒服の顔面を掴むと、そのままその後頭部を地面へと叩き付けた。

そこから雷の如き加速を見せ、三階の床を突きぬき、二階の床を突きぬき、一階の地面へ落とした。

その軌道は稲妻のように光を描いていた。

そこまでの動作、わずか数秒。

雷速の世界。

首が取れてもおかしくないが、どうやらその辺りは調節しているらしい。

そういう部分では雷速の世界では無いのかも知れない。

どちらにしろ、人間が反応することは出来ないのだが。

【一億、ボルテージ！！】

そして顔から手を離さずに、手から電気が溢れ出す様に放電される。バリバリ、と言うよりは一瞬で流された電流は空気を破裂させドオンと言う音を響かせた。

黒服の身体からは煙が出ていた。

【流石ニ死ンダカ。サテ、折角出テ来レタ訳ダ。面白イ状況ニモナツテルッポイシ、楽シマセテモラフカ。】

そう言う“サンダー雷”は身体を光らせると一瞬でその場から消え去ってしまった。

<3> “都市”、いたるところで戦闘開始。<4> (後書き

実は。

この設定はかなり出したかったところでありまして。

すこしすっきり。

まだいっぱい残ってるけどー。

<3> “都市”、いたるところで戦闘開始。<5> (前書き)

三月が長く感じます。

去るってよく言うのに！。

<3> “都市”、いたるところで戦闘開始。(5)

10..27、都市Dブロックのあるビル。

「まったく、なんつう力なんだよ……。流石の俺もすぐには回復出来なかったじゃねーか。」

とあるビルの一階。

まるで吹き抜けのように三階から穴の開いてしまっているその真下にある男が埋まっていた。

その男は身体こそ傷一つ付いていないが、服は九割九分が黒焦げになってしまっていた。

そして、埋まっていたそこから這い出した。

メタモルフオーゼ

「流石に“変異系”相手じゃ分が悪かったな。化物めが。あんな攻撃がほとんど効かない様な奴に勝てるわけ無いってもんだ。」

その男はぶつぶつと呟きながらビルの外へ出ようとする。

そこで、あることに気がついた。

「おれ、服焼けちゃったじゃん！」

その男はある意味一番大切なことに気がつく、その場から消えた。

テレポーション

“瞬間移動”のように。

いや、実際にしたのだろうが。

10..33、都市Dブロックのあるビル。

「やばいな、天音があっちの方になっちまいがった……。」「とあるビルの三階。

そこである男が倒れていた。

その周りには血溜まりに近いものが出来ていた。

藤崎は生きていた。

実はあの黒服に切られた時に“グレードアップ値上昇”の“硬化”を自分の身体に発動していた。

だが、あまりにとっさのことで能力がそこまで上手く発動できず、ある程度は切られてしまった。

それでも切られた傷ならほうっておくと命に関わるが、今度は“値上昇”の“回復力強化”を自分の身体に使って傷を癒していた。

ぐい、と藤崎のお腹がなる。

「これ使おうと染山じゃないけどすごい体力とか使うんだよね……。血も作らなきゃいけないからな……。」

藤崎は今すぐに死ぬことは無くなったが、あまり激しい運動は出来なさそうに感じ、三階にいることにした。

10；40、都市Eブロック。

そこでは、怒気ともいふべき雰囲気放っている黒服と相馬、篠崎がいた。

一瞬で戦おうなんて考えをそがれた。

無理だ。

負ける想像しかできない。

数では勝っているものの、二人は動けなかった。

「どうした、何もしないのか赤井の仲間達よ。」

威風堂々とした黒服は聞いてくる。

そしてこのままゆっくりとこちらに歩みを進めてくる。

「よし、捕まりましょう。」

重苦しい空気の中、相馬が驚くべき一言を言い出した。

「何言ってるの相馬君!!」

篠崎はとても驚いている。

「少年、自分で何を言ってるのか分かってるのか？ そりゃ手もかからないほうが楽だが。」

流石のことにその黒服も驚いている。

「あなたに勝てそうもないと悟った。ただそれだけのことです。」
何事も無いかのように相馬は語った。

「その代わり命は助けていただけじゃないでしょうか？ 命あつてのな
んとやらと言いますしね。」

「……交渉か。悪の組織のボス相手に。」

黒服、いや“創造主”はそこで笑い出した。

「ボスでしたか。それはそれは、やはりというのでしょうか。風格
が違いますね。」

「褒めても何も出ないぞ。その交渉に乗るのは構わないが。」

黒服はひとしきり笑うと、こちらに好印象な感じで話しかけてきた。

「じゃあ、交渉成功というわけですね。縛るなり何なりしてください

い。」

「ならこの手錠を掛けてもらうか。手を出せ。」

そう言って黒服は相馬の両手に手錠を掛けた。

そして、篠崎も相馬に促されいやいやながらも手錠を掛けた。

「お前、面白いな。俺の仲間にもなってみないか？」

なんと“創造主”は相馬を仲間に誘ってきた。

「悪党の仲間ですか……。どうでしょうか。考える時間が欲しいですね。ちなみに、世界の半分が欲しいというわけではありませんから。それに、もしかしたら裏切るかも、というようなことを考えないのでしょ

うか？」「そりゃそうだな。まあ俺の仲間

に裏切れる度胸のある奴は白道く
らいなものだが。時間か。ならお前達を俺の本拠地の中にでも入れて
おこう。着いて来い。」

そう言う“創造主”は後ろを向いて歩き出した。

「どうしてあんなこと言ったのよ！！ 男らしくないわね、敵に屈
するなんて！！」

篠崎が怒った口調で相馬に詰め寄る。

「そう言わないで欲しいものですね。本来なら、この手錠を私の才
能で外す予定だったのです。」

相馬は聞こえないように静かに篠崎に言った。

「本来ならってどういう意味よ。」

それに見習い篠崎も声を潜める。

「この手錠、才能を封じる力でもあるのか、私の才能が発動しませ
ん。困りましたね。」

相馬が困り果てて笑っていた。

「ちょ、何よそれ、結局打つ手無いんじゃないのー！！！！」

その篠崎の声はむなしく回りに響いた。

<3> “都市”、いたるところで戦闘開始。

(5)

(後書き

次は廻家と焰の方の戦闘に入ります。

死んだと思われて死んでないキャラはあまり好きじゃないですが、仕方が無いですねー、この場合。

<3> “都市”、いたるところで戦闘開始。<6> (前書き)

けいおんがまた連載再開するそうです。

大学生編だそうですよ。

<3> “都市”、いたるところで戦闘開始。 (6)

9..30、廢ビル外、西に1kmの地点。

「逃げてでも無駄か。」

ジェット機のように足と手から炎を出して飛んでいた焰がゆっくりと地面に落ちる。

「やっと、止まって、くれたか、よお……。」

ぜえぜえはあはあと息を切らしながら白道が止まる。

「おっさんにこの運動は地獄だったのお……。」

どうやら白道はおっさんらしい。

「お前を倒したほうが速そうだ。白道。」

「そのほうが俺としても楽だな。」

余程白道は走るのが嫌いのようだ。

「まずは、お前に才能を使わせないことが重要か。」

そう焰は言う、手からバーナーの炎を大きくしたような炎が噴き出した。

「やばいつてのお。」

そんな炎が自分に向けられていると言うのに、全く動じる気配の無い白道。

白道はスーツから長方形の黒い布を取り出した。

「さて、白道月影のマジックショーをご堪能あれ!!」

白道は叫ぶと、黒い布を身体の前面に広げた。

そして白道の姿が見えなくなる。

そのまま炎が直撃する。

白道が身体の前に出していた黒い布ごと燃えるかと思われた。

が、

炎は白道の前で壁のような何かに当たると、その壁に邪魔されてそこから先に進まなくなってしまった。

「……なんじゃそりゃ。」

「マジックショーってなあ。」

焰は呆れ、白道は黒い布を手に掴む。

「圧倒的な攻撃力を持つ焰さんに、どこまで時間を稼げるかなって。」

そこで白道はマントを左手に持ち、右手でスーツの右外ポケットから手のひらにすっぽり収まるくらいの深緑色の物を取り出した。

「俺特製の手榴弾、威力は折り紙つきだってえのお！」

その手榴弾の安全ピンを口で抜く。

そして焰に投げつけた。

「これで炎は使えまい！」

かん、こん、と地面を転がっていく。

「こんなもん。」

焰が手から炎を出し、思いつき後ろに下がる。

白道は走って前進すると、またも黒い布を身体の前に出す。

ドオンと爆発。

一瞬地面が振動したかのような錯覚を受ける。

コンマほど遅れて爆風が吹きすさぶ。

「止まれや、“白眼視”^{ホワイトアイズ}！！」

白道は爆風が終わった瞬間黒い布を身体からのけ、焰のいた方向を視た。

「そういうことか。」

白道の後ろから声がした。

「嘘だろお……。」

白道が視た方向には誰もおらず、後ろに焰が立っていた。焰は爆弾が爆発した時に足と手から炎を出して上昇して、白道の後ろに回っていた。

白道は前に黒い布を出していたので、その一連の動作が見えなかったのだ。

そのまま白道は後頭部に手を当てられる。

つまり、命を握られたも同然。

「お前の才能は分かった。お前は、対象物の時間を止められるんだな？」

「まあ正解だ。あんなまどろっこしい言い方からよくここまで思いついたな。」

「『世界の理を外して止める』^{いじわり} ってのは、物体の時間を止めること。時間の止まった物体はどんなものの影響も受けなくなる。炎だろうと、爆風だろうとな。お前はその布の時間を止めて防御していたんだろう。これほどいい防御も無いな。」

「……ちなみに、昔にこの才能を極めた神話の化け女がいるんだが。」

「蛇女^{ゴゴン}か。まあ本当にあの時代なら時間を止めるなんて概念も無いからただ固まるⅡ石になると勘違いしてもおかしくないな。」

「それに何者も壊せないほど堅くなるからな。堅いⅡ石ってのもあ

ったんだろうよお。」

「とにかく、お前はその才能を使っていたわけだが、そんな才能にも弱点があるわけだ。一度それを発動すると他のところの時間は止められないんだろ？」

「くそ、アンタ頭良いな。もういい、俺を焼くのか？」

「そんなことはせん。ちゃんと法という絶対的正義の元に罰してもらうのみだ。」

焰はそこで左手を使って腰から手錠を取り出す。

「俺達を随分と侮辱してくれたな。警察ってのは大体使えないものの象徴みたいに言われてるが、ちゃんと仕事はしている。」

その言葉は怒りに満ちていた。

「流石は都市警察総長、部下がやられて怒るのも無理ないか……。」

焰は、今日の深夜ごろから警察が何者かに襲われている報告を受けていた。

そのためどう動くか考えていたのだ。

現場に向かってみると、幸か不幸か死者は出ていなかったが、なくなっているものが共通してあった。

手錠。

才能を封じる手錠がなくなっていた。

「まったく、ここまで大規模に動くとは考えていなかったさ。ほら、手を回してさっさとお縄につきやがれ。」

そうして手錠を掛けようとした。

白道も素直に後ろに手を回す。

「まだ死ねねえっての！！」
ホワイトアイズ “白眼視” ！」

白道は焰が手錠と後ろに回した手に意識を逸らしたその一瞬を見逃さなかった。

勢いよく振り返ると、才能を使った。

白道はもうとつくに最初に使った才能を解除していたようだった。

焰がそのまま固まる。

「油断、かつこ悪いってな。実戦経験の差かな、才能に頼りすぎだ。甘い甘い。」

まるで達観したように白道は固まった焰に語る。

そして、白道は手袋をつけ、手錠をとりだすと焰の腕に掛けた。

ブンツと焰の手錠を持った手が空を切る。

才能の効果が手錠に触れたことで封印されたのだ。

「これで終わり……、これは……！？」

焰が手に掛けられた手錠に気づいた。

「もうお前は才能を使えない。俺の勝ちだなあ。」

白道は得意げにそう言い放った。

&l t;3&g t;、 “都市”、いたるところで戦闘開始。

（6）

（後書き

私はあっちこっち派……。

きつと分かる人いないんだろうなあ……。

また雑誌の表紙がけいおんカラーに染まりそうで怖い……。

&1 t.;3>t.;、 “都市”、いたるところで戦闘開始。、 (7) (前書き

今回は廻家編です。

9..31、廢ビル外、東に1kmの地点。

「はさみこまれちゃったな。」

廻家が言葉とは裏腹にまったく恐れていないようだった。

「もう敗北は許されん、許されんだ!!」

“風”は切羽詰ったような感じで声を上げる。

「ごめんなさい。ちくつとするかもです!」

まるでこれから注射をするかのように“DBY”は言う。

仕掛けたのは、“風”だった。

「ふんっ!」

才能、“滅亡の右手”ジェノサイド・ライトによる一突き。

それを左回転して距離を半歩分ほど下げ間合いを外すと、その回転のまま裏拳を叩き込む。

“風”はその裏拳を左腕でガードする。

廻家はそのまま回転して後ろに回る。

“風”も後ろを向く。

“巡る輪廻”スピンアウト、まったく厄介な才能だな。無条件で回転をかけられては、間合いを外されてしまう。」

「だろ?」

廻家はそのまま地面に手をつける。

「こんなことも出来ちゃうんだな!!」

すると、道路のコンクリートと土がめくれ上がり“風”に向かって吹き飛んだ。

「なっ!?!」

“風”は多少動揺するが、すぐに持ち直し難く避ける。

だが、避けた先にあったのは廻家の拳だった。

「あーらよつと!!」

身体全体で回転するようにして打たれたパンチは“風”にヒットし、“DBY”が待機している後ろの方まで吹っ飛んだ。

「……回転の力でコンクリートと土を巻き上げ、拳には威力を増させることが出来る……。強いな。」

“風”は不意打ちのような攻撃でさえ耐え切って見せた。

「当たり前だろ？ 俺は“創造主”と同期なんだから。」

「そういや、そんなことも……。いやいい。“DBY”、準備は？」「室内じゃないからまだ時間がかかりそうなんですごめんなさい!!」

“DBY”は本当に申し訳なさそうに腰を曲げて謝る。

「別にいい。なら、俺もこの才能に慣れないといけないな。」
触れた物体をすべて回転させる？

上等だ。

俺は触れた物体をすべて腐らせてきたんだからな!!

また“風”の猛攻が始まった。

それを右へ左へ回転しながら飄々（ひょうひょう）と、時には紙一重で避ける。

まったく動く予兆の無い回転。

どちらに回転するか分からない。

それが“巡る輪廻”の強みだ。

「反撃させてもらうぜ？」

そしてノーモーションで右足をいきなり蹴り上げる。

“風”はそれをぎりぎりで気づき、上体を反らして何とか避ける。

“風”の顔の前には靴が見える。

その靴のかかと辺りには球体の何かが入っていた。

大方それで回ったりなどのスムーズな動きを行っているのだろう。

その靴が近づいてきた。

「!？」

そのまま“風”の顔面に当たり、威力はそれほど無かったもののバランスを崩して倒れる。

それは残していた左足のボールを回転させ前に突っ込んできただけだが、普通の人間にはもちろんそんなことは出来ない。

廻家はまた右足を高く上げると、“風”目掛けて振り下ろした。

倒れこんだ“風”目掛けて^{かかと}踵落としが炸裂……

とはいかなかった。

廻家の踵落としては“風”の身体の15?上ほどで止まっていた。

「間に合いましたよ、“風”さん!!」

“DBY”が嬉しそうに声を上げる。

「……、ぎりぎり、つてところか。お前に助けられるとはな。」

流石の“風”もこの状況には冷や汗を流していた。

「これは……、さっきのやつか……。」

廻家の振り下ろした右足の下に、よく見るとキラリと光る糸のようなものがある。

それに止められたのだ。

思い切り振り下ろしたので、足を少し切ったようで、血を流している。

「いつでもどこでもあなたのそばに有私鉄尖」、発動です。」

廻家の周りにもキラリと光る糸が無数に乱雑な方向から出ていた。その糸のせいで廻家は動けない。

「鉄の糸……？ メタルメイカー 発鉄能力”か？」

「僕はそんなものじゃない。 メタル・アーティスト “操鉄能力”だ！」

“DBY”が珍しく強気で言う。

「危なかった。やはりこちらに“DBY”をおいて正解だったな。」
いつの間にか地面から立ち上がっていた“風”がこちらを向く。

チエックメイト
「王手だ。」

そして動けない廻家は、手錠を掛けられた。

&1 t.; 3 & g t.;) “都市”、いたるところで戦闘開始。) (7) (後書き

なんと二人とも捕まってしまうました！

さて、次は桜編になると思います。

It;3>; “都市”、いたるところで戦闘開始。 (8) (前書き

桜編です。

9・58、間之崎学園から北に500mの地点。

「さっさと片付けさせてもらうかいのお。」

大男は桜に向かってそういった。

「そう易々と言うなつての。」

桜はその言葉にちよつとムツとした。

先に動いたのは大男だった。

その丸太のような太い腕で殴りかかってきた。

技術など無い純粹な力による一振り。

その先端、拳は前に殺した者の返り血が付いていた。

桜はそれを難なく左に一步すつと進んで避けると、そのままから空きになっている腹に右ストレートを叩き込んだ。

ガンッ！と音が鳴った。まるでとても堅いものを叩いたような。

桜が殴った後バックステップですぐに三步下がる。

そして殴った拳の方を見る。

「……、才能か？」

その拳は赤くなつていつていた。

「ガッハッハ！！ おぬしは今ダイヤモンドを直接殴つたようなもんじゃからのう！ もうその右は使えまい！」

大男は快活に笑つた。

「どういう意味だ？ ダiamondってのは。」

桜は意味が分らず問いかける。

「わしの才能は“ダイヤモンド・ボディ肉体硬化”。その名の通り、身体がダイヤモンドのように堅くなる才能じゃあ！ もちろん、柔軟性を残したままな

！銃弾ですらわしの身体には傷一つ付けられんじやろう！」

ダイアモンド・ボディ

“肉体硬化”。

USBの中に入っていたデータからすると、こいつが“yesterday”なのだろう。

「確かに、おかしいとは思ってたのさ。どうして拳に返り血が付いていたのかだ。アンタみたいな体格だ。バンテージをつけて人を殴らないと自分の拳の方もいかれちゃうはずなのに、アンタはバンテージを取り出すことも無くそのまま俺との戦闘に入ったからな。」かなりの激痛が右の拳から走っているはずなのに、なんともなしに桜は言う。

「ここでアンタの伝説も終わりじゃのう。紅桜。“風”を倒したとか聞いたから期待しておったのに。」

さも残念そうに言う“yesterday”。

「まだ俺は五体満足だったの。終わってないぜ？」

あくまでも傷などおっていないかのように桜は挑発する。

「あれだけの威力のパンチじゃ。骨が折れておってもおかしくない筈じゃのに。そこまでお望みなら、砕け散ると良いのお！！」

“yesterday”はその大柄な身体とは裏腹に俊敏に動くと、桜の前まで一瞬で詰め寄ると。

そのままタックルした。

かなり“yesterday”は大柄なので避けられなかったのだろうか。

桜は思い切り正面で受けてしまった。

トラックに跳ねられた人のように桜が宙を舞い、3m程吹っ飛んだ。

そのままごろごろと転がり、止まる。

桜はピクリとも動かなかった。

「おやおや、死んでもうたかいのお。“創造主”には生かして連れて来いと言われとったんじゃが……。でも、こんなところで死ぬ男ならこの先もいらんかいな。」

それでも“yesterday”は念のためと一応近づく。

ガンッ！ と、“yesterday”の顔面に両足蹴りが炸裂した。

「まだ、終わって無い。」

桜はところどころから血を流していたが、生きていた。

「そうこなくてはのお!!」

“yesterday”は凄く喜んだ顔をした。

&1 t.;3>t.;、 “都市”、いたるところで戦闘開始。、

(8)

(後書き

さて、どうなるんでしょうか!?

<1 t.;3 > t.;、 “都市”、いたるところで戦闘開始。、 (9) (前書き

では、桜編をどうぞっ！

「まったく、さっさと捕まってくれんか？」

「生憎だがお断りだ。」

桜は身体から血を流しながらも、断る。

「さっきの顔面蹴りは面白かったが、わたしには効かんぞ？」

「黙ってろ、老獪^{ろうかい}。」

「酷い言い草じゃのう。そんな口もわしの拳で打ち砕いてくれよう。」

拳を構える“yesterday”。

「俺は、相手がアンタで良かったと思ってるんだ。“yesterday”。」

桜は“yesterday”を睨みながら言う。

「わしおぬしに名乗ったかのお。……、ああ、おぬしはあのUSBを持っておったんじゃないか。で、なんでわしで良かったんじゃない？」

「アンタは言うなれば凄く堅い鎧を着ているだけの男だからな。摩訶不思議な才能を使われるよか、よっぽど楽だ。」

「……言うじゃねえの！ 気に入ったぜ、桜！」

そしてやはりその身体の大きさからは想像も出来ないような速さで桜に近づくとまたも丸太のような拳が桜に飛ぶ。

それを難なく避けるが、今度はがら空きな腹を殴らない。

「流石に二回目は無いかのお！」

やはり先程のもわざと隙を作って打たせたらしい。

もうそう簡単に殴ってこないことが分かった“yesterday”は、猛攻を開始した。

右に左に拳が乱れ飛ぶ。

それをすいすいと躲^{かわ}す桜。

「どこまで避けきれるかな、桜！」

「答えは一つ、どこまでもだ。」

拳が使えるのなら、他の部位を使うまで。

堅さなど関係の無い、杭のような重い一撃を放てる。

そして桜は、“yesterday”の猛攻の中にチャンスを見出す。

元々ほとんど油断している相手、簡単にそれは出来た。

「今から出す技は、かなりえぐいから気をつけろ。」
気をつける必要など無い、と“yesterday”は言おうとした。

桜の手が“yesterday”の右肩辺りに触れたように見えた。
バゴンと。

何かが外れるような音がした。

「気をつけて、があっああ!!」

“yesterday”が飛びのく。

その“yesterday”の右腕は、反対の左腕よりも長くなっていた。

そして力が入らないかのようにだらんと垂れ下がっている。

「お前……、関節外しやがったな!!」

そんな右腕を左腕で抱える。

「あいこだ。これで。」

「ふざけんじゃねえっての!!」

ガコンと、“yesterday”は左腕で嵌め直す。

「これで、元通りだ。」

「今のはお試し。さしずめお前が俺に一回殴らせて才能を分かったようなもんだ。」

桜は手を前に出し、ちょいちょいと指を手前に折る。
来いよ、と。

「次はお前のタックル、つまり決め技みたいなもんだ。」

「舐めた口利いてくれるのお！」

今度は簡単な攻防を避け、先ほどの超強烈、超高速、タックル。

避けられないかと思われた。

「さっきまでの俺は、お前の实力を見ていたと言っても過言じゃない。」

そんな声が聞こえた。

桜は一瞬で“yesterday”の後ろに回ると、肩甲骨辺りに軽く肘鉄を当てる。

それでバランスを崩し地面にこけてしまう。

そしてこけた“yesterday”にすばやく近づき、両肩に手を当てる。

「があああああ！！ ま、また……！！？」

バギンと一瞬で両肩が外れる。

そこで桜は終わらなかった。

バゴンと、さっきよりもより鈍い音が“yesterday”から鳴る。

「があああああっあああっああ！！」

両膝が外された。

「まだまだ。」

今度は両膝よりも音は軽かった。

「ぐあああああつあつああ



——！！」

両肘が外される。

あまりの激痛で“yesterday”は白目をむいてビク、ビクと動くだけになった。

「まったく、随分久しぶりにこんなえぐい技出しちまったな。確かこいつも手錠を持ってるんじゃないかなかったか……。」

ごそごそと“yesterday”の身体を探ると、すぐに手錠を発見できた。

「これ、手首にあわないじゃん。」

鍛えられた“yesterday”の手首は大きく、手錠が嵌らないほどのレベルだった。

「しょうがない。」

ボギンと何のためらいも無く“yesterday”の手首も外すと、ガチャリと手錠を嵌めた。

「少し体力を使いすぎたな。腹減った。なんか血を作るもんが欲しい。」

そう呟きながら、飄々と桜は歩いていった。

<it>3>it>、**“都市”**、いたるところで**戦闘開始**。< <9> <後書き

という訳で。

これで>3<は終了です。
次は>4<です！。

&l t;4 & g t;ゝ“都市”、乱れに乱れり。ゝ (1) (前書き)

東北関東大震災が随分と大変そうです！。

皆さん、募金しませんか？

<4> “都市”、乱れに乱れり。 (1)

10..50、とあるビル内。

「……、ここは、どこだ。」

赤井は大きなホールの真ん中に倒れていた。
一緒に“痛”^{ペイン}にやられた紅は居なかった。

その時、ホールから入ってきた男が居た。

「やっと来てくれたか。これは一度帰ってきておいて正解だった。
あの二人に感謝せねばな。」

その声は忘れもしない、あの“創造主”だった。

“創造主”は一度このホールを出て行ったものの、発見した赤井の仲間である相馬と篠崎を連れ帰ってきたので、戻ってきていたのだ。

「アンタが、俺をここまで呼んだのか？ “創造主”さんよ。」

「ああ。お前に聞きたいことがあってな。赤井、俺の仲間にならないか？」

“創造主”は至極当然といった風にそう言った。

「何で……、俺なんかを誘うんだよ。」

「何故？ 簡単だ。お前の才能と性格を考えた末の結果だ。」

「なら、俺が仲間になるわけ無いだろ！！」

「そうか？ お前は、そういう簡単な感情からは一線を引いた男だ
と思っっているんだがな。」

「……。」

「お前は一時の感情でそんな簡単に道を踏み外さない男だろう？
お前は、良くも悪くも達観している。何故一介の高校生がこうなっ

たのかは分からないがな。」

「いつもお前はすべてを見透かしたような男だな。」

赤井の口調が、普段紅などと話していたものから、ある種冷たさを感じるようなものになる。

「それが赤井、お前の本性か？」

「本性かどうかは俺にだって分からない。そんなものだろう。」

「確かに、その通りだな。」

「だが、俺はお前の仲間になる気は無いぞ。」

赤井は冷たい口調のまま“創造主”に言う。

「世界の半分をやるって言ってもか？」

「その場合どっちを選んでもバトルになるだろうが。」

「なら、今俺が拘束している紅とその他2名がどうなっても知らない、と言ったら？」

「古典的で典型的だが……、それはどうしようも出来ないな。」

赤井が思案顔になる。

「お前には……、そうだな、“消”^{デリート}って名前をつけてやろうか？」

「……っち……。」

赤井は舌打ちした。

10..50、ポイントDと呼ばれていた地点近く。

「まったく、本当にみんな捕らえられてるみたいじゃん。すごいやん。」

「感心してす場合じゃないよー、紫瀬ー。」

染山と十島はいまだぼちぼちと歩いていた。

その目の前に、黒い服を着た人影が見えた。

「隠れるじゃん！」

咄嗟に染山が周りを見渡し、隠れるところを探す。

「才能使えー？」

「……予備のカロリーメイトはあるじゃん。じゃ、問題ないじゃん。」

胸元のカロリーメイトプレート、メイプル、チョコを確認すると、すぐ横にあったビルのガラスへと両手を当てる。

「カロリー・コントロール体温自在”、溶けろじゃん！」

すぐにその壁が赤く光り溶け出す。

すると染山は赤くなったガラスに手をめり込ますと、両手を横に開くようにした。

そうして上手く穴を作った。

「早く入れ！」

「分かったー。」

二人はそうして中へと入り、もう一度ガラスを溶かして壁を塞いだ。もちろんそんなことで綺麗になるはずも無いので、デロデロになっている。

二人は中に入ると、すぐに壁のあるところへと向かい、背を隠した。

数分後、黒い服を着た二人組がさっきまで染山と十島が通っていた道を歩いてきた。

「ムーン月”さん、大丈夫ですか？」

「かなり……、きついですが……。」

両方とも女性ではあったが、明らかに違う二人だった。

一人は黒いスーツに赤いネクタイでゆったりとした格好だった。背はすらりと高く、そのままモデルとして出ても構わない様な体型と顔立ちだった。

もう一人は黒を基調としたフリフリのついた服。いわゆるゴスロリという奴だろう。背は低く、口に手を当てていた。

二人とも共通していたのは、顔が蒼白としていたことだろうか。

「あんなことを見た後ですから……。そうなるのも無理ないです。」

「あんなの、“創造主”の考えじゃないよ……。」「あんなの？」

梁山と十島はその言葉が気になった。

その後も二人は何か話していたようだが、よく分からなかった。幸い二人はここに来るまでに周囲の注意力を妨げられるような何かがあったようで、何事も無く通り過ぎていった。

「あんなことって何だろうねー、紫瀬ー。」

「知るわけないじゃん。ここは、あいつらが来たほうの道を行って見た方がいいかもじゃん。」

「そうだねー。」

そうして二人はビルに入ったのと同じ方法で出た。

二人は出た後、黒服の二人組が来た方向へと向かっていた。

その道を進むほどにだんだん鉄が錆びたような臭いが強くなってきた。

「何だろうねー、この臭いー。」

「お前、分かってるだろ。じゃなけりゃ才能を使ってるはずだ。」

梁山も普通の口調になっている。

顔が引き締まっていた。

「どうということじゃんよ、これ……。」「

「黒服の仕業ー、じゃなさそうだったよねー、あの様子を見るとー。」

そこは、血溜まりという表現しか思いつかないような惨状になっていた。

そこにいた人々がまとめて切り刻まれていて、あたり一面が血の海、血溜まりと化している。

「やっぱり、あれは血の臭いだったじゃんよ……。」

「うへー。」

エロリと。

十島は胃の内容物を吐き出した。

「これは……、流石に……。」

染山も胃の内容物を吐き出した。

「誰が一体こんなことを……。」

<4> “都市”、乱れに乱れり。 (1) (後書き)

すごくまともなことを前書きで初めて言えた気がします。

&l t;4 &g t;; “都市”、乱れに乱れり。ゝ (2) (前書き)

最近更新が一日おきくらいになってますね。

ごめんなさい。

後量も少なめに戻ってきてます。

ごめんなさい。

<4> “都市”、乱れに乱れり。 (2)

9..46、廢ビル外、西に1kmの地点。

「つたく、こんなところで野垂れ死ぬのだけは勘弁だな……。」「白道によって捕まってしまった焰は、じゃらじゃらと手錠を手足から鳴らしながら、ピョンピョンと飛び跳ねて目的だった間之崎学園へと進んでいた。

とはいえそれは非常に体力を使うので、身体から汗が噴き出していた。

「その人。間之崎学園というところを知りませんかね？」

それはパツと見は普通のおっさん、といったような感じの服装。だが、それをぶち壊しているといっても過言ではない装備が体中にされていた。

背には大きな剣。

腰には一方に三丁、両方で六丁の拳銃がしまわれていた。

そして静かに威圧というように歴戦の猛者を思わせる闘氣を漲みなぎらせていた。

こんな状況でまだ捕まっていない。

それがこの威圧感を証明しているように思えた。

「俺もそこに向かってる。なあ、これを外してくれないか？　そうしたら教えてやる。」

焰はこの男を信用はしていないが、とりあえずはこれを外してもらおうと思った。

そこで背広の中に入っている鍵を渡そうと思っていた。

この男は、その予想を遥かに上回っていたのだが。

「これが鍵」

「よし、そのまま居ろよ。」

焰の言うことを聞かずに、その男は何か集中した。

「絶対に動くなよ!!」

念を押されたので、何をするのか気になったが様子をみた。

「はっ!!」

シヤリヤンと金属がこすれあう音がしたかと思うと、その男は背に背負っていた大剣を振り下ろしていた。

その後、バギンと手錠が切れ、大剣の威力に耐え切れず砕け散った。

「だ、大道芸人かよ……。」

焰もこれには冷や汗をかいた。

「さあ、助けてやったぞ。連れて行ってくれないか。」

その男は先ほどのことを何とも思っていないように言った。

「お前の、名前は……?」

焰は驚きながら聞く。

「赤井太陽。覚えておいて損は……、無いと言い切れん。」

赤井……?」

「お前、赤井夢斗という男を知っているか？」

「あー!!　それ、俺の息子だよ!!　何だアンタ、知り合いだったのか？」

太陽は十年來の知り合いだったかのように言う。

「アンタではない。焰炎作だ。さて、お前に言いたいことがあるんだが……」

「何だ？　焰さん。」

太陽が何事かと聞く。

太陽は知らなかったのだ。

焰炎作の呼び名を。

“燃える正義”、“炎の執行人”と呼ばれていることを。

「赤井太陽を午前9時51分、銃刀法違反で現行犯逮捕させてもらう。」

「はあ!!」

太陽もこれには驚いていた。

<4> “都市”、乱れに乱れ。 (3) (前書き)

何と総合評価100pt超え!!

おめでとうっ!

ありがとうございます、皆さんっ!!

<4> “都市”、乱れに乱れり。 (3)

「おいおい、そんなこと言うなよ!! 助けてやったんだぜ!?’」
助けた男に逮捕するぞと脅される。
コントかよ。

「何があっても、俺は法を曲げることは出来ん。そうやって持っているだけなら何も私は言わなかったのだ。大剣は許可証でもあれば問題ないし、銃はモデルガンと思えば良かったからな。なのにお前はその剣を抜き叩っ切った。それは十分法に触れる。」
滔々と喋る焰。

「ま、待ってって! 俺は焰さん、アンタが手錠を外してくれというから外してやったんじゃないか!!’」

「叩っ切れとは言っていないぞ。ちゃんと鍵だってあったんだ。」
そうして鍵を目の前で振る。

「何で捕まった奴が鍵を持ってるんだよ!! それともなんだ? 自分で持ってた手錠を間違って掛けちゃったとでも言うのか!?’」

「いや、そういうわけではない。これは警察の手錠ならどんなものでも外せるマスターキーのようなものだ。」

「なんで持ってたんだよ!!’」

「俺が都市警察総長だからだ。」

「……あの都市警察のトップ……。アンタが……?’」
太陽はドン引きしていた。

「まあ、あんなふうに捕まっけていては疑われても仕方がないがな。」
「成程。随分と堅物な訳だ。アンタがあゝ“炎の執行人”ってやつな訳だ。焰さん。なあ、ならどうして焰さんはこんな風に拘束されてたんだよ。相当強いって聞くぜ?’」

太陽は呼び名自体は知っていたようだ。
目の前の男とは思わなかったようだ。

「ある男だ。この都市を占領している黒服のグループの幹部とでも言うのか……。名を白道と言っていた。」

焰は負けた相手について話す。

「白道！？ 白道月影か！？」

太陽は焰のその話題に随分と食い付いてきた。

「そうだが、知り合いか？」

「ああ。そうか……。やっぱりアイツこういう悪の組織っぽいところについてたのか……。」

太陽はぶつぶつと呟きだした。

「知り合いなのか……。まあ、お前もアイツも同じ場所で合わせてやる。拘置所でな！」

「だから待てって!!」

太陽は大仰に手を振る。

焰は忘れていなかったようだ。

「司法取引！ 司法取引ってのはどうだ!!」

「司法取引？」

太陽が司法取引を持ちかけた。

この堅物の男にはこういう正攻法で攻めたほうが良いだろう。

「俺はアンタと一緒に戦おう。黒服も殺さずに捕まえるつもりだ。だから今捕まえるのはやめてくれ。」

とにかく太陽としては間之崎学園に辿り着くことが大切だった。

息子に会うことが、大切だった。

「俺は司法取引というものがあまり好きではないんだがな……。あれ、地雷ふんでた？」

太陽はそう思ったが、それも杞憂となった。

「いいだろう。乗ってやる。俺もあまり助けてくれたお前のことを捕まえたくは無かったからな。それならば一応法の下に平等だ。」

焰も納得し、二人で間之崎学園へ向かうことになった。

のだが。

「さ、おぶってやる。」

「何言ってるんだアンタ!？」

焰が急にしゃがみこんでおんぶする格好になった。

「何って、おんぶだが？」

「どうしてここでおんぶを迫って来るんだよ!!」

ここでおんぶを迫るとはね……。

理解に苦しむ太陽。

「じゃあお前、才能を全開にした俺に着いて来れるのか？」

「ん？ 瞬間移動系の才能なのか？」

「いや、俺はもっと物理的だ。」

「物理的？」

数分後。

「いやー、快適快適。しかしすごい速度だなー。」

「まあな。俺の才能“コンプリートファイア極めれり炎”は発炎能力の究極系だ。この程度造作も無い。」

今の状況を簡単に言うなら、空を飛んでいた。

焰は足から炎を出し、かなりの速度で飛んでいる。

太陽も焰におぶってもらい、その背で快適な空の旅を楽しんでいた。

それからさらに数分後。

「ほら、見えてきたぞ。間之崎学園だ。」

焰が顔を向けるとそこには、間之崎学園があった。

そこに見事に着地する。

目の前では、ある戦いが終わりを迎えようとしていた。

ある女性が男に手錠を掛けられていたのだ。

「舞人……、桜島舞人か……。」

焰は手錠を掛ける側の男を見て呟いた。

「お前……、祈じゃねえか……。」

太陽は手錠を掛けられている側の女を見て呟いた。

<4> “都市”、乱れに乱れり。> (3) (後書き)

遂に3桁台ですね！。

とっても嬉しいです！！

&l t; 4 & g t; ； “都市”、乱れに乱れり。 ； （4）（前書き）

今回は一話分が凄く長くなったので二つに切らせてもらいました。

だから切れ目が微妙になっているかもしれない。

<4> “都市”、乱れに乱れり。 (4)

10..13、間之崎学園玄関前。

「さて、理事長先生。もうおしまいかな？」

桜島が勝ち誇ったように言う。

その目の前には、体中を傷だらけにして倒れている理事長こと富士祈がいた。

「私は、負けるわけにはいけないの!!」

鬼気迫るような顔で、ふらふらしながらも立ち上がろうとする。が、やはり力を入れきれずにどさりと地面に倒れる。

「何でそんなに頑^{かたく}なのかねえ。とりあえず、手錠を掛けさせてもらうか。」

桜島が倒れている祈に近づく。

私は、守れないと言うの？

あの人の、息子を。

確かに、他の人から見たら可笑^{おか}しいかもね。

有り得ないか。

好きになった男の息子を、しかも自分のでも無いのに。

でも。

「まだ、負けてないんだから!」

這ってでも桜島から逃げる祈。

「何があなたをそうさせるのか……。まったく、美しい顔が台無しだ。俺はそんな執念深い女は微妙なんだがっ」と。
「この速度なんてもちろんたかが知れているもので、桜島はそんな祈の前に立った。」

祈は手を庇うような姿勢を見せるも、何かの力で空中へと宙ぶらりんにさせられ、手錠を掛けた。

「さて、仲間の話だと帰ってきてない奴らが居るんだったな。まだ捕まってないのは……。あの生徒会長か……。一番面倒くさそうだが、何とかなるな。探しにでも行くか……。何だありゃ？」

桜島は間之崎の校舎の方に戻ろうとして、轟っという音が後ろからしたので振り返った。

そこには、人を一人おんぶし足から炎を出している男が空に浮いていて、その男は見事に着地した。

「舞人……。桜島舞人か……。」

炎を出しながら降りてきた男が桜島の名前を出した。

「おお。これはこれは焰先生。久しぶりですね。」

桜島はその男、焰と面識があるようだ。

「お前、その服……。黒服共の仲間になってるのか……？」

「あれ、言ってませんでしたっけ？ いやいや、先生の教えのおかげで、黒服でも幹部に。アンタよりもずっとずっと強くなったんだぜ？」

途中からだんだん口調が変わっていく桜島。

「若造が。抜かすな!!」

そう焰は言い、右手を前に突き出した。

そこから炎が噴出する。

「俺の才能、忘れたわけじゃないですよね。」

桜島はそれを無防備に見ている。

炎が桜島に迫る！！

が、桜島はまる焦げにはならなかった。

噴出した炎は桜島を避けるように進んでいた。

それはまるで桜島の目の前に透明な球体のボールがあるように。

コンブリートサイコキネシス

「極めれり念」……、いやアンタの才能をもじる必要もないな。

ハイパー・サイコキネシス

“超・念能力”。この才能、勝てるか？」

「負ける気はしない。」

焰はその場から足に炎を噴出させ飛び出した。

桜島も自らの才能、超・念能力を使って飛び出した。

その最中。

太陽と祈は、お互いの顔を見て驚いていた。

「お前……、祈じゃねえか……。」

「太陽！？ 何でこんなところに！？」

太陽と祈もどうやら知り合いのようだ。

「ところで祈、大丈夫か！！」

「見た目よりはそうでもないわ。とにかく、この手錠を外してくれないかしら？」

太陽は傷だらけの祈に心配したが、どうやらそうでも無いようだ。

焰にしたように太陽は大剣でバギンと手錠を切って外す。

「向こうに居る叶も助けてあげて。」

そう祈が指差した方を見ると、叶の姿が。

叶も大剣で手錠を外すと、こっちに連れてきた。

「これで何とかなったわね。」

祈は手首の辺りを見ながらさすっている。

「ありがとう、太陽!!」

叶は元気にこっちに笑顔を振りまいた。

「どうしてお前がここに……?」

太陽は祈と叶が何故ここにいるのか分からなかった。

「それは別にいいでしょ。それより太陽、あなたが何でここに居るの?　ここは都市よ。才能が無ければ入るのが難しいのよ?」

「いやいや、俺の息子がここに居るはずなんだ。」

太陽がきよろきよろと周りを見た。

「そういえば、私が戦つてるときにはもう居なかったわね……。確か桜島はその木の下に置いていたはず……。つてあれ!?　そこにあつたトラックが居なくなつてる!」

「ちよつと前にここを出てたよそのトラック!!」

祈と叶がそれぞれ怪しいトラックを確認していたようだ。

「それさつき見た!　こんな状況でトラックなんておかしいとは思つてたが……。その中に夢斗が居たわけか……。」

どうやらすれ違いに近いものになったらしい。

そのトラックに迫い着こうにも足が無い。

焰は目の前で桜島とバトルを始めてしまったのだ。

「そうよ!　あの男、桜島と戦つてはいけないわ!!　赤井夢斗、あなたの息子の力で封じないと、あの才能は危険すぎるの!!」

「そうなの!!　赤井君の才能が必要なの!!」

焰が戦いを始めたのを見ると、必死な形相で祈と叶がこっちに話しかけてきた。

「だが、見た感じ焰は強いぜ?」

「そんなの関係ない！！　あの男はそういう次元の上に居るの！！
赤井を早く取り戻さないと……。」

祈がここまで叫んでいる。

これは本腰を入れないといけないほどの相手なのだろう。

「ならトラックを追いかけて見るか。」

「でも、もう見えないわよ……。」

祈が門の向こうを見るが、もうそこには平坦な道しか見えなかった。

&l t; 4 & g t; 〽 都市〃、乱れに乱れり。 〽 (4) (後書き)

念能力についての説明。

念能力とは手を触れずに物体に力を及ぼす能力です。

説明できなかったので念のため。

念能力だけにね。

「お困りでしょうか、理事長先生。」

その声は、唐突に後ろから聞こえてきた。

そこにいたのは生徒会長こと高原衣だった。

隣には風紀委員長の姫岸鉄も居る。

「やっぱり高原君は生きてたのね……、って今はそんなことを言ってる場合じゃないのよ。ゴメンね。」

生徒がちゃんと生きていたことには喜ぶものの、今の現状は変わらない――。

「北に1 km、東に1.3 km。その地点をトラックは走行中です。」

「なんだって!？」

高原のいきなりの言葉に太陽の方が先に驚いた。

「そうか……。高原君の才能、オブサーバー“観察者”――!! ありがとう高原君――!!」

高原の才能を思い出し、とても喜ぶ。

「何なんだ、その“おぶさーばー”ってのは。」

「私の才能です。効果範囲内なら視点を変えて見ることが出来ます。今は衛星写真のようにしてそのトラックを見えています。」

「へえ、便利な才能だな。じゃあ、さっさと追いかけるぞ。効果範囲があるんだろ?」

「ええ。急ぎましょう。」

「なら私の車を使おうよ――!!」

「人数が多いから二つに分けた方が良いわ。私の車も使いましょう。」

ポケットから鍵を取り出す叶と祈。

人数が多い？

太陽は不思議に思ったが、その理由はすぐに分かった。走ってそこまで行くと、そこには赤い軽自動車が。

その奥には四人乗りのいかにも速度が出そうな外車が。

「確かに……。こりゃ無理だわ。」

「じゃあ、叶の車のほうに高原君を乗せましょう。じゃないと、置いていかれるから。」

謎の祈の助言があり、叶の車に高原と姫岸、祈の車に太陽が乗ることになった。

「どうして叶の車にあの高原ってやつを乗せたんだ？ あっちの方が軽自動車だから遅くないか？」

「どうやら軽自動車の方が叶のだったようで、今からカーチェイスを行うのには少々頼りない。」

こちらには高原が居ないから叶の車についていくしかないのに。

「何言ってるの？ あなたはこっちに乗れたんだからラッキーなのよ？」

「どういう意味だよ。」

「すぐに分かるわ。」

ブウウンと、エンジン音が隣の軽自動車から鳴った。

まるでF-1の車のような。

見ると叶の車のほうが慌しくなっていた。

「なんなんですか今の音！？」

「軽とは思えませんよ！？」

高原と姫岸はすごく驚く。

そんな音を鳴らした本人はゴメンゴメンと言うと、サングラスのよ
うなゴーグルのようなものを取り出して掛けた。

「口を閉じてないと下を噛むかも知れないよ♪」
すごくいい笑顔で。

叶はそう言った。

キィイとタイヤが少しから回りしたかと思うと、一気に車が発進し
た。

そのまま校門に向かう。

「トップスピードに入るの早くね、ギッ！」
ツッコもうとした高原は舌を噛んだようだ。

そうして校門を出ようとしたとき、校門の目の前に人影が見えた。

「先生、前っ!!！」

「危なっ!!！」

キキィィイと急ブレーキを踏む。

だがそれだけでは確実に撥ねてしまうと感じた叶はそこからドリフ
トのように車を横滑りするようにして、その人のぎりぎり目の前で
止めた。

その人も凄く驚いていた。

何せ人はもう捕まっているから、人が居ないと思って出していた速
度だ。

止められたのは発振した直後だったのと、叶の運転テクニクの賜
物だろう。

「ごめんなさい!!」

「いいっていいって。」

叶はその人にとっても謝った。

その人はとても良い人そうだった。

「ところでアンタ、まだ捕まっていないようだが。何者だ？」

太陽はいぶかしむように見る。

一般人はほとんど捕まってしまったこの状況で普通に動いているこいつは何者なのだろう。

「何者……、名乗るほどの者じゃないが……。俺は紅桜。俺の妹がここに居るはずなんだ。」

その人、桜は太陽とほとんど同じことを言った。

<4> “都市”、乱れに乱れ。> (5) (後書き)

だんだん集結しつつあります。
色々ところで集まっていた者たちが。

<4> “都市”、乱れに乱れり。 (6)

10..11、間之崎から北に200mの地点。

“yesterday”を倒した桜はなんか食べておけば怪我也治るだろうと思い、さっき“yesterday”が出てきた穴から家に入り、簡単な料理を作った。

それをすばやく食べると、血がついてしまった衣服を片付けクロゼットから適当な服を取り出した。

「泥棒とか堅いこと言わないでくれると嬉しいな全く。」
それを着て間之崎学園に向かうことにした。

そうして穴から出ようとする際、一台のトラックが道を走っているのが見えた。

こんな状況でトラックが通っている？

そう思い少し気に止まったが、関係ないだろうと無視した。

急いで向かうこととしよう。

そうして数分走って門の目の前まで着いた。

さあ入ろうとしたそのとき――――、

軽自動車が突っ込んできた。

「いきなり黒服の攻撃か!？」
そう思ったが、その軽自動車がぎりぎりで止まった。

そして、その車から一人の女性が降りてきた。

「ごめんなさい!!」

その人は随分と可愛い女性だった。

「いいっていいって。」

つつい普通に許してしまう。

どうやら車は二台あるようで、後ろの車から出てきた男が俺に話しかけてきた。

「ところでアンタ、まだ捕まっていないようだが。何者だ？」

「何者……、名乗るほどの者じゃないが……。俺は紅桜。俺の妹がここに居るはずなんだ。」

彼らは悪い人ではないように思えたので、普通に自己紹介することにした。

「あなた、紅さんのお兄さんね！」

苗字が紅といえば、と叶は自分のクラスに居る女子を思い出す。

「アンタ知り合いか？」

「あなたの言っている人が私のクラスの鍵音さんならそうなるわね。担任をさせてもらっているわ。」

「じゃあアンタ……、いや貴女が富士叶先生ですか！ あんな速度で飛ばしてきたからそんなこと思いませんでしたよ。」

決して皮肉ではなく言ったつもりだが、
「その、ごめんなさい!!」
どうやら勘違いされてしまった。

「私の妹が、悪かったわね。」

「いえいえ。別に死んでないんだから、別にいいんじゃないんですか？」

後ろの車からまた美しい女性が出てきて俺に謝ってくれた。口ぶりからして俺を轢きかけた人と姉妹らしい。だが、随分と雰囲気の違いで、この人は大人の雰囲気をかもし出している。

「で、鍵音はどうなってますか？ 捕まってるなら開放しに来たんですが。」

「その……、私達もそれを追ってる最中なんです。乗りますか？」
叶の車に乗せることにした。四人乗りなので一人空いている。

「追ってるっていうのは？」

「トラックに乗っていったんです。それを追わないと……。」

それを聞いて、一つ思い出す。

そういや、さっきそんなトラック見たな……。

「じゃあ、行きますよ♪」

桜を乗せた軽自動車が唸りを上げて走り出した。

「うおおおおお！！ はああいええええいいいいええええええ！！」
そんじよそこらの絶叫アトラクションよりも怖かった。
何せ絶対に死なない（死ぬときはそのアトラクションの不良）アトラクションと違って、死の恐怖がある。

可愛い彼女にこんな走り屋の一面があるとは思わなかった。

「高原君。道はどうしたら良いの♪」

「ふた、二つ目を右です！」

何より一番かわいそうなのは助手席に座っている彼だろう。

どうやら彼の才能でトラックを追っているそうで、そのためにも前に座らないといけない。

「あ、速度を落としてください！！ 右に曲がった先に一人捕まっている人が居ます！！ 黒服も回りに居ません！ 助けましょうか！？」

「助けるっ！ 先生として！」

二言で高原の問いに答えると、右に曲がった先で人が一人手錠を掛けられていた。

「大丈夫ですか！？」

今回は先に人が居るのが分かっていたので、急ブレーキを掛けることなく止まった。

その道の真ん中に一人の男が手と足に手錠を掛けられ転がっていた。その周りはコンクリートがめくれ上がっているところもあった。叶がその男に駆け寄って聞く。

「ああ。済まないな。」

もはや恒例化したように太陽が切って手錠を壊した。

「名前は？」

太陽が聞く。

「廻家界視。お前達はどこに向かっているんだ？」

その男、廻家が俺達に聞いてきた。

「私あ達はあなたを捕まえた人たちでもある黒い服を着た人たちの

後を追っているのよ。」

捕まっていたから彼も無害だろうと叶が説明する。

「へえ。俺は間之崎学園でちよいと待ち合わせしていな。」

廻家は焰との約束がある。

「そーいや、あの焰って男も間之崎で会いたい奴が居るとか言ってたが……、そりゃアンタのことか？」

太陽が思い出したように言う。

焰がそんなことを言っていた。

「ああ！ そいつだ！ 今も間之崎に居るのか？」

「いや。桜島って男と今もバトってると思うわ。」

「そうか……、あの野郎またなんか悪いことしてる奴でも見つけて制裁にかけてるのか……。そうなるならしばらくは止まらんな。相手のご愁傷様だ。それより絶対俺のことなんて忘れてるだろうしな。なら、俺もお前達に付いて行って良いか？」

しばらく一人で語っていたかと思うと、こちらに仲間にしてくれと頼んできた。

「またこのパターンかよ……。」

なんとなく予想できた展開に太陽は頭を抱えた。

「心配するな。俺は車に乗る必要は無い。」

「は？ どういう意味だよ。」

太陽が頭を傾げるが、まあまあと廻家になだめられる。

そしてそのまま出発することに。

すると廻家は太陽達の車の後ろの突起を掴んですべるように進みだした。

「足の下にローラーでも仕込んでやがったのか……。」

太陽は眩いた。

現在、七名。

<4> “都市”、乱れに乱れり。 (6) (後書き)

最近GC版のバイオハザード1をやっています。

いや、本当怖いよ。

&1 t; 4 & g t; ; “都市”、乱れに乱れり。ゝ (7) (前書き)

はい。

ここで>4<は終わりになるんじゃないですかね。

<4> “都市”、乱れに乱れり。 (7)

10・44、都市Eブロック。

「見えた♪」

今まで高原の言うとおりにハンドルを切ってきた葉が目の中の車両を見て喜んだ。

その目の前にはトラックが。

「あの中に鍵音も居るわけだ……。待ってろよ。」

桜はその中に居る妹の顔を思い出し、改めて決意する。

どうそのトラックに突入したものか七人は考えていたのだが、トラックは不意に右に曲がるとあるビルの中に突っ込んだ。

『は!?!』

七人全員で間拔けな声を上げてしまった。

だが、衝突音のようなものは全く聞こえなかった。

何故なら、そのビルの手前のコンクリートの一部が下がり地下への入り口が開いていて、トラックはその中に入っていたからだだった。

「トラックはこの中です!」

高原は叫ぶ。

「じゃあ、行くっきゃないでしょ♪」

叶は元気な声を上げると、下がって斜面になっているコンクリートが上がる前に中に入った。

後ろの柵たちも中に入る。

中に入ると少し小さめの地下駐車場のようになっていて、トラックが奥のほうに頭から入って止まった。

ここまで来たら向こうも警戒してくるだろう。

緊迫した雰囲気の中、この地下駐車場のトラックが止まった荷台の後ろの扉が開き、多くの黒服が出てきた。

「団体様のお着きだあ！」

「元ネタ分かる人が少ないわね。」

太陽と祈が車から降りて対応する。

「俺も加勢させてもらおう。」

祈の車の後ろから着いてきていた廻家も前に出る。

「あの三人が何とかしてる間に、私達はトラックの荷台から二人を助け出すよ。私は赤井君を。桜さんは鍵音さんをお願いします。高原君は敵の動向を逐一報告して。姫岸さんは車に残って待機部隊となってもらうね。依存は？」

「「「……。」」」

沈黙で答える三人。

別に何も考えていなかったわけではなく、的確すぎる指示に驚いていたのだ。

この人は本当にただの一介の教師なのだろうか。あまりにも場慣れしている。

「急がないと。私達が入ってきたあの道がいつ閉じるか分からないんだから。」

そう叶はいい、そつと車から出る。

だが、黒服はそのトラックを囲むようにしていて、付け入るようなところは無かった。

「……。急ぎたいけど、ある程度待ったほうが良いわね。」

そうして三人は少し前に進んで柱に隠れた。

「実戦なんて日本に帰ってきてからしてなかったな。さて、どこまでいけるかな？」

「大剣の一振りで手錠を壊すような芸当をする男が言うセリフじゃないわな。」

「……みんな、落ち着いてるわね。機関銃を向けられているのだけれど。」

三人は全く状況にそぐわない会話を繰り返していた。

「お前達、何者かは知らんが手を挙げて投降したほうが身のためだぞ！！」

黒服の一人が大声で叫ぶ。

「って言ってるけど、どうする？」

「無視じゃねえの？」

「……、俺、アンタと良い友達になれそうだ。」

「全くだ。」

太陽と廻家は会話を止めていなかった。

「黙れ！ 何を普通に喋っておるのだ！！」

黒服が苛立った声を上げる。

「俺が威嚇で機関銃を落とさせるから、後は何とかしてくれ。」

「落とさせる？ あんた才能持ってるのか？」

「いや？ 俺はそんな超能力は持ってないさ。」

太陽の言っている意味が分からなかった。

「銃弾も今頃手に入りにくいし、あんま使いたくないんだが……、特例で良いよな。才能が無いからって弱いとは限らないところを見せてやろう。」

太陽は腰に手を掛けた。

相手が油断している隙にさっさと決着^{けり}をつける。

太陽はそう思うと、六丁の拳銃を一気に自分の頭くらいの高さまで放り上げる。

そして銃弾が同時に前方180度あらゆる方向から撃ち出された。

その銃弾は見事に黒服の機関銃に直撃し、はじき落とす。

太陽がしたことは至極明快だった。

同時に何発も拳銃を撃つことは不可能だ。

だから太陽は二丁ずつ拳銃が落ちないように撃って少しあげ、また落ち始めている拳銃を撃って少しあげ、を繰り返した。

恐ろしい速さで、また、同時に二つの拳銃を撃っているにもかかわらず有り得ないほどの命中率で。

黒服の顔がまだ何が起きたのか分からないでいる。

その呆^{ほう}けている間に廻家^{スピンアウト}が才能、“廻る輪廻”で足のボールを回転させ一気に黒服に近づき機関銃を拾う。

そのまま廻家はしゃがみこむと、回転して足払いを掛ける。

5・6人ほどが一気にこける。

そしてこけた黒服を超え部隊の中心に乗り込むと、片足を身体に垂直に出してもう片方の足で回転を掛ける。

こまのように回転すると、黒服が円状に蹴られ一方向に飛んだ。

ある程度状況を的確に判断していたものはかがみこんで避けた。

そのうちの一人が軸足をスライディングで狙いに来るが、それをネリチャギのように振り下ろして対処する。

足を振り下ろした後、黒服がナイフを取り出したのでこれもしゃがみこみで避けると地面に手をついた。

“巡る輪廻”は一対多に強いからな。こういう状況、陽動みたい

なのは得意なのよ!」

地面のコンクリートに才能を使い、コンクリートに亀裂が入る。

亀裂は二つ、廻家の周りに小さく一つ、もう一つは黒服を囲んで大きな円を。

そして大きな円が凄いい速さで回転した。

黒服はバランスを崩して倒れこみ、外にはじき出される。

廻家の居るところは回転していなかったようだ。

はじき出されて転がっている黒服に廻家は止めを刺す。

転がっている黒服に近づき腕を掴むと、そのままジャイアントスイングのように身体をぐるぐる回転させ投げ飛ばした。

「廻家さんって、凄いですね。」

「助けておいて正解でしたね♪」

「さっさと行きましょう。」

「じゃあ行くか。トラック空けるんだろ?」

四人はこの間にトラックに忍び寄り、廻家の戦闘をつい見てしまっていた。

トラックに手を掛けると、鍵は開いていたようで簡単に開いた。

「鍵音っ!! って、あれ?」

桜が先陣を切って乗り込むも、その中には誰も居ない。

「……、もう、運び込まれた……? あの時!?」

叶先生はある可能性に一瞬で辿り着いた。

黒服がトラックを囲みこんだ時。

あのとこの間にすでもう運び込まれていた、ってこと……。

「なあ、このトラックに本当に入ってたのか?」

桜が不思議そうに聞く。

「赤井君も紅さんも、もう中に運び込まれちゃったのよ!!」
早く
追いかけるわ!!」

その指は、黒服たちが出てきた扉を指していた。

&l t; 4 & g t; 〕 “都市”、乱れに乱れり。 〕 (7) (後書き)

という訳で、遂に敵の基地に飛び込みましたっ!!

〕 「刀語」 最終話炎刀銃をみてとがめっ!! とか言いながら。 〕
火桜芙蓉。

&l t; 1&g t;; すべての人物が集結する。誰かが仕組んだことなのか。

ジャスト千文字になりましたっ!!

他に特に意味はありません。

&1t;1>t;、すべての人物が集結する。誰かが仕組んだことなのか。

1
1
..
0
0、とあるビル内。

赤井と“創造主”はあるホールで話していた。

「お前には……、そうだな、“消”って名前をつけてやろうか？」

「……ち……。」

赤井は舌打ちした。

空白の時間が続く。

「創造主、侵入者です!!」

その声は空白を塗りつぶすように、女の子の大きな声がホールに響き渡った。

「それはあいづらが何とかしてゐるんじゃないのか!？」
「花」!」

“創造主”が少し動揺している。

「それが破られたみたいで、今B1の地下駐車場近くの通路を慕進はくしんしています!!」

正直、この赤井を連れてきたトラックをすごい速度で追いかけてきている二台の車があるのは“花”^{フラワー}の報告で知っていた。

だからこそ逃げ場の無い駐車で大量の兵を使って捕まえる予定だったのだ。

「侵入者は合わせて十人です！」

「名前が分かるものは!？」

「……これは！？ 赤井太陽に富士姉妹、イレギュラーの紅桜にあの高原衣と風紀委員長、それに廻家です！！」

「嘘だろ……、捕まらなかった面倒な奴らが集結してここに来てやがんのか……。」

“創造主”は頭を抱えた。

「あーあ。残念だったな“創造主”さんよお。」
赤井はここぞとばかりに言う。

「捕まってるやつ態度かよそれ……。そういうところが卓越してるっつーか、達観してるって言ってるのに。というか、侵入者は十人だったな。その報告だと七人だぞ。」

「後三人は飛び込みのように入ってきました。地下の入り口を閉じていなかったのが責任です。三人とも間之崎の制服を着ています。赤井の仲間……です！一人は地下駐車場から扉に入りました。後の二人は今歩いて駐車場に入ってきました。」

「俺の仲間！？」

その言葉に反応したのは赤井の方だった。

「成程、名前は？」

「二人組は梁山紫瀬と十島茶仁、一人で居るのは天音……雷綱？です。」

「待て、どうして？が付いた。」

「いや、体中から電気をビリビリだしながら高笑いするような報告は聞いてないんですが。」

「「そんなことしてるのか！？」」

“花”の報告に赤井と“創造主”は両方驚いた。

天音はそんなことをするようなキャラじゃなかった筈だ。

「こうなったら……、“五日間”と“花鳥風月”、“痛”、“恋”を全員呼び戻すか。輝かがやきと鳳凰院、間之崎は動かないようだからな。“花”、通達を頼む。」

「分かりました！」

慌しくなってきた。

どうやら全面戦争になりそうだ。

&1 t; 1& g t; ; すべて的人物が集結する。誰かが仕組んだことなのか。

これは時間的には四章の『>4< 都市』、乱れに乱れり。 1)
『の赤井と“創造主”の話の後となっております。

…?」

「そういえば廻家のところに行くとき見たな。あまりにも印象が違いすぎてわかんなかった。にしても……、えー」

天音の変貌を元から知っていた風な高原は落ち着いて、一度天音自身を見たことのある桜は見ているだけにギャップに悩まされていた。

他の人たちは……。

「また随分と凄いやつが来たなー」

「まったくだ。なんか体中から電気出してるしな」

太陽と廻家に関しては、よく分からなさ過ぎて逆に落ち着いていた。

【面白ソウナ事シテルナ。赤井トカ紅トカ助け出スンダッテ? 仲間ニ混ぜテクレヨ】

案の定、雷は仲間になってきた。

「否定する理由も無いしね……」

「本当に無いかな……?」

そして、なんだかんだで（人手が足りないとか）仲間になることになった。

「そういや、どうやってここまで来たんだ?」

それは高原が聞いた。

【一度ビルカラ見タケド、随分ト面白ソウナ運転シテル車見ツケタ
ンダ。デ、ソレニ付イテ行ツタ訳ダ】

……。

確かにあの運転は目立つよな……。

「？」

当の叶本人以外の心が一致した。

そうして八人で通路を抜けると、大きな丸いホールが現れた。

そのホールは真ん中が柱のように突き出っていて、エレベーターのようだった。

八人がそのホールに入り終わると、そこで今まで来た通路へと繋がっている扉が閉ざされた。

「エレベーターが使えると思わないでくださいよ。襲撃者の皆さん」
その声は女の子の声で、ホール全体に響き渡るように聞こえた。

「ここで、迎撃させていただきます！！」

女の子の叫びとともにホールの四方八方の壁が開き、中からロボットのような機械仕掛けの人形が出てきた。

その目は一様にロックオンのような紋様が紅く光っている。
わらわらとどんどん出てくる。

「侵入者撃退用ロボットって所か？」

「まあ、そうなるわね」

太陽の眩きに意外にも相手の女の子は答えてくれた。

「ざっと200体くらいよ。これを倒せれば、下に進んでもいいわ」
その言葉に応じて、ホールの奥のほうに階段が現れた。

「200体！！ どんだけいるんだよ……」

気だるそうな声を上げるも、決して出来ないわけじゃないといった構えの八人だった。

「ノリがマッ○ルタワーに近づきつつあるな……」

太陽は読んだマンガの内容を思い出していた。

【此処ハ俺ニ任シテクレ】

そこで、雷が前に出てきた。

「おいおい、こんなところで出張ったって良いことないぜ？」

「よくある展開ではあるが……」

「かっこいいことなんて無いよ？」

「そうよ？　ここは全員で戦力を保持しながら降りないと」

「先生的にも許可できません！！」

太陽、廻家、姫岸、祈、叶が反対する。流石にこの数相手に一人は無理なんじゃないか、という考えの下だった。

【ン？　大丈夫サ。スグニ追イツク】

「ますますフラグを立ててきたな……」

雷の危ない発現に太陽は頭を掻く。

【大体、サツサト降りナイト赤井ガ危ナインダロ？　道ハ作ルカラ

ヨ】

そう言つて雷が指差した方にはもうロボットもどきが階段を塞いでいた。

「道作るつたつてよ……」

廻家が呟く。

【心配スルナ】

雷は両手を身体の前で合わせると、ゆっくりと広げた。

すると、そこにバリバリとなりながら光り輝く長い槍が現れる。

カミゴロシノライオンウ

【神殺雷槍。目ト耳ヲ塞イダ方ガ身ノ為ダ】

雷は出来上がった槍を右手に持つと、思いつきり投げた。

ピカツと一瞬光り、その後ドオオオンという爆発音、地響きのよ
うな音が鳴り響いた。

その槍が飛んだ直線状は煙が出ており、階段まで一直線に道が出
来ている。

「才能……、か……？」

太陽が恐る恐る聞く。

【嗚呼。メタモルフオーゼサンダー“変異系…雷”、ツマリ雷其ノモノニナレル。ツマリ……】

「俺達はむしろ邪魔なようだな。お前が全力で才能を使うのに」

【ソウイウコトダ。俺ノ才能ハ一対多ニ向キスギテイルカラナ】

廻家は自分達がこの雷と言う男の全力を妨げていると分かったよ
うで、雷の言葉を遮って言った。

「行くぞ」

その判断をしたのは太陽。

全員廻家の話に納得し、雷が作ってくれた道を進んだ。

【サテ、一人残ッチマッタガ、コンナ機械人形デコノ天災カミナリニ勝テル
カナ？】

&l t; 1&g t;;、すべての人物が集結する。誰かが仕組んだことなのか。

雷がかっこよくなってきましたねー。

<1 t; 1 & g t; 1>すべての人物が集結する。誰かが仕組んだことなのか。

最近前書きに書くことも無くなってきました。

&l t; 1 & g t; ; 〽すべての人物が集結する。誰かが仕組んだことなのか。〽

「まさか天音君があのも最強の才能変異系だとは」

「実は俺一度変異系と戦ったことがあってな。炎の男だった。そんなときは絶対に喧嘩を売らないようにしようと思ったな、愛剣も溶かされたし」

「へえ……、太陽さんは無才能なのにあの変異系とも戦ったことがあるんですね」

「おうよ。こう見えても“スキルアナライザー才能分析者”とは伊達に言われてないってことさ」

「そんな風に呼ばれているんですね……」

“雷”にB 1 Fを任せ、七人は階段を下っていた。

そしてB 2 F。

そこもB 1 Fと同じようにホールになっていて、真ん中には円柱の柱が。

それはきつとエレベーターなのだろう。

「もう嫌な予感しかないんだが」

太陽がそう愚痴をこぼすと、エレベーターがチンとなり、ドアが開いた。

「あれあれ、この人たちを倒せばいいってことなのかなー？」

そこから出てきたのはまだあどけなさの残る少女だった。少女は黒を基調としたフリフリのついた服。いわゆるゴスロリというもののだろう。

「またこの展開か……」

桜も呟く。

「皆さんとは初対面だから自己紹介させてもらうね？ 私は“花鳥風月”の“月”^{ムーン}。“創造主”の命令で時間を稼げって言われてるから、足止めさせてもらうね？」

やはり、少女は敵らしい。

「どうするよ？」

「少年漫画的展開を所望するなら、誰かが一人残るって展開なんだろうけどよ」

桜の問いに太陽が答え、スッと指を指す。

その方向を見ると、“月”は向こう側にある降りる階段を守るように立っていた。

「ありゃ一人残したとしても行かせてくれそうにないぜ？」

「大体、なんでこんな構造になってるんだよ。普通に考えて有り得ないだろ」

「それは、この道自体がブラフだからだよ？」

高原が構造自体に疑問を抱くと、“月”が答えてくれた。

「今あなたたちが通ってる道は侵入者用の通路。本来はこのエレベーターから地下に向かうか、隠し通路で行くから、ここはひたすら時間稼ぎと倒すための道になってるの。元々、地下は幹部以外はほとんど来ないんだよね。ほとんどの職員は上のビルの方にいるから」

「それ、最悪のパターンだな……。上のビルこそブラフじゃなく本物だったってことか。でもよ、そんなことを俺達に言ってもいいのか？」

「だってあなたたちはここで倒すから？」

「その言葉自体はいいと思うがな、？は外した方が良いぜ」

そのときエレベーターがチンとなり閉じ、今まで来ていた階段が上がり閉じてしまった。

「戻れないってシステムか……」

「女とかとは戦いたくないんだよねー」

そういう桜はこんな状況でも落ち着いていた。

「じゃあ、私の力を見せてあげるね？」

“月”は手をこちらに向けた。

「!？」

グッと急に身体が磁石に引き寄せられるように。
全員が周りの壁に磔にさせられた。

「こいつは前に感じたことがある……、重力か!？」

太陽は“スキルアナライザー才能分析者”らしく、その才能の正体をすぐに見破った。

「そうだねー。私の才能は重力、引力、斥力を操るの。ワールド言う事を聞きなさい”って言うんだよ？」

「そいつは……、この面子じゃきびしそうだな……」

太陽は壁に磔はりつけにされながら忌々しげに呟いた。

&1t;1>t;、すべての人物が集結する。誰かが仕組んだことなのか。

ちよつと更新が遅れて一日ずれました！。

<t;1>; 〽すべての人物が集結する。誰かが仕組んだことなのか。〽

「重力か。なら、こうさせてもらうか」

桜は磔のままそう言うと、クツと力を入れると壁に対して垂直に立った。

「嘘っ！？ 今あなたたちには身体中に1.5倍の重力がかかっているのよ！？ 体重の半分の重りがついているのと同義なのに！？」

“月”の顔が驚きに染まる。

「この程度、へでもないつつうの」

桜はそのまま円柱状になっている壁を走り出した。

すると、あるところを境にしていきなり重力が元に戻った。

桜は重力の位置が九十度変わってバランスを崩しかけるが、片手を地面についてから見事に着地する。

「もうっ！！ 面倒くさいな！！」

そういらいらした口調で“月”は叫ぶと太陽達にもかけていた重力を外した。

磔がとかれて自由になる。

「どうして解いたんだ……？」

「まだ、手はあるってことかしら」
なにしろ警戒は解かない。

「本当はああやってして時間を稼ぐつもりだったんだよ？ でもこ
うなったら、私の奥の手で戦ってあげる。さあ、来なよ」

自信満々に“月”は平らな胸を張った。

「とりあえず、行かせてもらおうね♪」

戦闘で一番怖いものはそれを楽しんでいるもの。

叶の口調はそれに近かった。

叶はダッシュで“月”のところまで行き、その勢いそのままに掌底を打ち込もうとしていた。

「あ、あれ？」

だが、異変が起きた。

叶の掌底が、“月”に触れるぎりぎりのところで止まっている。そして、バチンとはじき飛ばされた。

「よく考えたら、最初からこれでいけばよかったのかも知れないね？」

“月”は無邪気に顔を傾ける。

「斥力」

高原はふと呟いた。

「なんだそりゃ？」

桜が聞く。

「斥力っていうのは、簡単に言うならはじき返す力。磁石の同じ極同士をあわせようとすると反発するじゃないですか。あれと同じだと考えてもらえれば結構ですね」

高原は饒舌に語る。

「彼女は自分から言いましたからね」

“私の才能は重力、引力、斥力を操るの”

「あ、そんなこと言っちゃったかも？」

“月”は慌てて口を押さえている。

「さて、俺も才能を使わせてもらいますかね。“オブサーバー観測者”、“個人観察モード”」

高原はじつと“月”を見つめ始めた。

「他の方はどうぞご勝手に戦うなり話すなりしてください。その間に弱点でも見つけます」

高原は何事も無いように話した。

「どうしてそんな風に軽い気持ちでいられるのかなー？」

“月”がこちら、高原に手を向ける。

「おお!？」

その瞬間、グッと高原が“月”に吸い寄せられた。

「私は引力だって使えるんだよー？」

「引き寄せる力……、しくじった!!」

「何やってんだよ生徒会長さんよ!」

太陽は拳銃を向ける。

「駄目! 斥力がアイツには働いているのよ! もしも跳弾が来たらどうするのよ!」

祈がそれを慌てて止める。

「でもよ!？」

「大丈夫。私の見た未来じゃあ、彼は助かる」

「……お前の“未来視”か」

「私のはそこまで強い力はないけど。劣化版に近いのよ? まあ見てなさい。彼は伊達や酔狂で名門間之崎の生徒会長をやっていないわ」

その祈の言葉は、迫力に満ちていた。

「私は随分と腕とかひ弱だけどー」

“月”が高原に向けていない方の腕を見せる。

その肌はとても白く輝いていた。

「重力を操るってことは、重さを操るってこと。攻撃って言うのは」

高原がもう“月”の目と鼻の先まで近づく。

「重さと速さで威力が決まるんだよ!!」

“月”は白い腕のほうを思い切り振りかぶり、引き寄せられていた高原に思い切り殴りかかった。

&1t;1>t;、すべての人物が集結する。誰かが仕組んだことなのか。

라이어ゲーム見てたんです。

ごめんなさい。

&l t; 1&g t;; すべて的人物が集結する。誰かが仕組んだことなのか。 (

何故昨日更新できなかったか？

昨日とある行事がありました。

42. 195キロを歩こうという馬鹿げた企画で体力とか削られまして。

風邪引き気味になりました。

パソコンに触れることなくゴーとうーべっどしてました。

<すべての人物が集結する。誰かが仕組んだことなのか。>

ブンツと“月”のパンチは。
空を切った。

「???」

“月”が訳のわからないような顔をする。
何故なら、今まで引き寄せられていた高原が急に目の前から消えたからで。

「全員の死角、盲点」

その声は全員が見ていなかったエレベーターの陰から聞こえた。
「それを観察して、ただ立っていただけ。それだけで消える事だ
て出来る」

そこから現れたのは先ほど消えたと思われていた高原だった。

「どういうこと!?! さっきまで私が引き寄せていたはず!! あ
なたの才能は“観測者”ってやつじゃないの!?! 今のは“瞬間移
動”!?!」

“月”が高原の訳の分からない行動を聞く。

「皆さん、“月”という女性の弱点を発見したので、私がGOと言
ったら階段まで走ってください」

高原は“月”を無視して六人に言う。

「おいおい、お前だけ見捨てたってか!?!」
太陽が叫ぶ。

基本こういうことは嫌なタイプなのだ。

「いいんです！ では、行きます。合図したらお願いします！」
「おい！？」

太陽の制止も無視し、高原はまた“月”に走っていく。

「いいから。あの男を信じなさい。相当凄い男よ、彼は」

「随分と買ってるじゃねえか。祈。お前にしては珍しいな」
太陽を祈が抑えた。

「もうっ！！ 私話を聞かない男なんて今度こそ倒してあげるんだから！！」

“月”に向かっていった高原にまた手を向けると、グッと引き寄せられる力が高原に掛けられた。

「じゃ、GOで」

高原は“月”に引き寄せられながらも平気な顔をして言った。

「行きましょう」

「おい、マジで行くのかよ。祈」

「大丈夫だよ太陽さん。あの高原衣、生徒会長だから」

「それは理由になるのか……」

「衣……」

「あの少年、何か普通じゃないな」

六者六様。

ちなみに上から祈、太陽、叶、廻家、姫岸、桜だ。

そして六人はなんだかんだで階段へと向かって走り出した。

「^{ムーン}月”ちゃんの弱点はこれだよね」

本当に小さい子の相手をするような高原の声が、“月”の後ろから聞こえた。

「えっ！？」

前で引き寄せている高原がいるにも関わらず“月”は振り返る。その瞬間、体の体重が無くなった。ジェットコースターで味わうような、あの無重力感。

何故か後ろにいた高原に“月”は腰をがっしりと掴まれてヒョイと横に放り投げられてしまった。

「やっぱり背丈と同じで軽いのな」

放り投げられた“月”は先ほどまでいた方を見ると、高原が二人居た。

「双……子……?」

「驚いたな、いきなり後ろからもう一人目が現れるとは」

「だから言ったでしょ太陽。彼は強い。ただ弱いとすれば、ナチュラルジゴロなところかしら」

「そーそー。太陽さんみたいな」

「お前、そういうタイプなのか?」

「ふう……、この親にしてこの子ありか」

今度は五人。祈、太陽、叶、廻家、桜だ。

「まったく、あの馬鹿。これ以上女子を落として何がしたいのかしら」

「痛い!」

階段まで走っていた姫岸は途中で止まり、バコンと高原の頭を叩いた。

「姫ちゃん!! 早く降りてって!」

「衣、アンタにあの子が泣かされないように私が見張っておくことにするわ」

「俺は姫ちゃん一筋だって」

「……!! も、もう!! このロリコン!!」

「赤い顔ですごい罵倒された!？」

姫岸は高原の言葉で真っ赤になりながら、照れ隠しで罵倒しているだけというのに高原は気づかない。

いや、本当は気づいているのだろうか。

「あっ……、通しちゃった……」

“月”が呟いた。

「これじゃあ、“創造主”に怒られちゃうね」

“月”はゆっくりと立ち上がる。

「せめて、あなた達だけは本気で倒させてもらおうから」

“月”はこちらを睨んだ。

&l t; 1&g t;; すべて的人物が集結する。誰かが仕組んだことなのか。

更新遅れますね。

<1<>すべての人物が集結する。誰かが仕組んだことなのか。

「もう一人の自分」
ドッペルゲンガー

B3Fに降りる途中で祈が呟いた。

「高原君は間之崎で一人の“二重才能者”なのよ。さっきのは二つ目の才能ね」

「二重才能って言うと、二つあるってことなのか？」

「その通り。彼は“観測者”オブサーバーと“もう一人の自分”ドッペルゲンガー。“観測者”はまあその字の通り観察、観測に重きを置く目にまつわる才能。で、問題の二つ目、“もう一人の自分”は簡単に言うなら自分の分身を作ることが出来るの」

「それで、エレベーターの陰から“月”の後ろに回ってあんなことが出来たってことなのか……。やっぱ才能ってのはすごいな」

太陽は素直に羨ましいと思った。

「“二重才能者”っていうのはこういう“自分を作る”ような才能系の人に多いの。統計で出たそうよ」

「統計ねえ……。そんな自分の分身を作るなんて才能がなかなか少ないと思うがな」

「それは言わない約束よ」

高原の説明も終わったところで、叶が声を上げた。

「そういえば、高原君の言ってた弱点って何なのかな？」

B2F、ホール。

「“月”ちゃん。君の才能の弱点は同時に二つの力を使えないところだね。だから、紅桜さんが君の重力から抜け出したとき一度俺達みんなの分の重力を解いてから斥力を使った」

「……」

「二度目は俺を引き寄せてから、引力を外してから自らの腕の重さを変える重力を使った」

二人になった高原は交互に“月”に喋る。

「どうして、あなたが二人になっているの？」

「そいつは簡単だ。俺の才能“ドッベルゲンガーもう一人の自分”。こいつは簡単に言えば自分をもう一人作れる才能だ」

「二重才能者って……、こと？」

「そういうことだ」

“月”はそれを聞くと立ち上がった。

「なら、さっさと両方倒させてもらうまでよ！！」

“月”が上から下に手を下ろすと、急に体が重くなり立っていられなくなった。

そのまま高原×2と姫岸は地面にへばりつけられる。

「お、これは……」

気づくと、高原が一人に戻っていた。

「どっちにしろ、私の重力で押しつぶしちゃえば問題ないんだからグッと身体に掛かる力が大きくなった。」

五人となった太陽達は下に降りると、そこもやはりホールとなっていた。

そこに立っていたのは一人の男。

その男は、ワイシャツ一枚で腕まくりして立っていた。

そして、右腕だけが何かを腐らせたかのような茶褐色をしていた。

「ウィンド“風”か……」

桜がその顔を見て、つい最近戦った男だと分かる。

「紅桜！　お前に一騎打ちを申し込む！！」

“風”は桜を指差して叫んできた。

「構わないぜ？　その代わり、他の人たちは通してくれるんだろ？」

「もちろんだ。ほら、さっさいけ」

“風”が横を見やると、下りの階段が出ていた。

「おい、いいのかよ？」

太陽が不安げに聞く。

太陽は一目見て目の前の男の実力が分かったのだろう。

「こいつは俺を指名してきたんだ。なら、それに答えるのは当然だ」
桜は一步前に入る。

「男ってほんと馬鹿……、行くよ」

「えっ！？　お姉ちゃん桜さん放って行くの！？」

「あの男はどうせ私達の言葉なんて聞かないタイプよ。それより、相手のほうが犠牲は一人でもいいって言うてくれるんだから。その間に私達はみんなを助けて脱出しましょう」

祈は叶を説得していた。

「お前、アイツの才能知ってんだろ？」

「ええ。まあ」

「……。そうかよ。まあお前に限って心配はしてないさ。さっさと勝って来い」

廻家はかつこよく締めた。

「行くならさっさと行け。俺の才能はお前らを巻き込みかねん」

“風”が待ちかねて桜以外の四人を急かす。

「分かったっての」

四人はさっさと階段を降りることに。

「俺は今から怪物になる」

“風”はそう呟くと、自分の茶褐色の右腕の二の腕の辺りについていたわっかのようなものに左手で手を掛ける。

「こいつは俺の才能を封じるためにあるものなんだ」
「封じる？」

“風”の才能は“滅亡の右手”
ジェノサイド・ライト。
触れたものを腐らせる才能である。

わっかにあるボタンを左手で押すと。それが開いて外れる。

そのわっかはどうやらおかしな構造をしていたようだ。

わっかの内側に一本長い針のようなものがあった。

“風”の二の腕にはそれでつけられ続けていたのであろう穴が開いている。

「自分に刺さってたのか？ その針」

「俺の才能の元は超活性。別にこの程度の傷は痛くも無かったさ」
その言葉通り、二の腕に開いていた穴は見る見るうちに塞がっている。

「“滅亡の右手”の本当の能力は超活性ね。さしずめその力が強すぎて耐えられない物体が腐敗するってところなんだろう？」

「流石桜。それだけで見抜くとわな」

いや自分でほとんどのヒント与えてたような……。

「俺は元々化物だったのさ。自分の才能をコントロールできない、

な」

喋りながらも“風”は驚くべきことをした。
自分の“滅亡の右手”と左手を合わせたのだ。

「おい……、そんなことしたら、左手が腐っちまうんじゃないか！
？」

「だが、それを“創造主”が助けてくれた」
桜の言葉を見殺して両手を合わせる。

すると、左手は腐ることなく茶褐色だけがゆっくりと左手にも移っていった。

「……どうということだ？」

桜が首をかしげる。

「この“滅亡の右手”は元々俺の体全体にあった才能だ。それを“創造主”が努力して右手だけに抑えて封印してくれていた」

ゆっくりと、じんわりと。

茶褐色は右腕のほうからも“風”の身体を侵食し、顔の右半分も茶褐色になりつつあった。

「俺はこれを開放することで、化物と化す」

&1 t; 1& g t; ; すべて的人物が集結する。誰かが仕組んだことなのか。

前回何を血迷ったのかタイトルが訳の分からないものになっていたので訂正しました！。

<1>;1<>;　すべての人物が集結する。誰かが仕組んだことなのか。

「まったく、男ってのは本当に馬鹿なのかしら」

「祈ちゃん、ここに男が二人居るんだよ……？」

「お前の姉ちゃん随分と怖いな」

「そう言わないであげて廻家さん。ああいうキャラなんです」

太陽、祈、叶、廻家は更に下への階段を走っていた。

そうして下に辿り着くと、もう定番化してきた大きなホールが。

今回はホールの向こうに通路のようなものが見えていた。

「もうこの構造が分からなくなってきた……」

太陽は頭を抱えた。

「もしかしたら、そういうのこそが敵の狙いかもしれないわよ」

「あの男の考えていることなんてよく分からないけど、ひょっとしたらそうかも知れないわね」

祈の呟きに答えるように女の声が通路の方から聞こえた。

「ま、あの男の考えることじゃ。ワイには分からへんなア」

「い、いきなり喋ってごめんなさい!!」

「本当に“DBY”は気が弱いのか。いや、このレベルだと気が弱いとかじゃないかしら」

通路側に立っていたのは四人の男女。

もちろん全員が微妙に違ったコーディネートで黒服を着ていた。

「四対四ってか。ちょうどいい感じだな」

「まあそろそろ出てきたもんね」

あくまで太陽と祈は強気。

「俺達がこうやって仕事やるんも、なかなか珍しいっちゅーもんだ」
「そうなるわね」

「こうなったのも上の三人が時間を稼いでくれてるおかげなんだから、感謝しないと」

「う、上のみなさん、ごめんなさい!!」
黒服たちは思い思いに話している。

「さて、一応お約束的に聞いてみるけどよ。その通路の向こうに行かせてはくれないか？」

「「「無理」」」

だが、太陽が黒服たちに問いかけると、見事にハモって返してくれた。

「ちょうど四対四なんじゃったら、一対一タイマンでやろーや。ワイはそこ
の廻家って男にするわ」

ある黒服の男が提案して、廻家のほうを指差した。

「俺か？」

「そう、お前じゃ」

「私は女だからその貴女にするわね」

次の女の黒服は祈を指差して答えた。

「そう、後悔しないと良いわね」

「じゃあ、私は落とすって意味でその彼にしようかしら」
さつきとは違う女の黒服が太陽を指して答える。

「随分と綺麗な女性ではあるわけだが……。俺には妻子がいてな」

「え、えと……。余りものみたいな選び方になってごめんなさい！」

先ほどから謝り続けている男はもう叶しか残っていないので叶を選ぶ。

「まあ、しょうがないよね。選ばれなかったんだから」

そうして四人の戦いが始まった。

<1t;1>t;ゝすべての人物が集結する。誰かが仕組んだことなのか。ゝ

だんだん文字数が減ってきているので、次からはまた増やしていきたいなゝと。

&1 t.; 2 & g t.; 俺達と黒服との戦い。 〽 (回転VS化物) (前書き)

ここからは戦いが連続して続きそうですー。

&l t; 2 & g t; 俺達と黒服との戦い。 (回転VS化物)

B 4 F、廻家side。

「簡単に自己紹介させてもらうなら、ワイは“鳥”^{バード}。そして、これがワイの才能」

廻家の前に現れたのは随分となまりの強い男だった。

「う、うう……。うあああああああ!!!」

その“鳥”と名乗った男は急に叫び声、というよりは雄たけびのような声を上げた。だした。

すると、男の様子が少しずつ変化していく。

少しガタイが良くなり、口からは鋭い八重歯が現れた。

そして何より一番変わった場所は目。

その目は本来白目の部分が真っ赤に染まっており、黒目の部分は緑色、瞳孔はその緑より深い色へと変わって行った。

「化物が俺の相手か……?」

「化物……。確かにそうだな。俺の才能はそのまま、“吸血鬼”^{ヴァンパイア}じゃからな」

「そんななまりの強い西洋の妖怪がいてたまるか」

「ハッ! そんな舐めた口を利けるのも今のうちちゅーこっちゃ!」

“鳥”はそう廻家に言った瞬間、消えた。

いや、正確には消えたように見えたのだが。

「がッ……!!!」

気がつくのと、“鳥”が廻家の目の前に迫っており、その拳は廻家に刺さっていた。

“鳥”はそこから一步下がると、右足で回し蹴りを廻家の側頭部

に叩き込んだ。

廻家は壁まで吹き飛ばされる。

「才能、“吸血鬼”ってのは簡単に言うなら伝説の通りなんだよな。怪力とかな。そしてワシは、油断なんせーへんからな」

“鳥”は廻家に迫り、圧倒的な拳を廻家に振りかぶる。ドン、ドンと廻家が攻撃される。

「がッ！ くッ！ たぁ！！」

廻家は三発目の拳を両手で受け止めた。

「ワイの拳を受け止めたことには驚いたが、人にも、そして吸血鬼にも、手は二つあるんだぜ！！」

廻家が止めているほうと逆の手を“鳥”が振りかぶると、異変が起きた。

「ふざけんなや。俺の才能も使わせろ」

ゴキリと音がして、廻家が抑えていた方の拳が反対を向いた。

「いったあぁっあぁあぁ！！！！」

手首を押さえて“鳥”はその辺をのた打ち回る。

「まったく」

廻家はそのままノーモーションで足を凄い速度で振り上げ、“鳥”の顔面を蹴り上げた。

「俺の才能、知らないわけ無いじゃないだろ？ “巡る輪廻”スレンアウト、それぐらい調べてるはずさ。つと、これ以上やると悪役っぽいな。俺向こうを見ると、“鳥”はゆっくりと立ち上がっていた。

「糞……ったれがあぁあぁあ！！」

“鳥”は思い切りひねられた方の手をグキリと無茶に戻すと、頭を押させた。

「おいおい、そんな風に治さなくても良いんじゃないか？」
その状況を見ていた廻家も思わず引く。

「ワイは吸血鬼……、再生能力も馬鹿でかいんだっての！」
実際、“鳥”も拳を結んで開いてしていた。
そして、またも消える。

「夜闇……ってほどでもないが、気配を消すのは得意なんだぜ？」
今度は速度に身を任せた訳ではなく、本当に消えたようになったようだった。

地面は回転できそうに無い……、こりゃ、久々に本気で才能を使わなきゃならないか……。

「……死ね」

後ろから声。

廻家はそれに瞬時に反応して足のボールで回転して振り向くが、そこには両手をあわせて握り締めた拳が。

もちろん、吸血鬼の怪力で強化された拳である。

ドオンと大きく鈍い音を出し、その衝撃に耐えられず回転しながら吹っ飛んだ。
「吹っ飛んだ廻家に“鳥”が言う。」

「吸血鬼の、目を舐めるな。今、上手くダメージを減らしたな？」
吹っ飛んだ廻家に“鳥”が言う。

「減らしてもよ……、痛いもんは痛いんだっての」
鼻から血を流しながら、よろよろと廻家は立ち上がる。

「そう言うなや。今のは頭部爆裂コース。普通なら後頭部からトマトみたいになっとるレベルなんじゃきーの」

「回転する力が無かったら、楽になれたのかな……」

廻家は“巡る輪廻”を使って自分の身体を攻撃してきた方向に回転させることで、自分のダメージをある程度減らしたのだ。

「廻り廻るよ、世界は、廻る」

「ん？」

廻家はふと呟いた。

「世界は、偶然で出来ている」

「何言ってるんだ？」

廻家は呟きを止めない。

そして廻家はゆっくりと腰に右手を回した。

「偶然から成功を手にするには、全力を尽くさねばならない」
そしてしゃがみながらも片膝立ちのような構えになる。

「自分が傷つくことを、恐れること無かれ。自分が慢心することを、恐れること無かれ」

「???」

“鳥”は訳が分からず廻家のペースに吞まれる。

廻家は、突然動いた。

思い切り踏み出すように“鳥”に近づく。

「どれだけ不意をついたとしても、吸血鬼の目はごまかせんさー!!」
“鳥”はその廻家のいきなりの挙動にも焦らず、対処した。

いや、対処したはずだった。

想像していた速さにあわせてカウンターを叩き込もうと思っていた“鳥”は、

気がつくとも腹部を思い切り殴られていた。

……速い!!??

“鳥”は気がついた。

廻家が飛び出した速度よりも明らかに速度が上がっていることに。

廻家は自分に当てた右手で自分に回転の力を与えた。

それは、ぐるぐると回る、というようなものとは少し違っていた。例えば、地球は丸いが、普通に生活している人間はそのことを自覚しているのだろうか？

答えはほとんどノー（イエスと答える人間は多分ひねくれた人）だ。

非常に大きな円を描けば、その中の弧は直線に近い軌道を描く。廻家は大きな円の回転軸を回転させると考え、ほとんど直線に近い力を得、飛び出した速度よりも加速したのだ。

そして“鳥”の視界が少しずつ回転する。

「この拳には回転の力が掛かっている。一つは拳の威力を挙げために、もう一つは————」

「お、おとおおおお!!?」

“鳥”がぐるぐると回転しながら後ろに吹っ飛ぶ。

「お前に触れた瞬間に回転する力を与えてある。吹き飛ば。サイクロの射手”！！」

その回転数は人間が耐えられるような数では無かった。

ドンツと“鳥”は壁にぶつかり、そこである程度ぐるぐると回転した後、ゆっくりと地面に落ちた。

「遠心力で内臓とかぐちゃぐちゃだろ。まあ、吸血鬼だからダメー
ジなら再生できるのかも知れないが、ずれた内臓の位置はどうする
んだろうな？」

“鳥”は沈黙していた。

明らかにしばらくは立ち上がらないだろう。

「語るってのは俺の性に合わないんだがな。時間稼ぎくらいにはな
るな。それに……、語るのも面白い」

廻家は非常にかっこいい感じで戦いを終わらせた。

&1 t.; 2& g t.;)俺達と黒服との戦い。) (回転VS化物) (後書き)

結構かっこいい感じになった気がします。

え？ 私だけ？

<2>;俺達と黒服との戦い。(先生VS気弱)

B4F、叶side。

「え、えと……。こういうときは自己紹介をしたほうがいいんじゃないでしょうか……。僕は“DBY”デイ・ビフォー・イエスタデイって言ってます……」

叶の前に現れたのはとても気の弱そうな黒服の男だった。

「へえ。私は富士叶っていうの。よろしくね♪」

「は、はい……。でも、ここで倒されてもらうんですけどね」

“DBY”は腰周りに八つの飾りのようなものを付けていた。それは剣の柄えと鍔つばだけのものだった。

「それで何するの？」

「これは僕の武器……。僕の才能、メタル・アーティスト“操鉄能力”のね」

その柄を持つと、そこから刃が飛び出した。

「メタル・アーティスト……。’メタルメイカー発鉄能力’みたいなものかしら」

「そんな陳腐な能力と一緒にしないことだね!!」

“DBY”がその出来た剣を振りかぶった。

その剣の長さから考えて、叶には決して届かないと思われたが――

「危なっ!!」

その剣が叶まで届いた。

振りかぶられた剣はその途中でどんどん長さが伸びていったのだ。

そして鞭のような柔らかさを見せて叶に向かった。

それを叶はぎりぎりで避けた。

「舐めないでよね！」

振り下ろしていた剣を右手に持ち、もう一つの柄を左手に持つと、今度は刃のようなものではなくレイピアのような鋭い剣先が生まれ、叶に向かった。

それを紙一重で叶は避けると、“D B Y”へ走っていった。

メタル・シールド
「鉄壁！！！」

“D B Y”が手を前に出すと、鉄の壁が叶の目の前に現れた。いつの間にかあんなに長かった剣も無かったことになっていた。

「こんなもので、私を止められないよ♪」

叶は左手で鉄壁に触れ、右手の掌底（手首より上の手のひら部分）を思い切り鉄壁にぶつけた。

「衝・撃！！！」

ドオンとまるで鋼鉄に攻撃したとは思えないような音が出ると、一瞬間を置いてから、鉄の壁が砕け散った。

「えっ！？ そんな！！！」

“D B Y”はその状況を見て非常に驚いていた。

「叶さん、あなたは肉体強化系の才能……？」

「そんなものじゃないわよ♪」

叶はそのまま“D B Y”に迫る。

「まだ、負けないよ！！！」

“D B Y”は両腰から短剣を取り出し構えた。

「私の才能、インパクト・ギザァー“衝撃をあなたに”はその名のとおり、衝撃を……、与える！！！」

叶は両手を一瞬だけ短剣に当たるか当たらないかまで近づけた。

すると、一瞬間を置いてから剣が内部から砕け散った。

「……、まるで北斗○拳みたいな感じですか？」

「フフッ。否定できないのが残念ね」

叶はそのまま両手で小さな球を描くように構えると、その中の空間が陽炎のように少し歪んで見える。

「それが、衝撃ですか？」

「ええ。わざわざ私の才能を教えてあげたんだから、少しは持ちこたえてね♪」

するとかめ○め波のようにそれを打ち出した。

しかし、何も起こらない。

「……？ 何ですか？」

「別に♪」

「……、ああもう！！ あなたの才能は衝撃なんですよね！ なら、さっさと本気を出しておけばよかった」

イライラしながらも、“DBY”はまたも両腰から二本ずつ取り出した。

そこから出た鉄は、まるで糸のような細さをしていた。

「“有私鉄尖”はこの地面が堅いから使えないんですよね。だからこそ、昔の————」

そこでその糸のような剣を愛でるように見た。

「血が騒ぐんですよ♪」

“DBY”は何かの愉悦に浸っているような顔をする。

叶はゾクリとした。

その笑顔に。

普通に生活していれば、こんな顔は出来ない。

「殺人鬼のね♪」

「……、♪は私の専売特許なんだけどなー」
怖い。

さっきまで謝っていた男とは違う。

いや、隠していたんだろうか。

叶は今までの男との変貌ぶりに恐怖していた。

しらじらしい言葉しかでない。

「ぎーんの線にー、赤ーい筋ー♪」
急に“D B Y”が歌いだした。

「美しい花をー、赤い花をー♪」
回りながらその細い糸を振る。

もちろんそんなものに殺傷能力などない。
それを無視して“D B Y”へ叶は迫る。

さっさとこいつを倒したい。

「怖いけど、考えなさすぎ————、って!!」

“D B Y”は愉悦に浸っていて、すぐそこまで迫っていた叶に気づかなかった。

「これでも!!」

“D B Y”は振っていないなかった方の細い糸を叶に振る。
が、もちろん攻撃力は皆無で、ほとんど無視された。

「波っ!!」

右の掌底が“D B Y”に当たる。

「うわぁ!! ————ってあれ? 痛くない?」

だが、その掌底は“D B Y”を決して攻撃することなく、本当に触れるくらいで止められている。

「わかんないけど、この距離は僕の範囲だよ？」

“D B Y”は両腕を交差させた。

「???」

その行為が叶はよく分からなかったが、すぐに分かることになった。

「えっ!？」

キュツと首が絞まる感覚がした。

「どう、僕の技は」

「さっきの……、糸……?」

“D B Y”はその鉄を操る能力で、右手と左手で振った別々の糸を繋ぎ長さを少しずつ元に戻した。

そのわっかが叶についたのを見て、腕を交差させた。
そうすることで首に糸が絡みついたのだ。

「このままゆっくりと締め上げるね♪」

キリキリキリとだんだん鉄の糸が首を締め付けてくる。

「赤い花を咲かして欲しいな♪」

このまま行けば叶の首は斬られてしまうだろう。

「油断は……、禁物よ……♪」

「喋ると切れちゃうよ……、って言う前に少し切れちゃったじゃないかー」

のどを動かしたせいで少し斬れてしまっていた。

「一つだけ言わせてもらおうとね……」

「よくこんな状況で喋れるね？」

「この範囲は私の領域でもあるのよ♪」

「……？」

“D B Y”は頭に？を浮かべていた。

トンツと軽く叶は“D B Y”のおなかの辺りを掌底で押す。

「だから、叶さん。君の攻撃は痛くないよ？」

「そう……、かしらね♪」

フツと不敵に叶は笑った。

その時。

「あれ……？ 地震？」

“D B Y”は地震が起きたのかと思った。

もちろん地震など起きていない。

だが、体が揺れたかと思った。

「がふっ……！？」

“D B Y”は何の予兆もなく、吐血した。

「あなたはまだ気づいてないんだよね。私の才能に。術中に嵌っていることにも」

「……？」

体が急にふらついて“D B Y”は倒れこむ。

糸は緩み叶は自由になる。

「私の才能は衝撃って言ったでしょ？ 私の才能は相手に蓄積するの」

「ゴフッ！」

また“D B Y”は吐血する。

「この力、衝撃は相手の内部に蓄積するの。鉄壁に攻撃したときに壊れるのに一瞬間を置いたのはこのせい。蓄積してから効果が及ぶのに時間が掛かるの。この衝撃は与えてからある程度の物理的接触の後に発動するの。だから、この衝撃は物理的接触の力を倍加させたりも出来る。これで鉄壁を壊したんだけどね」

「なら……、あなたの攻撃が痛くなかったのは……」

「衝撃自体にはそこまで攻撃力は無い。今までの私の攻撃はすべて衝撃を与えるものだったから。最初の掌底も、衝撃を球にして飛ばしたときも、あなたが私のそばに立っているときも」

「そば……？」

インバクト・フィールド

「私の才能の技。“絶対領域”は、体の回りに衝撃を与える球を作り出すの。ほら、よくて見なさいな」

ドンツと胸を張る叶。

その周りをよく見てみると、景色が少し歪んで見える。

「この範囲に入っている間その対象の相手は私の衝撃を受け続けるの。だから、私の領域でもあるの」

「なっ……」

「じゃあ、これでフィニッシュになるのかしら」

少し叶は腰を落とし、右の掌底を構えた。

そして、ゴウとした勢いで手を振る。

その手は“D B Y”の頭の辺りを触れて止まっている。

「あ、さっき言ったけどさ。衝撃は攻撃力が無いっていったけど、衝撃も溜まり過ぎるといつか爆発してね」

「……？」

「もうそろそろね。はじけ飛ぶわよ？ インバクトダウン 衝撃崩壊」

ブウウンと視界が思いつき揺れて感じる。

「かっ!？」

その瞬間、“D B Y” 皮膚が裂け、血が噴き出す。
そして倒れこんだ。

「返り血がついちゃったかー。生徒の前に出れないな」
叶は自分の服を見ながら可愛くそう呟き、戦いを終わらせた。

&l t; 2&g t;; 俺達と黒服との戦い。 〵

(先生VS気弱)

(後書き)

叶先生の才能、“衝撃をあなたに”。

実はこの才能もつと早めに出す予定だったんです。

いや、だから何って話でしたね。

&1 t.; 2 & g t.; 俺達と黒服との戦い。 劣化VS劣化 前書き

だんだん話も佳境になってきました。

&l t; 2 & g t; ；俺達と黒服との戦い。 ； （劣化VS劣化）

B4F、祈side。

「私の相手はあなたなのね？ 私は^{ディ・アフター・トゥモロー}“DAT”よ。よろしくね」
祈の前に現れたのは黒服の女だった。

一つ特徴としてあげるなら、深紅のように紅い^{あか}ネクタイだ。

「そう。私は富士祈。間之崎で理事長をさせてもらっているわ」

「まあ、こんな自己紹介必要ないんじゃないかしら？ さっさとぶつ潰されるんだから、私に」

「何言ってるの？ 私がぶつ潰すんでしょ？」

顔はかなり綺麗な二人だが、言っていることが汚かった。

ある意味似た二人なのかも知れない。

ゆっくりと“DAT”は祈に歩を進める。

そして三步ほど歩いたその時だった。

“DAT”の体が急に伸びたように見えた。

「は……、あ……？」

気がつくと、“DAT”の右拳が祈の中心に刺さっていた。

いくら駆け出してもまだ届かないであろう距離から急に近づいてきたため、油断していた。

息を吐き出すような抜けた声が出る。

「こうして、はい」

予備動作も無く、左腕が伸びたようになって一瞬で左拳がまた祈

の腹に刺さる。

祈の腹に思いっきり刺さったその拳は祈をくの字に折り曲げ、すっ飛ばした。

「さて、もう負ける気がしないから言わせてもらおうとさ、私の才能。
クイックムーヴ

“定点移動” って言うんだけどさ」

ドスリとまた右拳が倒れこんだ祈に刺さる。

「これは劣化した瞬間移動と言っても遜色ないわね。そんしょう動かしたいところまでを頭で想像すると、そこまで身体が一瞬で移動するの。とは言っても、距離は一メートル程。とはいえ、壁を抜けることも出来ない。これは凄く速く移動するって才能で、次元を超えてワープする訳じゃないから。それに、腕とかを選択すると、この才能移動し終わるまで止まらないから下手すると腕が千切れないから注意が必要なんだけどね。だから、これは瞬間移動としても使えない」

ドン！！ ドン！！ とたこ殴りに近い諸行をする。

「でも、こと戦闘に関しては使えるのよね。これには予備動作がないから、敵の油断もつけるし。」

またもブンと拳が一瞬で祈に迫る。

だが、その拳が当たることはなかった。

「痛ったいわね……。さすがに色々死地を乗り越えてきたとはいえ……。ね……」

どこを狙っているのか分からないその攻撃を、祈は顔を横にして避けていた。

顔の横には拳。

「どうして、避けられたのかしら？」

口調はまだ落ち着いたものだが、目は有り得ないものでも見るよ

うな目だった。

「あなたが滔々^{とうとう}と才能を馬鹿みたいに喋ってくれたからね。私も才能を教えてあげるわ」

皮肉たつぷりに祈は言う。

「へえ、そりやどうも!!」

ブンとまたも予備動作無く“DAT”の拳が祈に迫るが、またも祈は身体を少しずらして避ける。

「私の才能は“一寸先の未来”^{インフエリアー・フューチャー}。私もあなたと似ているわね。劣化したってところでね。」

祈はゆっくりと立ち上がる。

「これは五秒先の未来まで見れる。たった、五秒。だから、生活とかギャンブルでまったく使えない。劣化してるでしょ?」

そして拳を構えた。

「でも、こと戦闘に関しては使えるのよね。戦闘では十分も一時間も先を読む必要は無い。五秒は最適な時間なのよ」

先ほどの“DAT”と同じように言った。

「それは……。私の才能と相性悪すぎるわね。でも、それならどうして最初の方の攻撃を受けたのよ」

「私が読めるのは五秒。逆に言えばそれまでにほんの少しのブランクがあるの。攻撃は読めていたけど、間合いが迫って予備動作が見えてから動こうと思ったの。それに……」

「それに、何よ」

「あなたの才能が図りかねていたからね。まさか、自分で語る馬鹿がいるとは思えなかったけど」

最後は思い切り馬鹿にした。

「五月蠅^{うるせ}いわね。あーあ、勝てる気がしないわね。良いわよ。私は

負ける戦いはしないタイプだから、血湧き肉踊るようなことはもうしないわ」

「自分の才能をばらすような馬鹿なのに、ちゃんと先は見えるのね」

「まだ引きずってるの？ 小さい女ね」

「この程度で怒るの？ 小さい女ね」

まるで十年來の知り合いの会話のようだった。

「あなたとは気が合いそうね。コードネームじゃなくて、本当の名前を教えて欲しいわ」

「私？ 千崎せんざき継夜けいや。まるで男みたいだけどね」

「そう？ いい名前だけれど」

祈はまるで少年漫画で戦った相手と仲良くなったかのような感じで、戦いを終わらせた。

と、ここで話は終わらなかった。

何者かに祈はカチャリと銃が後頭部に突きつけられた。

「どうしたの？ 私に欲情でもしたの？」

祈はやはり挑発したようにその男に言った。

「ねえ、何を血迷ったの？ 太陽」

銃を突きつけていたのは、赤井太陽だった。

<2>俺達と黒服との戦い。(父親VS魔性)

B4F、太陽side。

「妻子が要るそうだけど、この“恋”^{ラヴ}に身を委ねて楽になってみない？」

太陽の前に現れたのは艶^{なまめ}かしくも美しい女性だった。

「だからそんなものにうつつを抜かせる訳が無いだろうがよ。俺は妻に、美月に誓いを立ててるんでな」

「一途な男って好きよ？」

「そうか、残念だったな」

皮肉のように、息子のように返す太陽。

「でも、もう終わったわね」

“恋”はそう呟いた。

「!？」

身体が……、動かせない……？

太陽は目を見開いたまま硬直した。

「私の才能は、最強よ」

“恋”は固まったまま動けない太陽に近づく。

違う。

身体が動かせないんじゃない。

この女に、攻撃したくないと身体に命令されているような……。

「どう……、いう……、ことだ……？」

口を動かすのもやっとだった。

「フッフ。私の力は“ラヴァーズ神経衰弱”。私は、世界全てを支配できるわ」
「は……？」

「世界の半分だんせいを魅惑し、世界の半分じよせいを魅了する。だから、世界全てを支配できるの」

「そりゃ、ご大層なこった。精神系の才能か……」

「悪の組織は戦闘的な才能だけじゃないってこと。私はそれに、“花鳥風月”より上だしね」
胸を張る“恋”。

「ぼちぼち、喋れなくなってきたて、私の見える姿もおかしくなって、その最愛の奥さんとか言う美月さんあたりに変わってくる頃じゃないのかしら？」

“太陽、やっと帰ってきたのね！！”

“むー、世話焼かせないでよねー”

“私は、太陽が一番好きなんだよ”

美月。

ああ、やばいな。

今日の前にいるのは敵のはずなんだが。

流石に精神系は掛かっちゃったら最後自分の精神力頼みだからな。
どうしようも、ねえ……。

「この力は誰も抗あらがえない。今までこの才能が効かなかったのはたつた二人。“創造主”は帰却キャンセルがあるからともかく、あの男は……」

あの男？

逃れる方法などあるのだろうか？

「紅桜。あの男……」

紅桜……、さっきまでいた男か。

そういえば聞いたことある名前なんだよな。

「そりゃ、有名に決まってるじゃない。 “紅鬼”^{あかおに}、 “相對すな”、 “人類最強” の異名の、紅桜よ？」

心が読まれた!?

いや、そんなことは精神系ならしょうがない。

思い出した。

むしろ、今まであの名前を聞いて何故思い出せなかったんだ。

あの紅桜。

実際に見たことは無かったが……。

傭兵としてアイツは動かないからな……。

気分で動くとか。

だからこそ戦うことは無かったんだが……。

「まったく、嫌になるわよ。才能を否定されるなんて。アイデンティティーの消失よ」

才能だけがアイデンティティーなんて、悲しいな。

「あなたに言われたくないわね。才能すら無いくせに。じゃあ、私のために戦いなさい」

そう“恋”が言うと、身体が勝手に動く。

操る力かよ。

「あなたが何を思おうがもう関係ないわ。身体はもうほとんど自由に動かせない。私の言葉はその美月だったわけ？ その人と同じ重さを持つから」

あ、やばい。

声まで美月だ。

やばい、美月が。

「これ、あなたの娘さん？ ってこれが美月って人！？ ちょっと、法律的に大丈夫なの？」

美月の姿を心を読んで見た“恋”は、ドン引きした。

そこに映っていたのは少女といって間違いないような女だったからだ。

うるせー、人の嫁に口答えすんなっての。

「じゃあ、殺ってきて。その人から」
身体が勝手に！！

カチャリと銃を突きつけた。

「どうしたの？ 私に欲情でもしたの？」
すまない、逃げてくれ！！

「ねえ、何を血迷ったの？ 太陽」

俺は、祈に銃を突きつけていた。

「無理よ。その男は私の才能に魅了された。魅了されてしまった」

「はあ？ って、くっ！？」

「あなたも私の虜とりこになったみたいね」

祈も身体が動かなくなる。

「見てなさい。私のことどう思う？」

「か、かわ、くっ!! 綺麗……、だ……」

太陽は口が勝手に動いてしまう。

「ほら、私の才能は最強でしょ？ 世界をぶっ潰せる、傾国の力よ？ さあ、撃ちなさい」

太陽が引き金に力を入れる。

「フッ……」

祈は何故か少し笑って見えた。

バンツと、乾いた銃声が響いた。

「う……、そ……？」

「すぐ手当てすりゃ死ぬことは無い。ったく……、女に手を挙げるのは、嫌いなんだよ」

打ち抜かれていたのは、“恋”の右の太ももだった。

「どうして、私が撃てるのよ!!」

右の太ももを押さえながら、必死に叫ぶ。

「それは、まだ太陽があなたに完璧に乗っ取られていなかったからでしょうね」

“恋”に答えたのは祈の方だった。

「どういうこと……？」

「あなたさっき、『私のことどう思う？』って聞いたでしょ？」
「それが何？」

「それは――――、」

「そこは俺が言う」

祈の説明を止めて、太陽が顔を少し歪めて言う。

「俺のポリシーの一つ。女を褒めるときには愛を持った人間以外には『可愛い』とは言わないんだよ」

「だから、何？」

「逆に言えば、愛を持った人間には必ず褒めるときに『可愛い』を使う」

「だから――――、まさか!！」

“恋”は何かに気づいたようだ。

「アンタの才能は人に愛させる才能なんだろう？　もしも俺の心を完璧に乗っ取ったなら、俺は『可愛い』っていうはずなんだよ。そこで、祈も気づいたんだろうけどな」

「……。なんでその言葉にだけこだわるの？　ポリシーになる理由が分からないわ」

「そんなことにも気づかないのか。『綺麗だ』とか、『美しい』には、『愛』の文字が入ってないんだよ。『可愛い』には、愛があるんだよ」

「そんな……、理由」

“恋”はふう……と溜息をつく。

「まあ、流石に乗っ取られていないとはいえ、身体が言うことを聞かなかったんでな。まったく、こりゃあいこになりそうだぜ？」

そう言っって祈の前に出る。

「そ……、れは……？　何で自分で……？」

“恋”はその太陽の姿を見て息を呑んだ。

太陽の右太ももにも、刃渡り20cmほどのサバイバルナイフが刺さっていた。

「これぐらいやんねーと、身体が言うこと聞かなくなてな。祈の後ろに回ったときに、腰にあったナイフを刺しておいた」

「おかしいでしょ！？ 何でそれなら、普通に会話できるのよ！！！」

「いや、敵に痛みを悟られるなつてのもポリシーの一つなんだよ。女には手を出したくなかったんでな、だが、アンタを攻撃しないとこの呪縛も解けそうもない。だから、同じ所を攻撃した」

「どんだけ……、フェミニストなのよ……」

太陽は片膝をつき、相手を気遣いながらも戦いを終わらせた。

&l t.; 2 & g t.; 俺達と黒服との戦い。 〽 (回転V S創造) (前書き)

これから先、更新が遅れることがあると思います。

ごめんなさい。

「大丈夫なんですか？ 太陽さん」

「ちよっとこの先戦うのはきつそうだな」

「はい、これハンカチ」

祈から手渡されたハンカチをビリビリと裂き、右の太もも辺りをきつく縛る。

「“恋”さん、大丈夫なんですか？ あーあー、“DBY”もこんなボロボロになっちゃって」

「どうして、あなたは怪我一つしていないのですか？」

「戦う気が失せた。負ける戦はしないのが私の主義。ほら、さっさと止血処置だけはしておきますよ」

「分かったわ。――――、っ痛！」

「我慢するんです。これやっとなないと死ぬかもしれませんよ？」

“恋”の手当ては“DAT”がしていた。

紅いネクタイを外してきつく結ぶ。

その時だった。

チンと安っぽい音が鳴った。

「さて、こちらはどうなっているかな？」

「俺達が出るってこと〓死なんだけどな」

真ん中を通っていたエレベーターが開き、中から二人の男が現れた。

「なっ!!」

「遂に、本気出したのかしら? “創造主”」

“恋”と“DAT”がその面子を見て驚愕している。

「あらら、“恋”^{ラヴ}。やられちまってるじゃねえか」

「うるさいわね。さっさと倒しなさいよ。“痛”^{ペイン}」

その二人とは、“創造主”と“痛”だった。

「そういえば、“鳥”はどこに行った?」

「そこに……? あれ? 先ほどまでいたはずなのですが」

“創造主”があたりを見渡して仲間を探していた。

“鳥”、逃げたか。まあいい。さてお前達、相手をしよう」

「言っとくけど、俺と戦う⇨敗北ってことは悟っとけよ?」

“創造主”は極めて落ち着いて、“痛”は挑発するように言う。

「“痛”……、やばいよ、お姉ちゃん」

「赤井君がいないこの状況、最悪だわね」

「こいつが“痛”。お前達が言ってたやばい奴か。いや、そんなことよりも、だな。“創造”^{クリエイター}」

廻家は“創造主”に歩いて詰め寄る。

「その名前はもうとっくに捨てている。今は“創造主”^{クリエイター}だ」

「お前、あの事件から変わっちゃったな」

「黙れ。———、“痛”、こいつは俺がやる。他の奴らの相手を頼む」

「ほいほい。とはいえ、全員やられてるしな、骨の無い仕事だな」
そうして廻家と“創造主”が歩いて右の端のほうへ行く。

「ほら、さつさとやるぞ。“回^{スピン}転”」

「成程な。昔のあだ名なんて、言われても嬉しくないな」

“回^{スピン}転”もとい廻家は、はあ……と手を横に振る。

「ここでさつさと倒しておくか」

右手を廻家に向ける。

「正直、勝てる気がしないな。最強の四天王、“4C”に、俺が挑んでるなんて」

「その話をするな」

「そうかよ、過去をうじうじと引っ張ってる馬鹿野郎が」

廻家はそこで言葉を切ると、両手を前に突き出す構えにした。

「全てを回せ」

ヒュウと風の音が鳴り出す。

「お前の才能で俺に勝てると思ってるのか？」

「ま、多分無理だろうな」

だんだん廻家からゴォォと響くような音に変わる。

「創造^{ストーム}…爆風」

ゴツと“創造主”の右手辺りから音が鳴り巻き風が吹く。

「おらっ!!」

ゴツと廻家からも両手辺りから音が鳴り巻き風が吹く。

その風は真ん中で衝突すると、消えてなくなる。

「お前の力でやろうとすることなど、簡単に真似できる。武器はどうした？」

「お前の作戦が思いのほか朝早くにやられたもんで、家に忘れちゃった」

「そうか、なら俺が確実に――――、勝つ」

言葉を途中で区切り、右腕を後ろに回し左腕を腰辺りで少し曲げて構えた。

瞬間、凄い速さで“創造主”が廻家に迫る。

足腰は全く動いていなかったにも関わらず、だった。

それに対応しきれず、思い切り顔面を廻家は“創造主”に殴られる。

そのまま吹っ飛ばされ、地面に倒れこむ。

「か、ったくよお。それ、強すぎだろ。消キャンセルカノンし去る砲弾」

「俺の力を差し引いても、弱すぎるな。鈍ったか？」

「さっきお前の仲間に散々殴られてな。それより、殺すのか？」

“創造主”は吹っ飛ばされた廻家に馬乗りになっていた。

そして、頭に右手を当てられる。

「俺は、アイツと同じようなことをするつもりは無い。ただ、しばらくは黙っていてくれ」

“創造主”は廻家の手に手錠を掛けた。

&l t; 2&g t;; 俺達と黒服との戦い。 父親VS超念 (前書き)

ふつかーーーーっーーーー!!!

大変な仕事に追われてまして。

それがようやく山場を越えましたー!!

更新遅れてごめんなさい。

「みんな手負いなんだろう？　　ったく、つまんねー仕事任されたもん
だ」

“痛”^{ペイン}と呼ばれていた男が気だるそうに呟く。

「おい、焰はどうしたんだ」

太陽はこの桜が何故ここにいるのか分からなかった。
こいつは俺と一緒に間之崎に来た焰と戦っていたはずだ。

「ああ、焰先生ですか？　さっくりざっくり倒したけど？」

「……やっぱりか」

叶と祈が敗れた相手だ。

相当の強さを持っているのだろう。

「とはいえ、あの人は流石だったな。本当ならもっと早くここに来
たかったし、服を着替えさせられるとは」

どうやら“痛”は自分が負けるとは微塵も考えていないらしい。
その態度に太陽は非常に腹が立った。

バンと銃声が響く。

「男なら容赦する気は無い。　　ったく、油断するところなる――――
――、何？」

太陽は手に銃を持っていた。

そのまま“痛”の心臓へ目掛けて撃ったのだ。

だが、その銃弾は“痛”の身体に当たるか当たらないか位のところ
で止められていた。

「危ねえ危ねえ。傭兵ってのは油断も隙もあつたもんじゃないな」

“痛”は手を横にしてやれやれというようなジェスチャーをとる。

「それが、才能か？」

「そう。念能力サイコキネシスってのはよく応用がされやすい。その叶先生の衝撃だつてそれに入る。だが、元を辿れば一つの力しかない。『触れることなく物体を運動させる』だ。叶先生は衝撃として空間レベルで才能を使つてたんだろうな」

「それで、銃弾を止めたつてのか？」

「話が早い。こうすればもっと分かりやすいか？」

“痛”が太陽を一瞥する。

その瞬間、太陽が壁に吹っ飛ばされ叩きつけられた。

「な、手品みたいだろ？ 俺はまったく触れてない。種も仕掛けもありやしない。才能はあるけどな」

「ガッ……！」

不意に結構な勢いで叩きつけられた太陽はかなりのダメージを受けているようだ。

「どうす」

どうするよ、と“痛”が言おうとしていたその時だった。

“痛”が急に停止した。

固まったかと思うくらい。

「やっぱりお前らが来てたのか。裏切るとでも思ったのかねえうちの大将は。それにしてもよお、お前らしくねえなあ。足にナイフぶっ刺して、壁際まで追いやられてるなんてよお」

その声は通路の方から聞こえてきた。

嫌味の入った言葉。

これは、まさか。

「白道！？」

通路の方を見ると、旧友の姿があった。

「月影は、やっぱりそっちの仲間だったんだね……」

「の割には、太陽のピンチを救ってくれたように見えるけど？」
叶と祈もその顔を見て思い思いの反応をする。

「お前ら、貸しは高くつくと思っとけよお？ 今お前達のピンチを止めたばかりじゃなく、他にも俺はお前達のために適当に尽力してやったんだからなあ」

「他にも？」

白道の言っている意味がまだ分からなかった。

「ほら、出てみろって」

白道が後ろを振り向き、後ろに話しかける。

まだ通路には白道以外にいるのか？

みると5・6人の人影が見える。

「白道、俺はまだお前を信じた訳じゃ——————って、父さん！？」

そこから出てきたのは捕まっていたはずの、赤井夢斗だった。

&1 t.; 2 & g t.; 俺達と黒服との戦い。 父親VS超念 (後書き)

はちみつトースト、おいしい。

焼いた食パンに蜂蜜をぬっただけですが。

&1 t.; 3 & g t.; 救出者達、その裏側。 白道の語り 前書き

話も佳境に近づいてきた……、かな？

<3>救出者達、その裏側。< (白道の語り)

「どうして父さんがここに!？」

「お前捕まってたんじゃないのか!？」

親子がここに感動の出会いを迎えた。

「へえ、あれが赤井のお父さん。結構かっこいい人なのね」

「でも怪我してる!! 足!!」

「あれは……、かなりきつい痛手だと思いますよ」

「でも凄く普通に会話してるじゃん？」

「驚きー。痛くないのかなー」

赤井が出てきた通路からぞろぞろと出てくる。

篠崎、紅、相馬、染山、十島だった。

「どうして白道、お前がここにいる? 持ち場を離れて、更に捕ま

えていた者達を放すとはどういう神経をしているんだ？」

その感動のシーンに水を差すように言葉が入ってくる。

廻家との戦いを終えたのであろう“創造主”^{クリエイター}だった。

「別に俺はアンタが真面目にこいつらと戦わせてくれてたら戦ってたさ。ただ、まるで左遷みたいに俺だけ戦闘の前線に立たせてくれないなんてよお、酷いじゃねえか。だから、ちよつといたずらをしようと思ったわけよ。あ、そうだ。^{アウト}解除」

自分は悪くないとでも言いたげな顔でいけしゃあしゃあと白道は言った。

白道が最後に言った言葉で、“痛”も動き出した。

「るよ? ってあれ? 何が起きてんだ？」

どうするよ?と言おうとしていたのだろう。

変なところで区切られたせいで『るよ』なんていう訳の分からない

い単語になっていた。

時間を止められていたせいで、今の赤井親子が揃っていたり他にも間之崎の捕まっていた生徒がここにいることに訳が分からないでいる様子だった。

「そういえばお前はそんな性格か……」

“創造主”も頭を抱えている。

「でも赤井はともかく、どうやって、いやむしろなんで他の彼らまで助けたの？ 赤井君、あ、夢斗君の方ね。夢斗君に助けてってお願いされたの？」

叶が不意に白道に聞いた。

「お前、自分の生徒だろ……。助けてもらったことを素直に喜べよ。後、赤井少年から助けを求められては無い。赤井君からすれば、俺が裏表無く助けようとしているなんて想像もつかなかっただろうから」

そこで白道は赤井を見る。

悪かったな、といった風な顔をしていた。

「ならどうして助けたのよ？」

「だからお前の口調助けて欲しくなかったみたいにとれるって」

「だって、白道の性格なら気に入った赤井君とかならともかく、他の生徒たちまで救いそうに無いんだもん」

それは太陽にとっても同感だった。

この白道がどうでもいい捕まっていた赤井の友達を助けるだろうか？

「そこまで言われるとちょっとへこむぜ。まあ、それはどっちゃかつーと俺じゃなくてその三人に聞いた方が速いと思うぜ？」

白道は振り返って三人、相馬、染山、十島の方を見る。

「確かに、そうじゃん」

「えへへー」

「では、誰から簡単に話しましょうか」

「じゃ、時間軸的に俺達からじゃん？ 多分」

「では、時間を少し戻してみよー」

最初に説明してくれるのは染山と十島のだ。

赤井がトラックで運ばれて“創造主”の居るビルに到着した頃。

「しかし、あれは……」

「あそこまでする人たちのかな」

梁山と十島はさっきみた映像が頭から離れなかった。

さっき見た映像とは、そこにいた人々がまとめて切り刻まれていて、あたり一面が血の海、血溜まりと化していたものである。

「酷かったじゃん。黒服を着た奴らはこんなことをするじゃんか？」

「あれはー、って、前から誰か来るよ？」

二人がああ場を早急に立ち去っていると、前から一人ふらふらとこっちに歩いてきた。

「黒服？」

その人は黒いスーツを身に纏っていた。

黒服の戦闘員だろうか。

そう思い警戒を強める。

「待て！！ 警戒しなくてもいい！！ 私話を聞いてくれないか

！！」

その黒服は両手を挙げて敵意が無いことを伝えてきた。

「どうするー？」

「まだ警戒は解くな」

梁山と十島はまだ険しい顔をする。

その黒服は走ってこっちへと向かってくる。

「君達赤井君の仲間だよね!! 写真で見せられたんだ!! 赤井君、そして君の友達が捕まえられたんだ!!」

「何？」

「嘘はついてないー、よー」

「お願いがあるんだ!! これから赤井君達を助けに行こうと思うんだが、手伝ってくれないか!!」

「どういう魂胆だろうか？」

「罠か？」

「君達が僕を疑うのも無理は無い。でも、僕はもう“統一された幸福な世界”^{ビ・ワールド}、黒服たちを裏切ってきているんだ!!」

「十島、これは？」

「嘘はついてないー」

「君達の才能も教えてもらっている。 “体温自在”^{カローリ・コントロール}の染山君、 “閃”^{センス}の十島君だろ？ それを見込んでの話なんだ、信じてくれ」

「どうやらこの黒服は俺達のことを知っているようだ。」

「十島の“閃”の的中率は99%だから、信用は出来るのだろう。」

「じゃあ、信じる。話つてのは、どういうことじゃん？」

「君達に赤井君達の救出を手伝って欲しい。今からそのアジトに向かおうと思うんだ」

「どうやってー？」

「私の才能は“瞬間移動”。それで今から君達を飛ばす。地下駐車場みたいなところに着くから、そこから通路に入ってくれ」

「変なところに飛ばすなよ？」

「当たり前だ!! 嘘はつかん。なんなら十島君に聞いてくれて構わん」

「十島」

「嘘はついてない」

「なら話を続ける。通路に入ったら、すぐに右の壁を溶かしてくれ」
「どういうことだ？」

「そこが隠し通路になっている。その先に隠しのエレベーターがあるから、それに乗ってB4まで降りてくれ。その先には道が広がっているから、そのまますすぐ進んでくれ。そうすれば捕虜室が見えてくるはずだ」

「一切の嘘なし。この人は本当に助けて欲しいみたいだよ」

「分かった。そこまで情報を教えてくれたのなら、協力しよう」

染山はそこで黒服と握手をした。

「じゃあ行くぞ」

黒服が二人の手を掴んで目をつぶった。

ジェットコースターで感じるような無重力を一瞬感じたかと思うと、目の前の景色が切り替わった。

「さて、この下だ。私は少し他の仕事がある。君達がここに入るのをごまかす、な」

「そうか、頑張るじゃん」

「頑張れー」

「お前達もな」

そうして二人は黒服と別れた。

「ハツ」

梁山と十島と分かれた黒服の男はある程度その場から離れると、

[illegible]

狂ったように笑い出した。

「確かに嘘はついて無いけどよ」

愉悦に顔を歪める。

「だからってお前達の仲間になったわけじゃねえだろうに」

誰に向かってでもなく、喋る。

「わざわざ死地に出向くような奴らとはな。まあいい。これで役者は全員揃った。後はどうなるか」

その男は特にあても無く歩く。

「俺としては最悪の終焉^{バッドエンド}を望むわけだが、赤井・夢斗がいるならば仕方^{フォーゲッター}がない。俺の“忘れ者”も、どうせ赤井が消し去るだろうしな。こうなったら、あの男がどこまで最悪^{ワースト}を最高^{ベスト}へと塗り替えるのか、調査するのも悪くない」

どうやらこの男は赤井を知っているようだ。

「面白くなってきやがった」

そう言った瞬間、場からその男が消えた。

&l t.; 3&g t.; 救出者達、その裏側。ゝ

(染山&a m p.; 十島編、2)

最近前書きに書くことがありません。

ネタ切れってやつなのです。

「えっと、ここの壁か」

地下駐車場から通路に入った梁山と十島は、黒服の話から壁に手をつけた。

「カロリーコントロール体温自在”、発動じゃん!!」

梁山の当てている壁の部分から、煙が噴き出だす。

そして赤く光りだす。

ズブリとその赤くなって柔らかくなった壁に手をつ込むと、横にクパアと広げた。

ゆっくりとその壁が開かれていく。その奥には通路が続いていた。

「本当にありやがったじゃん……。隠しのエレベーター」

「信じてなかったのー？」

「そりゃ、半信半疑ってやつじゃん」

通路の先まで進むと、エレベーターの扉を発見した。

そのままB4のボタンを押し、下降する。

「で、この先に牢屋ってやつがあるんだったじゃん？」

「そうなんだよー」

エレベーターから降りた先は、すこしだけ曲がっている先の見通せない通路だった。

「さっさと行くじゃん」

「長居はー、無用ー」

走り出す二人。

それでも、一応の警戒は解かない。

走り出して数分ですぐに牢屋は見つかった。
その扉を溶かして開ける。

「梁山君と十島君!？」

「どうして二人が!？」

そこにいたのは篠崎と紅だった。

「篠崎に紅……、助けられて本当によかったじゃん」

「あれ、でもー」

梁山は二人を発見できて安堵したが、十島は少し違っていた。

「赤井君はー？」

そう、赤井が居なかった。

「そうなのよ、赤井は私と一緒にここに連れてこられたはずなんだから……。ここには居ないわ」

一緒に来たという紅は知らないようだ。

篠崎も首を横に振る。

「今その手錠を外してやるからな」

梁山が手錠に近づく。

指の温度を上げて変形させて穴を広くさせようとしたのだ。

「無理だよ、梁山君」

篠崎は苦い顔で言う。

「この手錠はどうやら才能を封印しているらしい。この手錠に触れたら才能を使えなくなっちゃうんだ」

その話を聞いて、篠崎の顔も翳^{かげ}る。

「マジじゃん……。じゃあ、俺達がここに来てもしようも出来

ないじゃん……」

「そうかい、だからあんな風に人が捕まって抵抗できなかったりしたんだねー」

望みを失った染山を対照的に、十島は冷静に考えていた。

「ところで、どうしてあなた達はここに來れたの？」

篠崎が素朴な質問をする。

「それがな――――」

「それが――――」

染山と十島が同時に言う。

「つてあれ、俺達、どうしてここに來れたんじゃん？」

「んー、そういえば、どうして僕達はここに來れたんだろう？」

染山と十島は今までのこと、助言を、何故か忘れてしまっていた。

「ちょっと、おちよくってんの？」

紅がジトーっとした目で見つめてくる。

「いや、よく考えたら、どうして俺達はここまで迷わず來れたんじゃん？」

「全然わかんないよー？」

「本当に、わからないの？」

篠崎が二人の態度を見て、本当に忘れているのだと気づく。

「不思議な話じゃん……」

「摩訶不思議アドオンチャー？」

「それは曲名じゃん」

人間として、生理的に目を逸らしたくなる様な、血だまりのことは覚えていてというのに。

その後からが思い出せない。

「本当に訳がわかんないわよ、あんた達」

「確かに、俺もそう思うじゃん」

「そうだ、染山君と十島君に言っとかないと」

「何を？」

「何じゃん？」

「何ー？」

篠崎が何かを思い出し、紅に話を振るが紅に問い返されてしまった。

染山と十島もこちらを見てきた。

「紅は覚えてるでしょ。相馬君が、私達を助けるって行ってここから脱出したのよ」

「そうだった!!」

「は!?! どうやってじゃん!!」

「手錠、かけられてなかったのかなー？」

紅は思い出し、篠崎の物言いに染山と十島は訳が分からなくなっ

&l t.; 3 & g t.; 救出者達、その裏側。 〽 (梁山 & a m p.; 十島編、3)

最近晩御飯を食べた後にすぐ寝ちゃうことが多くて。

と、更新が遅れた言い訳をしてみます。

牢屋？　みたいな所。

「紅さんまでここにいらっしやいましたか」

「ちょ、紅！！　大丈夫なの！？」

相馬と篠崎がいた部屋に新たに紅が連れ込まれた。
両手には二人と同じように手錠が掛かっていた。

「紅！！　起きて！！」

篠崎は身体をすり寄せた。

「ん……、ここは？　って、“痛”^{ペイン}は！？　赤井は！？」

紅はブンブンと首がおかしくなるほど振った。

「よくわかんないけど、ここは牢屋……？　みたいところよ。も

ちろん赤井君も、そのペインとか言う人もいないわ」

篠崎が慌てている紅をゆっくりとなだめる。

「そう、なの……」

紅ががっくりと気を落とす。

「では、紅さんまでいらっしやったようですし、出陣しますか」

「「は？」」

相馬のいきなりの不思議な発言に篠崎と紅が聞き返した。

「いえいえ、篠崎さんが捕まったのは私の失敗からですし。紅さん
もここに来て、赤井君もここに居るようなので」

「そこじゃなくて！！」

「どうやって出陣するんですか！！」

篠崎と紅は未だに発言の真意が掴めない。

その時、コキリと音がした。

「こうやって、ですよ」

するりと相馬の片手から手錠が外れた。

「え!？　いまどうやって外したの!？」

「縄抜けの一種なんです。親指の間接を外して抜いただけのことです。ただ、これやるとしばらくの間間接が外れやすくなるし、相
当に痛いから、したくなかったんですよ。ですが、状況がそれを許
さないものとなってしまいましたから」

相馬は間接を戻し、もう片方の手も同じようにして手錠を外す。

「女子の皆さんにこんなことをさせるわけにはいきません。ですから、今から鍵か何かこの手錠を外す何かを取ってきます」

相馬はそう言って牢屋の壁際まで歩いた。

「何かを取ってくるのはともかく、どうやってここから出るのよ」

「そうよ。流石にドアが開いているってことは無いでしょ」

篠崎と紅が聞く。

「そういえば皆さんには私の才能を話していませんでしたね。私の才能は“オールパス通行許可証”と言うのですが。簡単に紹介するなら、この
ような才能です」

そのまま相馬は壁に手を当てる。

すると、その手が壁に入っていた。

「「えっ!？」」

「この才能は簡単に言うなら火の中水の中壁の中、どこでも入ることが出来ます。この才能を使っている間は温度も毒ガスも全く効か

ない、という才能です。では、行って来ます」

気さくに相馬は手を挙げると、壁へ飛び出していった。

「というわけなのよ」

篠崎は染山と十島に事情を説明した。

「つたくあのフェミニストが。何であんなに女に甘いじゃん……」

「カッコつけたかったのかなー」

「ちよっとは心配しよう!!」

染山と十島は思い思いにここにいない男に呟いていた。

「じゃあ、ここで待ってみるか。相馬が帰ってくるかもしれないし」
染山と十島はその牢屋で待つことにした。

そしてしばらくの間待ったその時、カッン、カッンとゆっくりこ
つちに歩いてくる音が聞こえてきた。

「なんか、来たじゃん」

染山はその音を聞いて、牢屋に溶かして空けた穴のすぐ横に隠れ
た。

最近は眠くなることが多いですね。

春眠暁を覚えず。

私の場合暁どころか昼くらいまで忘れていますが。

昼寝も好きなんです。

この場合夜まで忘れかけるようですが。

「はあ、はあ……、ガハッ！」

あの野郎、ふざけてやがる……。

“^{バード}鳥”は通路の方を歩いていた。

内臓をぐちゃぐちゃにされ、先ほどから血を吐き続けていた。

「血、血が足んねえ……」

通路の奥にある隠しエレベーターから上の階まで上がって、輸血用血液をもらうつもりだったのだ。

そうして歩いていると、あるところで大穴が開いている所があった。

その大穴の円周は黒く、まるで溶岩が冷え固まったときのような状態になっていた。

あの辺は、牢屋か？

とりあえず、その中を確認しておこうと穴の中に無防備に“鳥”は入っていった。

そうして中をのぞいた瞬間、首元に手が伸びてきた。
それを紙一重でかわす。

こんなことが出来たのは、吸血鬼の目の力だろう。

「ちっ!!」

どうやら男のようだ。

「面倒くさいことに首イ突っ込んだかいの？」

見てみると、四人の青少年少女がいた。

男のほうの二人は手錠が無く自由なようだったが、女の方は両方とも手錠を掛けられていた。

その動けない女子二人を庇うように前に二人の男が出ていた。

「アンタにでも話を聞くじゃん。この手錠、どうやって外すのか」

「ってこの人の目ー、白目が赤で、黒目が緑ー？」

「本当じゃん！！ 一体どういう仕組みなんじゃん？」

少年二人はワイにあの手錠の外し方を聞いてきやがった。

やっぱり、ワイは化物か。

こんな目じゃな。

しかし、丁度いいな。

「ワイに手錠の外し方を聞きたいと。なら、ワイを倒して是が非でも吐かせてみい！！」

いくら手負いでも、敵は少年二人。

さっさと倒して――――――、

威勢よく“鳥”は言うど、少年二人に走りこんだ。

この速さには反応できまい。

さっさとラリアットでも極めて意識取ってからじっくりいただくか。

そうして少年二人まであと一步程度のところで、それは起きた。

ズプリと、地面に足がめり込んだ。

「ああああああっつつつつつつつつ！！！」

そこは溶岩のようになっていて、超高温だった。

しかも、そこが溶岩になっているのをカモフラージュするために、地面のほんの少し上だけを普通の固体で置いておいてあったようだ。

早くそこから出ようと思うのだが、底にまだ足が着いておらず、その温度のせいもあり、上手く力が入れられず慌てふためいていた。

「手錠の秘密ー、聞くんじゃなかったのー？」

「お前がこうしろっていったんじゃん！？」

染山と十島は何者かがここに近づいてくるのを音で確認していた。そこで、一番有効な戦い方を“閃”で考えた結果がこれだった。

「まあ、死ぬことは無いと思うよー。あれほどの温度だと、もう膝から下辺りは全部の神経もぶった切れて逆に関係ないものになるからー」

「何か、見てるとえぐいじゃん。吐きそう、じゃん」

「あああああああつあああああ！！！！ はつつうう！！！！」

膝から下はもう無くなっていて、這いずりながらその地獄から“鳥”が出てきた。

「ヒィ……」

「我慢して、篠崎。彼らは私達を守ってくれてるの」

その状況を足を抱え込んで我慢している篠崎と、それをなだめる紅が居た。

「意識がぶっ飛んでないだけ凄と思うー。この人の目もそうだけど、怪物さんみたいだねー」

「だが、本当に意識あるのか？ 白目剥いて、いや赤目剥いてるじ

やん？」

その状況を見ても尚、少年二人は普通に喋っていた。

普通なら、氣狂いしてもおかしくないような状況だということに。

舐めすぎた。

いけないいけない、人外だからといって、こいつらは才能を使うんじゃない。

危うく討伐されるとこじやった。

痛みに慣れておいて良かった。

意識が飛ふかと思ったが、再生能力が内臓に回っていて低いことと、これが相当な高温でよかった。

神経が一瞬で焼け爛れて痛みが途中から感じなくなっちゃったからな。

それでもこの中から出たら今度は冷えて溶けきれた足の境目が痛い。

関係ない。

こいつらは俺の敵。

そして、俺の食料だ。

「ふざけんじゃ、ねええええええええええ！！！」

このとき“鳥”は、生命の危機を感じ、内臓のことを考えずひたすら機動力の回復、つまり足の回復に専念することにした。

それが意識的なものなのか無意識的なものかは分からないが、生命

の危機を感じたこともあり、異常とも言うべき回復を見せた。

「なっ！！」「嘘っ！！」

少年二人が驚いているが関係ない。

再生した足を限界までフル稼働して飛び出した。

その衝撃に耐え切れず、足に変な音が鳴るがもう気にしない。

狙うは、女の血。

少年二人を振り切ると、足を抱え込んでいて無防備な方の女子に近づき。

その首元に噛み付いた。

It; 3> 救出者達、その裏側。)

(梁山&P; 十島編、4)

というわけで寝てきます。

ぐっどらっく。

&l t.; 3& g t.; 救出者達、その裏側。 〽 (全員の合流) (前書き)

今回99話目です!!

つまり次で100話目!!

<3>救出者達、その裏側。</>（全員の合流）

“鳥”はカプリと首元に噛み付くと、そのまま立ち上がった。

篠崎も一緒に立ち上げられる。

肘鉄を食らわせたりと必死に抵抗するものの、“鳥”は篠崎から離れず血を吸い続ける。

「手前え!!」

染山が“鳥”に攻撃しようとするが、“鳥”は壁を背にして篠崎を前に突き出した。

つまるところ、盾にされてしまった。

「しくじった、じゃん」

染山が歯をかみしめて悔しがる。

こうしている間にも篠崎の顔は恐怖と嫌悪感に歪む。

「十島!!」

「言われなくても分かってる。でも、解決法が見つからない」

珍しくのんびりした口調を脱却している十島も、同じく悔しがっている。

「離れなさいよ!!」

紅も足で蹴ったりしているが、まるで効果が無い。

才能を使えず、手錠をされていては紅の攻撃もたいしたことが無いようだ。

「あ、か……」

篠崎の顔もだんだん蒼白としてくる。

「どうすれば……」

その呟きに答えるように、一つの人影が走り抜けた。

その人影は一直線に篠崎と“鳥”の元まで向かった。

「少々失礼します」

篠崎の顔面、それも首元に向けてその人影は殴りかかった。
ちゃんと腰の入ったストレート。

「グハッ!!」

だが殴られたのは篠崎ではなく、“鳥”だった。しかも、篠崎の首元を通り抜けるようにして殴っていた。

そんな攻撃が来るとは思ってもいなかった“鳥”はそのまま仰け反って篠崎から離れる。

「そ、相馬」

篠崎が呟く。

“鳥”を殴り飛ばしたのは、手錠の外し方を探しに行った相馬だった。

「ど、どうということだ……」

人の首をすり抜けた？

「俺の才能、“オールパス通行許可証”。これは、どんなものでもすり抜けられるという才能でして。篠崎さん、首元に殴りかかるような風に見せてしまつて申し訳ありません」

ペコリと相馬は篠崎に謝る。

「さて、あなたは誰なのですか」

相馬はそのまま“鳥”に顔を向ける。

「糞野郎」

「あれ？ 相馬君？」

紅がその変貌振りに驚く。

「口調が、崩れてる？」

篠崎それには驚く。

「十島、指示を出せ。俺の才能は聞いていたな」

本当に普段の口調からは想像もできないような口調だった。

「本当、女の事だとお前目の色変わるじゃん」

「そういう訳ではありませんよ。ただ、女に手を挙げている男、というのがはらわたが煮えくり返るほど嫌いなだけです」

「そうだねー、相馬君に関しては才能が才能だから近接戦トップクラスだしー」

「否定はしない。目の色のおかしな男だな、化物が」
吐き捨てるように相馬は言う。

「なんじゃあ？ 訳が分からん。大体食事を邪魔されて本気でムカツイとんじゃ。死ね」

“鳥”は相馬に向かって走りこんだ。

そのまま連射のような速度で殴る、殴る、殴る――――、

「??? どういうことじゃ？」

だが、相馬にまったくダメージを受けた気配が無い。
というか、当たった音すらなかった。

「どんなものでもすり抜けられるって言ったろ。俺はどんな攻撃でもすり抜けられる。さて、紅さんと篠崎さんは手錠を掛けられてますよね。染山、十島、さっさと牢屋の外へ出ろ」

「ん？ あ、ああ」「わかんないけどー、そうしよつかー」

染山と十島はそのまま牢屋から出る。

それとすれ違うように黒い服を着た男が中に入ってくる。

「まったくよお、少年。お前結構燃える男だったんだなあ。見直した。十分な時間稼ぎだよ」

“鳥”は相馬が前にいてその顔が見えない。

相馬はそのまま後ろ、牢屋に入ってきた男のところまで下がり、その身体をすり抜けて後ろに下がった。

「よお。そして止まれ。 “白眼視”」
ホワイトアイズ

その身体をすり抜けて出てきた顔は有無を言わせず才能を使うと、“鳥”の動きが時間を止められたように固まる。

篠崎と紅はそのまま部屋にいたが、固まることは無かった。

「黒服さんでも、いい人はいるんですね」

「いい人じゃないさ。ただの気まぐれで金にうるさいおっさんだ」

「ありがとう、白道さん」

相馬は一礼する。

「じゃ、手錠掛けるか。この手錠も不思議なもんだよなあ。手錠を掛けた者は才能を封じられるだけじゃなく、外からの才能も封じる。だがそれも完璧じゃない。身体全体に才能を掛けられると封じることが出来るが、部分的に掛けられると才能を封じられないんだからな」

そう、だからこそ手錠を掛けられている篠崎の首元をすり抜けて“鳥”を殴ることができ、白道の才能は部屋に残っている二人には効かなかったのだ。

「どうして、白道が……？」

未だに紅は白道の真意が掴めずにいた。

どうして私達を助ける？

「紅！！」

白道が“鳥”を止めた後、牢屋に入ってくる人がまだいた。

「赤井！？」

それは、他の場所で捕まっているはずの赤井夢斗だった。

<救出者達、その裏側。> (相馬、白道、赤井編1) (前

今回で百話到達ー!!

これも皆さんのおかげです!!

ひいては、キャラクター人気投票とかしたいなーとか。

まあ投票といっても、感想に自分の好きなキャラを書いていただけると嬉しいな!

と思っただけです!

白道はそのまま“鳥”に手錠を掛ける。

「何だ？ って、ああ！？ 白道、手前か！？」

手錠を掛けられた“鳥”が止まっていた状態から動き出す。

「ま、才能が使えなければ花鳥風月も目じゃないわな。こうなっちまえば、俺の方が強い」

そのまま腰から拳銃を取り出して、“鳥”の額に当てる。

「こんなことして、お前どうする気だよ」

「どうする？ 俺はいつでも金のある方に動いてきた。正直“創造主”から前金もらってるし、この組織ももう怪しいしなあ」

白道はハッと笑う。

「どういこと！？ どうして赤井がここに！？ それに、白道が何で私達を助けるのよ！！」

紅は状況が掴みきれず、とても驚いている。

「俺もそうじゃん。どうして、赤井が普通にここまで来てしかも黒服の人と組んでるじゃん？」

「理解ー、不能ー」

梁山と十島も同じく聞いてくる。

「そうだなあ、すり抜け少年から説明した方が早いんじゃないか？」

そう白道が相馬を見た。

「そうでしょうか？ 私はあまり動いていないようにも見えますが

……。まあ、語らせてもらいましょう」

相馬はそのまま語りだした。

梁山と十島が牢屋に着くちよっと前ぐらい。

「さて、どこに向かいましょうか。とりあえず、あの道にしましうか」

相馬は牢屋から脱出した後、ここに降りてくるときから気になっていた通路の分かれ道の方に向かってみることにした。

その通路をそのまま走っていくと、ある男二人を発見した。

「白道、またお前に会うとはな」

「そうだなあ。まったく合縁奇縁とはこのことか？」

一人は白道と呼ばれている黒服だった。

もう一人は見知った顔だった。

赤井！？

そのもう一人とは赤井だった。

赤井は手錠を掛けられていて、赤井が白道と呼んでいる黒服にどこかに連れて行かれているようだった。

だがどうやらその黒服と赤井は知り合いのようだ。

とにかく、赤井を救出しなければいけないのだが、とりあえず様子を見ることにした。

「さてキャンセラー赤井君。ぶっちゃけた話をしよう」

黒服の男は飄々と、真意がつかめないような話し方をする。

「俺は正直この組織、“統一された幸福な世界”オールワン・ハッピーワールドをな、・・・抜けようと思うのよお」

「は！？」 「な！？」

赤井も驚くが、相馬もその発言には驚いて声を上げてしまった。

「？ 誰かいるのか？」

白道は周りをきよろきよろと向く。

しまった。

まさか黒服からそんな発言が出るとは思わなかった。

「どうしてそんなことするんだよ。お前金で雇われた傭兵なんだろう！？」 そんな簡単に裏切っているのか！？」

「前金ももらってるし、ここまで働いたらもう十分だからなあ。それに、ちよつとアイツの采配さいはいが気に食わなくてな」

「気に食わない？」

「今どうやら謎の集団がここに殴りこみに来ているらしい。それで俺がここに着いたからさで行こうかと思つたわけだが、それを“創造主”に止められたって訳さあ」

「あの男か。でもあれくらい男なら何か考えがあるんじゃないのか？」

何せ相当の推理力があつたし。

「確かにあるだろうよお。だから、そうしたであろう理由がムカつくのさ」

そうしたのであろう理由？

つまり、

「お前はそうされた理由が分かつてるのか？」

「ああ。多分富士祈に叶、それにお前の父さんの太陽が来ているからだろうな」

「父さん！？ 何でここに？ それに、富士先生達まで？」

(！？)

どういうことでしょうか。

富士先生達に、赤井君のお父さんが、ここに関係してくる？
相馬もその話に耳を傾ける。

「多分にしてなんとなくだが、確信している。他にも仲間がいるのかもしれないが、あの“創造主”が俺の才能を知っていて前線から外す理由はこれくらいしかないからなあ」

「待てよ。俺の父さんと富士先生達がもしもいたとして、お前と何の関係があるんだ？」

白道の口ぶりはまるで何か前から関係があるかのようなものだった。

「ん？　そーか、太陽結局お前とは会わなかったんだなあ。アイツのことだから、会っても話すかどうかはわからんが。俺、お前の父さんである太陽、そして富士姉妹を合わせた俺達四人で傭兵をしてんだ。^{エヴリーセイバー}祈りて叶える月と太陽”ってチーム名だったんだが”

「はあ！！　んな馬鹿な！！　そんなこと初めて聞いたぞ！！」

「だろうな。アイツはそういう主義だ。それに安心しろ。俺達は請け負う仕事の色々と違うタイプだったりする場合が多かったからな」
「色々と違う？」

「そ。仕事にも色々あるんだよ。そういう意味では何でも屋の意味合いも強いかもしれないがなあ。俺は金を優先して仕事を取っていたけど、太陽の野郎はレジスタンスとかそういう正義ともとれる活動を主にやってたから心配するなよ」

「そういう意味じゃねえよ！！」

つまり白道は父さんの旧友ということになるのか？

「でだ。“創造主”は俺達のことも知ってるわけだ。そこで俺が再会したらどうなると思う？　普通に考えて裏切るかもしれないと思うだろ？」

「かも知れないな」

「それで外したんだろうなあ。それがムカつくのさ。正々堂々と前

線に出してくれればちゃんと戦ったつてのによお、まるで裏切るのと前提みたいな考えがなあ」

「いや、それ半分お前の性格とかも判断されてると思うが。まあいいか、裏切るんならついでにこの手錠も外してくれないか？」

赤井はとりあえず図々しくも手錠を外すことを要求した。

「それなんだがな。この手錠にはマスターキーっていう便利な物があるんだ。それを取って来ない事には外せないんだよお」

「そうなのか」

肩を落とす赤井。

「だがな、その壁に潜むなんて器用な真似が出来る少年の力も借りれば取ってくることも出来ると思う訳だ」

あっさりと赤井の横にある壁に向かって言い放った。

「バレて、いたのですか。驚きですね、普通は気配がしたとしても気のせいだと思うはずなのですが」

相馬はその白道の目が気づいている目だと思い、素直に壁から出てくる。

「つておい！？ 相馬！？」

赤井は気づいていなかったようで驚いている。

「どのあたりで、でしょうか」

「いや、お前赤井と一緒に驚いて声上げただろ。そのときから怪しいとは思ってたが、妙に気配とかそういう第六感が働いてな」

「それでも、壁の中に人がいるという発想まで辿り着けますかね」

「そういうのは経験の差って奴さあ。傭兵で汚い仕事とかやってると、泥沼戦とかも十分にあるからな。才能者同士の戦いなんて今に始まったことじゃない」

このときの白道は少し格好良く見えた。

&1 t; 3 & g t; 救出者達、その裏側。 相馬、白道、赤井編1 (後

だんだん白道がいい味出してるキャラになってきている気が……。

やっぱり最初の方に実力の差を思い知らせるような感じで出てくる敵ってのは仲間になりやすいんでしょうか。

ベ○ータとか。

のどが痛いです。

風邪を引いたかも……

そこで薬を飲みました。

眠い。

「どうして相馬がここにいるんだよ!!」

「面目ないですが、この黒服達に捕まってしまいました。私のせいで一緒に居た篠崎さんも捕まってしまう、紅さんも私達が捕まっている部屋にに来てしまったので間接を外して手錠を抜けてきたのです。とはいえ、少々力技だったので、多少痛いですがね」

そうして見せた相馬の手は少し赤くなっていた。
女子の前ではそうした態度は我慢していたのだ。

「お前、その手」

「心配ありません。ちゃんと間接を外してから抜いたので、あまり痛いというほどでも、拳が握れないというほどでもありません」
グーパーと見せる相馬だった。

「状況整理も済んだところで、鍵を取りに行くか」
そう言って白道が先頭を切る。

「なあ、監視カメラとかそういうのあるんじゃないのか？」
至極真つ当な質問が赤井から出た。

「それなら心配ない。ここの監視カメラを仕切ってる“花”^{フラワー}って奴がいるんだがな。そいつが今全力出して戦闘してるところだから、そこまで気がまわらねえよお」

「そうか、ならいいんだがな」

三人はさつき白道と赤井が歩いてきていた方に戻っていた。

「じゃあ、ここで私の才能が活躍する番という事ですね」
作戦は簡単だった。

この先の通路の右側にドアがあり、白道や他の“五日間”、それ

に“花鳥風月”や“痛”、“恋”でも入れない鍵のかかったその部屋の奥にあるらしいので、その壁をすり抜けてマスターキーを取ってくるというものだった。

「しかし、どうして白道さんはその扉の先に手錠のマスターキーがあるを知っているのですか？」

「いやあ、こういうきな臭い組織だと自分に必要なものがどこにあるかとかは調べときたくなるもんなんだよお。そんなときになあ」

そうこうして歩いていくうちに、その扉の前に着いた。

「仕事は速く、正確に、なあ」

「分かりました。では、行ってきます」

「気をつけてな！！」

赤井の見送りと共に相馬は扉の奥へとダイブした。

「さて、この部屋の奥にあるのですか。しかし、不思議な部屋ですね。これだけとは。誰かの私物、しかも秘密の部屋なのでしょうか」
相馬が入った部屋は小さめの部屋で、デスクの上に大きめのパソコン一台とその横に壁にフックが掛かっているような状態で鍵が掛けられていた。

その鍵の周りは透明なガラスで正方形に覆われていた。

試しに相馬が才能“オールパス通行許可証”を使ってガラスをすり抜けようとしたが、出来なかった。

どうやら才能を封じるあの手錠の技術でも応用しているらしい。

「それなら、こうするまでです」

相馬はそう呟くと横の壁に身体をすり抜けさせ、そのまま壁を歩いてマスターキーの後ろに回り込んだ。

そして反対側から取る。

「どうやら、ここまでは想定していなかったようですね」
相馬の才能“オールパス通行許可証”は、触れているものならすり抜けさせることも可能である。

本来ならこの才能を使って自分と篠崎の手錠も外す予定だったのだ。

「さて、仕事も終わりましたしさっさと出ましようか」

そうしてその部屋から出ようとしたとき、ゴンとパソコンの置いてあったデスクに腰をぶつけた。

すると、パソコンの画面に光がともる。どうやら電源が切れていなかったらしい。

「ん？ これは――――――」

「ただいま帰りました」

「遅かったなあ。何してたんだあ？」

「いえ、別に」

「まあいいじゃないか白道。これで俺の手錠も外せるんだから」

相馬が扉の奥から帰ってきた。

ただ、その顔は少し暗かった。

赤井が手を出すと、相馬がマスターキーで赤井の手錠を外した。

「ふうー、これで晴れて自由の身だな。まったく窮屈で仕方が無いんだよ手錠ってのは」

伸びをする赤井。

確かに手錠というものは精神的なダメージも大きい。

普段自由に動かせる両手というものの動きが制限されるのだ、無理は無いだろう。

「じゃあそれを持って篠崎と紅のところへ行こうぜ!!」
赤井が走り出す。

「逆方向だぜえ」
白道にダメ出しを入れられた。

「よく考えたらお前はまだ牢屋に行ってなかっただろうがよお」
「皆さん、こちらです」

相馬は今も手錠を掛けられている二人のことが気がかりで仕方が無かった。

そうして走り出した。

「これで私達が四人、篠崎さん、紅さん、染山君、十島君と合流して“鳥”という男を倒し、全員の手錠を外してここまで走ってきた、というわけです」

これで、染山と十島から始まった救出の裏側は相馬の補完説明で埋まることとなった。

時間軸はB4F、全員が集結したところへと戻る。

「成程、白道。お前は裏切った、つまり敵と考えていいのだな？」
“創造主”が少し怒りを含む口調で言う。
策がことごとく崩されていくのが気に食わないのだろう。

「ああ、楽しくやろうや」

白道はにやりと笑う。

「篠崎、大丈夫？ やっぱり休んどきなって」

「大丈夫よ、少しめまいがしたただだから……」

白道達グループの一番後ろではある異変が起きていた。

篠崎が先ほどからふらふらしていたのだ。

相馬が手錠を外した後くらいからこの現象が起きていて、みんな、特に紅と相馬は心配していた。

「いいえ、ちゃんと座っていてください。後は他の皆様が片付けてくれます。貴女は血を吸われてますから貧血を起こしているのです。よう。座ってください」

相馬からも優しげで堅苦しい口調ながらも強制され、篠崎はそこに座り込んだ。

「遂にここで戦える戦力は我ら二人になってしまったな。“痛”^{ペイン}」

“創造主”が“痛”に話しかけると、“痛”は空を飛んで来た。

「別にいいんじゃないか？ 俺達Ⅱ最終兵器だろうが。それに敵には手負いも数多くいるんだ。赤井以外なら俺一人で十分だったの」

「油断は禁物だ。だが、確かにそう悲観することもなさそうだな」

“創造主”も“痛”の軽口に釘を刺しながらもきっちり答えた。

救出者達、その裏側。 (相馬、白道、赤井編2) (後

というわけで、次からは最終決戦!!

つまりラスボス戦です!!

&l t; 4 & g t; 最終決戦!! **(1)** **(前書き)**

タイトルの通り、最終決戦です。

ではっ!!

<4>最終決戦!! (1)

「問題は白道の才能だな。白道、少し話をしないか？」

“創造主”はいたって平静に話を始めた。

「何だあ？ 俺に話かあ？」

白道は答える。

「白道、今まで払う予定だった金の3倍出そう」

淡々と“創造主”は、

「マジかよ!!」

究極的な発言をした。

「つておい!!」

「いやいや、3倍かよお!! 　　つてことは、ひい、ふう、みい、よ
お……」

「本気で数えてんじゃねえっての!!」

赤井が必死に突っ込むが、白道の顔はキラキラと輝いている。

「確かに、白道にとっては有効すぎる手だな」

太陽も忌々しげに眩く。

「そうだ祈さん。貴女も私達の仲間になりませんか？ 貴女は仕事
と私生活を分けられる人だ。白道さんと同じ分の給金は出しますよ
？」

“創造主”は祈も誘ってきた。

「ふーん、そうね、とてもいい話だわ」

祈も好感触な反応だった。

「お姉ちゃん!？」

これには叶も驚く。

「でも、」

だが、祈はこう続けた。

「私、勝てる見込みの無いところにつくつもりは無いの。その白道と違ってね」

と、ばさりと“創造主”を切り捨てた。

「何か、かっこいいじゃん。理事長先生」

「戦うー、女ー？」

生徒達からも色々といわれる。

「それに比べてこっちの大人は……」

赤井が見た方向は白道のほう。

白道は眉間にしわをよせて本気で考えていた。

「白道！ 俺とお前の仲だろうが！ 俺達の方にいろって！！」

太陽も必死に説得を試みるが、あまり聞いていないようだ。

「白道にはそんな誘い方は駄目よ。交渉ってのは、こうやるの」
太陽を尻目に祈が前に出てくる。

「ねえ白道。じゃあ、これならどう？」

祈は服の内ポケットから何故入っているのか分からないが電卓を取り出したき出した。

そして、白道に見せ付ける。

「マジ？」

「あなたがこっち側についてくれて、それにこの戦いに勝ったら考えるわ」

「乗った!!」

祈が言ってから0.3秒という速度で白道が答える。

「結局お前は金なのか、モラルってもんは無いのかよ……」

赤井がうなだれる。

「よく考えてみろってえ。俺は命を掛け金にしていままで稼いできたようなもんだぜ？ 高い方がいいだろうがよお」

白道の信念は変わらず金のようなだった。

「しょうがないな。なら、まずは白道の目を封じよう。そこからは“痛”、お前の出番だ」

「了解。ただし、赤井のほうはアンタに任せるぜ？ 流石に“才能帰却”は相手に出来ないんでな」

“創造主”と“痛”はなにやら話し合っていた。

「ペイン、クラッシュ!!」

“痛”は何か叫んだかと思うと、赤井を除く全員が壁に何かの力で引っ張られるようになる。

「こ、これは!？」

「何、簡単なこと。“超・念能力”で壁に向かって垂直な力をかけてるだけ。こういう風に極めれば、他の才能の代用だってできるって寸法さ」

立っているのは赤井一人だけとなった。

ホワイトアイズ
「白眼視!!」

白道が壁に貼り付けられたままの状態でそう叫ぶと、全員の身体に掛かっていた力が解除される。

“痛”の動きが時間が止まったようになる。

ここにいる全員がこの才能を知っている。

“蛇女ゴウゴンの目”は、見たものの全ての時間を止める。

故に、どんな物体からの干渉も受け付けない、つまりダメージを受けなくなる。

止まっている間の意識は無くなっていて、才能を受けたものは時間の錯覚を起こす。

この攻守に優れた才能があるからこそ、“創造主”も白道を仲間にしようと思ったのだ。

「気をつけろ！！これは—————」

「キャンセルカノン消し去る砲弾」

白道の言葉は、“創造主”の拳によって止められた。

“創造主”はこの全ての時間を止めるという状況下でも動いていた。

白道の身体がくの字に折れ曲がる。

そして殴られた瞬間から、また赤井以外の全員に壁に向けて垂直な力が掛かりだした。

「ど、どういうことじゃん？」

「白道さんのー、才能がー、聞いていないー？」

「んな馬鹿な！！ 白道の視界にあの男は入っていたはずだぞ！！」
上から染山、十島、太陽が今起きた状況について不思議に思っている。

そうだ、俺以外みんなアイツの才能については知らなかったんだ。
廻家さんは教えてた様子も無かったし。

しくじった！！

多分口調からして白道は知っていたんだろうけど……。

早く説明しないと!!

「アイツは二重才能なんだ!! 一つは“デュアルスキル創造主の右手”、これは全発能力系才能の頂点に立つといわれる才能で、これは炎だろ^{メイカー}うが氷だろ^{メイカー}うが何でも作れるそうだ!! そしてもう一つ、“キャンセラーズ帰却者の左手”、これが厄介でな!! それに触れたものの才能を全て消す!!

俺の才能の左手版だとも思ってくれたらいい!!」
赤井は急いで全員に説明する。

「どうして俺の才能を君が知っているんだい? ああ、廻家が教えたのか」

創造主は平然としている。

みんなの顔は赤井の説明を聞いて、絶望していた。

「おい、待つじゃん。それって……」

「勝機がー、見出せないー」

「俺は才能が無いけど……、その“創造主の右手”ってのが厄介だな……」

「どうりで、未来が見えないはずよ……」

「となると、私の才能も効かなくなっちゃうのかな……」

「篠崎!! 大丈夫!? こんな体勢だけど気分悪くなったりしてない?」

「私は大丈夫。紅は今の状況にちゃんと絶望しよう……」
後半の方は話が変わったような気がするが上から染山、十島、太陽、祈、叶、紅、篠崎がこう言う。

赤井は今どう動こうかと悩んでいた。
それが、隙となってしまった。

「キャンセルカノン消し去る砲弾」

遠めにいたはずの“創造主”が一瞬で間合いを詰めてきて、赤井もその左拳の餌食となった。

&l t; 4 & g t; 最終決戦!! 〽 (1) (後書き)

ちよつと絶望ムードが漂ってきました……。

っていうかラスボスあたりの才能強いなー。

「<4>最終決戦!!」
(2) (前書き)

のどが痛い……

時期外れの風邪にかかりました……

<4>最終決戦!! (2)

「が、はあ……!!」

“創造主”のパンチは赤井を殴った後もその拳を止めることは無く、赤井の腹を押し込むようにして壁まで吹き飛ばした。

「さて、もうほとんど勝利は目前な訳だが油断はしないようにせんとな」

“創造主”はそんな状況でも悪の組織に見られるような油断は無く、極めて冷静だった。

「そんな堅いこと言うなや。俺とアンタが組む〓負けるわけ無いだろうがよお」

だが、仲間は調子に乗っていた。

「くっそ……。白眼視!!」
ホワイトアイズ

その“痛”の隙を突いて、赤井ほど攻撃されなかった白道がもう一度挑戦する。

また身体が自由になる。今度は“創造主”に全員が警戒した。

「まだ動けたのか。油断も隙もない男だな」

「お褒めに預かり、光栄だ……」

“創造主”の問いかけに弱弱しく答える白道。

見ると、ハアハアと息を切らし頭を抱えていた。

目もよく見ると充血しかかっている。

「馬鹿野郎、才能の使いすぎだ。ここに来るまでに何発使ってきたんだよ」

「うる……、せえ。黙っ……、てろ。集中が、途切れる」

白道はもうこれ以上動けそうには無かった。

「白道は時間の問題、赤井は静めた。もう問題は――――、

」

ない、と“創造主”が言おうとした瞬間、その懷に飛び込んでくる影があった。

「はあ！！」

その影は懷に飛び込みながらしゃがみ、そのまま右回転にひねって飛び上がるようにして右膝を“創造主”の腹に直撃させた。

「ぐ……」

流石の“創造主”もこれは驚きを隠せないようで、ぐぐもった声を出したまま屈み込む。

「私の怒りを受け止めなさい！！」

その影は紅だった。

そして叫ぶや否や屈み込んだ“創造主”の顔面を蹴り上げた。

「忘れて、ましたね。紅さん、貴女の才能“超跳躍”^{ホッパー}は脚力の上昇、でしたか」

“創造主”は蹴り上げられる瞬間後ろにステップを踏んで後退し、その蹴りを避ける。

「ですが」

“創造主”がそのまま右手を前にかざすと、そこから稲妻が飛び出した。

「創造…雷」

紅は避けることができずに直撃する。

「く、あああ!!」

紅はその場に屈み込んでしまう。

紅が雷を浴びたその直後に、それは聞こえた。

「女性に手を出すのは、いただけませんね」

その声は“創造主”の真下、地面から聞こえてきた。

すると地面からヌリと手が生えてきて、“創造主”の足を掴む。

「これは!？」

“創造主”は必死に足を振りほどこうとするが、振りほどこうとしても当たる感触が無く、地面に足をつけた瞬間また足を掴まれてしまう。

「ありがとじゃん!! 相馬!!」

“創造主”の隙を突き、前から染山が走る。

相馬は“痛”が“超・念能力”を使った頃からすでに壁に潜んでおり、逆転の機を待っていたのだ。

これは、まずい。

“創造主”がそう考えるのとほぼ同時に、

「摂氏千度を喰らえ!!」

染山が右手を突き出した。

&l t; 4 & g t; 最終決戦!! ㄱ (2) (後書き)

好きな曲のあるワンフレーズだけ歌えない……

音が、出ないよー……

&l t; 4 & g t; 最終決戦!! **(3)** **(前書き)**

これがチートキャラっていうのでしょうか。

“クリエイター
創造主”さん。

「だが惜しい」

“創造主”は慌ててもおかしくないような状況下で冷静にそういつた。

そして染山の右手を左手、“キャンセラーズ・レフト 帰却者の左手”で掴むことで温度の問題を回避し、この一手で倒せると思っていてバランスが崩れている染山を後ろに投げ飛ばした。

染山はそのまま後ろに投げ飛ばされる。

“創造主”は次に左手を地面から出ている手を掴もうとした。すると、慌てて相馬は地面から飛び出す。

「少年、お前だったのか。面白い才能だな」

相馬が飛び出した理由は至極明快だった。

どうやら赤井の言っていた通り“創造主”の才能は赤井の身体と同じようだ。

つまりその手に触れられている間は才能を発揮できないということ。

ということとは、触れられた瞬間壁をすり抜けるという才能が使えなくなり、相馬は一発で圧死するところだったのだ。

たとえ地面に隠れたとしても、この“キャンセラーズ・レフト 帰却者の左手”がどの範囲まで才能を使えなくさせるのか分からない。地面全体で才能の効果を受け付けなくなってしまえば、やはり相馬は圧死してしまうのだ。

だがこの場合、出たとしても出なかったとしても結果は変わらないかったのかもしれない。

相馬は自分が死んでしまうかもしれないことを一瞬で計算し脱出したが、その後のことまでは考えていなかった。

それが、実戦経験の差というもののなのかもしれない。
戦闘というのは一瞬の中で数手先を読みながらしなければなら
ないものだ。

“創造主”は飛び上がった相馬の右足首を左手で掴み、右手を頭
に向ける。

「創造…雷」

そういった瞬間“創造主”の右手から紅のときと同じように電氣
が放出され、相馬は逃げる事が出来ずもろにそれを受けてしまう。
相馬はビリビリと身体から言わせながら、その場に倒れこんだ。

「心配するな、死ぬほどの電圧では放っていない。さて、“痛”で
も起こしに行くか」

“創造主”は歩いて“痛”の元まで向かう。

「あの人に対するー、対抗策がー、見当たらないー」

「しょうがないんじゃない、無いかな、十島君。あの人の左手は赤井君
と同じなんだから」

十島は自分では戦力にならないことを自覚している。

自分の才能は補助である。

敵の隙が見えたとしても、十島ではそこに身体が追いつかないこ
とは重々承知していた。

篠崎は先ほどからずっと苦しそうに息をしており、座り込んでい
た。

汗も大量に噴き出していた。

「お姉ちゃん、どうしよう！！」

インフェリアー・フューチャー

「そうは言っても、私の“一寸先の未来”じゃあの男がどんな行動

をしてくるかが読めないのよ……。だから、戦えないわ……」

叶は先ほどと間之崎学園での“痛”との戦闘があり、先ほどの戦闘でのダメージもあって、満足に戦える状況ではない。

祈は“痛”との戦闘ではダメージを受けたが、先ほどの試合を無傷で終わらせている。だが、自分の才能が全く効かない相手とは正直言って戦いたくない。

というか祈は傭兵で培った体術があったとしても、今は戦うだけ無駄、足手まといにしかないと考えている。

この辺りが元傭兵なのあっさりとした考えだろうか。
無謀な挑戦は避けている。

「白道、もしもこれがアイツの左手で解除されたら、次は出来るか？」

「無理だ……。なあ。そうしたら、俺が、本気で、ぶっ壊れるからよお……」

太陽は“恋”との戦闘で自分から太もものにナイフを刺してあまり足を使った身動きが取れないので、“創造主”の隙を見計らっていた。

隙があれば、座った状態でも攻撃可能な拳銃で撃つ予定だった。だが、“創造主”には隙が無い。

いつ、どの瞬間で撃つても瞬時に防御されそうな気がする。

事実、紅や染山が“創造主”に攻めていたとき、こちらにもしっかりと注意を向けていた。

白道は才能の乱発のしすぎで今にも倒れそうな感じになっている、体中からは篠崎と同じくらい汗が噴き出し、目は充血しているが顔は蒼白としていた。

まさしく、絶望的状况という言葉がぴったりだった。

「あらら。まだ赤井は状況をひっくり返してないのかよ。せつかくお前と友達の染山と十島を送り込んで全員救出させてやったのによ。俺が見込んだ、嫌敵手^{ライバル}だろ？」

その男は現在ある部屋にいた。

そこは壁一面モニターがあり、デスクの上には色々なボタンやラバーがセットされてある。

そんな司令室のような場所に一人の女の子が座っていた。だが女の子はデスクに突っ伏すようにして気を失っている。

男はその後ろでモニターを見ていたのだ。

「まったく、“花”^{フラワー}ちゃんの才能とか、こういう空間把握能力っていうの？ 大量の画面を見る力って、うらやましいよな」

その男はそのままデスクに近づく。

「俺にこうさせることですらアイツの力の内なら、対したもんだよ。赤井夢斗。いや、俺なりに言うならMr. ハッピーエンドの方がいいのか？」

男は黒い服を着ていた。

それこそ、“統一^{オールワン・ハッピーワールド}された幸福な世界”の制服の様な黒い服を。

その黒服はデスクに近づくと、あるボタンを三つ同時に押した。

「もう“創造主”なんておもちゃ飽きちまったな。さつさとアイツに絶望でも与えてやるか」
バッドエンド

“創造主”が“痛”に近づいているとき、ガコンガコンと機械的な音がホールに響いた。

その音が気になって振り向いてみると、そこには、

「どういうことだ……!？」

ゆっくりと階段が出来上がっていた。

その階段は太陽や叶達が降りてきたときの階段。

この階段は目的の者が空間に入ってからすぐに閉じるようになって
っているはず。

ある程度の敵を下の階に送ることで、敵を分離、もしくは閉鎖する
のに。

その階段が今、もう一度現れていた。

&l t; 4 & g t; 最終決戦!! **(3)** **(後書き)**

語句の説明が出来なかったので少し。

好敵手と書いてライバルと読ませるそうですが。

彼の場合は憎んでいますから。

だから嫌敵手と書かせてもらいました。

彼の説明はまた……

&l t; 4 & g t;) 最終決戦!!) (無能最強、颯爽登場!!) (前書き)

タイトルの通りです。

ここからはちよつと時間軸が行ったり来たりします。

桜は腰からガサゴソと何かを取り出す。

「奪っておいで正解だったぜ。これが無かったら攻撃できなかったし」

それは才能を封印する手錠だった。

ここに来る前、“yesterday”と戦ったときに持っていた手錠を全て奪っておいでいたのだ。

桜は両手に一つずつ手錠を持った。

「G a a ! !」

“風”は桜に考えも無く突進してきた。

だがその速度はとも人間のものとは思えない。

“風”の才能、“滅亡^{ジエノサイド・ライト}の右手”改め、“滅亡^{ジエノサイド}”は触れたものみな全てを腐らせる。

だが実際はそのような能力ではなく、触れたものを超活性化させる。その超活性化に耐え切れず生物の細胞が腐るという仕組みだ。

超活性化はもちろん自分にも適応され、今“風”の筋力人間のものとは呼べないほどのレベルまで達していた。

「確かに避けやすいけど、」

それをひらりと避ける桜。

「触れた瞬間ゲームオーバーって、ゲームバランスどうかしてるだろうがよ!!」

“風”はそのまま走り、壁を蹴って桜に迫る。

だがその動きは単調なもので、またひらりと避ける。

「これで、終わりか？」

桜の手からは手錠が一つ減っていた。

「Guu...!？」

その減った手錠は“風”の右手にクルクルと掛かって収まった。手錠の掛かったところから肌色が見せる。

「Guooooo!!!」

“風”はその手錠を乱暴に掴んだ。そして力のままに引きちぎった。

「えー」

桜もそれにはドン引きした。

「手錠かけるだけじゃ終われないのかよ。じゃあ、やつぱり拳で倒すしかないか」

桜はまた腰から手錠を取り出し両手に手錠をもう一度持つと、メリケンサックのように装備した。

「俺が攻撃する方法はこの両拳のみ、対して敵は俺に触れた瞬間腐らせてきてデッドエンド。どんだけだよ」

今度は桜から仕掛けた。

敵は強くても野獣のように単純だ。

桜は“風”まで走りこむ。

「Guo!!」

それをカウンターのようにな“風”は桜の脇腹に拳を打つ。

だが、桜はそれを読みきれないほどの男ではなかった。

桜は“風”に迫ると見せかけ、一瞬一歩だけ下がって間合いを外したのだ。

そのままカウンターを放ってがら空きの脇腹に桜が拳を叩きこむ。

「Guoo!!」

桜のその一撃で、“風”はよろめく。

「倒れないか。流石だな。お前は回復速度もチートだったな」
よろめいている隙に、二発ジャブを叩き込む。

「なら、回復する前に倒す」

ジャブ、ジャブ、ジャブ――――

一撃一撃はそれほど重いものではないが、バランスを崩した状態で連発して受け続けられ、かなりのダメージになる。

そして、完璧にバランスを崩しダメージを逃がせないようにしたところで、放つ。

「破っ!!」

その右ストレートは綺麗に“風”の腹に直撃し、空中に浮かび上がった。

「締めだ」

桜はその状況で手錠を右手首に投げ、カチャリと掛ける。

“風”の右手首のみが肌色に戻る。

桜はその部分を両手で掴み、思い切り投げ降ろした。

「Finish!!」

その投げは柔道のような力のあまり必要ないものではなく、純粋な力だけで振り降ろした。

“風”はドオンと地面が揺れたかと錯覚するほどの威力で頭から地面に叩きつけられた。

そしてそのままクタリと倒れこんだ。

「ふう……。しばらくは起きねえ、よな？」

桜も壁際まで行き、座る。

そうしてしばらくたった後だった。

ガコンと音が鳴り、先ほどまで閉じていた階段が姿を現した。

「ん？ 罌か？」

桜はそう考えたが、動かないでいても何も始まらないと思いその階段を降りることにした。

それを降りると、ある男が二人ホールで立っており、他の全員が倒れこんでいたり座り込んだりしていた。

一人は硬直したように立っていて、もう一人がその硬直している男に近寄っていた。

「……鍵音!!」

桜はそこから自分の妹の姿を発見し、近くに寄る。

「大丈夫か!？」

「お、お兄ちゃん……。? なんでここに……。?」

紅は先ほどの電撃で喋りにくそうだった。

「紅、桜……。不確定要素の一人か。お前がここに来れたというこ
イレギュラー
とは、“風”が負けたのか? アイツのことだ、“滅亡”ジェノサイドを本気で
発動させたはずだが……」

「お前、誰だよ。鍵音に、何しやがった」

「何をした、とは。俺に攻撃をしてきたから正当防衛的に攻撃させ

てもらっただけだ。俺の名前、いや任務名は“創造主”コードネーム クリエイター。しょうがない、お前も倒させてもらう」

「成程な。お前を倒せば全て丸く収まるわけだ」
桜は拳を構えた。

&l t; 4 & g t; 最終決戦!!

(無能最強、颯爽登場!!)

(後書き)

人類最強Ⅱクレア・スタンフィールド、哀川潤なら、
無能最強Ⅱ紅桜、みたいな!!

ちなみに、クレア・スタンフィールドはバッカーノ!のキャラ、哀
川潤は戯言シリーズのキャラですよー。

&l t; 4 & g t; 最終決戦!! 〽 (4) (前書き)

桜さんが活躍しすぎのような……

「……!？」

赤井夢斗は気がついた。

「な、何が起きてるんだ……!？」

腹を押さえながら気がついた赤井はそこで見た光景とは、

「驚きだな。ここまで攻撃を避けられるほどの体術まで持ってるのか」

「“風”とか“yesterday”に教えられてな」

「あー悪い。俺が倒した奴らだわ」

“創造主”と桜が肉弾戦を繰り返していた。

「桜さんが何でここに? ていうかほとんど互角の戦いしてない?」
赤井は訳が分からなかった。

「確かにこの腕なら、倒したというのもうなずける。これ以上避けるのは……」

桜のジャブを“創造主”は顔を少し傾けるだけで避ける。

「この腕? 舐めすぎだろ。実力の半分も出してないっての」

だがそこで“創造主”の視線が一瞬そちらを向いて死角が出来たのを桜は見逃さず、左足で足払いをかける。

「なら、俺もだ」

“創造主”はその足払いを掛けられバランスを崩すが、右手を胸の前にかざす。

「創造…風爆」
エクスプロージョン

“創造主”がそう言った瞬間、空気の塊が爆発したような錯覚に

襲われた。

「おお!？」

桜はその風に5mほど吹っ飛ばされる。

だが、そこでも桜は焦らず上手く足を滑らしながら着地する。

「ふん」

対して“創造主”はその空気の塊に左手を合わせるだけで対処した。

そして崩れた態勢を直す。

「才能……か？」

「ああ。言ったら、本気じゃないってな」

“創造主”はそこで攻撃の手を止めず、右手を後ろに構える。

つまり、あの構えだ。

「キャンセルカノン消し去る砲弾」

そうして一瞬で吹っ飛んでバランスが崩れたと思った桜に一気に迫った。

「お前が本気じゃなかったのは分かった」

だが桜は、バランスが多少崩れているから攻撃を受けるなどという次元にはいない男だった。

着地した瞬間に“創造主”の左拳が迫ったが、上半身を腹筋と背筋の力だけで瞬間的に反らし、反らしながらも両手で掴んで、反らす勢いと“創造主”が飛んできた勢いとで後ろに投げ飛ばした。

「!？」

“創造主”は驚いた顔をしながらも、壁で着地し、そのまま地面まで降りる。

「俺は半分も力出してないって言ったら？」

「確かに、そのようだな。こちらも才能を全力で使わせてもらう」

“創造主”は右手を前に出す。

「それは、風を操る力か？ さっきの突風みたいな爆発的な風も、自分が吹っ飛んできた“消し去る砲弾”^{キャンセルカノン} ってやつも右手から風出して自分から吹っ飛んでたんだろ？」

「よく、気づいたな。“消し去る砲弾”^{キャンセルカノン}の方は気づかれにくいんだが」

「風の感じだ」

「仙人かよ」

「だが、こういう組織のトップに君臨してる男がそんな風を起こすだけの才能とは思えないんだよな」

「何故そう思う？」

「勘だ」

「勘かよ」

「桜さん！！ その人の才能は“創造主の右手”^{クリエイターズ・ライト}と“帰却者の左手”^{キャンセラーズ・レフト} って言うんです！！ その“創造主の右手”^{クリエイターズ・ライト}は火でも氷でもとにかく生物以外なら何でも創るって才能です！！ 左手はあまり関係ないですけど……」

赤井はその会話に割って入り、桜に説明した。

「起きてたのか」

「成程な、そうかそうか。それなら納得だ。で赤井君、その“帰却者^{キャンセラーズ・レフト}の左手”^{キャンセラーズ・レフト}ってのは何なんだ？ どんなものでも戦闘に活用できないものは無い。教えてくれ」

「は、はい。“帰却者の右手”^{キャンセラーズ・レフト}っていうのは、俺と同じ才能を消す才能です」

なんだか俺、“創造主”の説明係になってないか？

さっきからそう思い始めた。

「分かった、ありがとう。それなら確かに才能者を束ねるトップの才能として間違いなさそうだ」

「ふう、バレたか。まあ別に構わない」

そこで“創造主”は右手を銃の形にした。

「創造…拳銃。コルトパイソン能力付与…反動0、弾丸は“クリエーターズ・ライト創造主の右手”により無制限、357マグナム弾」

“創造主”の手の中に拳銃が出てくる。

「そんなものまで創れるのか。ん？ 反動0？ 無制限？」

今の“創造主”の言葉におかしなところがあった。

「何を言っている？ 俺は何でも創造できる。文字通り、な。つまり、有り得ないような空想の物でもだ」

バンと大きな音を立てて拳銃が火を噴く。コルトパイソン

“創造主”はそんな大型口径を片手で撃っているにも関わらず、全く右手を動かしたような様子は無い。

その弾丸は桜の顔の右横を大きく逸れた。

拳銃を片手で撃てば、外れるのは当たり前だ。

「弱点といえば、両手で撃てない事か。“帰却者の右手”のせいで、触れた瞬間拳銃が消えるからな。だが、弾数無制限なら多少外れようが問題はない」

そのままバン！ バン！ と撃つ。

「やばい！！」

桜は集中して銃口を見、弾が飛んでくる方向を予測し、避ける。

「いつまで持つかな？」

反動がない分、コルトとは思えない速度で弾が飛んでくる。

「一発即死じゃねえかそれ!？」

そうは言いつつもしかりと避ける桜。

そしてそのまま間合いを一気に、一瞬で詰めた。

それは、銃を撃つ“創造主”にとっては瞬間移動したような、身体が伸びたような錯覚に襲われる速度だった。

「な!？」

「地脈を縮めるが如く。歩法、縮地」

“創造主”が拳銃を桜に構えるよりも早く、右拳をその無防備な腹に振りぬいた。

&l t; 4 & g t; 最終決戦!! **(4)** **(後書き)**

コルトパイソンについての説明を。

高威力のマグナム銃で、357マグナム弾使用の旧式リボルバーなんです。

何より見た目がかっこいいんですよー。

<4>; 最終決戦!! (間之崎組、最強二人。)

「いやー、すごいですねーあの紅さんのお兄さん。ってか怪物なのか？」

「って、高原さん!？」

桜が“創造主”をぶっ飛ばしていた頃。

赤井の隣には先ほどまでいなかったはずの高原衣と、姫岸鉄がいた。

「しかし、あの敵の“創造主”って男も相当な才能だな。俺はこの戦いには行けない。何せ、“オブサーバー観察者”も“ドッベルゲンガーもう一人の自分”も、その“キャンセラーズ・レフト帰却者の左手”とやらで消されるからな」

「私の“シーリンググリンダ封鬼委員”も、あの才能じゃ消されちゃうでしょうし」それがこの二人の才能なのだろうか。

いや、そんなことよりも大切なことに突っ込まなければならぬだろう。

彼らの立ち方だ。

「どうしてお姫様抱っこなんですか!？」

「なんで怒り気味なのかな? 別にぶらぶら姫ちゃんとデートしてたわけじゃないよ。ちゃんと“花鳥風月”ってものの一角を倒してきたんだから」

「は!？」

少し前の話、太陽達がB4Fに降りた頃。B2F。

そこでは、高原と姫岸が“月”と相対していた。

高原は“ドツベルゲンガーもう一人の自分”で二人になっていた。

「さっさと両方倒させてもらうまでよ!!」

“月”が上から下に手を下ろすと、急に体が重くなり立っていられなくなった。

そのまま高原×2と姫岸は地面にへばりつけられる。

「お、これは……」

気づくと、高原が一人に戻っていた。

「どっちにしろ、私の重力で押しつぶしちゃえば問題ないんだから」グツと身体に掛かる力が大きくなった。

「私の衣に何してくれてるのよ」

重力を掛けられている中、姫岸がふらふらしながら立ち上がる。

「何で立てるの……？　もういいわ！　押しつぶす」

ズツと目に見えて分かる重力の増加。

姫岸も膝をつくが……、倒れない。

「あー、姬ちゃんの才能知らないもんね」

高原は残念そうに言う。

「まったく、体が重いわね」

そうは言いながらも、一步、また一步と“月”に近づく。

そんな姫岸の身体に、ある異変が起きていた。

「天使？」

姫岸の頭に、光るわっかが浮かんでいた。さながら天使のように。

「ど、どういふこと!？」

「私の才能。あなたが力を増やしても、もう意味が無い」

明らかに体重の二倍以上の力が掛かっているというのに、平然と姫岸は立ち上がった。

「風紀委員は、何か起きないと動けない」

そして“月”にゆっくりと歩いて迫ってくる。

シーリングリング

「この“封鬼委員”は、才能を封印するような才能。とはいえ、赤井君のような絶対能力じゃないけれど。それに、あなた達が持つてる手錠なんかがあると、ちょっと凹む」

「風紀委員ってのは、才能が暴走した人を抑える仕事もしなければならぬ。というかそっちの仕事がほとんどだったりするわね」

「このわっか、見えるでしょ？ さっきより大きくなってると思わない？」

確かに先ほどは頭くらいの円周くらいだったのが、もう腰周りほどになっていた。

エンジェルフープ

「“天使のわっか”」

姫岸が右手を出すと、同じような天使のわっかが現れる。

それは出るとすぐに大きく広がる。

そのわっかは左手にも現れる。

「Go!!」

姫岸はそのわっかの円周を掴み、回転しながら“月”に投げつけた。

“月”はダンと大きな音を立て空中に飛んで避けた。それは細い足では不可能なぐらいのジャンプだった。斥力を使ったのだろう。

「おっ」

高原の身体も軽くなった。

「訳わかんないのよ!! あなた達!!」

今度は姫岸に集中的に重力を掛けたらしい。

が、姫岸には何も起こらない。

「じゃあ、じゃんじゃん行くよ!!」

姫岸は一瞬で“月”に迫る。

それは、普通の人間なら有り得ない速度だった。

「!?!」

「封☆印」

頭にわっかが出来てからやけにテンションの高い姫岸は“月”の両肩を掴んだ。

すると一瞬で“月”が光のわっかによって動きを封じられる。

さらに、腰、膝、足とわっかが掛かっていく。

「どうして!! 私の斥力でも外せないなんて!!」

「そういう才能。私のこのわっかはいかなるエネルギーを消す。赤井君とは少し違うけど、十分特異な才能なのよ? それは一日何があっても外れない。あ、そうやって封じられていても食事とかは必

要ないから」

そう言って普段の姫岸では有り得ないであろうウィンクをした。

「あーもう、こんな無茶して!! わっかがもう小さなフラフラプくらいになってるよ!!」

「そうね、ぼちぼち解除しましょうか」

姫岸は壁際までよって解除した。

「解除――――、はああ!!!!」

解除と姫岸が言ってその数秒後、ガクンと糸が切れたように倒れこむ。

球のような汗をだらだらと流しだす。

「でも、結構短時間だったけどわっかが大きくなったね」

「それだけ、強かった……」

ハア、ハアと息を切らし、そこでしゃがみこむ。

シーリングリング

“封鬼委員”は才能を開放している間はいかなるエネルギーを受けず、身体能力を特異な状態まで引き上げ、飛行能力を会得する、ほとんど無敵な状態にするが、その分反動が凄まじい。

自分の頭上に浮かぶわっかは自分が受けたエネルギーに応じて大きく広がる。

時間、身体能力も使えば使うほどわっかは大きく広がる。

そしてその大きく広がれば広がるほど、反動は大きくなる。

そうしてしばらく座っていると、急に今まで閉じていた階段が出現した。

「あ、階段、出た。降り、ないと」

姫岸はよろよろと立ち上がり階段へ歩き出した。

だが、姫岸はまだやっと歩けるくらいの体力しか回復していなかった。

「しょうがないな」

「ふ、ふえ!？」

高原はきつそうな姫岸を見て、両手で抱え込んだ。
よくある、お姫様抱っこというものだ。

「ちょ、別にいいって!! 少し休めば!」

身体を放そうとするが、蚊が鳴くような力だった。

「これだけしか力出せて無いし、こんな身体熱くなってるよ? い
いっていいって、姫ちゃんが倒れたときに傍で支えてやるのが、彼
氏の役目だ」

「で、ここまで来たと」

「そうそう」

「高原、降ろしてー」

姫岸がこの状況に少し恥ずかしく思ったのか、高原に言う。

「うーん、この態勢も悪くない……、っていうか良かったけどない。
まあ、姫ちゃんが降ろしてって言うなら」

そうして姫岸を綺麗に降ろす。

「なんかむかつくなー、この二人」

赤井はその二人を見ていらした。

その瞬間、人影が視界の端を飛んでいった。

人影はドォンと大きな音を立て壁にぶつかる。

「か、はぁ……!!」

「さ、桜さん!!」

それは先ほどまで優勢だった桜だった。

&l t; 4 & g t; ； 最終決戦！！ ； **（間之崎組、最強二人。）** **（後書き）**

二人と言いましたが、頑張ってるのは姫岸の方でしたね。

で、でもでも、ちゃんと背中を支えるって意味で高原も頑張ってるんですよ！！

&l t; 4 & g t; 最終決戦!! (5) (前書き)

どうやら小説家になろうの利用規約が少し変わったそうです。

投稿数が増えたから盗作対策だとか。

パロネタもやりにくくなるのかな？

「どうして桜さんが!？」

さっきまで優勢だった桜さんが吹き飛ばされた!？

赤井は思わず叫んでいた。

「桜島!! お前が何でそっち側にいるんだ!？」

「今の俺は“痛”だ。桜島じゃない」

桜を吹き飛ばしたのは、今まで白道の“白眼視”で止まっていたはずの“痛”こと桜島だった。

桜は動かなくなっている桜島の姿を見ててつきり黒服である白道に止められているんだなと思っていた。まだ白道が黒服を裏切っていることを知らなかったのだ。

「お前、黒服の側だったってことか。ならどうしてお前が止まっていたのが謎なんだが」

「そこでゼーハー言ってる白道が裏切って俺を止めていたまでのことさ」

「ちょ、ちょっと待って!!」

二人の会話に赤井が入る。

「どうやってお前、“痛”は“白眼視”から動けるようになったんだ!？」

白道はやわな男じゃない。

そう簡単に才能を解除するとは思えないが……。

「俺の左手のことを、忘れていないか？」

その問いに答えたのは“創造主”だった。

「そ。“創造主”は頭いいから、吹っ飛ばされながらも左手で俺に触ったんだよな」

“創造主”の左手は才能を全て無効化する。
だから触ってしまえば“白眼視”ですら消し去れる、ということか。

「本当は銃を撃ちながら下がって触れるというのがベストだったんだが。まあいいだろう」

“創造主”は殴られたことなどこともなげに言う。

「歩法・縮地」

「危ねえが、無駄」

桜は二人が喋っているうちに先ほど“創造主”との間合いを詰めたときの“歩法・縮地”音も無く近づき、“痛”を殴り飛ばそうと思ったが、“痛”は見もせずに左手を振ると、突っ込んできていた桜が“痛”から見て左、桜から見て右に吹っ飛んだ。

しかも回転しながら奥のほうにあった壁にさっきより強く激突する。

大きなホールの端っこだ。ざっと30mは飛んだろう。

「さ、桜さん!？」

赤井から見れば、いきなりホールの中央に現れた桜が吹っ飛んでいったのが見えた。

それだけ“歩法・縮地”は完璧だった、にも関わらず“痛”は見もせずに桜を吹っ飛ばした。

「お前瞬間移動才能者じゃねえんだから、縮地とか実際に出来るわけ無いだろう?」

嘲笑うかのように“痛”は言う。

「本当に、あの桜島先生が黒服側だったなんて」

姫岸はその態度に、本当に桜島先生は“痛”なのだと確信する。だが、その口調は前に一度聞いていたかのようなものだった。

「あれ？ 姫ちゃん俺の言ったこと信じてなかったの？」

「あのね、確かに信じてはいたけど、生で見るとやっぱり驚くものよ」

どうやら教えたのは高原のようだ。

「俺の“観察眼”に死角なし。もっとこれからは信じてよね」

高原は少しむくれているようにも見えた。

間之崎にいた時に富士叶と戦っている“痛”こと桜島を“観察眼”で見ていたのだ。

「だがな、確かにお前の“歩法・縮地”ってやつはかなり凄いとは思うがな。センサーを張っていなけりゃ気づくことすら出来なかった」

「センサー？」

“痛”のその言葉が引かなかった。

「そうだな、出血大サービスで教えてやる。俺の“超・念能力”はなんにでも活用できるって言ったら？ 重力のように使うとかだ。それで。ほんの少しだけ、物なんて決して動かせないぐらいの念を俺は自分の周りに送り続けているのさ。それで、念が途切れたり消えたりしていればすぐに気がつける」

つまり、“痛”に不意打ちは通用しないということだ。

「しょうがない。赤井君、協力してまずは“痛”という男を倒すぞ。姫ちゃんの助力は得られないのは分かってるな。“創造主”との戦闘では俺は戦えないが、桜島先生、“痛”ならば俺の才能もフルに

使える」

「わかりました。でも、どうしましょう」

「良い考えがあるが、それをするには“創造主”という男が邪魔だ。だから、俺が“創造主”の気を引くから、お前は何とかして“痛”を捕まえていてくれ。場所は、あそこだ」

高原は指差してその場所を指差した。

「捕まえるときは腰を思いっきり掴んで離さないようにしろよ。何が何でも放すな」

「でも、どうするんですか？」

「それはな――――――」

「さて、その三人でも倒させてもらうかな。ま、この二人が戦う
|| お前らの絶望だけだな」

“痛”と“創造主”は、赤井、高原、姫岸を睨むと、“痛”は高らかに宣言した。

&l t; 4 & g t; 最終決戦!! **(5)** **(後書き)**

ちゃ、ちゃんと伏字とかにしてるから大丈夫だよね！

シリアス展開なのにあとがきがゆるいなあ……。。

&l t; 4 & g t; 最終決戦!! **(6) (前書き)**

これからは、ゴールデンウィーク！

ゴールデンウィークが終わるくらいには、この話も終わるかな？

<4>; 最終決戦!! (6)

「では、“創造主”とやら。相手になりましょう」

「いいのか？ 俺に“観察眼”は効かないが」

「調査済み、というわけですね。ですが、これはどうでしょう」

高原は挑発的に言う、姿が二人へと増えた。

「これは……」

ドッベルゲンガー

「才能名は“もう一人の自分”。知らなかったようですね」
二人に増えた高原はそのまま“創造主”に殴りかかった。

「俺の相手はあの“才能帰却”スキルキャンセラーの赤井君か。やりにくいったらありやしねえのな!!」

“痛”はそれを見て、赤井に向かって飛んできた。
おそらく、自分に念の力を送っているのだろう。

さて、作戦通りにいくか。

「お前は俺の念は消せても、俺の威力までは消せないんだろお!」
どんどんと“痛”は速度を増して赤井に迫る。

そして赤井の目の前で足を地面について、拳を構えた。
そのまま“痛”は今までの速度を使って腰をぶん回し、拳を放つ。

「危ねっ!!」

赤井はそれを横に飛んで避ける。

ブンツと大きな風切り音が鳴った。

「おいしい」

“痛”はそう呟き、こちらを向く。

「こりゃいつまで持つか分かんねえな……、さっさと決めないと」

「おやおや、これは……。お前も二重才能者か」

「ええ」「まったく」「面白いでしょう？」

いつの間にか高原は3人に増えながら突っ込んでいた。

「自分を増やす系統の才能ですか。とはいえ、このタイプは色々と能力が分かりますからね……。おそらく俺が左手で触れれば消え去るのだろうが。それでも、本物と区別がつかないなら危険だな。なら——、」

“創造主”は高原を見やるとぶつぶつと呟くと、右手を前に出す。

「創造…サンダー雷撃、形状は樹形^{ツリー}」

すると、“創造主”の右手から電撃が出る。

だがそれはすぐに枝分かれし、走ってきていた高原全員に向かう。

「これは……」

「さあ、どう出る。分身した方に質量があるのか、ダメージを受けるのか、その他等々、見させてもらうぞ」

“創造主”は前方の3人に注目していた。

「ですが無理そうです」

その声は“創造主”の後ろから聞こえた。

後ろの声によって“創造主”は殴り飛ばされた。

「なっ!？」

そこには、高原の姿があった。

そして目を逸らしていた隙に、今までいた3人の高原は消えてしまっていた。

「私のは才能が才能ですから、死角を突き、トリッキー 奇想天外に予測不可能に攻撃しないといけないのですよ」

そこまで言うその後ろにいた高原まで消えてしまう。

“創造主” はあたりを探す。

すると、高原は最初にいた場所に立っていた。

「成程、相当にやっかいだということが分かったよ。高原衣。全力で叩き潰す」

「恐ろしいな」

高原はそういうと、今度は5人になって“創造主” に向かった。

「こんなのはどうかだよ!!」

“痛” は黒服の内ポケットからボールペンを取り出すと、物凄いいスピードで飛ばしてきた。

それを間一髪で避ける赤井。

「帰って来い!!」

その言葉と共に、後ろに飛んでいったボールペンが方向転換し、こちらに帰ってきた。

「おいおい、耐久かよ……」

それを振り返って避ける。

「これで、どうだ!!」

だが、振り返った隙に一気に赤井に詰め寄った“痛” が赤井を殴り飛ばした。

速度の乗った攻撃。

赤井は3 m程吹っ飛んだ。

赤井は吹っ飛ばされた態勢のまま、ピクリとも動かない。

「もう終わりか？ 齒ごたえの無い奴だな。じゃ、手錠でも掛けさせてもらうぜ。手伝えって言わされるだろうな。あーあ、高原と戦うのは嫌だっつーのに」

“痛”は全く注意することなく赤井の横に立つ。

隙は一瞬。

だが、その一瞬が明暗を分ける。

「おりゃ!!」

赤井はいきなり起き上がって“痛”に後ろから抱きついた。

「な、手前起きてて……!! 放しやがれ!!」

“痛”が身体を振ったりしても赤井は離さない。

今“痛”は赤井の“才能帰却”のせいで才能を使えなくなってしまっている。つまり、一般人と同義だ。

『僥倖だな。まったく』

“創造主”と戦っていた高原全員は呟く。

「ん？ どういう意味だ？」

“創造主”はその言葉の意味が分からず首をかしげていた。

「全員、確実に俺達のこと忘れてるぜ？」

「正直、俺もアンタがここで倒れてると思わなかった」

「準備万端です。廻家さん、桜さん、用意はいいですね」

その声はホールの反対側から聞こえた。

そこには廻家、桜、高原が立っていた。

「私達は」「意識を」「共有している」「だからこんな話し方が」「出来る」

“創造主”と戦っていた5人がバラバラに一つの文章を言う。

「俺と姫ちゃんがここに来たとき」「俺は階段の裏にもう一人」「ドツベルゲンガーもう一人の自分”を置いていた」「お前達の注意が向こうに向いている内に」「コンタクトをとらせてもらった」

高原は5人がかりで説明する。

「だが、あの二人はほとんど戦える状況ではないだろう。そんな負傷した兵をどう使うつもりだ」

“創造主”は二人の状況をよく知っている。

廻家は“鳥”の異常な攻撃力でかなり疲労しており、俺の“消^{キヤ}し去る砲弾”で止めともいえる一撃を喰らっている。

紅桜に関しては先ほど“痛”がかなり痛めつけている。もう以前のような機動力を得るのは難しいはず。

「確かにほとんど戦えないが」「全員が力を合わせれば」「勝てる」「俺はそのタイミングを」「計っただけだ」

高原は自信満々にそう言う。

その答えは、向こうにいた3人が証明してくれた。

「確かに俺は身体を動かすのもきついが、才能は使えるんだよ」「廻家は桜の背に手を当てていた。

「確かに俺は動きが鈍くなったが、まだ身体が動かない訳じゃねえ」「桜は拳を握り締める。

「では、行ってください」

高原の掛け声で、桜が物凄い速度でこちらに向かって飛んできた。

「そうか!! 廻家、お前の」

“創造主”はあることに気がついたようだ。

「そうだ。俺の才能“巡る輪廻”は物体に回転力を与える。だが、その回転する円周を大きくしちまえば、直線に力を掛けることも可能。ちょうど、昔の人が地球が球だと思わず、直線だと思ったようにな。忘れたか? 俺の十八番だろうが」

非常に大きな円周の弧はほとんど直線に見えることがある。
それを応用しているのだ。

「狙いは……、まさか!？」

“創造主”はすこし向こうを見る。

そこには、信頼を置いていたあの仲間の姿が。

「桜!？ 何で、お前!？ そんな速度で動けるはずが……!？」
“痛”は赤井に抱え込まれながらも飛んでくるその男の姿を見て言う。

「この、」

今まで地面から数十センチ浮いていた足を地面につける。

そして先ほど“痛”がやったように、自分の持つ速度を腰の唸りと共に攻撃をして打ち出す。

「馬鹿野郎が!!!!」

「う、うわ!! やめ—————」

“痛”の声はそこで途切れた。

桜の右ストレートが顔面に直撃したのだ。

その威力は尋常なものではなかった。

「押さえきれない————」

“痛”が才能を使えないようにするため抱え込んでいた赤井はその威力に耐え切れず、それでも自分はこの威力を殺さないために、足だけは耐えていようと思った。

その結果どうなったか。

赤井は威力のせいでブリッジのように腰が思いっきり曲がってしまった。

赤井よりも“痛”の方が背が高かったために、ゴンと凄い勢いで“痛”の頭が地面に叩きつけられた。

「じゃ、ジャーマン・スープレックス……」

高原があるプロレス技名を呟く。

ジャーマン・スープレックスとは、相手を抱え込んだ状態で後方に反り投げをするというプロレスの有名な技である。

「期せずして、か。赤井君、流石だよ」

高原は素直に賞賛の言葉を述べる。

「こ、腰が、死ぬ……」

ただ、本人は人生初めての角度でのブリッジを行い、腰がボロボロになっていた。

「……」

思わぬ二段攻撃を受けた“痛”は意識を失っていた。

&l t; 4 & g t; 最終決戦!! (窮地を救う、眩い光。)

「ああ、遂に俺一人か」

“創造主”は“痛”が意識を失っているのを確認し、はあ……と溜息をつく。

「このまま、畳み掛けましょうか!!」

赤井は腰をさすりながらテンションを上げる。

「いや、本当の戦いはこれからだ」

と、高原さんが顔をしかめた。

「どういうことですか? もうアイツ一人ですよ?」

「いや、戦力的にはほとんど最悪だ。ここに来ている全員の中で戦力となるのは俺と赤井君だけだろう。桜さんも動けないだろうし、廻家さんも無理だと言っていたからな」

成程、それは確かに最悪な状況かもしれない。

「でも、やるしかない」

赤井は静かにそう言う。

「そうだな」

高原もそれに同調する。

「こうなれば俺一人でも計画を実行してみせる」

“創造主”がこちらを向いて構える。

「なあ、赤井君。一応作戦のようなものが無いわけではない。聞くか?」

「え!?!? あるんですか!?!」

そんなものがあるなら早く教えてくれればいいのに。

「いや、これは作戦とはいえないがな。希望、だ。賭けと言っても良い。いいか、ひたすらに時間を稼げ」

「え、あ、はい。分かりました……」

一体どんな作戦なんだろうか？

「成功すれば超高確率で勝てる。まあ、失敗すれば超高確率で負けるだろうが、な！！」

高原の姿が6人に増える。

そしてまた高原は“創造主”へと走っていく。

「俺も、行くか！！」

赤井も高原に続く。

「どんな策かな、策士高原君。だが、俺相手に時間を稼ぐなんて出来るのか？」

“創造主”は両手で構える。

「創造…風爆」
エクスプロージョン

“創造主”がそういうと、急に“創造主”の方から爆風のような風が飛んでくる。

そして赤井と高原さん×6は後ろに飛ばされた。

“創造主”の技、エクスプロージョン“風爆”はある程度の巨大な空気の塊を急激に膨張させるようにして創りだし、大きな風を生み出す技である。

この出来た風は、周りの空気を押し出すようにするのでかなり広範囲にまで風が及ぶ。

また、周りの空気は才能で出来たものではないので、“才能帰却”も効かないのだ。

「消し去る砲弾」
キャンセルカノン

“創造主”は右手を後ろに構え、ジェットのような気流を創って赤井に迫る。

そしてその左拳で殴り飛ばす。

「がっ！！」

赤井は風に飛ばされていたこともあり、その衝撃を全て受け壁まで吹っ飛んだ。

「赤井君！！」

全員の高原が赤井のほうを見る。

「そっちを注意していいのか？」

その声はすでに着地した“創造主”だ。

“創造主”は右手をすでに前に出していた。

「創造…雷撃^{サンダー}、形状は樹形^{ツリー}」

すると右手から電撃が6人の高原それぞれに飛ぶ。

「ちっ！！　まずい！！」

高原は急いで5人を消す。

だが、最後の一人は消えない。

「ようやく本体を発見したぞ」

「ぐっ！！　があああ！！」

高原に電撃が走る。

「ふむ、お前の才能^{ドッベルゲンガー}　もう一人の自分”がお前の行動である程度分かってきたな」

倒れている赤井と高原に向かって言う。

「増やした分身の方にも質量があり、意識を共有でき、どうやら創った分身の方も才能を使えるようだ。創った方が更に才能を使って分身を創っているようなところも見て取れたからな。それほど強い才能、どこかに弱点があると思ったわけだ。その弱点ってのは、ダメージの共有、だろ？」

「ぐっ……!!」

高原は答えたのか答えてないのか分からない呻きを漏らす。

「でなければ、わざわざ増やした方を消す必要も無いしな」

“創造主”は語る。

「ああ、お前達に手錠でも掛けるか」

“創造主”はゆっくりと歩き、高原に腰から取り出した手錠を掛けた。

「赤井君、君はよく頑張ったと思うよ。その根性、俺の仲間として活躍させて欲しいものだ」

そして赤井の腕に手を掛けた瞬間だった。

【1億、ボルテージ】

その声は階段側から聞こえた。

瞬間、まばゆい光と共に電撃が“創造主”に飛ぶ。

「なっ!？」

いち早く“創造主”はそれに気づき、左手を前にする。すると、雷が消えうせた。

「まさか……。やはり、“花”^{フラワー}は抑えられなかったということか……」

振り返った先には、体中に電気を張り巡らせている男が堂々と立っていた。

【マア、機械仕掛けで天災ヲ止メル事ヲ出来ル訳が無い、ダロウ？】

「天音……、じゃん？」

「あれは、天音さん？」

「どうということー？」

「天音って、梁山君と十島君の友達なの？　こんな人なの……？」
今まで静かに黙っていた梁山、相馬、十島、姫岸も思わず声を上げる。

その姿は、ここにいる全員が知っている人だ。

だが、その喋り方と行動、雰囲気が全く違っていた。

【嗚呼、俺ニ疑問ヲ抱クノモ無理ハ無い。俺ハ天音雷綱デハアツテ、
天音雷綱デハ無い】

その男は堂々とした面持ちおももで語る。

【俺ニ名前ハマダ無い、ガ、自分デ付ケタ名ナラアル。“雷”サンダートデ
モ呼ンデクレ】

その男、天音雷綱であり“雷”サンダーと名乗った男は体の周りの放電量を増やして答えた。

<4>最終決戦!! (7)

「成程な、策士が。これを狙っていたということか」

“創造主”は忌々しげに呟く。

「本気で、賭けだったがな……」

ふらふらになりつつも高原は答える。

「サンダー“雷”？」

「じゃあ、あれは天音であって天音でないって事じゃん？」

「そういうことになるのでしょうか。あれは私の知っている天音さんではありませんし」

「そうなの？ てっきり私はこんな人かと思っちゃったわよ」

十島、染山、相馬、姫岸は“サンダー雷”のその説明を聞いて一応は納得する。

「やるだけ、やってみようとするか。カミナリ天災よ」

【人間ノ反抗ナシテ小サイ物ダガナ】

“雷”はそういうと、右手に電気を集中させる。

とはいっても、ほんの一瞬気をそむける程度。

そのまま右手を前に出す。

【ダガ、命令デモ無ク己ノ信念ダケデ俺ト戦オフトシテイル、其ノ心意気ハ買オフ】

“雷”の右手から幾重もの電撃が飛び出す。

“創造主”は“帰却者の左手”でこれを打ち消して止める。

【ン？ 消ヘタ？】

「さて、化物退治と行くか」

“創造主”は右手を後ろに、左手を前に構える。

もしもこの男が“花”の報告通りなら、ほとんどの物理攻撃を無効化できる、変異系メタモルフオーゼということになる。

いや、もしもなんて希望的観測は避けよう。

希望は碎かれ、絶望が我が物顔で闊歩するのがこの世の中だ。

そうなれば勝てるのは、俺の左手だけか。

「キャンセルカノン消し去る砲弾”！」

今までの最高噴出で“創造主”が飛ぶ。

【其ノ程度デ俺ニ殴リカカロウト思ツタノカ？】

馬鹿、とても軽く言うかのように。

“雷”は一瞬でその大砲のような速度の拳を右に移動することで避けた。

そして一瞬で“創造主”まで詰め寄った。

【カミナリ“神鳴”】

そのまま“創造主”の両耳から両目にかけて手を合わせると、“雷”の両手が輝く。

ドオオオンという、漫画的な音がよく似合うほどの爆音がホールに響き、“創造主”のいた辺りが鋭く輝いた。

それは、ホールが揺れたかと錯覚するような程の音だった。

「……！？ 何だ！？ 敵襲！？」

その音は意識を失っていた赤井が目を覚ますほどのものだった。

他の全員も耳を塞いだ。頭がくらくらする。目の前がちかちかしたりする。

【命ダケハ取ラナイデヤルヨ。俺ハアンタニ恨ミガ其処^{ソコ}マデ有ル訳
ジャ無イシナ】

“雷”はそこで立ちっぱなしでいる“創造主”に言う。

“創造主”は、目を見開いたまま硬直していた。

別に直接電撃を受けた訳ではない。

ただ、超至近距離で超爆音と閃光が爆裂した。

“創造主”の耳から血が垂れた。

そしてバランスを失ったのか、ふらりと倒れこんだ。

超爆音は鼓膜を破壊し、閃光は目を焼いた。

耳には三半規管という人間がバランスを保つための器官があるが、それも破壊され“創造主”はバランスを取れなくなったのだ。

あっけなく、実力差、才能差を見せ付けられ、

戦いが集結した。

&l t; 4 & g t; 最終決戦!! 〵 (7) (後書き)

歴史なんてあっけないものです。

むしろ、主人公がラスボスを倒せるなんて実際では稀なことなので
す。

あっけなく、人は負けるのです。

&l t.; 5& g t.; 〵全員はある異変に気づく。 〵(前書き)

何と、まだ終わりませんっ!!

別にこれをずるずると引きずる気はありませんがー。

全員はある異変に気づく。

「終わった？」

全員が啞然とする。

【マア、ソウナルナ】

“雷”はこちらに向かって歩いてきながら言う。

「しかしあつけないというか、何と言うか、ですね」
相馬は呆然としながら呟く。

「確かに、歴史なんてものはこんなものだな」
太陽は見てきたかのような口ぶりで言う。

「ん？」

そんな結末に少し違和感のようなものを抱く全員を尻目に、赤井があるものに気がついた。

「どうしたの？ 赤井？」

「いや、あの“創造主”の右手が少し動いたような……」

赤井が“創造主”を見ていると、ピクリと右腕が動いたような錯覚を受けたのだ。

「でも、
“創造主”
は別に死んだわけじゃないんだから」

“創造主”は意識を失っているだけだ。

だが、妙な胸騒ぎを感じた。

まだ終わっていないような。

「でもよ、あの右手何かおかしいじゃん？」

赤井の言葉を聞いて、その異変に最初に気がついたのは染山だっ

た。

「紫瀬どうかしたのー？」

十島が答えた。

「いや、何か黒くなってないか？」

そう、“創造主”の右手が黒く染まり始めていた。

「言われてみれば……」

最初よりは黒くなってきている気がする。

それにじっと観察してみると、その黒はだんだんと濃くなっている。

そして“創造主”の右手は真っ黒に変色してしまった。

「一体何が起こってるって言うの？」

紅は訳が分からなくなっている。

「俺もアイツとはかなり長い間一緒にいたが、あんな状況は初めてだな……」

廻家も知らないようだ。

その時、“創造主”の黒くなってしまった右腕から何かがゆっくりと染み出すように出てきた。

それは霧のような感じで、“創造主”の周りをくるくると回りながら集まっていき、同時に“創造主”の右腕からは黒色が消えていく。

そして集まった霧は人が一人くらい入れそうな球となった。

全員が固唾を吞んで見守る中、それは黒い球から現れた。

「ふう。ようやく出てこれやがったってもんだ」

それは真っ黒な人影がそのまま立体になったような黒さをしていた。

よく探偵物とかで途中で出てくる黒い犯人を示す人影のような。

その人影は左腕が途中から無いという点を除いては、ある男にそっくりだった。

「……“創造主”？」

その人影は、“創造主”と瓜二つだった。

&l t; 5& g t; ; 全員はある異変に気づく。 (後書き)

基本ですかね。

ラスボスを倒したかと思ったら……、みたいな。

&l t; 5& g t; ; 異変は面倒臭そうだが饒舌に話す。 (前書き)

T H E ・ 異常展開その二です。

説明の回となっています。

<異変は面倒臭そうだが饒舌に話す。>

「な、何なんだよ……、お前」

その姿を見て、赤井は思わず声を上げる。

明らかに人ではない。

なら、何だ？

「あー、説明しないと駄目なのか？ まったく、こいつ寝ちまってるしー」

その人影のような黒はだるそうに眩き、足元にいる“創造主”を蹴飛ばす。

「一回しか説明しないからよく聞けよ？ 赤井、お前この“創造主”の才能は誰に教えて貰ったんだ？」

「え？ ……、その廻家さんですけど？」

急に話が赤井に向いてちよつとしどろもどろで答える。

「ん？ ああ、俺が教えた、教えたけれど、なんだよ？」

廻家はある人外を前にし、話を振られても普通に答えた。

「ちゃんと教えたか？ こいつが言ったとおりに」

人影は念を押す。

「じゃあ、リピートしてやる、してやるよ。えーっと……」

廻家は頭を掻いた。

「『俺は“二重才能”。一つは“創造主の右手”^{クリエイターズ・ライト}。これは発能力の

すべてを凝縮したようなものだ。炎でも氷でも電気でも何でも創れる。とは言っても、生物までは創れないがな。もう一つは“帰却者^{キャンセラ}」

イズ・レフト

の左手”。こいつは触れたものが才能なら何でも無効化できる。それに、この左手が触れている間はどんな才能者でも才能を行使することが出来なくなる』つつつてたな。あれだけ衝撃的な説明、忘れるわけ無いだろ」

廻家さんはすらすらとそう説明した。

俺に教えてくれたときと同じだ。

「じゃあ聞こう。どうして“創造主”は、生物が創れないと知っていると思う？」

……！？

全員の空気が凍りついた。

そういえば廻家さんが教えてくれたときもそんなことを言っていた。ただ、そんなところまで説明するのを忘れていた。

いや、そんなことよりも。

これは、俺と同じだ。

白道にここに連れてこられた時の質問に近い。

その才能が史上類を見ないものだったとき、それには例がない。だから、調べようが無い。

使ってみないことには。

「まさか……」

全員の顔も驚く。どうやら全員この結論に辿り着いたようだ。

「気がついたようだな。説明が楽で助かる。そうだ、俺は――――

――――、」

「唯一“創造主”が創り出した生命体、“クリエイト・シャドウ創造する影”。まあ長いから“影”シャドウで良いがな」

その人影、“影”シャドウはこともなげにそう言った。

「待てよ!!」

発言に異論を申し立てたのは梁山だった。

「なんだよ？ 嘘なんかついてないっての」

「おかしいじゃん!! そんな生命体、いるわけ無いじゃんよ!!」
そうだ。

まったく生命体には見えない。
ファンタジーの魔物みたいだ。

「もしも俺が完璧な生命体なら、“創造主”は他にも生命体を創っていたかもしれないがな」

もしも？

まるで自分が――――、

「俺は不完全な存在なんだよ。どこがどう不完全かって言うなら、まず、俺にはこんなふうに色、というか身体が無い」
身体を広げてみせる“影”。

「それに、俺が出てくるところなる」

“影”は右手で下にいる“創造主”を指差す。

「あれー？」

十島があることに気づく。

「影がー、無い？」

そう、“創造主”から左腕を残して影が消えてしまっていた。

「どうのことだ？」

「俺に聞かれても。こういうところから俺は“創造する影”って名づけたんだがな」

まったく才能ってやつは、わからない。

「もう一つ、そしてこれがこいつにとって一番困る出来事なんだがな」

更に“影”は続けた。

「俺はこの“創造主”の才能の内の一つ、“クリエイターズ・ライト創造主の右手”の能力の八割を持っていったって所だ」

「持って行った？」

そんな才能は簡単に持ち運びできるものじゃないと思うんだが。

「そう。俺がほとんど持って行った。だからこいつは俺がいなければ左手の才能しかなくなっちゃったのさ。だからこそ、俺はずっと右手に封じ込められてたのさ。身体が無いからその辺の概念は無視できるしな。見ただろ、俺が右手から出てくる所。とはいっても、俺は才能を四割程度しか貸し出してやらなかったがな」

つまり、この“影”という男は“創造主”からしてもいないと困る存在だったというわけか。

「だけど、どうしてあなたは“創造主”の言うことを聞いて右手なにかにこもってたの？」

今度は紅の質問。

「俺は実体が無い。この姿だって全部才能から出来ている。そして、こいつの左手には才能を全部消せる力が眠ってたろうが」

そうか。

あの左手に触れられた瞬間、消えてなくなってしまうのか。

「ほんの少し魔が差して人間を創ろうなんて思ったのがこいつのおこがましい所。神になったとでも思っていたのかね。こいつの“創造主の右手”は俺が貸したのに残ったので足して六割だ。それで戦ってたわけだが、もしもこいつが十割の力で戦えてたらどうなってただろうな？」

“影”は挑発的にそう言った。

【オイ、オ前達。今聞クノハソンナ事デハ無イダロウ？】

“雷”が“影”が出てきてから初めて声を上げた。

「どういうことだ？」

【大切ナノハ、オ前ニ敵意ガ有ルカ無イカダロウガ】

“雷”は、ここが戦場だということをまったく忘れていない。敵意が有るか無いか、極論を言えばそれだけでも良いのだ。

そんな重大な問いに“影”は、

「あー、俺はこいつのくっだらねえ野望に付き合う気はねえっての。せっかく自由になったんだ、羽を伸ばしたいね」

と、ぱっさり切り捨てた。

そして、こう続けた。

「知りたくないか、どうして“創造主”がこんな奇行に走ったのか」

&1 t; 5 & g t; ; 異変は全てを語る。 (

「知って、いるのか？」

廻家は急に重い顔になった。

「ああ。俺と“創造主”は記憶こそ一致してないが、知識は一致する。難しく言うなら、エピソード記憶は繋がってないが、意味記憶は繋がってるって所だ。それに、俺が生まれたのはあの事件が起こる前だしな」

“影”は伊達や酔狂でなく知っているようだ。

「廻家さん……、あの事件って、崩野の」

「だろうな」

赤井は廻家から聞いてその事件の詳細まで知っている。

正直、最悪の事件だ。

「回想とかはだるいから、あつた事件だけ教えてやる」

「こいつは、普通に生活していた。友達だつて多くいた。その中でも、親友と呼ばれるような存在だつていたわけだ。分かるだろう？」

「創造主」達には親友同士だけの呼び名とかがあったんだ」

「親友は四人。才能から取った名だろうが、“創造”^{create}、これは今の“創造主”^{creator}、他は“崩壊”^{crush}、“光輝”^{clear}そして“閉路”^{closed}だ。周りの奴らからは敬意からか“4C”なんて呼ばれてたがな」

これなら、“創造主”が初めて赤井と会ったときに『崩壊』クラッシュいや、崩野響輔ではないか?』って聞いた理由も分かる。

「敬意？
 どういうことだ？」

ここで初めて太陽が質問した。

「こいつら四人は特異な才能を持っていたんだ。“創造主”も然りだろ。そして各方面に優秀だったしな。例えばこの“創造主”はかなり頭が良い。IQ220とか言ってたな」

『IQ220!？』

叫んだ赤井、梁山、紅、太陽、叶、祈の声がハモる。

「とはいっても頭に血が上りやすかったりして、いじられやすいキヤラだったけどな」

「想像ができねえ……」

いじられやすい秘密結社のボスってどうなの？

「良くも悪くも口車に乗りやすかったり、騙されやすいってことだ。ここは関係ないがな。で、本題だ」

「赤井君は聞かれたろう？ “崩壊”こと“崩野響輔”に出会ったのではないかってな」

「……ああ」

赤井はだんだん顔が暗くなる。

この先の展開を知っているからだ。

「“崩野響輔”はな、“創造主”がいた学年の者達のほとんどを虐殺したんだよ。その中には“創造主”が好きだった“閉鎖”も含まれていた。生き残りは、『円卓』にいる一星の輝、こいつは今言った“光輝”だ。そしてその廻家界視もそうなる。他にも“光輝”が守った数人がいるだろうが、あんま今は関係ないな」

「は？」

「廻家さん、本当じゃん!？」
いち早く廻家が染山に聞く。

「本当だ」

嫌なことを思い出したように、廻家は答える。

「“創造主”は絶望し、こんなくだらない世界をぶっ壊そうと思っ
たわけだ。そりゃまあ、信じていた奴に好きだった奴を殺されたし
な。これが理由だ」

全員が静かになる。

その中で、落ち着いている男が一人いた。

「どうして、相馬は落ち着いているじゃん？」

「だって、知っていましたから」

『何!？』

こんどは全員が驚く。

「いえ、捕らえられている皆さんを助けるときにマスターキーを取
りにいったんですが、その鍵を取りに行った部屋にあったパソコン
がありましたね。そこで読んだんですよ」

「そういえば、帰ってくるのが遅かったな」
赤井は思い出していた。

あの時鍵を取ってくるだけだったのに、やけに相馬が帰ってくる
のが遅かったのだ。

「へえ。成程、だとするとお前は凄いな。そんな事情を知っていな

がら戦えた、ということか」

「同情なんて抱きませんよ。大切なのは今していることですから。過去には生きません。私達が生きているのは現在です」

「……随分と、卓越した考えだな」

“影”は素直に驚く。

高校生風情にそんな考えが出来たことに。

「あ、一言言い忘れてたわ」

“影”は色々なことに驚いて静かになった全員に構わず言う。

「さっきよ、俺に敵意があるのかって聞いたろ？俺はこんな世界征服なんてくだらない野望に乗る気は無いけどよ」

すると、“影”はいきなり黒い矢の様な形になり凄い速度で飛んでいくと廻家に突き刺さった。

そのままその矢は廻家の中に入っていくと、消えてしまった。

「な、何だ今の!？」

全員が廻家を見る。

「野望が無え訳じゃねえよ!!」

その声は廻家そのものだったが、喋っていることは“影”だった。

&l t; 5& g t; ； 異変は全てを語る。 ； （後書き）

ちなみに意味記憶とは文字通り意味の記憶で、 『信号は赤で止まる』 『火は熱い』 などのことです。

エピソード記憶とは思いつきの記憶です。 高校の記憶とか、 何をしていたかとかの生活の記憶なのです。

解説終わり！。

&l t; 5& g t; ; 異変は自由を得て動きだす。 〵 (前書き)

五章長いな！。

戦闘とか説明だから、仕方ないよね！！

<異変は自由を得て動きだす。>

「しかし、生身の身体というのは本当に良いものだな」
廻家の声で、おかしなことを語る。

「ま、まさか……」
赤井に最悪の考えが浮かぶ。

「廻、家さん？」
廻家のことを知らない人たちは急に口調が変わり首をかしげる程度だが。

分かる。これは、

「説明してなかったかな？ 俺、“影”は長い間“創造主”の腕の中に入っていたからな。人の身体にはいつ乗っ取ることが出来るんだよ」

廻家は、いや“影”は高笑いしながら答えた。

「そして“創造主の右手”が使えるのはもちろん、乗っ取った者の才能も使えるんだよ！！」
サークルカッター スピン
円影刃、回転！！」

“影（廻家）”が右手を上に掲げると黒く円状に回転する刃が出現する。

“影（廻家）”は右手を振り下ろす。
するとその刃がブウンと風切り音を立てて、紅に飛ぶ。

『！？』

飛んでいる最中、その刃が三つに分裂した。

それは紅、梁山と十島の方、桜に飛ぶ。

「危なえ！！」

すぐさま赤井が紅に飛び、その刃を手で受け止める。

影の刃は触れた瞬間に消え失せた。

梁山達と桜はその刃をジャンプで避ける。

「ふう。こうやって実体を持って相対するのは初めてだな。“創造主”、いや“創造”」

全員が刃に注目している間に、“影（廻家）”は“創造主”のところまで詰め寄っていた。

「手前が邪魔な左腕なんか持ったせいで、俺は今でも左腕を動かすことすら出来ねえんだぜ、この糞みたいな左腕の才能のせいだな！！」

よく見ると、左腕はだらんと垂れ下がっており動かしているような様子は無かった。

“影（廻家）”は叫び終わると、右手を不意に振った。手には黒い剣のようなものを握っている。

その瞬間、“創造主”の左腕が根元ぐらいから宙に飛んだ。

『！？』

これには全員が驚いた。

その左腕はぽとりと落ちる。

“創造主”の左腕と飛んだ左腕から血が噴き出した。

「な、何で……」

「さっき言っただろ？ この左腕さえ、貴様のような才能さえなければ俺は左腕も使えて最強だったのに。むかついて当然だ」

赤井を見やって答える。

「まあいいさ。俺はこうして肉体を手に入れた。そうだな、冥土の土産に俺の野望でも聞くか？ まず、俺に対する危険因子を殺す。次に、邪魔な奴らを殺す。最後に、むかついた奴を殺す。世界征服とは言わんが、こうすれば小国ぐらい乗っ取れる」

ふざけた野望だ。

だが、誰も動けない。

「どうする、攻撃してみるか？ ただ、俺はこの身体がボロボロになったら他のものに乗換えるだけなんだがな。いや、それ以前にお前達に戦うだけの気力があるかどうか分からないがな」

そして“影（廻家）”は笑う。

別に廻家が乗っ取られているから誰も動けない訳ではない。

おそらく、赤井が“影（廻家）”に触ればあいつは飛び出すだろう。

しかし、触れられるかどうかは分からない。

連戦に次ぐ連戦のようなものだ。

この世界はRPGじゃない。回復道具なんてあるわけが無いのだ。全員が疲労しすぎていた。

一人を除いて。

【ソイツハ仲間ノ様ダナ。ジャア、殺サナイ程度ニ動ケ無クサセテヤルカ】

“雷”は一瞬で“影（廻家）”まで詰め寄ると、両手で目と耳を

覆った。

先ほど“創造主”を沈めた構えだ。

「そう、赤井に次ぐ危険因子が君だ。注意してないわけが無い」
“雷”が“神鳴”を放つよりも先に、“影（廻家）”はある行動を起こしていた。

先ほど切り落とした“創造主”に左腕の切り口の辺りを黒い影のようなもので掴んで飛ばし、“雷”に触れさせた。

【ん？ さっき切り落とした左腕、か————】
その瞬間バチンと大きな音が立ち、“雷”が常に纏わせていた電気が消えた。

「お前は赤井と比べて攻撃力も防御力も桁違いだ。だが、それ故に人の小さな行動を無視しすぎる。つまり、油断しすぎなんだよ。だからお前は赤井に次ぐ、つまり二番目の危険因子な訳だ」

“雷”は“創造主”の左手の才能を知らなかった。

“帰却者の左手”は触れたものの全ての才能を消す、ということを。

「あれ？ ここ……、どこ……？」

その声は“雷”ではなく、天音のものだった。

“影（廻家）”は腹部から黒い石柱を飛び立たせ、天音の腹部を強打した。

「ぐはっ!？」

天音はそのまま相馬の辺りまで吹っ飛び、そのまま意識を失った。

「お前の報告は聞いている。“創造主”の仲間の“花”という奴が、お前達がここに来るほんの少し前に調べていたんだよ。監視カメラにおかしな雷が映るとかでな。お前は二重人格だそうじゃねえか。しかも、才能に性格、意識が付与されたなんていうな。俺にそっくりだったから、ついつい覚えちゃったぜ。さて質問だが、才能に意識が付与されたんなら、それが消されちゃったらどうなるんだろうな？」

“影（廻家）”は右手で“創造主”の左腕の切り口辺りを器用に持って語る。

「普段はそっちの気弱な方に閉じ込められてるんだろ？　なら、一度中に引っ込ませてそっちの意識を失わせれば、なかなか出られないよな？」

希望が、絶たれた。

<t;5>t;、異変に赤井は迫られる。、

どうすればいいんだ？

「まずは、その赤井君から殺させてもらおう」

“影（廻家）”はこちらを向く。

このままじゃ、全員が死ぬだろう。

「俺はこいつみたいな馬鹿じゃない。危険因子のお前から確実に殺す。とはいっても道具は何にしたものか」

“影（廻家）”は“創造主”を一目見やると、周りを見渡す。

死んで、たまるか。

どんな絶望的な状況でも、やらないやならない時がある。

「そうだな、この左腕を使って赤井君の才能を打ち消してから首でも飛ばすか。知ってるか？」

“才能帰却” 同士が触れ合うと両方の才能が無効化されるそうだ」

“創造主”の左腕の切り口辺りを持ってこちらへ向かってくる。

「やってやんよ」

赤井はゆつくりと立ち上がる。

正直立ち上がるだけでも腹に突き刺さるような痛みが走る。

だが、

「ここでやらないきゃ誰がやる。残念だよ、まったく」

「立ち上がるか。しかし、どうやらダメー
ジは大きそうだが？」
後

言わせてもらおうなら、俺はそんな姿でも容赦する気は毛頭無い」

だろうな。

この男は全力で俺を殺しに来るだろう。

「やらずに死ぬより、やって死ぬ。もちろん、死ぬつもりで戦う気は無いけどよ」

「そうか、せいぜい頑張りたまえ。お前の体力に合わせて、短期決戦にしてやるからよ!!」

“影（廻家）”は叫ぶと“創造主”の左腕を思い切り赤井に向けて放り投げた。

どうやら、あれに触れると俺の才能まで打ち消されちまう。つまり、あの男の才能まで喰らうことになってしまう。

赤井はそれを注意して避ける。

そして左腕から注意を“影（廻家）”の方に向けると、

「終わりだな」

“影（廻家）”はこちらに飛びながら身体を回転させてこちらに迫っていた。

左腕はブラフ、この攻撃をするために投げつけて注意を逸らしたのだ。

そしてその回転のまま右腕を構える。

廻家の才能で回転を強化して、一撃で殴り飛ばす気だろう。

その回転はかなりのもので、一秒間に2・5回転くらいしていた。

ただ、これを回避するすべが無い。

考えだけがとりとめも無く浮かんでは消えていく。

やはり人間危機、というよりは死ぬ前になると脳の活動が一時的に活発化するのだろうか？

“影（廻家）”の動きがゆっくりに見える。
相当な速度で回転しているはずなのに。

ゆっくり見えたからといって、身体は動かない。

これも後から見ればコンマ数秒の話なのかも知れない。

いや、どうでもいいか。

殴った瞬間に俺の才能で“影”が廻家さんから飛び出すんだ。

後はみんなに任せようか。

赤井はそんな遺言めいたことを考えた。

そして、目の前に拳が現れた。

&l t; 5& g t;) 異変に赤井は迫られる。) (後書き)

次の話くらいで完結しますかねー、第五章。

多分。

仲間の力は異変などものともしない。

“影（廻家）”の拳が迫る、その瞬間だった。

「歩法…縮地、攻法…開放、複合発動」

その声は妙に俺の耳に響いた。

身体が謎の力で壁側に引っ張られた。

そのまま拳をかわす様な形となった。

そして目の前にある男が瞬間移動したように現れた。

「桜さん!？」

「防法」
「衝流」

桜は赤井を横に逸らし、自分でその拳を受け止めた。

そして壁まで吹き飛んだ。

「ぐっ!？」

「!？」

声には出さなかったが“影（廻家）”もこの動きには驚いていた。

そして、そこに迫る影がもう一つあった。

「はあ！！」

それは紅だった。

紅は鋭い蹴りを“影（廻家）”に叩き込んだ。

そのまま“影（廻家）”も壁に激突する。

「ちよ!?! 紅!?! ためらい無さ過ぎない!?!」

「今そんなこと言ってる場合じゃないわ!!
それより、アンタも

行ってくるのよ!!」

え? と赤井が言うよりも早く紅の右足が腰の辺りに当てられる。

「大丈夫、痛くは無いように調節してあげるから」

何言ってるのか意味が分からな――――、

赤井がそう考えている最中に、腰に衝撃が走る。

そして、“影（廻家）”のところまで蹴り飛ばされた。

そのまま“影（廻家）”に衝突するようにして着地した。

「なっ!? 手前――――、」

“影（廻家）”は自分に触れているのが赤井ということに気づき、叫ぼうとしているが言葉が途切れた。

そして廻家の身体から黒いもやのようなものが飛び出した。

「糞!! 追い出されちゃった!!」

“影”は廻家から飛び出したようだ。

「さっさと寄り代しろを探すしかねえか……。ん? ちょうど良い。才能は知らねえがあの“創造主”が気に入った男にでも乗り移るか!」

“影”は何かに気がついたようだ。

それは、ホールの真ん中のほうに一人で立っている男だった。

“影”はまた黒い矢の様な形となりその男へと飛んでいった。

「う、うわあああ!!」

その男は悲鳴を上げて走って逃れようとするが、“影”の方が圧

倒的に速いのが見て取れた。

「赤井、ごめんなさい。あんな風に蹴っちゃって」

「残念だが、お前のおかげで“影”を出すことが出来た。怒ってない。それよりも、あの男を助けないと!!」

赤井の下に紅が寄ってきた。

が、正直今はあの男を助けないと、また入られてしまうのではないか？

「ん？ 赤井見えないの？ アイツなら大丈夫だって」

そう言われ目を凝らしたとき、特徴ある口調が聞こえた。

「何ちゃって。ですかね、申し訳ございません」

“影”がその男の身体を貫いた。

が、そのまま通り抜けてしまった。

「相馬か!!」

相馬の才能“オールパス通行許可証”は何でもすり抜けさせることが出来る。

「な、なんだ！？ 一体どうなってやがんだ!？」

“影”はうろたえている。

「赤井」

「景気よく頼むわ」

「行って来て!!」

紅はまた赤井を蹴り飛ばす。

その方向は、“影”の方向。

「ちっ！！ もっかい！！」

“影”はまた矢のような形となって相馬に飛ぶ。

「無駄ですよ。それに、あなたももう終わりでしょうね」
相馬の言葉通り、“影”は相馬の身体をすり抜けた。
そして今“影”は人型に戻っている。

「一体どうなってやがんだ！？」

まったく意味が分からない。
どういうことだ？

こんなことを考えず、目の前の男にこだわることなく、他の者に
乗り移れば良かったのだ。

つまりぬこだわりは、死を招く。

『行っけええええええ！！！！ 赤井いいい！！！！』
全員の声が一致した。

“影”はその声でようやく自分に迫るものに気がつく。

だが、気がついたときにはもう遅かった。

「おっりやあああああ！！！！！！」

紅に砲弾のように飛ばされていた赤井は咆哮を上げ、“影”を思
い切り殴り抜いた。

そして赤井はそのまま貫通するように飛んで着地した。

「やったか!？」

赤井は後ろを振り返る。

「あ、あ、か……」

声にならないようなかすれ声が“影”から上がっている。

“影”は赤井に殴られた右半身を丸く消されていた。

確実にもう動くことすら出来なさそうだ。

そして“影”は存在を保っていたらなくなったのか、ボンと爆散するように消えてしまった。

「終わった、のか……」

フウウと息を吐き、今度こそ赤井は本当に気が抜けた。

他のみんなもフウウと息を吐き、中には倒れこむ者もいた。

戦いは、終わった。

&l t; 5&g t;; 仲間の力は異変などものともしない。)(後書き)

と、言うわけで!!

遂にこの戦いが終了しました!!

わー(拍手)

でもまだほんのちょっとだけ続きます。

これで今回の大体の話は終わったので、感想&評価お願いします!!

ゝ特に観るものも無くただ徒然^{つれづれ}なるままに。)(火桜芙蓉。

(後日談、その他の話。)(前書き)

この話は補完の話っぽいですね。

まあ、事件も終わっちゃったことですし。

（後日談、その他の話。）

その後。

「お前達、大丈夫だったか!!」

外から焰さんとその仲間の警察が迎えに来てくれた。

焰さんは桜さんからメールをもらっていたらしい。

「いつそんなメール送ったんですか？」

「ほら、前に言っただろ？ 紅が元々追われる原因になったUSBメモリ。あの中にロックされてるフォルダとか隠しフォルダがあって、俺の親父が中身が全滅してたけど復旧するってな」

そういえば六日前そんなことを言ってた気が。

「一週間かかるって言って五日で終わらすのが俺の親父だ。で、俺がここに来ている間にこの携帯にメールが来た。今日作戦が実行されることとか、あいつらの才能とかな。“創造主”の才能は無かったが。その中にはこの場所の詳しい住所がかかれてあったから、一応送っと思ったんだ」

いつの間にメアド交換なんかしていたんだろう。

そんなことは置いといて。

俺達は全員まず病院に送られた。

桜さんなんかは平気そうにしていたが、あばらの骨が三本折れていたそうだ。

他のみんなもそれぞれに傷を負っていた。

でも、みんな命に別状は無かったそうだ。

一番酷かったのは白道だ。

才能の使いすぎで一週間ほどは目が見えないレベルなんだそうだった。

そして俺達のゴールデンウィークのほとんどは事情聴取に潰された。

そのときに焰さんから聞かされた話だと、あのホールからいつの間にか“創造主”が消えていたそうだった。

他の階にいた者達もごっそりまとめて、幹部達が消えてしまっていた。

“影”と戦っていた頃だろうか。

そのせいで俺達の事情聴取も長引いたのだが。

「こんなことなら首突っ込まなければ良かったじゃん」

「言わないのー」

染山と十島はぶつくさとぼやいていた。

そういえば病院に行く途中、天音がよって欲しいところがあると言った。

そこは今にも倒壊しかけのビルだった。

せめてちゃんとしたところで供養して欲しいと思っただったが、

「っ、天音!」

全員が暗い顔をしてそのビルに向かい、三階に天音がいったときに誰かが天音に抱きついてきた。

「ふ、藤崎!」

藤崎は平気な顔をして生きていた。

「どういうことじゃん？」

「あー、“グレイドアップ値上昇”で回復力を強化してたんだよ。実は切られた時に硬化もしてたんだがな、あっちのほうはとっさ過ぎてあまり効果が無かったんだ」

藤崎の才能、“値上昇”は物体に長所を付与する、もしくは長所を強化することが出来る。

もちろんそれは自分の身体にも活用可能という訳だ。

こうして、俺達からはまったく死者を出すことなく戦いが終わった。

「そういえば、梁山達はどうして“創造主”のビルまで来れたんだ？」

赤井はふと思いついていた。

あそこにいられる理由が分からない。

「ああ、それが……」

「思い出せないんだよー」

「なんでやねん!!」

ふざけたことを言い出した梁山と十島の頭を赤井は思い切りはたいた。

「あ!!」「思い出したー!!」

梁山達がはたかれてから声を上げる。

「舐めてんのか!!」

絶対ネタだっただろ!!

「いや、はたかれるまで今の今まですっかり忘れてたじゃんよ」

「本当だよー」

「信じられるか!!」

そんな中、梁山達から話を聞いた。

どうやら裏切り者の黒服がいたようで、その人のお陰でビルまで来れたようだ。

「ふう、じゃあ父さんはなんでここに？」

赤井は気を取り直して父さん、つまり太陽の方を見る。

「ん？ ああ、お前が才能者って聞いたからな。美月のところに来た黒い服着た人ってのが白道の印象に合い過ぎてて、それで電話を取ったらビンゴ。それで入れてもらったんだ」ということらしい。

「篠崎、本当に大丈夫なの？」

「病院の人には特に変わった様子は無いって言われたわ。多分、疲れてたんだろうって」

途中からずっと調子の悪そうだった篠崎はどうやら問題なかったようだ。

命を賭して戦った俺達や、黒服を裏切った白道、間之崎の先生方にはこの後警察から表彰があった。

この日本を、いや世界を揺るがそうとした大事件は後に“5. 01事件”と呼ばれ、京極事件と並ぶ大事件となる。

いくつかの不可解な謎、主犯格であった“創造主”その他幹部七

名が消えていなくなったりしたことなどを残しながらこの事件は幕を閉じることとなった。

S
k
i
l
l
s
C
r
o
s
s
才能者達が交錯した、この事件が。

（後日談、その他の話。）（後書き）

後一話だけ続きます！！

その話が波乱を呼んだり呼ばなかったり……。

(Next Prologue、その一) (前書き)

えー、今回で終わりの予定、一応完結する予定だったんですが……。

もう一話更新するときかり120話で終わるんですよー。

というわけでやっぱりもう一話続けますー！

(Next Prologue、その一)

5月3日、とある道。

ゴールデンウィークの最中の話だった。

ニュースでは“5・01事件”の話をしている。

ニュースでは“統一された幸福な世界”の幹部が行方不明、国際指名手配として写真等が出ていた。

「ありゃあ、どうみても……」

男は電光掲示板に出たニュースを見て呟いた。

「ま、まだ、俺が終わっちゃったわけじゃねえ……」

どこからともなく声がする。

そこはとある道だった。

何の変哲も無い、ただの。

そこには誰もいない。ゴールデンウィークにも関わらずである。

それは、この地区が特殊な地区のためでもあるのだが、今は関係ないだろう。

とにかく、誰もいない道路にも関わらず声は聞こえる。

「早く、寄り代さえ手に入れば……」

よく観ると地面に丸く黒い影のようなものがあり、それが移動していた。

「この“影”様に不可能は無い!!」

“影”は赤井に半身ほどを消されたが、爆散したように見せかけることでその場からの脱出を図ったのだ。

“影”はその道を進んでいくと、とある男が道を“影”に向かっているのが見えた。

「ちょうど良い、あいつの身体を奪って再生の時間を稼ぐか……。

しかし、“創造主の右手”クリエイターズ・ライトの才能が丸々残ってたってのはでかいな」

“影”は身体を半分を消されたが、それでも元々持っていた“創造主の右手”の力は失っていなかった。

「その身体、寄越せええええ!!!」

地面にある影が急に盛り上がり、その男へと向かう。

その時、一筋の閃光のような光が走った。

「ぎゃあああああ!!!」

その悲鳴は“影”のものだった。

その一筋の光が“影”を貫いたのだ。

「何だこの化物」

男はいぶかしげに見ている。

「ど、どういうことだ!? 俺に普通の攻撃が当たっている!?」

いや、今のは……?」

またも不可解なことが起きた。

「とにかく、寄越せや!!!」

“影”はその男にもう一度飛び掛る。かか

「危ないな」

「ぐひゃああ!!」

その男は“影”を見やると、何本もの光の矢のようなものを身体から発生させた。

それは“影”の腹部を穴だらけにした。

「しかしどこことなく体つきが“創造”に似てるな。一体どういうことだよ？」 お前

「お前、“光輝”^{clear}!？」

その男、“影”に“光輝”といわれた男はほう、といったような顔をした。

「へえ。究極にしてパーフェクトな俺の昔のあだ名を知っているのか。後な、そのあだ名そこまで好きじゃないんだ。俺様のことは^{パーフェクト}完全無欠って呼んでくれ。っていうか呼べ」

“光輝”は少し興味を持ったようだ。

ただ、尊大な口調は変わらない。

「お前は何だ？」

「か、言ってやる気はねえ!! 逃げる!!」

“影”は後ろを向いて矢のようになりその場から逃げ出した。

「そうか、^{こっぴどい}神々しい俺が恐怖か。だが、逃がす気は無い」
その男はやはり尊大な態度でそういうと、指を逃げる“影”に向ける。

そこから一本の矢のような光が飛び出すと、“影”を貫いた。

「ぐう!!」

「早く教えろ」

すぐに“影”の元へ“光輝”は近寄り、全てを吐かせた。

自分が“創造”から生まれたことなど。

“5・01事件”の主犯は“創造主”であることなど。

「成程な。ならお前は“創造”にとって邪魔な存在というわけか」

“光輝”はそう言うのと光で“影”を串刺しにした。

ビッグレーザー
「陽光」

そして串刺しになっている“影”に特大の光のビームを打ち出した。

“影”は影も形も無くなってしまった。

「やっぱり、あの国際指名手配の写真の主犯ってやつは“創造”だったのか。ああ、今は“創造主”とか言ってるのか。まったくあの馬鹿、まだ気づいてないのか。じゃあねえ、一発殴って改心させてやるか」

“光輝”はぼやきながら、“創造主”を探してみようと思った。

(Next Prologue、その一) (後書き)

では、これからの説明を。

これから前日譚、また他の学園の日々の話などを続けた『Skill
s Cross ｾ Another Life』と、この後の
完結する物語、『Skills Cross ｾ After S
tory』という形になると思います!!

では、次こそが本当にラストですっ!!

Next Prologue、その二 (前書き)

これがSkills Crossの最終回です!!

どうぞ!!

(Next Prologue、その二)

5月1日、“創造主”達のいたビル、壁一面にモニターのある司令室。

「へえ。“創造主”はあんな化物みたいな奴を持ってたのか。“影”ねえ」

そこには男がひとり立っており、モニターを見ていた。

その部屋には大きなデスクもあり、女の子がデスクに突っ伏して気を失っていた。

「そんな化物でも、あの男には負けるわけだ」

モニターの奥では、赤井が“影”を殴り飛ばしていた。

「あーあ、身体の半身が消されちまってるよ。流石にこりや無理だろうな。って、爆散しやがった」

身体の半分を消された“影”は爆散していた。

「しかし、最後の連係は^{れんけい}どうみてもアイコンタクトですら取って無かったよな」

部屋の中でじっとモニターを見ながら、静かにひとり呟く。

「これが、赤井夢斗の才能だ^{ちから}とでも言うのか。やはり、赤井夢斗は只者ではないということか」

男は忌々しげに続ける。

「味方は知らない間に赤井を庇うように行動し、敵は知らない間に隙を見せる。俺はこんな化物と昔やりあったってことかよ」

「やはり、スキルキャンセラー“才能帰却”なんてのが赤井の才能、いや、真の才能ではないな」

「敵も味方も、赤井と共にいたものは全員がハッピーエンドを迎える。まさしくアイツの本当の才能は——」

「ヒーロー主人公”。無自覚だろうが、まさしく化物の才能だな。だが、まだ俺は負けたと思ってはない」

男は拳を握り締める。

「策は考えた。準備にそこまで時間も掛からないだろう。良い勝負をしようぜ？ Mr. バッドエンドとして、お前に絶望を見せてやる」

モニターにそう語りかけると、瞬間移動のように一瞬で男はその場から消えた。

5月2日、事件後、“都市”外の二人の会話。

「これは、クリエイト“創造”じゃないか」

“5・01事件”について書かれている記事を見て、その男は見知った顔を発見して立ち止まった。

「クリエイト“創造”って確か、きょーすけが探している人よね？」

男の横にいた中学生くらいの女の子が新聞を横から覗き込む。

「そうだな。こんなことをしでかすなんて……。あの野郎、やっぱりあのことが頭に残って……」

「それって、きょーすけが話してくれたあの事件？」

「ああ。俺はあの男に嵌められたんだ。いや、俺だけじゃない。“創造”もだ。あの男は関わった人間すべてに絶望を味わせる、バツドエンドにする男にな」

その顔は苦虫を噛み潰したかのようなものだった。

「きょーすけ、顔怖いよ？」

「ん？ ああ、そう？ 悪かったな。後、お前別に見た目にこだわらずに口調は普通で良いぜ？」

「そうかしら？ とはいっても、どうせこんな姿なんだからエンジンヨイさせてもらうわ」

そのときの女の子の口調は老成されたもののようにだった。とても見た目からは想像できない。

「まったくお前は……。とにかく、こいつが今行方不明なんだとよ」
「ん？ それがどーかしたの？ それは今まで通りでしょ？」

「お前、その口調はちよつと幼稚すぎるんじゃないか。いや、今はそんなことよりもだ。行方不明って事は、“都市”以外のどこかにいるってことだ」

「あ、確かにー。頭良いんだね」

「お前に言われるとな……。とにかくだ。外国から当たってみるぞ」
そうしてきょーすけと呼ばれている男は歩き出す。

「あ、そうだ。この事件を解決したのが赤井だそうだ。ほら、警察から表彰を受けたって写真とかマスコミが殺到したとか、事件の反面を飾ってるだろ？」

思い出したように新聞の下を指差す。

「あ！？ 赤井！！」

その記事を発見して女の子は凄く驚いていた。

「中一のと看とはえらい違ひねー」

「いや、むしろあのときの経験のせいでこんなことに首を突っ込むようになっちゃったと思うんだが」

「そんなことないって。あー、久しぶりに赤井に会いたいなー」

その女の子は新聞を胸に抱いて言った。

「もしかしたら、“都市”に行くことにもなるかもしれないな。そのときは、会いにいけるかもしれない」

「本当！？ やったー！！」

手を挙げて女の子は喜んでいた。

赤井も、あまり色々なことに首を突っ込み過ぎないように釘を刺しておかんといかんな。

そういう風に目立つと、あの男が来るかもしれない。

なんとなくだが、嫌な予感がしてならない。

Mr. バッドエンド、お前は殺したと思っていても死んでいない男だということはよく分かっている。

まだ油断をする気は無い。

とにかく誤解を解かないとな。

嫌な予感がする。

お前はまだ、潜んでいるんじゃないか？

きょーすけと呼ばれている男は、“創造”を探し、ある誤解を解こうと考えた。

(Next Prologue、その二) (後書き)

と、最終回っぽくない感じに終わりましたね。

それは当然!!

この後にも話が続くからです!!

と、これは前回の話で言いましたね。

ではでは。

こんな初心者の書いた文章をここまで読んでくださった皆さん、ありがとうございます!!

これからも続けたいので、よろしくお願いします!!

感想、評価、好きなキャラなどはいつでも待っています!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7132p/>

Skills Cross

2011年9月22日23時55分発行